


# バハオラと新時代



J・E・エッセル  
メント博士著

バハイ出版局

## 序 言

一九一四年（大正三年）十二月にアブドル・バハに会ったことのある友人らと会談したり、教冊のパンフレットを借りて読んだりして、私は始めてバハイの教えを知った。私はただちにこの教えの含蓄の深さと威力と、その美とに心を打たれた。それらは私がいままでに接した他のどの宗教にもまして、現代世界の要求に合致しているように思われた。この印象は後の研究によつてますます深くなり確実となった。

私はこの運動の充分な知識を得るのに必要な文献を集めるために非常な困難に遭遇した。そしてやがて私は自分の知り得たところを一冊の著作としてまとめ、他の人々の利益に供しようとするに至つた。世界大戦後、パレスチナとの交通が回復するに及んで、私はアブドル・バハに書簡を送り、その書簡にそのほとんど草案がまとまつていた本書の九章の原稿を同封した。それに対して私は懇切な激励の返書を受け、かつ私の草稿全部をたづなえてハイプアに彼を訪問するようにとの親切な招待を受けた。私は喜んでこの招待に応じ、一九一九年から二〇年にかけて、約二カ月半の冬をアブドル・バハの賓客として送る光栄を持

つたのであった。そしてこの訪問中アブドル・バハは種々な機会に、本書について私と話しあわれた。この書の改善のために重要な暗示をあたえ、また私が原稿を修正したら、これを全部イラン語に翻訳させて、自らこれを通読し、必要な箇所を修正しようと提議された。この提案に従い、修正と翻訳は実行され、アブドル・バハはその繁忙の時をさいてその生前に約三章半（一、二、五章、及び三章の一部）の訂正をされた。アブドル・バハがこの草稿全部の訂正を完了する事ができず、本書の価値が大いに増すべくして及ばなかつたことは、私の深く遺憾とする処である。しかしながら草稿の全部は英国バハイ全国精神行政会の委員会の綿密な校訂をうけ、かつこの精神行政会によつて出版を承認されたのである。

私はここに、E・J・ローゼンバーグ嬢、クローディア・S・コールス夫人、ロトフォウルラーS・ハキム先生、ロイー・ウイルヘルム、及びマウントフォート・ミルス及びその他の諸氏の本書に対する優れた援助に対して深く感謝するものである。

アバーディーンのとおり、  
フエアフォード・カルツにて

J・E・エツセルモント

# 目次

## 第一序言

第一章 吉報	1頁
歴史上最大の出来事	1頁
移りゆく世界	3頁
正道の太陽	4頁
バハオラの使命	6頁
予言の実現	7頁
予言者たる証拠	9頁
探求の困難	11頁
本書の目的	12頁

## 第二章

先駆者バブ	14頁
新しい啓示の生地	14頁
生い立	16頁
宣言	17頁
バビ運動の展開	18頁
バブの主張	19頁
迫害しきりに起る	20頁
バブの殉教	21頁
カルメル山上の墓	23頁

## 第三章

神の栄光バハオラ	28頁
誕生と幼年時代	28頁
バビとしての投獄	29頁
バグダッドへの追放	31頁
荒野における二年	32頁
モルラの圧迫	33頁
バグダッドに近いレヅワンにおける宣言	35頁
コンスタンチノープルとアドリアブル	36頁
諸国元首への書簡	37頁
アッカにおける牢獄生活	38頁
束縛緩む	39頁
獄扉開かる	40頁
バークにおける生活	44頁
昇天	46頁
バハオラの予言者たること	47頁
彼の使命	53頁
バハオラの著作	55頁
バハイの精神	57頁

バブの文書	23頁
神が現わし給う者	24頁
復活、楽園と地獄	25頁
社会的倫理的教え	27頁

第四章 アブドルバハ「バハの僕」

生誕と幼年時代	59頁
青年時代	61頁
結婚	62頁
聖約の中心	63頁
再投獄	64頁
トルコ調査委員会	68頁
西洋の歴遊	69頁
「聖地」への帰還	70頁
戦争中のハイファ	72頁
彼の受辱	73頁
彼の晩年	74頁
アブドル・バハの逝去	75頁
著書と講演	77頁
アブドル・バハの地位	77頁
バハイ生活の具現者	80頁

第五章 バハイとは何ぞや

バハイ生活を生きる	82頁
神への献身	83頁
真理の探求	85頁
神を愛すること	86頁
超脱	89頁
従順	90頁

第六章 祈り

奉仕	92頁
教導	93頁
礼儀と尊敬	94頁
罪を隠す眼	96頁
謙遜	98頁
正直と誠実	99頁
自己実現	100頁

神との対話	103頁
献身の態度	104頁
媒介者の必要	106頁
祈りは欠くことのできぬもの	107頁
祈り、すなわち愛の言葉	109頁
会衆祈禱	110頁
災難からの解放	111頁
祈りと自然の法則	113頁
バハイ信徒の祈り	114頁

第七章 健康と治癒

肉体と魂	117頁
総ての生命の一体性	117頁
單純生活	118頁
アルコールと麻薬	119頁

第八章 宗教の融合

娯楽	119頁
清潔	120頁
予言者の命令に服従する利益	121頁
医者としての予言者	122頁
物質的方法による治癒	123頁
非物質的方法による治癒	125頁
聖霊の力	126頁
病者の態度	127頁
治癒者	129頁
各人いかに相助くべきか	131頁
黄金時代	132頁
健康の正しい用法	133頁
十九世紀の宗派主義	134頁
バハオラの伝言	136頁
人間性は変化し得るか	137頁
融合への第一歩	138頁
權威の問題	140頁
累進的啓示	141頁
予言者等の不謬性	143頁
至上の顯示者	145頁
新しい状況	146頁
バハイの啓示の完全性	147頁

第九章 眞の文明

職業的僥倖なし	148頁
バハイの聖約	151頁
宗教即ち文明の基礎	153頁
正義	154頁
政治	156頁
政治上の自由	159頁
支配者と臣民	160頁
任命と昇進	161頁
經濟問題	162頁
公共財政	163頁
任意の分配	164頁
万人に職業	165頁
富の倫理	165頁
産業上の奴隷を認めず	166頁
遺贈と相続	168頁
男女の平等	169頁
婦人と新時代	172頁
暴力手段の廢棄	172頁
教育	174頁
天性の相異	175頁
品性の訓練	176頁
芸術(化学)技術	177頁

犯罪者の取扱い	177頁
新聞の勢力	179頁

### 第十章 平和の道

争闘対協調	181頁
最大平和	182頁
宗教的偏見	183頁
人種的並に愛國的偏見	185頁
領土的野心	186頁
国際共通語	188頁
国際連盟	191頁
国際仲裁	193頁
軍備制限	195頁
無抵抗	195頁
正道の戦争	197頁
東西の融合	197頁

### 第十一章 諸々の掟と教え

僧院生活	201頁
結婚	202頁
離婚	204頁
バハイ曆	204頁
精神行政会	206頁
祝祭	209頁

断食	210頁
集會	212頁
ファイースト	213頁
マシユレゴウル・アスカル(札揮堂)	214頁
死後の生命	216頁
天国と地獄	218頁
二つの世界は一つである	221頁
悪は実在せず	225頁

### 第十二章 宗教と科学

衝突は誤謬に由来す	228頁
予言者等の迫害	229頁
和解の敵	231頁
真理の探求	232頁
眞の不可知論	233頁
神に就いての知識	234頁
神の顯示者	235頁
創造	236頁
人類の進化	238頁
肉体と魂	240頁
人類の一体性	242頁
融合の時代	242頁

第十三章 バハイ大業によって果たされた予言	244頁
-----------------------	------

予言の解釈……………	244頁
主の出現……………	245頁
キリストに就いての予言……………	246頁
バブ及びバハオラに就いての予言……………	248頁
神の栄光……………	249頁
神の日……………	251頁
枝・についての予言……………	251頁
審判の日……………	253頁
大復活……………	255頁
キリストの再現……………	257頁
終末の時……………	259頁
天地の徴候……………	262頁
出現の仕方……………	265頁
<b>第十四章 バハオラとアブドル・バハの予言……………</b>	<b>269頁</b>
神の言葉の創造力……………	269頁
ナポレオン三世……………	272頁
ドイツ……………	273頁
イラン……………	274頁
トルコ……………	275頁
アメリカ……………	277頁
世界大戦……………	279頁
大戦後の社会的紛争……………	280頁
「神の国」の出現……………	284頁

アツカとハイファ……………	286頁
<b>第十五章 回顧と展望……………</b>	<b>288頁</b>
バハイ大業の進展……………	288頁
バブとバハオラの予言者たること……………	290頁
栄光ある前途……………	291頁
宗教の刷新……………	292頁
新しい啓示の必要……………	293頁
真理は万人のためなり……………	293頁
<b>第十六章 アブドル・バハの「遺訓」……………</b>	<b>295頁</b>
新局面……………	295頁
神の大業の守護者……………	296頁
神の大業の翼成者……………	297頁
行政秩序……………	298頁
バハオラの世界秩序……………	308頁
アブドル・バハの「遺訓」からの拔華追加……………	317頁
結び……………	320頁

# 第一章 吉報

全世界の人々に、約束された偉聖いせいは現われた。全人類、全社会は啓示を待望してきた。そしてバハオラは全人類にとって首位の指導教師であり、大教育者である。——アブドル・バハ。

## 歴史上最大の出来事

今我々が歴史の各頁に書きのこされた記録の跡をたどって、人間進歩の物語を研究してゆくならば、実に我々は人類を進歩させてくれた先覚者が、各時代を通じて、その時代の人達の持っている觀念よりも遙かに進んだ点に着眼し、それまで人類にまだ知られていなかった真理の発見者、啓示者として、その人達を指導して行ったことがはっきりと分るのである。発明者、開拓者、天才、予言者——そういう人達によって、主としてこの世界の変革はなされているのである。カーライルは次のように云っている。

『至って明瞭な事実、我々はそれをこう考える……、一つのより高い知恵、これまで知られなかった精神的真理を持った人は、これを持たない十人よりも、万人よりも優れているのみか、持たないすべての人々よりも強い……それはあたかも天来の剣をふるかの如く、いかなる権も金鉄じやうてつの城廓じやうかくも、これに對抗し得ないほどである』——「時代の徴候」より



科学、芸術、音楽などの歴史において、我々はこの事実について多くの説明材料をもっている。しかし偉大なる人物とその伝言が、宗教の分野における如く、極度に重要であることが明瞭な場合は他に見つからない。全時代を通じて人々の精神生活が墮落し、道徳が腐敗すればいつでも神秘にして驚かすべき人物、すなわち予言者が出現して来るのである。彼はただ独りで、理解してくれる者もなく、教え導いてくれ、責任を共にしてくれる者もなく、唯一人全世界に対して起って、正義と真理の福音を声明する。あたかも群首ぐんこうの中にある唯一の具眼者ぐがんしやの如くである。

予言者達の中には、特別に卓越した者もある。数世紀ごとに神の偉大な啓示者、——クリシュナ、ゾロアスター、モーゼ、キリスト、モハメッドなどがあたかも太陽の如く、東方に現われて人々の暗い精神をかがやかし、眠れる魂をゆり覚ました。これら宗教の創始者の偉大さに対して、我々が意見を異にするとしても、我々は人類の教育について、彼等が最も力強い要素である事を認めなければならぬ。そして彼等予言者達は皆一致して次のように宣言している。即ち、自分達が説くところの言葉は自分達から出た言葉ではなく、自分達を通じてなされた啓示であり神託であり、自分達はそれの世界にもたらし伝える者である、と。記録に残された彼等の言葉には、必ず「機来きらいれば」偉大な世界の指導者が現われて来るという暗示や約束が豊富に示されている。そしてその指導者はその聖業を完成して、それを結実させるために現われて来る。その指導者によって、この地上世界は平和と正義の統治を完成し、すべての民族、宗教、国家、種族は一大家族となり、「一個として結束され、一人の牧羊者ぼくしやによって育成される」と。そして、すべての人々は、「卑小ひいせうなものから最大のものに至るまで」神の何たるかを知り、神を愛するようになる。

確かに、近代のこの偉大な「人類の教育者」の出現の日こそ、人類の歴史にとっては未曾有の、最

大事件であらねばならぬ。そしてバハイ信教はこの一大教育者が実際に現われたこと、その啓示が示され記録されて、熱心な求道者によって研究されるようになっていくこと、「主の日」がすでに明け、そして「正道の太陽」が昇ったという吉報を世界に向けて声明しつつあるのである。しかしながらこの栄光ある光輪を見たものは山頂にいた少数の者のみである。しかしもうすでにこの光線は、天にも地にも輝き渡っている。そして久しからずして、それは山頂を越えて昇ってゆき、やがて平原や溪谷まで、全力で照らしかけ、全人類に生命や指針をあたえるであろう。

### 移りゆく世界

十九世紀から今世紀の初期にかけて、世界が旧時代死滅の断末苦と、新時代を産む陣痛の期間を経つつあったことは、何人にも明らかなことである。唯物主義、利己主義の古い主義や、古い宗派的、愛国的な偏見や、憎悪などは、彼等自身もたらした衰退のうちに、次第に面目を失い影を薄めて行きつつある。そうして、すべての国々には信仰的態度や民族同胞主義や国際主義という新しい精神が撞頭し、古いしきたりを破り、古い境界線を越えんとするに至った。そして未曾有の勢いで、革命的な変革が、人間生活の各部分に勃興してきた。しかし古い時代は全く滅び去ってはいない。古い時代は来るべき新しい時代と生か死の闘争をしているのである。

膨大な恐ろしい弊害がこの間にはびこっている。それらは、やがて新しい力と、希望の勃興によって、正体をさらされ、試めされ、誰何され、攻撃されつつある。暗雲はもうもうとうとして空を覆い、恐ろしい光景を呈しているが、光はすでに暗雲を破り初め、向上の一路を照らしつつあり、前途を妨げる障害や落とし穴は暴露されつつある。

十八世紀にはこれと異っていた。当時は精神的、道徳的生活を挙げて、暗黒時代であつて、ほとんど光のさすすきもなかった。それは夜明前の暗さで、わずかにもれる燈火の光も、その暗黒を照らす力はなかった。カーライルは彼のフレデリック大王伝中に十八世紀について次のように言っている。

『歴史のない、また歴史を持ち得ない時代、未曾有の虚偽に充たされた時代、虚偽が余りに増大して、それに気づかなかつた時代、不正が充満して病膏盲（まどくらもろ）に入つた時代、事実それは行き着く所まで行き、遂にフランス革命が最後にそれにとどめをささなければならなかつた。私はこのような時代にとつて当然な結末が来たことに感謝を感じる。人の子等が猿人（えんじん）になり下がらないためにはもう一度神の啓示が必要だからである』

—「フレデリック大王伝」第一巻 第一章—

この十八世紀を現代に比較すると、あたかも現代は、暗黒後の曙光時代（きらく）であり、嚴冬後の陽春時代で、世界は新しい生命に躍動し、新しい理想と、希望に燃えている。数年前までは不可能な夢として見られたものが、今は実際に成し遂げ得られるようになった。なお数世紀を経なければ不可能だと見られた事柄がすでに実際問題として取り扱われるようになった。我々は大空を飛行し、海底を潜航するようになった。我々は電光の速度で全世界に通信を送り得るようになった。わずか数十年の間の奇蹟のような事実は枚挙（まきま）にいとまがない。

## 正道の太陽

世界にみなぎるこの急激な覚醒の原因は何であるか。バハイはこれを今より一世紀前、イランに

生まれ、十九世紀の末葉に「聖地」でこの世を去った予言者バハオラを通じてなされた聖靈の一大発露によって起されたと信じている。

太陽が自然界へ光明を与える如く、予言者、「神の顯示者」は、精神界へ光明を与えるものであるとバハオラは教えておられる。物的太陽が地上の世界を照らし、生き物有機体を成長發育させる如く、神の顯示者を通じて真理の太陽は心と魂の世界を照らし、そうして人間の思想、道徳、性格を教育する。自然界の太陽の光は、太陽を見たことのない生物に熱と生命をあたえ、世界の暗いすみずみまで透して日照の力があるように、聖靈の発露は神の顯示者を通じて万人の生命に影響を及ぼし、さらに予言者の名さえ知らない処や人々にまで、靈感をあたえる。顯示者の出現は春の陽の到来のごとく、精神的死者に新しい生命を喚起する「復活の日」である。これによって、神の宗教の实体は更新され再建され、そして「新しき天と地」とが現われるのである。

しかし、自然界にあつては、春は生物に新しい生命の成長と、目醒めとをあたえるのみならず、老朽衰退の要素を破壊し、驅逐し去る。なぜなら、春に花を咲かせ、樹々に新芽を萌えださせる太陽の力は、同時に又、死して無用となったものを破壊させる。そしてそれは堅氷を砕き、積雪を溶かせ、洪水を流し、暴風をまき起し、地上を清掃しつくすのである。精神界においてもこれと同様である。精神的太陽の光明は、同一の動揺と変化を精神界に起さしめる。かくて復活の日はまた審判の日である。これによって、真理の腐敗と模倣、使い古された觀念、習慣は排除され、棄却され、長い冬ごもりの間に堆積された偏見迷信の氷雪は、やがて溶解され、久しく氷結していた勢力は洪水の如くあふれ出て、この世界を更新するのである。

## バハオラの使命

バハオラは明白に、かつ繰り返して次の如く宣言された。彼御自身が全人類が長い間待望して来たところの教育者であり、教師であること。以前のすべての神の恩寵の発露を超越した不思議な恩寵に充ちた水路の如く、そのとうとうたる流れのうちにあたかも諸川の流れが洋々たる太平洋に注ぐが如く、従来の色々な形体の宗教は合流されたのであること。又、彼は全世界の統合と、従来の予言者が予言し、詩人が歌ったように、全人類の善良な意志が疎通して、地上に完全な平和の黄金時代が創始されるための確固たる基礎をきづいたのである、と。

真理の探求、人類の一体性、宗教、民族、国家、東西両洋の統合、宗教と科学との一致、偏見と迷信の根絶、男女の平等、正義と正道の確立、最高国際裁判所の建設、言語の統一、知識の義務的普及、その他種々の教えは今よりおよそ百年前バハオラの筆によって啓示され、多数の書籍や書簡中に残され、その中の幾つかの事項は世界の帝王や支配者に書き送られたのであった。

彼の広大無辺にして明快なる伝言は、実に驚くべきほど、時代の要求と目的に合致しているのである。現代ほど大きな、そうして複雑な新しい多くの問題に直面した時代はない。現代ほど多くの解決策が提案されていて、しかもそれらが互いに相矛盾している時代はない。現代ほど、世界を指導すべき一大教師の必要に迫られたことはない。現代ほどそのような教師に対する期待が確固として一般的であったこともないであろう。

## 予言の実現

アブドル・バハは次のように書いておられる

『キリストが今から二十世紀前に現われた当時、ユダヤ人は皆彼の出現を熱望し、涙を流し、毎日熱心に『おお神よ、救世主の啓示を急がせ給え』と祈りつつあった。しかも真理の太陽が曙光を放射し始めるや、彼等はキリストが救世主たることを否認し、彼に反対して起ち、非常な憎悪を抱き彼を呼んで悪魔と称し、遂に神の言葉にして、神の精神たる彼を無惨にも磔刑に処したことは福音書に記せられた処である。その理由はこうである。彼等ユダヤ人は言う。トーラの原典に明示された処に従えば、キリストが直ちに啓示であるというには確かな徴候によつて検証されねばならぬ。これらの徴候がない以上、いかに彼が救世主であると主張しても、それは詐欺師である。その徴候の中にはこういうことがある。即ち救世主なるものは世に知られざる場所から現われ来るべきはずである。しかるに我々のすべてはナザレにおける彼の生家を知っている。しかもいかなる善いものもナザレから現われることができないか。第二の徴候となるものはこうである。救世主は鉄棒をもつて支配をすべきである。彼は剣をとつて活動せねばならぬ。しかるに彼キリストは一本のつえさえ持たぬではないか。また他の条件となり徴候となるべきことは次の如くである。彼はダビデの王座につき、ダビデの統治権を確立しなければならぬ。しかるに彼キリストは王座につくどころか、自己が坐すべき一枚のむしろさえ持たぬではないか。なお又、トーラの法律のすべてを履行せねばならぬに拘らず、彼はこの法律を無視したではないか。そして又、安息日の掟を破つた者や、奇蹟を行つた者や、予言者であることを公言する者は何人でも死罪に処せられると明かにトーラの法律に示

されてあるにも拘らず、彼は安息日の掟を破ったではないか。他の徴候とは、救世主の治世に當つては正義は増進され、正道と善行が人間から動物の世界にまで拡充され、蛇とねずみとが同じ穴に、鷲と小雀とが同じ巢に、獅子とカモシカが同じ牧場に、狼と仔山羊が同じ泉から水を飲むようにならなければならぬ。しかるに不正義と横暴が、キリストをはりつけに処したほど、人々の心は荒れずさんだ時代であつたではないか。また他の条件は、救世主が出現したならば、ユダヤ人は榮えて、世界のすべての人々を征服統治するに至るべきである。しかるに何ぞや彼等はローマ帝国に征服され、最高の屈辱と不遇に泣かされているではないか。かかる有様で、どうして、トーラの經典に約束された救世主が彼キリストであり得ようというのである。

ユダヤ人は以上のような現由で、キリストを否定し去つて、実に彼がトーラに約束された神の精神であつたにも拘らず、真理の太陽を拒んだのであつた。そして、ユダヤ人はトーラに記されたその徴候の眞の意義を理解せず神の言葉をはりつけして終つた。バハイは、ユダヤ人の解釈とは異なり、トーラに記された救世主の徴候というのは、比喩的な寓意で表わされているもので、キリストの啓示によつて実現されて来たものと信じて疑わない。例えば救世主の統治権の意義は、バハイに言わせると、短い月日に滅びるナポレオンの統治権のようなものではなく、それは天國的で神聖な恒久的の統治権を指すのである。まことに、キリストの統治は実に二千年間成就されているではないか。そして今日なおそれは断絶することなく、彼の聖なる存在は永恆に不滅の王座を占めているではないか。

これと同様な意義をもつて他の多くの徴候も現わされている。しかしユダヤの人達にはこれを解することができなかった。キリストが榮光をもつて出現して以来、およそ二十世紀の歳月がいたづ

らに過ぎ去った。しかも、ユダヤ人は今なお救世主の出現を待ちのぞんでいる。そして彼等の所信は真理であるとし、キリストは虚偽だと断定している。——本章のためにアブドル・バハが執筆されたもの。

もしユダヤの人々が、疑問点をキリストに尋ねたならば、彼は必ず彼自身に関する予言の真の意義を説明したに違いない。我々はこれ等の実例から教びとろう。そして我々が、後代の大教師の顕示に関する予言は満されていないと断定する前に、バハオラがそうした予言の解釈について書かれたものについて見ることにしよう。それは、予言というものの多くは「封印された」言葉であって、真の人類教育者自身にして、はじめてその秘密の封緘を破り、奥底に秘められた真の意義を明示することができるのであるからである。

バハオラは古代の予言について多くの説明を書いておられる。しかしこれを基礎にして、彼は自分が予言者であるということ証拠立てようとされたのではない。太陽はこれを認める能力のあるすべての人々にとって、それ自身が証拠である。太陽が昇るとき、我々はそのかくかくたる光明について、古い証言を引いて説明をほどこすなら、必要もないのである。神の顕示者もこれと同じく、彼が出現すると、他からの証拠立てを要しないのである。従前の予言がすべて忘却されて終つても、霊的感覚が開かれているすべての人々にとっては、彼は彼自身で完全にして充分な証拠なのである。

### 予言者たる証拠

バハオラは、彼の説明や教えを盲目的に受取ることを、何人にも欲されなかった。これに反して、



彼は教えを盲目的に受容れる危険性を深く戒め、真理を確かめるために進んで独立して、誰はばかる処なく、自己の耳目により自己の判断を用いるように勧められておられる。彼は予言者たる証拠として、彼の言葉や活動や、そしてそれらの結果として、人々の生活や、品性を陶冶し転化させるに至る事実を提供され、これらを十分に検討することを求められ、少しも自己を隠蔽するような態度はとられなかった。それについて、彼が提起された考査の方法は、彼以前の顯示者たちが示したと同様のものであつた。モーゼは云っている。

『もし予言者があつて、主の名によつて語つても、その言葉が成就せず、またその事が起らない時は、それは主が語られた言葉ではなく、その予言者がほしいままに語つたのである。その予言者を恐れるに及ばない。』——「申命記」十八章 廿二節

キリストも同様はつきりと彼の試験方法を述べ、彼の言葉の証拠としてそれに訴えている。

『偽予言者に心せよ、羊の装いで来れども内は奪いかすむる狼なり。その果によりて彼らを知るべし。いばらよりぶどうを、あざみよりいちじくをとる者あらんや。かく、すべてよき樹はよき果をむすび、悪しき樹は悪しき果をむすぶ。……さらばその果によりて彼らを知るべし。』

——「マタイ伝」七章 十五—廿節

これから述べようとする各章において、我々はバハオラが予言者であるか、あるいは予言者としてのこれらの試験に堪えないところがあるか、さらに彼が予言した如く事物が現われたか否か、彼が悪しき結果をもたらしたか、良き結果を招来したか、彼の予言が実現し、彼の掟が確立されたか否か、

はた又、彼の終生の事業が人類の教育に、進歩に、道德の向上に、いかに貢献したか否か、をよく研究してみようと思う。

## 探求の困難

この大業を研究し深く事実の真相に触れようとする者には、そこに多くの研究上の困難がともなうのは止むを得ない。道德の大なる革新や、精神の改造には、いつも見られるようにバハイ信教も少なからず誤解をうけたものである。バハオラや、彼の信徒等がうけた恐るべき迫害や、苦痛が、いかに深刻であつたかは、敵も味方も等しく認めるところである。しかしながら、この運動の価値、創始者達の人格については、信者等の陳述と、これに対する反対者の意見は、全く相反しており、あたかもキリスト時代と同様の観がある。キリストのはりつけ、その信徒の迫害殉教については、キリスト教信者もユダヤ教の歴史家も等しく認めるところである。しかし、キリスト教信者は、彼はモーゼの教えを実現し發達させたと言ひ、反対者は、キリストは法律を破棄し、神の掟を蹂躪したのであるから、その罪は死にあたいするものだとしているのである。

科学におけると等しく宗教においても、それは「千金に値する一粒の真珠」を買うために持ちものすべてを売る者の態度を必要とするのである。あらゆる偏見や迷信をことごとく一掃して、謙虚な心で真理を求める者にのみ真理の扉は開かれるのである。バハイ信教の眞の意義を充分に理解するためには敬虔なる真情を傾け、ひとえに神のお導きに頼り、真理の前には自己を忘却して、研究の歩を進めなければならぬ。我々はこの信教の創始者達の書きのこされたものなかに大いなる精神的自覚と、その価値の究極の基準の神秘に通ずる鍵を発見することができよう。不幸にして我々には不

なベルシャ語、アラビヤ語でそれらの記録が記されているため、ここにもまた研究上少なからざる困難があるのである。ただ記録の一部は今日英訳されているが、その文体、正確さ等においてまだ我々の希望するところまでは行っていない。しかし、歴史や、翻譯上に不充足、不適當な点があるにも拘らず、この大業の雄大堅実なる礎石に立った姿はさながら濃霧の中にそびえる山の如くに見えるのである。

(注)現在ではバハオラ・アブドル・バハの著書はイラン語やアラビヤ語から英訳されている。これらはショージ・エフエンディによるもので非常に優れた翻譯である。ショージ・エフエンディ自身の幅広い著作はバハの歴史、およびバハの基礎的真理の解明とその意義づけ、行政秩序の展開などを包含するものである。これらの書物を合せたものはエッセルモント博士の時代には難かしかつた研究作業を大いに容易にならしめた。

## 本書の目的

以下の各章においては、バハイ信教の歴史的事実および特にその教えをできるだけ公正に叙述し、読者がその重要性に自己の知的判断を下せるようにし、さらに深く研究するための手引となるように努力をする。真理の確認が重要なことは言うまでもないが、それは我々の生活の全目的ではない。真理は死物ではない。それは博物館に陳列されて、目録や附箋をつけられ分類されて無味乾燥で不毛なものとして取扱われるべきではない。それは深く人間精神の奥底に根を下し、探究の成果がおさめられるに先だつて、すでに彼等の生活に結果をもたらさねばならぬ生きた何物かである。

それ故に、予言的な啓示の知識を広く普及しようとする真の目的は何であるかと言えば、その真理を確信するに至った人々が、やがてその原則を実行し、「正しい生活」に生き、この吉報を世に伝え、

そうすることによって、神の意志が天に行われると同時に、この地上にも実現されるに至る至幸の日が一日も早く招来されるようにするためである。

## 第二章 先驅者バブ

実に圧倒者は世界で最も愛さるべき者を殺戮し、これによって生物界より神の光を消滅し、恩寵と恵沢に充ちた主の日に於て天来の生命の流れより人類を妨害した。——「バハオラ・ラーイスへの書簡」より

### 新しい啓示の生地

バハイ啓示の生地たるペルシャ（イラン）は世界の歴史中でも特異の地位を占めている。ペルシャ初期の最盛期にあつては、その文明と富強で諸国に比類なく、あたかも女王の如くであつた。しかも、少からず卓越した王や政治家を輩出し、世界に有名なる予言者、詩人、哲学者、美術家等を多く出している。ゾロアスター、サイラス、ダリウス、ハフェズ、フェルドウシ、サーディ、オマル・ケイヤム等はペルシャがもつ有名な人々の少数に過ぎないのである。この国の工芸家は優れてたくみであつた。ペルシャの絨緞、剛鉄刃、陶器などはいづれも比類なく世界的に有名である。近東地方、中東地方の各地においてペルシャは古代において偉大であつた跡を数多く残している。

しかし、十八世紀十九世紀の間にペルシャの勢威は悲しくも傾いた。やがて往時の栄光は取り返しがつかぬまでに失われてしまった。政府は墮落して経済は行き詰り、支配者は力弱く、しかもその中にあつてある者は惨忍な怪物のようであつた。僧侶は頑迷固陋で偏狭であり、人民は無知で迷信深一度し難いのであつた。彼等の多くはイスラム教徒の中でもシーエー宗派と称せられるものに属してい

だが、その他に軋轢して相容れざる、ゾロアスター教徒、ユダヤ教徒、キリスト教徒の各宗派の多数もいた。これらの人々は、唯一の神を礼拝し、相互愛と提携とによって生きる事を教えられた偉大な教師の命を奉ずると口では主張するにも拘らず、互に他を罵り、穢れた者、畜生、あるいは異端者と称し、互に排斥し、憎み合い、誹謗し合ったのであった。相互の憎悪と呪咀とは恐ろしいまでに深化して行つた。かくて、ユダヤ教徒またはゾロアスター教徒が雨中に外出して街路を歩むことすら危険であつた。なぜならもし途中で雨に濡れた衣服の袖が誤つてイスラム教徒の衣服に触れば、彼は己れを汚せる者として許さず、そのために生命を捨ててその罪を償わねばならぬからである。もしイスラム教徒の一人がユダヤ教徒やゾロアスター教徒又はキリスト教徒の一人から金を受取る際には、イスラム教徒はその金を清水で洗い清めた上でなければ自分のポケットに納められないのであつた。我が子がイスラム教徒の乞食に一杯の水をあたえる様を見たユダヤ教徒の親は、怒つて我が子の手からコップをたたき落してあたえさせず、親切よりは憎悪が見たユダヤ教徒の親は、怒つて我が子の手からはげしい程であつた。ゾロアスター教徒はこれ等の争いの渦中にはあまり加わらなかつたけれども、他の異教徒の同国人と断交し、離れて彼等自身の団体のみで生活する状態にあつた。

かくて宗教的にも希望のない頹敗の淵に置かれてあつた。西洋の科学や芸術は宗教に反対する不浄なものともみなされていた。正義は曲視されていた。略奪強盗は横行し、道路は破壊され、旅行は安全でなく、衛生状態は恐ろしく劣悪であつた。

このような状態にも拘らず、なお精神生活における一道の光明は消滅しなかつた。混沌たる世欲と迷信の中にも此処彼処に神に憧がれる純真の情が育ちつつあつた。それはキリスト出現の前のアンナ

やシメオンの如き人物の心と同じである。多くの人々が熱心に神の約束された使者の出現近きにありと待望してきた。新時代の到来を宣してバブが現われ彼の伝言を伝えて、国中を動揺させたのは、イランがこのような状態にあった時であった。

(注)モハメットの死後、間もなくイスラム教が分裂してシーエー及びスンニの二大教派に分れたがその中の一つ。シーエー派は、モハメットの嫡アリが予言者の正当な後継者であるとなし、その後裔のみがカリフの正統であると主張する。

## 生い立ち

ミルザ・アリ・モハメッド、後にバブ(門の意味)という称号でよばれた彼は(注)一八一九年十月二十日イラン南部のシラズという地に呱呱の声をあげた。彼は「セイエド」すなわち予言者モハメッドの後裔であった。名の聞えた一商人であった彼の父は、バブが生まれて間もなく死去した。そこで彼はシラズにある母方の叔父に引きとられて育てられた。幼時彼は読書を習い、国風に従って初歩の教育を受けた。(注)十五歳の時初めて商人である伯父と共に商業に従い、その後ペルシャ湾の畔ブーシエールという処に住む他の伯父の方へ行つた。

青年としての彼は眉目秀麗、举止温雅で、敬虔の情に富み、品性高尚で世人賞評的であった。彼はまたイスラム教徒の儀式である祈り、断食、その他の掟をよく遵守し、教祖の教えの言葉にしたがつたばかりでなく、その精神に生きていたのであった。彼は二十二歳の時に結婚された。この結婚によつて一人の男児をもうけたが、この子はバブが最初に公然とした聖職につかれた年に乳児のまま死んでしまった。

(注)一)紀元一三三五年、モハラムの一日。イスラム教の暦は、西歴六二二年のモハメッドがメッカからメダイナ

## 宣 言

彼は二十五歳に達した時、神の命に應じて、初めて「高遠な神が自分をバブたる地位に挙げた」ということを宣言された。「旅行者の説話」なる書に次のように書かれてある。

「バブという称号によって彼が現わそうとする意味はこうである。彼は、無限に完全な徳性を備え、そして、未だ栄光の被覆の蔭に隠されているある偉大な人物から来る恩寵の通路であり、その偉大なる人の意志によって自分は動き、かつ彼の愛のきずなに自分は結ばれるものである」といふ意味である」と——「バブの挿話」三頁

へ敗走（アラビヤ語で「ヘヂユラト」という）した日を紀元とす。

（注二）この点に關してある歴史家は次の如く説く。「東洋における多くの人々、ことにバブの信徒等（現在のバハイ）は次のように信じていた。即ちバブは少しも教育を受けなかった。しかし、かのモルラ（イスラム教の神学者）は人々にバブを見くだすようにさせるために、バブが有した知識と知恵は、彼が受けた教育によって蓄積されたものだと言つた、のだと。この点に關する事實を深く研究したのち、我々はバブが幼時シエイク・モハメッド（アベドとしても知らる）の家にしばらく出入りし、そこでベルシャ語を読むことと、書くことを教えられたことを発見した。バブがその著「バヤン」を書いた時、書中に「おお、モハメッド、おおわが師よ……」と書いたのは、そのためである。

しかしながら注目すべきことは、彼の師であつたシエイクが、その弟子であつたバブの忠誠な弟子となつたことだ。またバブの父の如くであつた伯父のハヂ・セイエド・アリもまた忠誠な信者となりバビ（バブの信徒の意）として殉教した。

これ等の秘密は、真理を探求する者には理解される。しかし我々は、バブが受けた教育は極めて初歩のものに過ぎず、バブに現われたまれな偉大さと知識の表徴が何んであれ、それは天賦のもので神からのものであつたといふことを知っている。」



当時、神の使者が近く現われるという信仰は特にシエイキというイスラム教の一派に固く信ぜられていた。そしてバブが初めて彼の使命を告げられたのはモラ・ホセイイン・ボシユールイとよばれる神学者で、この派に属する有名な人であった。この告知の確かな時日は、バブの書きのこされた記録の一つである「バヤン」という書中に、ヘヂユラト紀元一二六〇年、ヂャマディヨウル・アウヅアル月の四日（即ち一八四四年五月二十二日）のことだと記されてある。バハイの一日は西欧諸国のように真夜中ではなく日没後に始まるので、バブの宣言は五月の二十三日にあたるヂャマディ月の五日に祝われることになっている。アブドル・バハはその同じ夜に生まれたのであるが、彼の誕生の正確な時間は明確にされていない。幾日か熱心に研究し、検討した後、シーエー宗徒が永く待望した使者が、本当に現われたのだとモラ・ホセイインは固く信ずるようになった。彼のこの発見に対する熱心な態度は、直ちに彼の友達にも伝わった。久しからずしてシエイキ派の大部分はバブを受け入れバビとして知られるようになった。かくしてたちまちバブなる青年予言者の名は燎原の火の如く全土へ広がったのである。

### バビ運動の展開

バブの最初の使徒十八人（彼を加えて十九人）は、やがて「生ける者の文字」として知られるに至った。彼はこの使徒達をイラン、トルキスタンの各地に送って彼の出現についてのニュースを伝えさせた。そして彼自らはメッカへの巡礼の旅に出かけ、一八四四年十二月にメッカに到着し、そこで公然と使命を宣言された。彼がブーシユールにかえると、彼がバブの地位にあるという宣言をしたことは非常な衝動を引き起こした。火のような彼の雄弁、疾風の早さと感化に充ちた著書の驚異、彼の非

凡な智恵と知識、改革者としての勇氣と熱意は、彼をめぐる人々に異常な熱狂を起させたが、しかしこれと同時にイスラム教正統派に驚異と敵意を惹起したのであった。シーエー宗徒の博士等ははげしく彼を攻撃し、次いでファールスの知事で狂信的な専制者であったホセイーン・カーンに彼を異端者として弾圧すべく説き伏せた。このためにそれ以後、バブは幾度もとらわれ、審判、侮辱、苛責、追放、笞刑、禁固等あらゆる迫害をうけ、それは一八五〇年のバブの殉教をもってようやく終ったのであった。

## バブの主張

バブの地位にあるという宣言によって惹起された敵意は、更に進んでこの若い改新児が自らをモハメッドの予言にある処の、メーディであると称したことによって一層激しくなった。シーエー派教徒は、約千年前不思議にも姿を没した第十二番目のエマムを、このメーディだと信じていた。そして彼等はこのエマムがお生きていて、再び同じ姿で現われるとし、その予言を物質的な意味に解しており、彼によって統治、国威発揚、征服などが立派に行われ、彼の出現の徴候が著われて来るものと信じていた。これはあたかもキリスト時代にユダヤ人が救世主出現の予言を同様解していたのと似ている。彼等はメーディは地上の主権と無数の軍隊をもって現われ、彼が啓示者であることを宣言するのみならず、死せる肉体をもよみがえらせることさえ容易であるなどと考えていた。これ等の奇蹟的な徴候が現われなかつたので、シーエー教徒等は悪罵をもってバブを排斥した。これはあたかもユダヤ教徒がキリストを拒んだのと同様であった。しかし一方バブの教徒等はこの予言の多くを比喩的に解釈していた。彼等はガリラヤの「悲の人」と同じように「約束された者」の主権を神秘的な主権とし

て解し、彼の栄光とは物質的なものではなく精神的栄光であり、征服とは人間精神の征服であるとした。その他彼等はバブの驚くべき生涯や教えや、ゆるがぬ信仰、不屈の堅固さ、過誤と無知とに埋まつた人々を覚醒させ、精神生活の新生に引上げる処の神祕的な彼の力を見て、バブの主張に誤のない証拠を見出したのであった。

バブはメーディであるという主張までで止まらぬばかりでなく、更にノグティエ・オラすなわち、「最初の点」という称号を用いることにしたのであった。この称号はモハメッドが彼の信徒から捧げられた称号であつて、エマムと呼ばれる者さえも、この称号に対しては第二義的のものとされ、エマムはこの「最初の点」からその靈感と權威とを与えられるものと考えられていたのであつた。この称号を用いることによつてバブは自らもモハメッドと同等の偉大な宗教の開祖の列に加わる一人としての地位に座したのであつた。この理由によつてシーエー教徒等は彼を不逞なる僭越者とみなした。これは彼の先輩であるモーゼ及びキリストが僭越者とみなされたと同様であつた。彼は更に曆日を改め、太陽曆を採用し、彼自身の宣言の年を新時代の紀元とされたのであつた。

(注)シーエーのエマムは全信徒等が服従せねばならぬモハメッドの後継者として神命を受けた人である。十二人の人々が代々エマムの椅子を占めた。最初の人は予言者の徒弟で同時に婿であるアリであつた。第十二代目のエマムはシーエー教徒たちによつてエマム・メーディと呼ばれた。彼等は、エマム・メーディは死んだのではない、只ヘヂユラト紀元三二九年に地下道によつて姿を消したに過ぎない。そして時来れば彼は再び来たり、不信仰な人々を滅亡させ、幸福な時代を来たらせるのだと主張する。

### 迫害しきりに起る

バブのこれ等の宣言と、貧富貴賤有識無学のあらゆる階級の人々が驚くべき速度で、熱心に彼の教

えの感化に応えつつあったことの結果として、弾圧の企てはますます教しく断固たるものになって来た。信徒等の家は略奪破壊され、婦女子は捕えられて連れて行かれた。テヘラン、ファールス、マザンダランその他の各地において殺されたものは数知れなかつた。その多くは断頭、絞首、あるいは大砲の口から爆撃され、あるいは火中に投げられ、あるいは寸断されたのであった。しかし迫害のあらゆる企てにも拘らずこの運動は進んで行った。否かくの如き恐るべき弾圧を通じて、バブの信徒の確信は増大して行ったのである。これはその弾圧によってメーデー出現に関する予言の多くが実際に実現されて行ったからである。シーエー派が権威あるものとして認めているチャベルによって記された伝承の中に次のような言葉がある。

『彼においてモーゼの完全さと、キリストの尊さと、ヨブの忍苦とがある。彼の弟子たちは彼の時代に圧迫されるであろう。トルコ人とデラミト人の両者が贈物として交換される如く彼等の首は断たれて贈物として交換されるであろう。彼等は斬られ焼かれ、そして恐怖させられ、戦慄させられ、大地は彼等の血で彩どられ、婦女子は皆号泣するであろう。これ等は実に我が聖者達である。』

—— E・G・ブラウン教授訳「バブの新歴史」より 一二二頁

## バブの殉教

<sup>注</sup> 一八五〇年七月九日、バブは三十一歳の時、遂に狂暴な迫害者等の憤怒の犠牲となった。彼と殉教を共にせんことを乞うて止まないアガ・モハメッド・アリという青年と共に、タブリズ兵營の構内にある死刑台に引かれたのであった。モハメッド・アリの頭部が彼の愛する師バブの胸部にあたるような工合に、二人が腋の下からロープで縛られて吊りあげられたのは、その日の正午より二時間前のこ

とであった。アルメニヤ兵士の一隊が連れて来られ銃殺の命令をうけた。直ちに一斉射撃がなされた。しかるに硝煙が拭かれた後、バブとアリとはなお生きていることが発見された。銃弾はただロープを切断したのみで、二人は傷を負わずに大地に墜落したのであった。バブとアリとは附近の一室に入つて彼等の友達の一人と話していたところを見つけられた。正午頃二人は再び吊り上げられた。アルメニヤ兵士等は射殺の結果がかくも不思議であつたため、奇蹟として憐れみのあまり、再び射撃することを拒んだのであつた。そこで他の一隊が新らたに連れて来られ、命令をうけて発射した。今回は銃殺の目的を達することができた。二人の身体は銃弾につらぬかれ、酷く裂傷されていたが、彼等の顔面はほとんど損傷されていなかった。

非道なこの行為によつて、タブリズの宮庭は第二のゴルゴタとなつたのである。バブの敵たちはいづれもこの罪深い勝利の喜びを謳歌した。これによつて、憎むべきバビ信教の木は根幹からおおわれ、残類が一掃されるのははや容易であると考えたのであつた。しかし、彼等の勝利の喜びもつかの間であつた。彼等は真理の木は単なる人工の斧で倒され得るものでないことを知らなかつた。彼等のこの罪悪行為がバブの運動に、より大なる勢力を与える手段であつたことを彼等が知つていたとしたらどうであろうか。バブの殉教は彼のかねてよりの願いをまっとうし、後に残された信徒に感激と熱情を加えたのであつた。彼等の精神的熱情はかくまで激しかったので、迫害の冷酷な風はかえつて情熱の火を煽つてはげしい炎と化せしめたのであつた。弾圧が強くなればなるほど火焰は高く燃え上がったのであつた。

(注)ヘチユラト紀元二二六六年シャーパーン月二十八日、金曜日

## カルメル山上の墓

バブの殉教の後、彼の遺骨は彼の猷身的な弟子の遺骨とともに市をとりまく城壁の外の濠端に遺棄された。二日目の夜の真夜中に二人の遺骨はひそかにバビ教徒等に拾われて、数年間ひそかにイラン国内のかくし場所にかくまわれた後、非常な危険と困難をおかして最後に、「聖地」に運ばれたのであった。「聖地」の「エリヤの洞窟」から程遠からぬカルメル山腹の美しい山景をおった地に築かれた墓に彼等二人の遺骨は今眠っている。ここはバハオラが最後の幾年かを送られた所、そして彼の墓所がある所から二・三里の地点である。バハオラの聖なる靈屋を拜せんと世界の各地から来る数千の巡礼者等は、何れもまたバハオラの崇愛の的であり、又、先駆者であったバブの廟にも参拝することを誰も忘れないのである。

## バブの文書

バブの文書はぼうだいなるものである。バブは研究や思索に耽らずに、迅速に立派な註釈や深遠な解説や雄弁な祈りを数多く成し遂げたが、これは彼の靈感の証明であるとされている。

彼の種々な文書の趣意を要約すれば次のようなことである。

『これ等バブの文書のあるものは、コーランの諸節の註釈、解説、あるいは祈り、教話、文意解釈の暗示であり、他は「神の唯一性」についての教義の諸点に関する訓戒、警告、講話などである。

また人格の陶冶、世俗超脱、神の靈感に依存すること等を励ましたものである。しかし、彼の文書が真髓とし趣意とする点は、彼の唯一の目的であり願望である、間もなく世に出現すべき「實在」に

就ての叙述であり、礼讃であつたと。いうのも、彼は自分の出現の主旨は、吉報の前駆であり、自分の眞の性質は単に、「かの人」のより大きな完成の顯示のための手段にすぎないと考えたのである。故に、バブは昼夜ひたすら「彼」の礼讃を止めず、信徒等に「彼」の出現を期待するよう説きつづけ、それを文書の中に次のように宣言しているほどである。すなわち『予は唯だこの最も力強い典籍の一字であり、無限の大海の一滴にすぎない。そして、「彼」が出現する時に始めて予の眞の性質、秘密、謎、暗示のすべてが明瞭になるであらう。そして又この宗教の胎芽は色々な段階を経て漸次発展し、「形相最も美しい」域に達し、「最も優れたる創造者たる神に栄光あれ」という讚美の法衣をもつて飾られるであらう。』と……。彼はそれほどまでに「彼」の焰で燃え上がらせられていたので、マークの要塞に囚われていた時の暗夜の灯火は、彼にとって、実に「彼」、来るべき者。バハオラへの祝賀の焰であり、「彼」を思い起すことはチェーリグの牢獄における彼のよき慰めであつた。これによつて彼は精神の増大を得、「彼」の芳酒に恍惚とし「彼」を思うことに歓喜したのであつた。——「バブの挿話」五四頁

### 神が現わし給う者

バブは洗礼者ヨハネに比較されるのであるが、バブの地位は単に先触れとか先駆者のそれではない。バブは彼自身神の顯示者であり、たとえその宗教は時間的に短日月の期間に限られていたとは云え、一つの独立した宗教の創始者であつた。バハイはバブとバハオラがバハイ信教の共同創始者であると信じており、バハオラの次のような言葉はこの眞理を裏がきしているのである。

『この最も力強く、驚異に満ちた啓示と我自身の以前の出現との間に、そのような短い期間が存在

したという事は、いかなる人も解き明かすことができない秘密であり、いかなる人智をもつてしてもはかり知ることのできない謎である。それが継続する期間はあらかじめ定められていたのであるが、私の隠された「書」の内容を知らされない内は誰もその理由が分らないであろう。』

しかしながら、バブがバハオラのことを言う時には、全く無私の心をあらわしている。すなわち次のように宣言している。

『**神が現わし給う者の時代に、彼より一句を聴き、それを暗誦する者はバヤンすなわちバブの啓示を千度誦するよりも善かるべし**』——「バブの挿話」三四九頁

彼は、もしそれによって神が現わし給う者のために少しでも通路を補綴することができるとすれば、如何なる苦難をも忍受することを幸福と考えた。そして、その人こそ自分の愛の唯一の対象であり、かつ靈感の唯一の源であると宣言した。

### 復活、樂園と地獄

バブの教えの重要な部分は、復活、審判の日、樂園および地獄等と言う用語に関する彼の説明である。復活とは、真理の太陽の新たな顯示者があらわれることである。死者の復活とは、無知と無思慮と、欲情の墓穴に眠れる人々が精神的に自覚するに至ることを意味する。審判の日とは、新しい顯示者の日であつて、その啓示を撰取するか否かによつて羊が山羊と区別されるのである。それは羊は良き牧羊者の声を聴き、これに従うからである。樂園とは、神の顯示者を通じて啓示された神を認識し、愛するに至る歡喜であり、それによつて、可能な限りの完成に達し、死後、神の国に入り、永遠の生を



得ることができるとを意味するのである。地獄とは、神についての知識をうばわれていて、その結果神聖なる完全に達することができず、遂に永遠の恩恵を失うことを意味するのである。彼は決定的にこれ等の用語は前述の意義を離れては真の意味を持たないと宣言している。そして、物質的天國、地獄、肉体の復活などの観念は、単に想像の作りごとであるとしている。彼は、人は死後の生活を持つということ教え、かつ来世における完全への進歩は無限であると教えている。

### 社会的倫理的教え

バブはその著書の中で、信徒等は、兄弟姉妹的愛情と親切とを持って他と区別されてあらねばならぬと教えておられる。有益な技術工芸はますます研究されねばならない、初等教育は一般に普及されねばならない、今はじまりつつある新らしい素晴らしい宗教制においては、婦人はより充分な自由を持たなければならぬ、貧窮者は公共の倉庫から世話すべきであるが、乞食をすることは飲料用として酒精類を用いることと同様に厳禁されねばならぬ、そして、真のバブの行動の原点は純真なる愛であらねばならず、報酬を望んだり、罰を恐れたりしてはならぬと教えている。バヤンの中で彼は次の如く言っている。

『たとえ神への礼拝の報酬として火をもって酬いられても、神への礼拝が変らないほど神を礼拝せよ。恐懼の心から神を礼拝するなら、それは神の聖域に至る価値のないものである……。そして、たもし汝が楽園を望みそれに向って希望を持って礼拝するならば、汝は神の創造物をして神の伴侶者たらしめるのである』——E・G・ブラウン教授著「ペルシャのバビ」(英国アジア協会機関誌)

## 受難と勝利

この引用において、バブの全生涯を躍動せしめた精神を検討して見よう。神を識りかつ愛し、神の屬性を照現し、来たらんとする神の顕示者を迎える準備をすること——これ等のことこそ彼の生存の目的であった。彼にとって生は恐れるものを持たず死も意とするに足りなかつた。何故ならば愛は恐怖を払い除け、殉教そのものはただ愛する神の脚下へ彼のすべてを捧げることであつたからである。何と奇怪なことであるか。この純にして美なる魂、この神の真理の靈感のこもれる教師、この神と同胞とを熱愛した者が、それほどまでに憎まれて、その時代の見せかけの信心家たちによつて殺されたとは。これは確かに無思慮と頑迷な偏見が、予言者、神の聖なる使者がそこに現に存在する事實を無視せしめ、盲目ならしめたことに他ならない。彼は世俗的な偉大さや輝しさなどは少しももたない。しかし俗世の援助を全く受けることなく、最凶横暴な俗世の反対をこえて勝利を獲得する能力がなく、いかにして精神的威力と支配とを証明し得ようか。かんなんの至ることなく受難をなめることなく、群敵の憎悪や見せかけの友の裏切り、あらゆる万難に対する極度の忍受、しかもこれ等のすべてにうち勝ち、憂えず、悩まずこれを怒り、かえつて彼等のために祝福を念ずる能力なくして不信の世界にいかにして神聖なる愛を示し得るであらうか。

バブは忍受した。そして勝利を得た。数千の人々は自らの生命を犠牲にし、彼等のすべてをつくして彼に奉仕することによつて、彼への愛の忠実を実証した。諸王は人々の心と生命の上に及ぼす彼の威力を妬んだことであろう。更に、神が現わし給う者は遂に現われて主張を確認し、彼の先駆者バブの献身をうけ入れ、そしてバブを彼の栄光の相伴者たらしめた。

### 第三章 神の栄光バハオラ

『おお待望しつつありし汝、もはや待つを要すまじ。何故となれば彼来たればなり。視よ、彼の聖堂とそのうちに在る彼の栄光とを。それは新しき顯示をもって来れる古の栄光なり』——バハオラ

#### 生誕と幼年時代

ミルザ・ホセイーン・アリ、その後バハオラ（神の栄光）の称号で呼ばれた彼は、イランの大臣でヌール州出身のミルザ・アッバスの長男であった。彼の家は富裕な旧家で、一族の多くはイランの文武官の高位についていた。彼はイランの首都テヘランに、<sup>注</sup>一八一七年十一月十二日の早晩に生誕された。彼は一度も学校教育は受けられなかった。彼がわずかでも教育を受けたとすれば、それは家庭での教育であった。それにもかかわらず、彼は子供の頃から驚ろくべき智慧と知識を備えておられた。彼がまだ青年であった頃、彼の父は死に、莫大な土地財産の管理や、弟妹等の保護が彼の手にのこされた。ある時、バハオラの長男アブドル・バハは彼の父の幼年時代の事蹟について筆者に次のような話をされた。

『彼は幼年より非常に親切で寛大であった。彼は好んで戸外に遊び、時間の多くを花園や野外に費やすを常とされた。彼は非常に人々を引きつける力に富み、それはすべての人に感ぜられていた。いつも大勢の人々が彼のまわりをとりまいていた。大臣や宮廷の官吏は好んで彼の周りに親近し、子供等も彼にひどくなくつくのであった。彼がわずかに十三、四歳の頃には、早くもその博識振り

## バビとして投獄

バブが一八四四年に彼の使命を宣言した時、バハオラは二十七歳であったが、大胆にこの新しい信

教の大業に参加し、やがて間もなく最も有力で勇敢な提唱者として知られるに至った。

彼は既にこの大業のために二度投獄の憂目をみておられた。そうして一度は足打ちの拷問にあわれた。それは一八五二年の八月にバビ教徒にとつて恐るべき結果をもたらす事件が突発した時のことであつた。サデグというバブの一青年信徒が彼の愛する師の殉教を目撃して痛く影響されたため、遂に常軌を逸し、復讐のためにピストルをもって皇帝を狙撃したことである。銃丸の代りに散弾を装填してあつたので、数発の小弾丸が命中したけれども大した傷害は与えなかつた。そこで青年は皇帝を馬から引摺り下したが、自身は王の従者に直ちにとらえられて、即座に殺害された。かくて全バビ教徒は不法にもこの行為の責任を負わされることになつて、恐るべき虐殺がおこなわれた。八十人の教徒

(注)ヘチユラト紀元一二三三年モハラム月一日

我々のと同じでない。彼の思う通りにさせてやれ』と言つた。』

は有名となつた。彼はいかなる問題についても話ができ、いかなる問題が提出されても究明解決を与えられるのであつた。大きな集会にあって彼はオラマ（イスラム教の教師）等と論談を交え宗教上の難題に解説を与えられた。すべての者はいつも非常な興味をもって彼の説を傾聴した。バハオラ二十二歳の時、彼の父が死去するや、政府は国習によつてバハオラに父の官職をつぐよう命じたのであつたが、彼はこれを辞された。時の総理大臣はこれを評して『彼の意のままに委ねよ。そんな官職は彼にとつては値うちがないのだ。彼はより高い目的を抱いている。予には彼の意のある処が分らないが、予は彼がある尊とい職務に運命づけられているのだと固く信じている。彼の考えは我々のと同じでない。彼の思う通りにさせてやれ』と言つた。』

なく、この者の秘かなはかり事によって、意見の衝突が信徒間に漸次増大し始めた。それは丁度キリストの高弟達の間に行った分裂と相似たものである。この分裂は、(後年アドリヤノーブルにおいて公然となり激烈となったが) 世界の人類の統合をもたらそうとすることが、人生の総目的であったバハオラにとつては誠に痛ましいことであつた。

(注)これは一八五三年のはじめの頃の語でバブの宣言より九年後のことである。かくてバブの「九年」についての予言は満されたのである。

## 荒野における二年

バグダッドに来てから約一年後、バハオラはただ独りソレイマニエの荒野へわずかに一着の着替をたずさえて出かけて行かれた。この時期に関しては彼は「確信の書」の中に次の如く記しておられる。

『我がこの地(バグダッド)に到着した最初の頃、差し迫つた出来事の兆(きざし)を認めたのでそれが起る前に身を引こうと決心した。我は荒野に逃れて世間から遠ざかり、寂しく二年間、全く孤独の生活を送つた。我の両眼からは苦惱の涙が雨と降り、血の滲(にじ)み出るような我の心には苦痛の大波が押し寄せていた。食物のない夜も多く、この身が全く休まることのない日も多かつた。我が存在を御手に持ち給う御方にかけて誓う。斯様な苦惱の嵐や、打ち続く災厄にも拘わらず、我の魂は歡喜に包まれ、我が全存在は言いようのない喜びを示すのであつた。というのも、我が独居においては、人の害とか利益とか、健康、疾病というようなことに気付かなかつたからである。我は、世間やその一切を忘れて、ただ一人我が靈と問答していたのである。しかし我は、神聖なる運命の綱目は人間の最大の觀念を超越するものであり、神の命令の投げ矢は最も大胆な人間の意図をも凌駕(りやうが)するも

有様なり。更に彼らはその行為を是となし、自らは安全の城に定住しているとす。しかし、事實は必ずしも彼らが想像するようではない。明日必ずや彼らは今拒否するものを見るであろう。

我等は今やこの辺境なる流刑の地（アドリヤノーブル）より更にアッカの獄舎に移されんとす。彼らの言う処によればアツカはさびれた地で、最も醜い外観を呈し、季候は最悪で水質も悪く、あたかもわずかにふくろうの主都に適すが如き処にて、ただふくろうの鳴く声を聞くのみである、と。彼らは予を此の地に幽閉し、恩赦を禁じ、生命の良きことを絶ちて、わずかなる余年を終らしめんとす。たとえその疲労は予を衰弱せしめ、飢餓は予を打ちひしぎ、寢床は岩石で作られ、予が交わる者は砂漠の野獣どもであろうとも神かけて予は辞せざるべし。予は断じて忍耐す。万物存在前の王なる、万民の創造者、神の激励により、忍耐するのみ。いかなる事情の下にあつても予は神に感謝す。そうして、予は、恩寵深き者（高遠なるかな神）がすべての人々の顔を、強大にして恵沢多き者に誠実をもって向わしめんことを望む。実に神は祈りを捧げる者に答え、神を呼ぶ者に近づかん。更に我は神に乞う、願くばこの暗き迫害をして彼の聖者達の身を護る楯となさしめ、それによつて彼らを鋭刃槍尖（鋭利な槍の先）より守り給え、と。苦難を通して神の光明は輝かされ、神の讚美は一層輝やきつづけるであろう。これ古来より今日に至るまで神が採り給う方法なり。』

——「バブの挿話」一四六一—一四七頁

### アツカにおける牢獄生活

その頃のアツカは、トルコ帝国全土より極悪罪人が送られる牢獄都市であった。男女老幼の八十人から八十四人を収容するバハオラとその従者達の一行は、悲惨な海上の旅を終えて、ここに到着する

## 束縛緩む

遂にこの牢獄生活も幾らか緩和される日が来た。トルコ軍隊が動員されこの兵舎が兵隊のために使

と直ちに兵営内に収監された。その場所は極度に不潔で陰気であった。そこには寝床もなければ何の道具類もなかった。食物も粗悪で不十分なものであったので、しばらくして、たまりかねた囚人等は自ら食物を買いたいと願い出でた。初めの数日間は子供等は泣き続け、ほとんど眠むることもできなかった。間もなくマラリヤ、赤痢等の悪疫が現われ、同行者一同が病気で臥し、ただわずかに五人を残す有様であった(その五人も後に病気の犠牲となったが)。四名はやがて倒れた。生き残った者も言語に絶する苦痛をなめたのであった。

この苛酷な牢獄生活は二年間継続し、その間誰も牢獄の外に出ることは許されなかった。ただわずかに四名の者が毎日嚴重な監視の下に食物の買入れに出たのみであった。

この兵営における牢獄生活中は外部からの訪問は嚴重に禁じられていた。イランの数人のバハイ等は徒歩はるばる師の温顔に接したいと訪れて来たが、市の城壁を一步も入ることを許されなかった。そこで彼等はよく第三の濠ぼろの外側の原に行った。そこからはバハオラの獄舎の窓を見ることができた。バハオラもまたその窓の一つに姿を現わされた。来訪者達ははるかに彼をみつめて涙なみだ泣し、そして帰路についたが、犠牲と奉仕の熱情が更らに燃え立つのを感じるのであった。

(注)二人の死者を葬るためにバハオラは自身のじゅうたんを提供して、その埋没費用にあてようとされた。しかしその金は、その目的のために使われずに、兵隊達に横領されてしまった。そして死体は地中の穴に投げ込まれた。——(イランの歴史家による)。

用されることになった。バハオラ一族は一個の彼等だけの住宅へ移され他の信徒達は市内のある隊商宿へ収容された。バハオラはこのようにしてそれ以後なお七年間ここに監禁されておられた。彼が幽閉されている小室の近くには彼の家族の十三人の男女が互に譲り合つてどうやらこうやら押し込められていた。ここに移つた始めの頃は、設備の不充分と、不十分な食物の支給と、普通の生活に必要な便宜品の欠乏のために非常な困難を重ねた。しかし、その後二、三室追加の部屋を使用することを許されたので、比較的便利に生活できるようになった。彼等が兵舎を出て以後は訪問者も許されるようになり、勅令によつて非常に厳格であつた束縛も、時々は一時的に施行されたが、次第次第に止められるようになった。

## 獄扉開かる

牢獄生活が悲惨の極にあつた時も、バハイは恐怖狼狽せず、確固たる信念を決して失わなかつた。アッカの兵營に囚われていた時代、バハオラはある信徒に書き送られた。「恐るるなかれ、これ等の扉は開かれるであろう。わが天幕はかのカルメル山上に張られ、そうして無上の歡喜は必らず来るであろう」と。この宣言はその追隨者等の慰安の大きな源となり、やがて事実となつて現われるに至つた。いかにして獄扉が開かれたかは、彼の曾孫シヨージ・エフエンデイによつて英訳されたアブドル・バハの次の言葉に最もよく語られている。

『バハオラは深く田舎の風景の美と、緑樹のうっ蒼とした所を好まれた。ある日彼は「予は九年間草木の繁つたさまを見なかつた。田舎は魂の世界であり、都市は肉体の世界である」と言われた。

予は間接的にこの話を聞いた時、バハオラは田舎を愛しておられるのだと思つた。そして予は、彼



の望みが実現されるために、予ができることは何でも成功する確信があった。当時アツカにモハメッド・パシヤ・サフウトとよぶ者があつて、非常に我々に反対していた。彼はマズラエと呼ばれる大邸宅を市の北部四哩ばかりのところに持つていた。その大邸宅は花園に囲まれ、小溪をめぐらせ、非常に好ましい場所であつた。予はパシヤを彼の家に訪ねて『パシヤあなたはあの立派なお城を捨ててアツカにすんでいられるが』と言うと、『私は病身であるから都會を離れることはできぬ。あそこに行けば淋しいし、それに友達にも会えぬのだ』と答えた。そこで予は『あなたがあそこに住まずお城が空いている間我々に貸してください』と言つた。彼はこの申込みに驚ろいたが、しかしすぐ承諾した。予は一カ年約五ポンドの低廉な家賃で五カ年分を払つて契約した。予は直ちに人を遣つてお城の修理をし、花園を整え、浴室を設けた。また祝福された美のために一台の馬車を用意した。ある日、予はそこへ行つて、予自身でその場所を見ようと決心した。市を囲んでいる要壁の外へ出てはならないという我々に対して何回も出された勅令にもかかわらず、予は市の関門を通過して外へ出た。監視の憲兵等は見張りをしていたが、とがめなかつたので、予はまづぐそのお城に行つた。翌日予は再び数人の友達および役人たちと共に出かけたが、城門の両側に見張りをしていた番兵もあえて阻止しなかつた。その後予はバーヂの松の樹の下にテーブルを整えて市の主だった人々や役人達を集めて宴会を催した。夕方には我々は皆一緒に市街へ帰つて行つた。ある日、予は祝福された美の御前に行つて、『マズラエのお城の用意はできました。そこへゆかれるための馬車も一台ととのえてあります』と言つた。(當時、アツカにもハイファにも馬車は一台もなかつた。)彼は『予は四人である』と言つて、そこへゆくのを拒まれた。後に再び願つたけれども、前と同じ答を得たのみであつた。三度願つたが、彼はなお『否』と言われた。そこで予もそ

れ以上強いて願い得なかつた。しかし、アッカに勢力をもつ有名なあるイスラム教のシェイクがあつて、バハオラを愛し彼もまたその人を愛していた。予はこのシェイクを呼んで事情を話した。予はこう言つた。『貴下は思い切つたことのできる方だ。今夜バハオラの聖なる御前に行つて、彼の前にひざまづき、彼の両手をとつて、彼が町を離れると約束されるまで、彼をなさないようにして勸めて下さい』と。シェイクはアラビヤ人であつた。……彼は直ちにバハオラの許に行き、彼の身近くひざまづいた。彼は祝福された美の手をとり、接吻して訊ねた。『何故貴下は市街からお去りになりませぬか』と。バハオラは『予は囚人である』と答えられた。シェイクは更に言つた。

『斯くてそのようなことはありません。何人が貴下を囚人となす権力を持ちましようか、貴下は貴下御自身を牢獄にとどめて居られるのです。この牢獄生活は貴下の御意志だったので。いま私は貴下が牢獄を出られて、あのお城に行かれることをお願いします。彼所は風光絶佳で青々としております。樹木は美しく、オレンヂは火の玉のようです。』祝福された美が、『予は囚人であるからそんなことはできない』と言われるたびごとに、シェイクはバハオラの両手をとつて接吻した。そして一時間も彼は願いつづけた。遂にバハオラも『ケイリ・コブ』即ち『よろしい』と答えられた。かくてシェイクの忍耐と執拗は酬いられたのであつた。やがて彼は非常な喜びと共に、聖師の承諾の知らせを予にもたらしした。アブドル・アジズの嚴重な勅令のために、祝福された完全との会合も實際も厳禁されているにも拘わらず、予は翌日馬車を駆つて彼をかのお城に送り届けた。誰も少しも妨げなかつた。予は彼をそこに残して市へ帰つた。

二年間彼はこの魅力ある美しい土地に留まられた。それから更に他の場所すなわちバーヂに移ることになつた。それはバーヂでたまたま流行病が発生し、その家の家主は家族と共に逃れ去り家を

誰にでも無料で貸す気になったからであった。我々は非常に安い家賃の家を借り、そこに神威と眞の尊嚴に輝やく門戸が開かれたのであった。バハオラは名目上は囚人であった（トルコ皇帝アブド・アジズの厳しい勅令は決して取消されてはいなかったが実際においてはその生活と態度に高貴と威嚴を示されたので、すべての人々から尊敬された。そして又パレスチナの支配階級の人々からもその感化力と權威をうらやまれた。知事モタサルレフ、軍団長、將軍、地方官吏等は驕傲に彼と相会することを願うに至ったが、彼はまれにしかそれに応じられなかった。

ある時、市知事が上官の命によると称して一人の武官と共に、祝福された完全に面会を求めた。その要求は受け入れられた。その武官は非常に肥ったヨーロッパ人であったが、バハオラの崇嚴な品位にうたれて扉のかたわらで地上にひざまづいて動かなかつた。それほど二人とも氣おくれがしてしまったので、すすめられたナールグウイレ（水パイプ）をなかなか口にすることもできず、バハオラから何度もすすめられてやっと口に持っていた。しかし、それでも彼等は只そのパイプを唇に触れたのみで側に置き、胸に手をあて襟を正して謙讓と尊敬の情に満ちた有様で坐しているだけなので、そこに居合せたすべての人々はすっかり驚かされた。

友人達の敬愛、すべての官吏達や重立った人々から示された厚情と尊敬、巡礼者達や、眞理の探求者達の相つぐ来訪、すべての人々が表わす奉仕と忠誠の精神、祝福された完全の崇嚴なる王者的風貌、彼の命令の有力き、彼の熱心な信徒の数——これらすべてが、バハオラは囚人ではなく、かえって王中の王たることを実証したのであった。二人の專制的な王が彼に反対していた。この二人の獨裁的な君主が彼を幽閉していた時ですら、獄中から彼等に呈されたバハオラの書簡は、あたかも王がその臣下に語るごとき、威嚴にみちたものであった。その後、彼は嚴重な勅令にも拘わらず、

バーヂにおいて王侯の如く生活された。彼はしばしば『実に、実に、最も惨憺たる獄舎はエデンの楽園と化したのだ。』と言われた。

確かにこのようなことは世界創造以来かつて例のないことである。』

(注)祝福された完全または祝福された美とは、信者達がしばしばバハオラを呼んだ称号である。

## バーヂにおける生活

バハオラの早年の困苦の時代には、貧窮と不名誉の境遇のうちにかに神の栄光を讃えるかを示されたが、その晩年にはバーヂにおいて名声と富裕のうちにかに神の栄光をたたえるかを示された。幾百千の熱誠なる信徒等は莫大な資金を彼に供し、その自由の裁量に委した。そして彼のバーヂにおける生活は、最高の意味における王者の如くであったと言われるが、それは決して物質的の栄誉の意味ではない。祝福された完全とその家族の生活は非常に簡単質素で、自分のための贅沢の如き風は、家のどこにも見られなかった。彼の家の附近に信徒等はレヅワンと呼ぶ美しい花園を設けた。彼はしばしばこの花園で幾日もあるいは幾週間をすらも費やされ、夜はその小屋に眠られた。時々彼はもつと遠い所に出かけて行かれた。彼は、アッカやハイファを度々訪問され、かつてアッカの兵営に幽閉されていた時予言されたように、カルメル山上にテントを張られたことも、一度ならずあった。バハオラの間は大部分、祈りと瞑想と、聖典を書くことと、聖なる書簡を啓示することと、信徒等の精神的教育とに費された。この偉大な聖業のために彼が全く自由に働けるように、アブドル・バハが一切の事務に当り、モルラ、詩人、政府の役人、等に面接すらもしたのであった。これらすべての人々は、アブドル・バハとの面会を通じて喜びを感じ、幸福になり、そして彼の説明や話で

十分に満足しバオラに直接会わないにも拘わらず、その子息アブドル・バハと相識ることによって全面的にバオラに対して友情を抱いたのであった。それはアブドル・バハの態度が、その父の地位を、彼等に理解させたためである。

かの有名な東洋学者でケンブリッジ大学教授であった故エドワード・G・ブラウンは一八九〇年バオラをバーヂに訪問し、その印象を次の如く記している。

『私の案内者は、私が靴を脱ぐ間暫時立停っていた。それから手をすばやく動かしてカーテンを引き、私を通してしまおうとそのカーテンを元通りにした。すると私は広い部屋に入っていた。その部屋の上手の一方には低い長椅子があり、扉と反対側には二三脚の椅子が置かれてあった。私はどこへつれてゆかれるのか、誰に会えるのかと、かすかにうたがっていたが（何故なら何んの確言も与えられていなかった）ので、やがて一分か二分たった頃、ぞっとするような気がしてこの室に誰かいることにはつきり気付いた。長椅子の端が壁に接している隅の所に、不思議な、そして神々しい姿の人物がイスラム教の托鉢僧によってターヂュと呼ばれる（しかし普通のとちがった高さで形をした）種類の頭巾を冠って腰かけていた。その頭巾の裾のまわりには白い小さなターバンがまどわれていた。私が熟視した彼の顔は描写する事はできないが決して忘れ得ない顔であった。輝やくその眼は何人の心をも読むが如くであった。力と権威とがその大きな額に備わっていた。額や頬には深いしわがあるけど、黒い頭髪や、ほとんど胸まで房々とおおっている髭は、歳をあざむくばかりであった。私はその人の前に身を屈めた時、それが誰の前であるかをたづねる必要はなかった。その人こそ王達も羨やみ帝達も徒らに嘆息する程の、愛と熱誠の目標であったかの人であったのである。優しいが威厳のある声が私にすわるように命じた。それから、次のように言われた。『貴下の到

来を神に感謝します……貴下は四人にして流刑者である者に会いに来られた。……我々はただ世界の利益と、国々の幸福とを願うばかりです。しかも彼等は我々をもって暴動の煽動者とみなし、その罪、禁錮追放に値するものとした……すべての国々が信仰において一体となり、すべての人々が同胞として一体となること、人々の間に親愛と和合のきずなが強化されること、種々な宗教の多様性が消滅し、人種の差別がなくなること、これ等のことのごとくに害がありません。……しかし、それは必ず実現されるでしょう。これら無益な闘争や破壊的な戦争はなくなり、やがて最大の平和が必ずや来るであろう……貴下もまたヨーロッパでこれを必要としませんか。これはキリストが予言したことではありませんか。……しかも我はヨーロッパの諸王や支配者等が人類の幸福のためよりも、人類の破壊のためにより自由に財宝を費しつつあるのを見るではありませんか。……これ等の闘争や流血や不和はやめられねばなりません。そうして全人類は一族、一親族の如くならねばなりません。誇りは自国を愛する者にあるのではなく、人類同胞を愛する者にあるのです。……私がバハから、そのときいたことは他にも色々あるが、以上が私の記憶する限り、その時の言葉である。これ等の言葉を読む人々をして自ら熟慮せしめよ、このような教義が束縛や死に値するかどうか、又、世界はこれらの言葉の普及によって利益を得るか、また損失を招くか、と云うことを。」

——「旅人の物語」の序文、バブの挿話——三九頁

## 昇 天

かくして、バハオラは簡素静純な地上の晩年を送られ、一八九二年五月二十九日発熱された後、遂に七十五才で逝去された。彼が啓示された最後の書簡中に自筆による、記名調印された「遺訓」が残

された。死後九日目にその封印は家族並びに少数の友人等の面前において、彼の長子の手で開かれ簡単にして銘記すべきこの文書の内容が知られるに至った。この遺言によってアブドル・バハは父バハオラの後を継ぐ者であり、かつ教えの解説者として指命され、バハオラの全信徒、家族、近親者等はすべて彼に帰向し服従するよう指示された。この取り定めによつて彼の死後、教派の分裂は止められ、この大業の統一は確立されたのであった。

### バハオラの予言者たること

バハオラが予言者であることについて、明瞭な観念を持つことは重要なことである。彼の言葉は他の神聖な顯示者と同様、二様に大別して考えられる。一方では、単に人々に対する伝言を神より授かった人として書いたり話したりしており、他方、その言葉は、神そのものから直接もたらされたものと考えられるのである。「確信の書」に彼は次の如く記しておられる。

「我は既に本書の先の頁で、永遠に神聖な曙から出現する発光体達〔顯示者達〕のそれぞれに、二つの地位を割り当てた。これら二つの地位の一つ、即ち本質的な統合の地位に就いては、我は既に説明した。「我らは彼らの間のいづれにも差別はつけぬ」。(コーラン 2・136) もう一つの地位は特異性の地位であり、創造の世界とその有限性に属するものである。この第二の地位について、神の顯示者達は、それぞれ独自の個性と明確に規定された使命、予定された啓示、及び特定の制限とを持ってゐる。各顯示者は、夫々異なる名で知られ、特種な属性で特徴づけられ、一定の使命を果たし、特別の啓示を託されている。まさしくこう言われている、「我は、使徒達の内の或るものを他の者達より卓越させておいた。ある者には、神は自ら言葉をかけ給ひ、或るものを起し、高め

給うた。そして我らは、マリヤの子、イエスにも数々の明らかな御兆を与え、聖霊をもって彼を強化した」と。(コーラン 2・253)

従って、彼らの同一性と崇高な超脱という観点からすれば、神性、神格、最高の単一性、及び内奥の本質という様な属性は、実在の精髓達「顕示者達」に当てはまるのである。というのも彼らは皆、聖なる啓示の王座にとどまり、神聖なる隠蔽の席に据えられているからである。彼らの出現により、神の啓示は明らかにされ、彼らの顔により、神の美は現わされる。従って、神聖なる実在の顕示者達の語るところに、神御自身の口調を聞きとれるのである。

顕示者達の第二の地位、即ちそれぞれの特異性、差異、この世での有限性、特質及び規準という観点から見ると、彼らは絶対的隷属、全き窮乏、完全な自己滅却を現わしている。このことを、まさしく彼は語られている、「我は神の僕である。我はお前達と同様の人間に過ぎない」と。

万物を蔽い包む神の顕示者達の中の誰ががもし、「我は神なり」と宣言したとしたら、彼は誠に真実を述べておられるのであり、そこには疑いの余地はない。なぜなら彼らの啓示や属性や御名を通して、神の啓示、神の御名、その属性が世の中に明らかにされる、ということは、これまでに繰り返し立証して来たところであるからである。このように述べられている、「あの槍は神の槍であって汝のものではなかった」と。(コーラン 8・17) こうも述べられている、「まこと汝に忠誠を誓うものは、即ち神に忠誠を誓うことになる」と。(コーラン 48・10) また予言者達の内の誰かが「我は神の使者である」と言われたとしても、彼はまた、疑う余地のない真実を語っておられるのである。まさにこう言われている、「マホメッドは、お前達の中の誰の父親でもなく、彼は神の使者である」と。(コーラン 33・40) こういう観点から見れば、顕示者達は皆、あの理想



の王、あの絶対に変わることのない本質、の使者に外ならないのである。またもし彼らが皆、「我はすべての予言者の打ち止めである」と宣言されたとしても、彼らは、誠に疑いの微塵の蔭さえない真実そのものを語っておられるのである。何となれば、彼らは皆、只一人の人物、只一つの魂、只一つの聖魂、只一つの本質、只一つの啓示であるからである。彼らは皆「始め」と「終わり」、「最初」と「最後」、「顕」と「隠」の現われであり、それらはすべて、聖霊中最も深奥にある聖霊に在りし、本質の精髓に在りし神に属するものである。また、もし彼らが「我々は神の僕なり」と言われたら、これもまた明白で争う余地のない事実である。何故ならば彼らは、なに人も到底達し得ない極度の隷属の状態にて現わされたからである。故に、これら本質の精髓達（顕示者達）は、古来永劫の神聖さの大海原に底深く沈んでいた時に、或いはまた彼らが、神聖なる神祕の最高峯の絶頂に舞い上がった時に、自らの言葉が神の御声であり神自身の呼び声であると公言されたのである。もし慧眼が開かれたならば、顕示者達はこういう地位にあつたにも拘わらず、万物に浸透し給い、永遠に不朽に在りし神の御前にあつては、完全に自らを滅却し、全く存在しないものと考えていたことが分かるであろう。思うに、顕示者達は、完全に自らを無とみなし、神の宮廷において自らの名があげられることは、神を冒瀆する行為とみなすのである。何となれば、神の宮廷では、自己のいささかな嘸きさえも、自己主張や独立自存の証拠とされるからである。神の宮廷に到達した彼らの眼から見れば、かようなことを連想すること自体が既に重大な罪悪なのである。もしも、神の御前、何か他のことが語られるとしたら、またもし人間の心や舌や精神や魂が、最愛なる御方以外のものに夢中になるとしたら、もし人間の眼が、神の美以外の何者かの顔を見つめるとしたら、人間の耳が、神の御声以外の他の調べを傾聴するとしたら、また人間の足が、神の道以外の別な道を歩むと

したら、これ以上に嘆かわしいことがあり得ようか。

今日では、神の微風が吹きわたり、聖靈は万物に充満している。神の恩寵がかくも豊かに降り注がれているから、筆は静止し、舌は沈黙する。

この地位故に顯示者達は、自らを神の御声、等であると公言し、また同時に、使者の地位故に、自らを神の使者と宣言したのである。いつの場合でも彼らは、その折々の必要に応じた言葉を述べ、またこれらの発言をすべて、自らに帰した。その発言たるや実に、神の啓示の領域から創造の領域にまで、また神性の領域から地上の存在の領域にまで及んでいる。従って顯示者達の言葉は、それが神性の領域、主の領域、予言者の領域、使者の領域、守護者の領域、使徒の領域、或いは隷属の領域、のいかなる領域に属するものであるうとも、それはすべて、疑う余地のない真実なのである。であるから、眼に見えぬ者の顯示者達、神聖さの嚮達<sup>キリヤク</sup>が述べた種々異なった言葉が、以後、決して人々の魂を騒がせたり、心を惑わせたりすることのないよう、我がこれまでに説明の裏づけとして引用して来たことをよく注意して考えてみるがよい。——『確信の書』一八九—一九五頁

バハオラが一個の人間として語られるとき、彼がとられる彼御自身の地位は非常に謙遜なもので、「神の内へ没我」するのであった。何が他の人々から、人としての顯示者を区別するかと言えば、それは彼の威力の完全さと同様、彼の完全な自己滅却によるのである。されば、いかなる場合にも彼はゲッセマネの園におけるキリストと同じく「己れの意志を行わんとするにはまず、ただ汝の意志のままに」と言えるのである。イラン皇帝への書簡にバハオラは次の如く言っておられる。

『おお、国王陛下、実に予は世のすべての人の如く予の床に眠れる一介の者に過ぎなかつた。榮光ある者の微風が吹きわたり予に存在するすべてのものの知識をもたらした。これは自己より出たも

のではない。只、強大なる全知の神からのものである。彼は予をして天地の間にこれを宣言させ給ひし。これによって洞察力のある者は皆涙するようなことが我が身にふりかかれるなり。予は世人の学ぶ学問を学ばず、又、学園にも入学せざりき……予は強大なる神の意志の微風が吹くままに動く一葉なり。疾風吹く時、いかに静かに止まり得るや。否、これ名称と属性とをそなへたる主に属せざればなり。彼の断固たる命令は世界に向つて彼の祝福を伝うべく予に起たしめたり。まことに予は主の指命の前には身命を惜まず、慈悲寛容の御手に自らをまかすのみ。誰人が自己自身の役割のために語りて、それがために衆人上下の迫害を受け得んや。否、願くは永遠の神祕を筆に教ゆる神により、力強く強きものによって力づけらるる者を救けしめよ』

キリストがその高弟の足を自ら洗つた如く、バハオラもまた折にふれしばしばその従者たちのために炊事その他の賤役を勤められた。彼は卑僕中の卑僕であられた。そうして他人に仕えることをよろこばれ、必要に応じて何も敷いていない床上に眠られ、ただパンと水とで生き、時には彼がいわゆる「神聖なる食餌、即ち、飢餓」を食となして生きられたのであった。彼の完全な謙讓の徳は、自然や人間性、ことに聖者、予言者、殉教者等に対して示される彼の深甚なる尊敬の中に見られた。彼にとつては卑小なものから偉大なものまで、事物はすべて神を語るのであった。

彼の人間としての人格は神の代弁となり筆となるために神によって選ばれたのである。彼がこの食べものもないような困難と艱難の道をとられたことは彼自身の意志によるものではなかつた。キリストが「父よできればこの杯を我より去り給え」と言った如く、バハオラも「もし他に代表者、代弁者が

あるなれば、予はみづから民衆の非難、嘲弄、迫害の的とはならなかつたであらう」（エシユラガトの書簡）と言われたのであつた。しかし、神聖な招喚は明確であり、命令的なものであり、彼はこれに従われたのであつた。神の意志は彼の意志となり、神の喜びは彼の喜びとなり、輝く黙従をもって彼は次の如く宣言された。

『まことに予は言う。神の道にいかなるものが落ち来ようとも、それは魂の愛するものにしてまた心の望む処である。神の道にあっては猛毒も純良な蜜であり、あらゆる難儀も清水の一飲みである。』——「狼の子への書簡」

既に述べた如く、バハオラは他の時には「神の地位」から語られるのである。かかる発言において彼の個人としての特質はすべて考慮外に置かれるべきほど、完全に従属的なものである。彼を通じて神はその創造物によびかけ、神の愛を伝え、神の属性を教え、神の意志を知らしめ、人々をみちびく神の掟を宣べ、神に対する彼等の愛と忠誠と奉仕を訴えられるのである。

バハオラの文書においては、時々その形式が一方から他の形式に変化している。すなわち、時には明らかに人間としての談論であるが、たちまち神自らの語るが如き風をもつて続けられている。しかしながら、人間として語られる時においてさえ、バハオラは神の使者として、神の意志に全く身をささげた生きたる模範として語っておられるのである。彼の全生命は聖霊によって活かされているのである。故に彼の生活および教えの中に、人間的要素と神的要素とを確然と識別することは出来難いのである。神は彼にいわく、

『言挙げよ。予の殿堂においては神の殿堂の外に、予の美においては神の美の外に、予の存在にお

いては神の存在の外に、予自身においては神自身の外に、予の運動においては神の運動の外に、予の黙認においては神の黙認の外に、予の筆においては神の筆の外に、すなわち、最も貴き、最も賞すべきものの他に何事も見えざるなり。

言挙げよ。予の魂にはただ真理のみがあり、予自身の中にはただ神のみが見ゆる。』

——「スーラトウル・ヘイカル」

## 彼の使命

バハオラのこの世界における使命は即ち統合——神により神を通じて全人類の統合を招来することに他ならない。彼は言われる。

『知識の樹において、最も光榮ある美果はこの秀でたる言葉なり。すべて汝等は一樹の果実にして、また一枝の葉なり。誇りは自國を愛する者にあるのではなく、人類同胞を愛する者にあるのである。』

従来の子言者達は皆、地上の平和が来、人類間に相互の好意がもたらされる時代の到来を伝え、そしてその実現を速やめるために、彼等の生命を捧げたのであった。彼等は一様に、この祝福すべき完成の時期は邪悪が審判され、正道の者が酬いられる主の到来の後に始めて来ることを明かに宣べているのである。

ゾロアスターは三千年の後に始めて救世主シャー・パーラムが出現して悪靈アーリマンを征服し、そうして正道と平和の統治が建てられることを予言した。

モーゼは、万軍の主が現われ、すべての諸国よりイスラエルの子等を集め、圧制者等を滅ぼすが万

軍の主の王国を地上に建てる時期の到来までは、なお久しい間イスラエルの子等にとっては追放、迫害、圧迫の長い時期があるだろうことを予言している。

キリストは言った。「われ地に平和を投ぜんために来れりと思ふな、平和にあらざり、かえつて剣を投ぜん爲に来れり。」(マタイ伝 第十章 三四節)と。このように彼は「父の栄光」をもって「人の子」が現われ来るまで、戦争、戦争の噂、騒擾、災難等の時代があることを予言したのである。

モハメッドは宣言して言う。ユダヤ教徒とキリスト教徒間の悪業の故に神は両者間に敵意と憎悪を置いた。それは神が彼等のすべてを審判するために現われる「復活の日」までつづくであろうと。

一方、バハオラは彼がこれ等のすべての予言者が約束した唯一の者なること、即ちその時代において平和の統治が現実に建設されるべき神聖なる顕示者であることを宣言されている。この声明は先例のない独自のものであるが、不思議な位に時代の徴候にびったり適合しており、すべての偉大な予言者達の予言と合致している。バハオラは類なき明瞭さと説明さをもつて、人類の平和と統合とを招来する方法をもたらされたのである。

勿論バハオラが出現されて以来、今日まで空前の大戦争があり、大破壊があった。しかしこれは予言者達が偉大で、「恐るべき主の審判の日」が来つつある黎明に起ると言つた処のものであって、これは「主の到来」が目前にあるのみならず、既に出来あがつた事実であることの証拠である。キリストの寓話を用いて言えば、あたかも、ぶどう園の主たる神が不埒な農夫からこれを取戻し、彼を懲罰し、そののちその季節の果実を主たる神に納める他の者に、そのぶどう園を与えられるようなものである。これは、主の降来に当って恐るべき破壊が起り、かの邪悪な農夫と同じように数世紀を通じてこの地球上に失政をほどこし、その果実を横領して来た暴政府、強欲頑迷なる僧侶、モルラ、或は横暴なる

支配者等を覚醒することを意味するのであるまいか。

恐るべき事件や比類のない惨禍はなお暫らくこの地上から絶えぬであろう。しかしバハオラは我々に保証されている。久しからずして「これ等の無益な闘争や破壊的な戦争はなくなり、やがて最大平和が到来する。戦争や争闘は、この破壊性が堪えがたい程ひどくなって来ているので、人類はそれ等から解放される道を見出すか、それでなければ死滅するかせねばならなくなるにちがいない。」定めの時」はすでに到来した。それと共に約束された救世主も到来した。

### バハオラの著作

バハオラの著作は、その範囲広汎にわたり、個人的および社会的生活の各事象、物質ならびに精神界の事項、古今の聖典の解釈、或は近き将来および遠い未来への予言等、一切を取り扱っている。

彼の知識の広さと正確さは実に驚ろくべきほどである。彼に対して、通信や質問をなす者がよく知っている種々の宗教教典に説明や解釈を与えるに際し、彼御自身はそれらの教典に接する通常の手段は持ち合わせておられなかったのに説得力と權威のある論調でそれらの書を引用し解説された。「狼の子への書簡」中に、彼はバブの文書すら未だ読む暇も機会も持たなかった、と宣べておられた。しかも、彼の文書中にはバブの啓示に対する最も完全な知識と、理解とが表示されている。(上に述べた如く、バブ自身彼の啓示すなわちバヤンは、神が現わし給う者によって靈感を与えられ発露されたものであると宣言している)一八九〇年に来訪したブラウン教授と二、三十分間づつ僅かに四回応対され他には、如何なる西欧の学識深い思想家と交わる機会も無かったのに、バハオラの著作は、彼が十分に西欧の社会的、政治的、宗教的の諸問題に理解を持っておられることを示している。それ故、彼の敵す

らも彼の学識と知恵の無比なことを認めないわけにはいかなかったのであつた。<sup>注</sup>彼の長い幽囚の生活状態は、彼の豊富な知識が一つに靈的源泉から得られたものであつて、決して普通の研究や、学問の方法や、書物の助けや指導等によって得られたもので無いことを証して余りあるのである。

時として彼は、母国の一般用語となつてゐる現代イラン語で書かれたが、それは多分にアラビヤ語が混入してゐる言葉である。また他の場合、学識あるゾロアスター教徒に宛たものには、純粹の古典的イラン語で書かれた。彼はアラビヤ語でも自由に書かれたが、時には平明な文章で、時にはコーランの文体の如き古典的な文体でお書きになつた。彼は全然文学的教育を受けられたことがないにも拘わらず、かくも多くの国語や文体を完全にこなしておられることは実に注目し得る。

彼の著書のあるものでは、彼は聖なる道を説くのに、「これを歩むものはおろかなりとも迷ふことなし。」(イザヤ書 二十五章 八節) という如き単純な言葉遣いを用いておられる。また他の著書では、豊富な詩的想像や、深遠な哲理や、イスラム教、ゾロアスター教、その他の経典、イラン、アラビヤ文学や伝説などに言及されているが、これ等はただ詩人、哲学者、学者のみが十分に鑑賞できるものである。更にまた、精神性の高い段階を取扱つたものがある。これ等はただその境地に到達した者のみが始めて理解し得る処のものである。彼の著作はあたかもごちそうのなつべられた潤沢な食卓の如く、純真な真理の求道者の要求と嗜好に適合するものである。

彼の大業が学者、教養ある者、精神的な詩人、著名な作家等の間に影響を与えたのは、右のような事が、その理由になつてゐるのである。そして、スーフィーその他の宗派の指導者や文筆家でもあつた幾人かの大臣たちすらも、バハオラの言葉に惹きつけられたが、それは彼の著作がその甘美さと精神的意義の深さにおいて、すべての他の著述家たちの著作を凌駕していたからである。



## バハイの精神

アッカの避地へきちに監禁されていながら、バハオラは故国イランを根底から動かされた。そして単にイランにとどまらず、当時の全世界を動かしたし、今も動かしつつあるのである。彼および彼の信徒等を鼓舞こぶした精神はごく穩健にして堅忍しかも威儀正しいものであるが、それは一面驚嘆すべき活力であり超越的力であった。それは一見不可能なことさえ成しとげるのであった。それは更に人の性格をさえ一変させた。この力にしたがった人は新生の人となった。彼等は愛と信仰と熱情に充たされ、それらに比べると地上の喜びも悲しみも一抹の塵に等しいものであった。彼等は神を畏おそれなく信賴することによって、完全な沈着をもって、否かがやかしい喜びに満たされ、進んで終生の苦痛も無惨な死にも直面する用意ができたのであった。

その最も驚ろくべきことは、これらの人は新生の歡喜に充たされていたので、自己の迫害者等に対して何等怨恨憎しみの念をさしはさむ余地を留めないことである。彼等は自衛のために暴力を用いることをも全く放棄した。そうして自己の運命を悲しむかわりに、新しい光榮ある啓示をうけたことを喜び、その真理を立証するために、進んで生命を捧げ、その血を流す特権を得たことをもって、自らを最も幸運者とした。彼等の精神は歡喜に満ちて歌うのであった。その理由は崇高永遠にして愛すべき神が、人間の唇を通して語り、彼等をしもべとし友として召喚し、この地上に神の王国を建て、そうして戦い疲れた世界に平和の至宝しほうをもたらすために来給うたことを信じたからである。

バハオラによって呼び起された信仰は、かくの如きものであった。彼は先にバブが予言した通り彼

の使命を公言された。そして彼の偉大な先駆者の献身的な努力のおかげで、彼の出現を迎える準備を整えていた何千という人々があった。——この数千人の者は迷信と偏見を離れ、純潔な精神と公正な度量を開いて「神の約束した栄光が顕示される事」を期待しつつあったのだ。貧窮、束縛、眼をおおうばかりの境遇や外面的屈辱も、遂に、「彼等の主の精神的栄光」を彼等から覆い去ることは出来なかつた。——否、かえってそれ等の暗黒なる地上の環境こそ、彼の真の光輝を更に増大させるために役立つたのである。

(注)バハオラは西洋の文書を特に勉強されてから、その知識の上に彼の教えを建てられたのかどうかを質問された時、アブドル・バハはバハオラの諸著書には、現在西洋において非常に親しまれてあたりまえのこととなっている思想を含んでいるが、六十年前それが書かれた当時はこれ等の思想は西洋においては印刷されるどころか考えられてもいなかったのだと答えられた。

## 第四章 アブドル・バハ「バハの僕」

我が出現の海原の潮が退ぞき、我が啓示の書が終らば、汝等は神が意図し給うたこの古来の根莖から分岐せる彼に、汝等の面を向けよ——バハオラ（アゲダスの書）

### 生誕と幼年時代

アッバス・エフエンディ、後年アブドル・バハ（すなわちバハの僕しもべ）の称号をもつて呼ばれる彼はバハオラの長子である。彼はテヘランにおいて、一八四四年五月二十三日、夜半の少し前、すなわちババが彼の使命を宣言した同夜に生誕したのであった。

彼の父がテヘランの牢獄に繋がれた時、彼はようやく九歳であったが、この時すでに彼は父に非常な愛着の心を持っていた。当時一家は暴民の略奪にあい、家財を奪われ、窮乏きうぼうにひんした。ある日彼はその愛する父が日課の運動に出て来た時に、面会のために牢獄の庭に入ることを許された時のことを語っている。

父の容貌ようぼうが痛く疲衰ひびして見えたこと、病軀びやうくのため歩行も困難で、鬚髮びんぼう乱離、その首にはめられた重い鎖のために筋肉は擦傷し、腫脹し、鎖の重さで、彼の体軀は湾曲わんきよくしていた。この惨状が敏感な子供心に忘れ得ぬ印象を刻みつけたのであった。

彼等がバグダッドに滞在して一年、すなわちバハオラがその使命を公然と宣言される十年前、当時

わずかに九才であったアブドル・バハは、彼の父が真に約束された者であること、その顯示は全バブの信徒等が期待していたものであることを恰慚にもすでに発見したのであった。約六十年の後、彼はこの確信が一挙に彼の全心を圧倒した折のことを次の如く記されている。――

『予はこの祝福された完全の僕である。バグダッドにおいて予はなお、児童であった。この時、彼は予に御言葉を知らしめた。そして予は直ちにそれを信じた。彼がこの御言葉を予に声明するや予は即座に彼の聖なる脚下に身を投じ、予が血をもって彼の道のために犠牲たらしめんことを切望した。犠牲！ 何と予はこの言葉に甘美を覚えたことよ。予にとってこれより大きな恵みはない。この首筋が彼のために鉄鎖によって繋がれ、この両脚が彼の愛故に架縛され、彼の大業のためにこの身が寸断され、深海に投入されるよりもさらに大きな光榮が何処にあるうか。真実に予が彼の誠実な敬愛者にして僕であるならば、予の生命、予のすべてをこの「祝福された鬮」に犠牲とすべきは当然のことである。』――「ミルザ・アーマド・ソーラブの日記」一九一四年一月

この頃から彼は盟友等によって「神の秘密」と呼ばれるようになった。これはバハオラから与えられた称号で、バグダッド滞在中は人々にこう呼ばれていた。

彼の父が広野に去った二年間、アッバスは断腸の思いであった。彼の主要な慰めはバブの聖なる書簡を書写したり、暗誦したりすることであつて、彼は大抵いつも孤独な瞑想に耽つていた。最後に父の帰る時が来た時、彼は喜びに飛立つ思いをした。

(注)ヘジュラト紀元二二六〇年、ジャマディヨウル・アウヴァアル月五日、木曜日。

## 青年時代

以来彼は父の最も親しい伴侶となり、いわば擁護者であった。一介の青年にしてすでに彼は驚くべき聡明と眼識をもって父の許に来訪する多くの人々に応接する役目を勤められた。訪客の中で真に真理を求める者たちは父に引合せ、そうでない者等には父との面会を謝絶して、あえてバハオラをわずらわさなかつた。またしばしば訪客の質疑に答え、難問題を解決するのに、彼の父を助けられた。例えば、スーフイ教師であるアリ・ショウカト・パシャという人が、回教伝承中の有名な「予は隠れたる秘密なり」という文句について、説明を求めて来た時、バハオラは我が子「神の秘密」、すなわちアッバスに、この説明をするように命じられたのであった。彼はこの時十六才であったが、直ちに筆をとり、かの教師を敬服させた程の明瞭な説明書を書かれた。この書簡は今に至って、バハイ間に広く流布され、またバハイ外の人々にも知られているのである。

この時代、彼はよく回教寺院に出入して、好んで教士学者等と神学上の討論をされたのであった。彼はいかなる学校にも学ばれたことは無く、彼の唯一の教師は、彼の父であった。また彼の好んでする気晴しは乗馬で、彼はよくそれを楽しまれた。

バグダッド郊外の園において、バハオラの宣言がなされて以来、アブドル・バハの父に対する献身は一層その度を増した。コンスタンチノーブルへの長途の旅行中、彼は父の馬車の側に乗ったり、父のテントの側を去らず、日夜警護の任に当られた。また彼は出来るだけ父に代って家庭の面倒や責任を負い、一家の支持者とも慰安者ともなられた。

アドリヤノーブルに在った頃の彼は人々の敬愛の的であった。またよく人を教え、「師」と常に呼ば

れていた。アッカに在って、一行のほとんど全員が、腸チフス、マラリヤ、赤痢をわずらって倒れた際、彼は自ら患者を看護し、浴湯ゆたうさせ、食餌を調べ、少しも休養せず、遂に疲労のあまり、自らも赤痢に罹患し、ほとんど一カ月危険状態に陥られたのであった。アドリヤノールに在った時と同様に、アッカに在っても、彼は、上は知事から下は乞食にいたるまで、すべての階級の者等から敬愛されていた。

## 結婚

アブドル・バハの結婚に関する次のことはバハイ宗教の歴史家である一イラン学者が著者に提供してくれたものである。

『アブドル・バハの青年時代において彼の結婚問題は当然、信徒たちにとって大きな関心事であった。そして多くの信徒等が彼等自身の家庭にこの榮冠を獲たいと願って押しかけて来た。けれどもアブドル・バハは長いこと結婚問題には耳をかされなかった。そして誰もそれについての真意を解するものはなかった。後に至って、それは彼の妻として定められている娘があったためだと分った。その娘はエスファハンにおいて、彼女の両親がババの祝福を受けて産んだ娘であった。父はミルザ・モハメッド・アリと云い、有名な「殉教者の王」や「殉教者の愛人」の伯父でエスファハンの名門の出であった。かつてババがこの地におられた頃、彼等には未だ子がなく妻は非常に子供を熱望していた。ババはそれを聞かれミルザ・モハメッド・アリに自分の食物の一部を与え、妻とこれを分つようと言われた。彼等がこれを食した後まもなく妻は妊娠し、長い間の願望であった子供を産むことになった。注 一 人の子を産み、モニレーと名づけた。その後男子が生まれ、セイエ

ド・ヤーヤと命名した。その後彼等は幾人かの子女を得た。後モニレーの父の死後、彼女のいとこたちはゼロロウス・ソルタン及びモルラ等のために殉教し、家族はバハイであるがために非常な難儀と迫害をこうむった。そこでバハオラはモニレーと弟セイエド・ヤーヤをアッカに引取られ、難をのがれしめた。バハオラ及び彼の妻すなわちアブドル・バハの母であるナウヴァブは非常にモニレーを愛されたので、側近者等はバハオラ夫妻が彼女をアブドル・バハに任せようとしているのだと解した。両親のこの願望はまたアブドル・バハの願望となった。彼はモニレーに対して熱愛の真情を捧げ、彼女もまた心からそれに応え、かくて間もなく彼等は結婚によって結ばれた。

この結婚はいたって幸福円満なものであった。彼等の間に生まれた子供のうち、長い間の苦しい獄中生活にも耐えて生育したのは四人の娘達であった。そうして彼女等は皆よく奉仕の美しい生活を通じて、彼女等を知る特権を持った周囲の人々から寵愛を集めたのであった。

(注)この物語を洗礼者ヨハネの誕生の話と比較すると面白い。ルカ伝 第一章参照。

## 聖約の中心

バハオラは種々の方法によって、アブドル・バハが自分の昇天の後の後継者であることを示された。バハオラの死より幾年も前に彼はこのことをその著「アグダスの書」中に暗に宣言しておられる。彼はアブドル・バハを指してしばしば「我が聖約の中心」あるいは「最大の枝」、「古来の根茎からの枝」などと呼ばれた。また常に彼を「師」とよび、家族に、特に彼を尊敬するよう教えられた。そしてその後、「遺訓」によって、すべての者が彼に帰向し、彼の命に従うことを判然と指示されたのであった。

かの「祝福された美」（バハオラは信徒等や家族から常にこの称号をもってよばれておられた）の死後、アブドル・バハはその父が、明かに指示された通り、大業の頭首、この教えの權威ある解釈者たる地位につかれた。しかし、このことはアブドル・バハの親戚のある人々やその他の人々を怒らせ、あたかもソブヘ・アザルがバハオラに反抗したと同様、彼もまた一部の親戚その他からの反対を受けた。彼等反対者等は信徒間に紛争を起させようと企てて失敗し、遂に種々な虚偽を以ってトルコ政府にアブドル・バハを訴えた。

アブドル・バハは父の遺命によってハイファアの上方、カルメル山の中腹にバハの遺骸の永遠の安置所と、集会所及び拝礼者等のための多くの室を持つ建物を建てつつあった。彼等反対者等はこの建築物はアブドル・バハの徒の要塞であつて、これを本拠として政府に反抗し、近傍シリヤの地を奪取しようとする陰謀であると官憲に告訴した。

## 再投獄

この告訴とその他の無根の嫌疑によつて、二十余年もアッカの周囲数里の間に自由を得ていたアブドル・バハとその一族は、再び一九〇一年から七年間以上もこの牢獄都市アッカの市壁内に嚴重に監禁されることになった。しかし、このことは彼がアジア、ヨーロッパ、アメリカにわたつてそのバハの伝言を宣伝する妨げとはならなかつた。ホーラス・ホーリー氏は、この時代のことを次の如く記している。

『アブドル・バハを師とし、友として来訪する者は、その種族、宗教、国家の如何を問わず、こぞつて卓を囲み、旧知の如く、数時間あるいは数ヶ月間滞留して、みな彼に社会的、精神的、道徳的



問題について質問し、みな感動させられ、更新され、賢明になって帰路についたのだ。恐らく世界にかくの如き宿舎は他に決して無かつたと信ずる。

彼の屋内に在っては、かの厳格なインドの階級制度は消滅し、ユダヤ教やキリスト教やイスラム教の有する人種の偏見は影を止めず、その家の主人の、ものを統合する同情同感によって、あたたかい心と大志を抱く心と云うかくべからざる法則を除いては總ての因襲は打破され除外されたのであった。それはあたかもアーサー王とその「円卓会議」の如きものであった……しかし、このアーサーは、男女の別なく爵位を授け、戦場に送り出すに剣をもつてせず、ただ御言葉をもつてしたのであった。——ホーラス・ホーリー著「近代社会宗教」一七一頁

この間、アブドル・バハは世界各国の信者等及び研究者等と盛んに文通された。この仕事では彼は彼の息女たち及び多くの通訳者や秘書等によって大いに助けられた。

彼の時間の多くは病苦や貧困に悩む者等をその家に訪問して、彼等を慰めることに費やされた。アッカの貧民窟において、この師ほど歓迎された者はなかつた。当時アッカを訪づれた一巡礼者は次の如く書いている。——

「アブドル・バハが毎週金曜日の朝、貧困者等にほどこしをするのは習慣になっていた。彼は彼の乏しい貯えの中から助けを求めてくる者の総てに少しづつ分配された。その朝はアブドル・バハの家の附近の道路には百人ばかりの人々が、あるいは座ったり、あるいはかがんだりして列をつくっている。そこにはあらゆる種類の人間が集っている。男や女や子供——一見して貧しく疲労と絶望に沈み、破衣をまとい、その中には多くの盲目や不具や病人などがいた。また、云いあら

わず言葉がないほど貧乏な乞食どもがいつでもアブドル・バハが扉から現われるのを待ちかねている表情だ。……彼は次から次へと順々にすばやく動きながら、時々立ち止っては同情と鼓舞の言葉を残し、熱心に差し出す掌中へ小さい貨幣を落し入れつつ、小児の顔を撫で、彼の衣服の裾にとりすがる老婆の手をとり、盲目の老人に明るい言葉を与え、病み臥して此処へ来ることができない者等の安否をたずね、愛と慰めの言葉と一緒に彼等への分け前を彼等に送るのであった。――

「アブドル・バハ警見記」 M・J・M 著 一三三頁

アブドル・バハ個人の欲求は僅少<sup>わずか</sup>であった。彼は遅く寝て早く起きて働き、食事は一日簡単な二食で足りた。衣服はほんの數着の安価な品を有するのみである。彼は他人の窮乏を他所にして自ら贅沢に生活することには堪えられない人であった。

彼の愛好するものは、児童と、花々と、自然の美とであった。毎朝六時か七時に一家は朝のお茶を一緒にするために集い、師が茶をすすっている間に、家内の子供等が祈りを節をつけて歌うのが常であった。ソーントン・チエース氏はこれ等の子供等について次の如く書いている。

『ていねいで、無欲で、他人への心やりが深く、意地張が無く、伶俐で、子供が好きな小さな物事にも欲求を抑えて、しかも素直なこんな子供産を私はいまだかつて見たことがない。』

——「ガリレアにおいて」五一頁

「花の奉仕」は彼がアッカの生活の一面をなしている。これについては巡礼者等はみな香ばしい思い出を持っている。リユカス夫人は次の如く書いている。

『花の香を嗅ぐ時の師の容姿を見ることは素晴らしい。彼がヒヤシンスの花弁に顔を埋めて匂がれる時、ヒヤシンスの花が彼に何事かを告げているかのように見えるのであった。それは丁度耳が美しいハーモニを聴こうとして熱心に傾けられている時のようで、注意力の集中と云ったような有様であつた。』——「私のアッカ訪問記」二六頁

彼は美しい匂いの花を多くの訪問者等に贈ることを好まれた。

ソーントン・チエース氏はアブドル・バハのアカにおける獄中生活の印象を要約して次の如く言っている。

『我々はこの最大の牢獄に彼と共に五日間滞在して囚人生活を送つた。それは平和と愛と奉仕の牢獄であつた。そこには人類の善と、世界の平和と、神の父性と、神の子としての人間相互の権利の承認の他なんの欲望も願ひも見い出さない。実際の牢獄、息詰るような空気が、人間の真情からの隔離、世界の諸条件の束縛など、不思議にもこの石壁の内部にはその影もなく、ここにはただ自由と純然たる神の精神がみなぎっているのみだ。あらゆる心配、騒動、世俗事に対する懸念とか、苦惱の類は影をも止めない。』——「ガリレアにおいて」二四頁

大抵の者には牢獄生活の惨苦は悲しむべき災厄と思われるものだが、アブドル・バハにとっては何等恐怖すべきものではなかつた。獄中であつて彼は次の如く記しておられる。

『予の入獄と禍難かたの故に悲しむなかれ。この牢獄は予の花園、予の住む樂園、人類の中における支

配の王座なる故なり。予が獄中の禍難は予にとりて正しき者の中に輝やく王冠なり。』

『何人も、慰安、安楽、成功、健康、快樂、歓喜等の状態にありては幸福たり得る。しかし、もし、苦難、困苦、重病等の時にても幸福にして、満足してあり得るならば、それは尊貴の証拠である。』

——「アブドル・バハの書簡集」第二卷 二五八、二六三頁

### トルコ調査委員会

アブドル・バハに対して提起された訴訟に対して一九〇四年と一九〇七年にトルコ政府から調査委員会が任命された。そうして、虚言でかためた証人たちはアブドル・バハに不利な証言をした。アブドル・バハはこの訴訟に対して反駁しながらも、何時でも法廷のいかなる宣告にも服従する用意のあることを示された。たとえ投獄されようとも、街路を引廻され、あるいは、呪われ、唾され、石攻にされる等、いかなる侮辱にも、また、絞首刑、銃殺刑に処せられようとも、なおかつ彼は幸福であるうと宣言されたのであった。

調査委員会の調査中も、彼は平静な気持ちで、園内に果樹を植えたり、精神的自由の威厳と輝やきに満ちながら結婚式の司会をしたりして、平常の如き生活を送っておられた。イタリヤ領事は、彼を望みの外国の港へ安全に送りどけようと申し出た。それに対し彼は感謝はされたが、固く辞して、たとえいかなることになっても、自分は、決して、敵から逃れたり、自分を救おうとしなかった。ババや「祝福された完全」の後にしたがって行かねばならぬと言われた。しかし彼は多くのバハイの人々に對しては、当時非常に危険になっていたアッカ附近から立ち去るよう勧告された。そして自分は少数の熱心な信徒たちと共にそこに留まりその運命を待たれた。

一九〇七年の冬の初めに四人の腐敗墮落した官吏が最後の調査委員会としてアッカに来て、一ヶ月の滞在の後そのいわゆる調査を終えて、アブドル・バハの嫌疑は事実に根拠あるものと報告し、彼を追放か死刑にすべきことを復命すべくコンスタンチノープルへ向って出發した。しかし彼等がトルコに帰着するかしないかに丁度その地に革命が勃発し、前政権の下にあった彼等は、身をもって逃避しなければならなかった。そして新たに政権を握った若き青年トルコは、オスマン帝国下にあつたすべての政治的、宗教的囚人を釈放した。アブドル・バハも一九〇八年九月遂に釈放され、その翌年、皇帝アブドル・ハミド自身獄囚の身となつた。

## 西洋の歴遊

釈放後のアブドル・バハは相変らず説教、書信、貧困者、疾病者等の世話にその聖なる生活を捧げ、ただアッカからハイファへ、ハイファからさらにアレクサンドリヤへと旅された位であつたが、一九一一年八月彼は西洋諸国への初旅にたれた。西洋における旅行中彼はあらゆる意見を持つ人々に接し喜々としてすべての人に交親せよ、というバハオラの命を充分に果したのであつた。彼は一九一一年九月初旬にロンドンに到着しここかに一カ月を送られたが、その間、日々の質問者等との談話その他の活動をなすかたわら、シテイテンブルで、R・J・キャムベル師の下での会合及びウエストミンスターの聖ジョンのアーチデーカーン、ウイバークフォースの下での会合において講演され、また市長と朝食を共にされた。ロンドンを去つて彼はパリに渡り、ここでも彼は日々熱心な多くの色々の国籍及び種類の人々に講演し、談話を交えるのに忙殺された。十二月エジプトに帰り、翌春アメリカのパハイの友の熱心な勧請に應じて合衆国に渡り、一九一二年四月にニューヨークに着かれた。以後

九カ月はアメリカ国中くまなく遍歴し、大学生、社会主義者、モルモン教徒、ユダヤ教徒、キリスト教徒、不可知論者、エスペランティストの会合、平和協会、新思想クラブ、婦人参政協会などあらゆる種類境遇の人々に講演し、またほとんどすべての宗派の教会において、その時々によってその聴衆に応じた講演をされたのであった。そして十二月五日に英国に向って出発し、リバープール、ロンドン、ブリストル、エジンバラ等を歴訪して六週間を送られた。エジンバラにおいてはエスペラント協会が目すべき講演をなし、東洋と西洋とが互に一層理解し合わんがために、彼は東方のバハイの人々に対して、エスペラント語の習得を勧告していることを述べられた。その後二カ月のパリにおける前回同様の活動の後、スツットガルトにおもむき、ドイツのバハイの人々と成功裡に会合を重ね、さらにブダペスト、ウイーンに行き、いたるところに新集団を創設しつつ一九一三年五月にエジプトに帰り、一九一三年十二月五日にハイファに着された。

### 「聖地」への帰還

彼は当時七十才であったが、その長年の刻苦精勵こくくせうれいの活動はこの奮闘的な西洋の旅行においてその頂点に達し、遂に身体の健康を害するに至った。彼は旅から帰って後、東洋と西洋との信者たちに対して次のような感動的な書簡を書かれた。

『諸友よ、予が汝らより離れ去るべき時期が近づきつつある。予は予の全力をつくして、能うかきりバハオラの大業に奉仕した。予は予の全生涯の日夜を通じて努力を尽したのである。』

予の望む所は、信者がこの大業に対して充分その責務に任ずることである。今や、アバハ（最上栄光）の国を宣べ伝えるべき時である。今や結合協同の時である。今や神の朋友等が精神的に和合

すべき時である……

予は東西南北に耳を傾け、信者等の会合に起る親愛の歌を聴くことを欲する。余命幾許もなき予はこれをもって唯一の歡とする。

いかに予は、かがやく一連の真珠の如く、輝やけるスバル星の如く、太陽の光線の如く、まな一の草原にすむカモシカの群の如く、バハイの友の一致固結がそのようであることを願う。

神秘の小夜鳥が彼等のために歌えるを聴かずや。楽園の鳥がさえずるを聞かずや。アブハの国の天使の呼ぶ声を耳にせずや。聖約の使者の懇請あるを心に留めずや。

嗚呼、諸々の信者等が、誠実忠節の体現、親愛和親の化身、和合同融の示現となることの吉報を心より待っている。

彼等は予の心を棄しませざるや。彼等は予の切望を満たさざるや。彼等は予の懇請を心に留めざるや。彼等は予の希望を遂げしめずや。彼等は予の呼ぶに応えざるや。

予は待つつある。予は忍耐強く待ちつつある。

バブがバハイ信教の敵共の暴虐の犠牲となり、バハオラがその郷土をおわれ、終生獄囚のうきめにあい、さらにバハオラの逝去によって一層その意を強めたバハイ信教の仇敵達は、アブドル・バハが欧米旅行から帰還後健康を苦し疲労したのを見て、再び勇気を取り戻した。しかし、彼等の望みは再び失望すべき運命にあった。間もなく、アブドル・バハは次の如く書くことを得た。

『勿論この肉体と人間の精力が、絶えざる磨滅に耐え得ないことは言うまでもない……しかし望まれた者の援助の力はこの弱く卑しいアブドル・バハの庇護であり指導であった……ある人々は、

アブドル・バハがこの世に最後の告別を告げようとしていると言い、アブドル・バハの体力は衰耗し尽したと言ひ、間もなくこれ等の理由で彼の生命は終りを告げるであろうと取沙汰した。これは真実から遠い。聖約破壊者や、薄志の徒の観測にもかかわらず、聖なる道程における試練のため、予の身体は弱っているが、しかし神に榮光あれ、祝福された完全の摂理によって、予の心力はますます若く旺盛を極めた。そして今や神に感謝すべきは、バハオラの祝福によって、予の身体精力は回復され、神聖な歓喜が我が内面にあふれ、無上の吉報はさん然と輝やき、至上の幸福は予が胸中に満つるに至ったことである。』

欧州大戦中及び大戦後、アブドル・バハは繁忙な活動中であつて、人々を感奮せしむるにたる立派な書簡を諸方面に送られたが、これらの書簡や通信が再開された時に、全世界の信者等に奉仕の熱情と、熱誠を新らしく喚起せしめたのであつた。その感激の下にこの大業は躍然として進展し、いたるところ、この信教の新勢力が見られるに至つた。

### 戦争中のハイファ

アブドル・バハの先見の明について注目すべき実例が、大戦直後数ヶ月間に与えられた。従来平時にはイランその他の世界各地から、多数の巡礼者がハイファを訪づれた。大戦勃発約六ヶ月前ハイファに在在の一老バハイが数人のイラン信者等のアブドル・バハ訪問の許可を申請した。けれどもアブドル・バハはこれを許されなかつたのみならず、以後ハイファに在在の巡礼者等を漸時に帰還せしめて、一九一四年七月末には、全部引払わされた。そして八月下旬、かの大戦の勃発が世界をおどろかせた時、



彼の先見の明があきらかになつたのである。

大戦が起ると共に五十五年間すでに追放と牢獄とにあつた彼は、ここに再び事実上トルコ政府の囚人となつた。シリヤ以外にある友達や信者等への通信はほとんど全く禁止された。そして再び彼と、彼に追従する少数の信徒等は食物の不足、生命の大危険と不便とたたかう苦しい境遇に置かれたのであつた。

戦争中アブドル・バハは周囲の人々の物質的及び精神的の欠乏を援助するために多忙であられた。そして自らテベリヤ附近に大農業を興し、小麦の大量を生産して、バハイのみならずハイファ及びアッカにおける他のすべての宗教の信徒等の飢饉を救い、その欠乏を広く救助されたのであつた。彼はすべての人々の世話をし、その困苦をでき得る限り軽減された。毎日多数の窮民達に小額の金銭をほどこし、他にパンも与えられた。パンのない時はココナツの実その他のものを与えられた。またしばしばアッカに行かれその信者等や窮民を慰藉救助されたのであつた。そして戦争中は毎日信者等と会合し、その助力によつて彼等はこの動乱の年月を一同幸福に平靜に送ることを得たのであつた。

## 彼の受爵

一九一八年九月二十三日午後三時、一昼夜にわたる戦闘の後、ハイファが英国及びインド騎兵の占領地となり、トルコ統治下における戦時の恐怖が去つた時、この市の歓びは非常なものであつた。

英軍占拠のはじまつた時から、各階級の軍人及び政府の官吏等は相率いてアブドル・バハに面会を求め、皆その談話の明快、見識の広博、洞察の深遠、及び礼節品位、歓待の温和なのを喜んだ。そして彼の高尚な品性、平和を促進し、人民の眞の繁栄に対して偉大な貢献をした彼の仕事は英国政府当

局者等を非常に深く感動させたので、遂に彼は英帝国のナイトの爵位（K・B・E）を授けられるに至り、一九二〇年四月二十七日ハイファ軍政総督の庭園において、その授爵式が挙行された。

## 彼の晩年

一九一九年から一九二〇年へかけて著者はハイファにあるアブドル・バハの賓客として二ヶ月半を送り、親しく彼の日常生活に接するの好機を得た。当時彼は七十六歳の高齢になんたとされていたがなお非常に元気に日々驚くべき多くの仕事をされていた。しかし彼は時々疲労して見える時があったが不思議な回復力を示された。そして彼の奉仕の活動は、最も彼を必要とする人々のためにいつでも提供されていた。彼の底なき忍耐、温和、親情、機智は彼の存在を祝福のようにしていた。毎夜の大部分の時間を祈りと瞑想に費やすのが彼の習慣であった。早朝から夕に至るまでは午餐後の短い午睡の他は、諸国からの書簡の披見返信に、あるいは種々な家庭の事務やバハイの大業のことに従事された。午後は大抵散策とか、ドライブとかでわずかに気晴しをされたが、その時ですらも二三人または一群の巡礼者等をとめない、路々精神的な問題を論じたり、途中窮民を訪づれたりされた。外出から帰ると彼は客間に友人達を呼んで夕の集いをされる。午餐と夕食には、よく巡礼者や友達と食卓を共にして語られた。そして非常に豊富な話題について貴重なお話をされるばかりでなく、いろいろな愉快な面白い話をして人々を喜ばされた。彼は自ら「予の家庭は、笑いとさざめきの家である」と言われたが実際そうであった。彼は各種の異った民族、人種、国家、宗教の人々と何の隔意かたがひもなく、心から打ちとけて親しく、彼の心からの食卓を囲むことを非常に喜ばれた。実に彼はハイファにおける小さい一団の親愛なる父であったばかりでなく、全世界のバハイ共同体にとつても父であった。

## アブドル・バハの逝去<sup>せいきょ</sup>

アブドル・バハの多方面の活動は次第に弱ってゆく身体にもかかわらず、彼の生涯の最後の日の一日か二日前までほとんど減ずることなくつづけられた。

一九二一年十一月二十五日の金曜日、彼はハイファの回教寺院の正午祈禱会に臨み、その後いつも如く彼は手づから窮民等に施興<sup>せいきう</sup>を行われた。昼食後、幾通かの書簡を口授された。休息の後、庭園に入り、園丁と話され、夕方、その日結婚したばかりの忠実な愛僕に祝福と訓誡を与えたのち、いつものように彼の客間のバハイの友の会合に出られた。それから三日とは経たない十一月二十八日、月曜日の午前一時三十分頃彼は非常に安らかに死去されたので、かたわらに待っていた彼の二人の息女も、彼がしづかに眠られたと思つた程であつた。

悲報はやがて市内に広まり、その訃電<sup>ふでん</sup>はたちまち世界の各地に報道された。翌朝（十一月二十九日火曜日）葬儀がとりおこなわれた。

『かくのごとき葬儀は、ハイファ、否、パレスチナにすらも未だかつて見たこともないほどのものであつた。……数千の、あらゆる宗教や、民族や、国語を代表して集つた哀悼者等の悲しみは非常に深いものであつた。』

総督ハーバード・サムエル氏、エルサレム知事、フェニキヤ知事、政府の重だつた役人たち、ハイファ駐在の各国領事、各種宗教団体の領袖<sup>りゆうしゅう</sup>、パレスチナの諸名士、ユダヤ教徒、キリスト教徒、回教徒、ドルース教徒、エジプト人、ギリシヤ人、トルコ人、クルド人、並にアメリカ、ヨーロッパ

バ及び土地の友人達、老若男女、貴賤貧富を問はず……その数は実に一万人、各々その親愛なる者の訣別を哀悼して、異口同音に「神よ、神よ、我等が父は去った」とそろって悲嘆したのであった。彼等は徐々に神のぶどう園たるカルメル山に向った。……徒歩二時間で一行はバブの墳墓の園に到着した。……大勢の群衆が彼の柩のまわりに集った時、回教、キリスト教、ユダヤ教の各派の代表は皆アブドル・バハに対する愛着に胸を充され、ある人々はその場のありさまに感激し、ある人々はあらかじめ用意していた頌讀と哀惜の声を挙げ、名残りを惜しみつつ、彼等の愛する者に最後の訣別の讚美を捧げた。彼等は等しく、アブドル・バハをこのかなしむべき混乱時代における人類の良き教師とし、調停者として賞讃することに一致していたので、バハイにとってそれ以上言うべきことはのこっていないようであった。——レーデイ・ブロムフィールドとショーギ・エフエンデイ共著「アブドル・バハの逝去」

回教、キリスト教、ユダヤ教の信者の社会の著名な九人の代表者等は、今や最後の幕を閉じたこの純潔高貴な生涯に対して、雄弁にして哀切な彼等の愛敬の意を表した。その後、棺は簡素で神聖な永遠の安息所に静かに置かれたのであった。

諸々の宗教、人種、言語の統一のために全生命を捧げて働いた人の記念としては、これは誠に適切な手向けであった。これはまたアブドル・バハの生涯の事業が無駄でなかったこと、及び、アブドル・バハの靈感、否、彼の生活そのものとなったバハオラの理想が、すでに世界に浸透し始め、数世紀にわたって回教徒、キリスト教徒、ユダヤ教徒を離反せしめていた宗派と階級の障壁を打破し、人類家族を分裂せしめた色々な党派を廃棄せしめ始めたことを証するのであった。

## 著書と講演

アブドル・バハの著書は非常に多いが、その多くは信者及び求道者等への書簡の形式になっている。また多くの談話と講演が記録され、その多くが出版されている。アッカ及びハイファに彼を訪問した多数の巡礼者の中には彼等の印象の記述を残している者が多く、これ等の記録の大部分も今は印刷されている。

彼の教えは、このようにして完全に保存されている。そうしてその取扱う問題の範囲もまた極めて広汎である。東洋と西洋の両方の問題の多くについて、彼はバハオラによって定められた一般原則の適用を具体化され、彼の父バハオラよりも、もっと詳しく説かれている。彼の著書でまだ西洋の言語に翻訳されないものが多数あるが、しかしすでに彼の教義の最も重要な原則について深い知識を与えに足るものは十分に翻訳されている。

彼は日常、イラン語、アラビヤ語、トルコ語をつかわれた。西洋歴遊に当っては、彼の談話や講演は常に通訳されたため、その独特の美と能弁と力を失ったことは明らかであるが、彼の言葉にとりなう精神的威力は、非常なものであったので、聴衆はすべて深く感銘させられたのであった。

## アブドル・バハの地位

アブドル・バハが「祝福された完全」(バハオラ)によってあたえられた独自の地位は、バハオラのごとき書簡中に示されている。

『我が出現の海原の潮が退ぞき、我が啓示の書が終らば、汝等は、神が意図し給うたこの古来の根。

「葦から分岐せる彼に、汝等の面を向けよ。」  
そして再び

『汝等もし、啓示の書につき理解し得ないことがあるなら、この権威ある血統より分岐せる彼に聞  
きなさい。』

アブドル・バハ自身は、次の如く書かれた。

『「アゲダスの書」の明文に従って、バハオラは、聖約の中心を彼の言葉の解釈者とされた。この  
聖約は、時の始めより、今日にいたるまでいかなる宗教制も同等のものを生み出せないほど確固で  
強大なものである。』

アブドル・バハが東西両洋に、バハオラの信教を広めた奉仕の完全こそ、時々信者によって、彼の  
地位についての考えの混乱を生んだ。多くの伝統的教義の崩潰を明示しつつある宗教的影響力の中に  
あって、アブドル・バハの言行を活す精神の純粹性を意識しつつ、多数のバハイは、アブドル・バハ  
を顕示者に類似したり、あるいは、キリストの再現と呼ぶことによって、彼に敬意を払ったと感じた。  
アブドル・バハのバハオラに奉仕する資格が、「真理の太陽」に向けられた鏡の清さから発したもので、  
「真理の太陽」そのものからではないと言ふことを感知できぬことほど、彼に強い悲しみを与え  
たものはない。

さらに、今までの宗教制と異り、バハオラの信教は、その内部に、世界人類社会の潜在性を保有す  
る。一八九二年から一九二一年までがアブドル・バハの使命を持たれた期間中にバハイ信教は、継続

的發展の數段階を眞の世界秩序の方向に向つて展開した。この發展は、この時代の地上にもたらされた新しい強い靈感を充分に認識していた唯一人の者アブドル・バハの絶ゆるまざる指導と特別の教えを必要とした。アブドル・バハがこの世を去られた後、彼自身の「遺訓」が公開され、バハイ信教の守護者シューギ・エフエンデイによりその意義が説明されるまで、バハイ信者は、愛する「師」の指導が、ほとんど必然的に顯示者と同程度の精神的權威を持つとみなしていた。

このような素朴な熱意の反響は、もはやバハイ共同体内において、感じられなくなったが、無比の献身と奉仕の神秘についての確固たる認識をもって、バハイ信者は今日、より意識しつつ、アブドルバハが成就された使命の独特な性格を味かうようになった。具現者ぐげんしゃであり、解釈者である者の追放と入獄により、一八九二年には非常に弱々しく又、頼りなきように思われたバハイ信教は、その後、反抗できぬほどの力をもって、およそ四十ヶ国に共同体を築き上げ、絶望的人類の未来を示す教えのみをもつて、衰退しつつある文明の弱点に挑戦する。

アブドル・バハの「遺訓」は、バブとバハオラの地位の秘密と、彼自身の使命の秘密とを完全かつ明白に表わしている。

『これがバハの人々の信仰の根底になるものである（願わくば彼等のために我が命が捧げられんことを）。「聖なる高遠の人（バブ）は神の一体性と唯一性の顯示者であり、古代の美の先駆者である。聖なるアブハの美（願わくば我が命が彼に忠実な友等のために犠牲にされんことを）」は神の至高の顯示者であり最も聖なる精髓の曙である。その他、全ての者は彼の僕であり彼の命に従うものである。』

この言葉や、我々の信教についての知識がアブドル・バハの一般的書簡に依存する重要性を強調した他の多くの彼の声明によって、信仰の一体制の基礎は確立され、その結果、師が個人的質問に答えられた個人宛への彼の書簡の参照によって生じた理解の相違は、急速に消え去っていった。さらに、守護者を頭目にもつ、明確な行政秩序の設立は、過去において種々の地方小団内にて、個人バハイの威光と力の形で支配されたあらゆる權威が、運営機関へと移された。

### バハイ生活の具現者

バハオラは元来「言葉」の啓示者であられた。彼の四十年間にわたる監禁生活は、その同胞たちとの交通を著しく制限したのであった。それ故に、啓示の説明者となり、「言葉」の実行者となり、多種多様の活動の最も複雑な様相において、今日の世界と現実とに接触し、バハイ生活の偉大な具現者となる重要な任務がアブドル・バハに下されたのである。彼はすなわち近代生活の急流の渦中において、各所にはびこる利己愛と物質的成功へのつまづきの世において、キリスト、バハオラその他の予言者等が人類に求めた神への完全なる帰衣と、人類への奉仕を、実行する生活を生きることがまだ可能であることを証示されたのである。一方では種々な試練、難儀、非謗、裏切などの渦中に耐え忍び、他面にあつては愛と称讃と献身と尊敬とをうけつつ、彼はその周囲で冬の嵐がたけり、夏の海が荒れる岩の上の燈台のように、狂乱怒号の中にあつて微動だもせず、平然自若として立たれているのであった。彼は自ら信仰の生活を送られた。そうして、彼に従う者に信仰の生活を今こころで呼びかけられているのである。彼は戦雲ただよう世界の真ただ中に、融合と平和の旗、新時代の大旗を押し立て、彼を支持する者等は新時代の精神で鼓舞されるであろうことを保証されたのである。それは古の



予言者、聖者を**鼓吹**したものと同様の聖霊であるが、しかし、それは新時代の要求に適應して出でた新しいほとばしりである。

## 第五章 バハイとは何ぞや

『人は常に実を結ばねばならぬ。聖なる精神（即ちキリスト）の言葉によると、実を結ばざる者は実を結ばざる樹に同じく、実を結ばざる樹はまさに火中に投げ入れらるべきものなり。』

バハオラ「楽園の言葉」

ハーバート・スペンサーはかつて言った、鉛の本能より黄金の行為を生成せしめる政治的錬金術はあらず、と。同様にまた鉛の個人より、黄金の社会を生成せしむべき政治的錬金術はないのである。バハオラもまたすべての古えの予言者の如く、この真理を主張され、この世界に「神の国」を建設せんがためには、先づそれが人間の心の中に、建設せらるべきことを教えておられる。されば我々は今バハイの教えを研究するに当って、先づ我々は個人の行為に対するバハオラの教訓から始めてバハイたることの意義について、明確なる理解を得たいと思う。

### バハイ生活を生きること

ある時「バハイとは何であるか」と問われた時、アブドル・バハは次のように答えられた。

「バハイたることは、単に全世界を愛し、人類を愛し、それに仕え万国平和と同胞愛のために活動することである。」また他の機会に彼はバハイを次のように定義された。「活動しつつある人間のあらゆる意味での完全性を授けられている者」と。ロンドンでのある講演で彼は、たとえバハオラの名を

聞いたことのない人でもバハイたり得ると述べられている。そして次の如く附言されている。

『およそ、バハオラの教えにしたがって生活する者は、すでにバハイである。これに反して、たとえ自ら五十年間もバハイであったと言っても、その生活がバハイらしくなければ彼はバハイではない。醜い人が自ら美貌と稱えても誰もだまされはしない。黒人が自らを白人と云っても誰もこれにあざむかれるものはなく、また自らをも欺くことはできない。』

しかしながら、神の「使者」を知らない人間は日陰にはえている植物のようなものである。それは太陽を知らないといえども、絶対的に太陽に依存しているのである。偉大なる予言者等は精神的な太陽であり、バハオラは現在我々の住むこの今の「日」の太陽である。往古の太陽はこの世界に温度と生気を与えたもので、これらの諸々の太陽がなかったならば、世界は冷却死滅していたであろう。しかし、これらの太陽がかって愛育した果実を成熟せしめることのできるのは今日の太陽だけなのである。

### 神への献身

完全なバハイ生活に到達するには、バハオラとの自覚された直接の関係が、あたかも百合やばらの開花に日光が必要なように必要である。しかしバハイは、バハオラの間人としての人格を礼拝するのではなくて、その人格を通して現われた「神の栄光」を礼拝するのである。バハイはキリスト、モハメッド、その他、古来より人類へつかわされた神の使者のすべてを尊敬するが、バハオラを、我々が生きているこの新時代のために神の託宣を伝える者として、またその先祖の業を実行成就せしめよ

うとする偉大なる「世界教育者」として認めるのである。

信条に対して単に知的に賛同することで人はバハイになれるものではない。あるいは単に外面的に正しい行為をすることで人がバハイになれるというものでもない。バハオラはその信徒に対して完全なる献身を求めておられるのである。このような要求は、ただ神のみがなし得るものであるが、バハオラは自らを神の顕示者、神意の啓示者として語っておられるのである。バハオラ以前の顕示者たちも皆この点に関しては同じように明瞭である。キリストは次のように言われた。

『たれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。』

自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだすであろう。』——（マタイ伝第十六章二十四—二十五節）

言葉こそ異れ、総ての神聖な顕示者たちは等しくその信徒等に対して、同様の要求をしており、宗教の歴史はまた明かに、かかる要求が素直に承認され、受けいれられる間は、いかなる抑圧、信者等の苦難、迫害、殉教があろうとも、宗教の栄えることを示している。これに反して妥協心が入り、いわゆる「名望心」が献身奉仕の精神に代るや、宗教はたちまち衰敗に帰した。すなわち宗教が時流に投ずることはあろうが、それは人間を救い改善する能力、奇蹟をためす力を失ってしまったのだ。真の宗教は決して、流行的であつたためしはない。神よ願わくば、いつか宗教がそんな風になる事を許されましよう。しかし、いまもなお、キリストの時代における如く、「生命にいたる門は狭く、そのみちは細く、これを見出すもの少なし。」（マタイ伝第七章十四節）ということとは真である。精神的誕

生の門は自然の誕生の門の如く人をして一人一人邪魔物なく入れしめる。もし将来において、過去におけるよりも多くの人々がこの道に入ることに成功するとしても、それは決してこの門が拡大されたのではなくて、ただ人々の側で、神の要求する「大なる帰服」をする精神が盛になったためである。何故ならば長い苦しい経験から、人々が遂に今まで、神の道の代りに、自我の道を選んで来た愚を悟るに至ったからである。

### 真理の探求

バハオラは全信徒に対して正義を説き、それを次のように定義された。

『一体性の眼をもって神の顕示者を識別し、万事をするごとく洞察することができるよう人間を迷信と模倣から解放すること』——「知恵の言葉」

すなわち個人は自らバハオラの人格に顕示された「神の栄光」を見、実感しなければならぬ。しからざればバハイ信教は彼にとって何等の意味なき単なる名目に過ぎぬのである。予言者等が人々に向って求めるところは、各人がその目を開き、これを閉ぢず、その理性を用い、それを抑圧しないことである。偏見の迷雲を洞察し、盲目的な模倣の束縛を破却して、もって新啓示の真理の体得を得せしめるものは、明確な見識と自由な思考であって、奴隸的な軽信ではないのである。

バハイたらんとするものは、勇敢な真理の探求者であることを要するが、決してこの探求を物質界にのみ限ってはならぬ。その物質的感受性と同じく、その精神的感受性も覚醒されねばならぬ。強固な十分な存在理由なくしては何ものも信ずるべきでなく、真理を獲得するためには、神から授けられ

た総ての能力を使用すべきである。もし心清く、心に偏見がなければ、熱心な求道者はいかなる寺院に於いても神の栄光を認めることに失敗しないであろう。パハオラはさらに言われる。

「人は自らを知り、貴賤、榮辱、恥辱、貧富などに至らしめるものを知るべきである」

——「タラザトの書簡」

『あらゆる学の根元は神の知識である。神の栄光は高遠なれ。しかもこの知識たるや、神の神聖な  
顯示者の知識によらねば到達し得ないものである』——「知恵の言葉」

顯示者はすなわち完全なる人間であり、人類の偉大な具現者であり、人類の樹の第一果である。我々は彼を知らずに、我々の内に潜在する諸能力を知るよしががない。キリストは百合がいかにして生長するかを考えよと述べ、またソロモンはその全盛時代においても、なお、その装いは百合の一輪に若く見ることなく、その花葉の無比な美観を見なければ、いかにして我々はその球根に含まれた実について知ることができようか。球根をいかに注意して解剖し、いかに精細に検査しても我々は庭師が呼びさます方法を知っていると、そのその中に眠っている美を発見することは不可能である。そのように我々は顯示者に啓示された神の栄光を見るまでは、我々及び我々の同僚の中にひそんでいる精神的美についてのいかなる観念をも持たないのである。ただ神の顯示者を知り、かつ愛し、その教えに従うことによって、我々は少しずつ、我々の内に存する潜在的な完全性を自覚し得るのである。その時に至って始めて人生並びに宇宙の意義と目的が我々に明瞭になってくるのである。

神を愛すること

神の顯示者を知ることとは、また神を愛することを意味するものである。この二つは分けて考えるべきものではない。バハオラによれば、人間創造の目的は、人間が神を知りこれを崇むることにある。彼はある書簡中で次のように言われている。

「よく知られている伝承に『予は隠れたる宝物にして人に知られんことを願う。それ故に予は知られんがために万物を創造せるなり。』と云っているように、万物の創造された原因は愛であつた。」

またその「隠されたる言葉」の中で言われている。

「おお実在の子よ、われを愛せよ。さらばわれ汝を愛し得ん。もし汝、われを愛さずば、わが愛は、決して汝に達するを得ず。これを知れ、おお僕よ。」

「おお不思議なる幻影の子よ、われ汝のうちに、われ自身の聖霊を吹き込んだ。汝わが愛する者とならんがために。汝何故にわれを見棄て、われより他に愛する者を探し求むるや。」

神の愛人たること、これこそバハイにとつて人生の唯一の目的である。神を神の御前において自分の最も親愛な伴侶、最も親密な友、無二の寵愛者とする者は、歎びに満ちている。神を愛することは、万物を愛し、万人を愛することを意味する。なぜならすべては神からのものであるからである。真のバハイは、最もよく愛の道をわきまえたものである。彼は万人を純潔な心で熱愛するであろう。いかなる人をも憎悪しないであろう。また彼はその「愛する者の面貌」をすべての人の顔に、また神の痕跡を到るところに発見するに至るので、何人をも侮蔑しないであろう。彼の愛は宗派、国家、階級あるいは人種等によつて、さえぎられることはないであろう。バハオラは言われている。

「かつては『自国を愛することは神への信仰の一部なり』と啓示されていたが、**壮・大の舌**はその顕示の日……において次の如く声明した。すなわち『誇りは、自国を愛する者にはなく、人類同胞を愛する者であり。』と」——『世界に関する書簡』

またさらに言われる。

『おのれよりもまずその兄弟を推す者は幸なり。かくの如き者こそバハの民たるなり。』

——『樂園の言葉』

アブドル・バハはまた我々に「多くの人々が一つの魂のようにならねばならぬ。なぜなら、相互に愛すれば愛する程、神に近づくものである」と語られた。アメリカにおける聴衆に彼は次のように語られた。

『同様に、神の聖なる顕示者達の教えた神聖な宗教は、呼び名こそ異れ、実体においては一つなのである。人間は、それがいかなる階階級から流れ出づるものにせよ、光を愛する者でなければならぬ。人は、どのような土壌に育ったバラであろうともそれを愛する者でなければならぬ。人は又、それがいかなる源から生まれ出た真理でも、その探求者でなければならぬ。燈ろうに心がひかれることは、光を愛することではない。土壌に心がひかれることは、不適當であり、土の上に育ったバラを楽しむことが価値あることなのである。樹に執着することは、無益であり、果実を喰べることが益をもたらずのである。美味しい果実は、どの樹になったのか、どこで産したのかに拘らず賞味さるべきである。真理の言葉は、誰の口によって語られたにせよ是認されるべきである。絶対の真理は、どの本に書かれていようとも容認さるべきである。もし、偏見にとらわれているならば、それ



は、損失と無知の原因となる。宗教間、国家間、人類間の軋轢あつぎの源は、誤解であり、我々が諸宗教を研究し、その基礎となる原則を発見する時、我々は、諸宗教が一致することを見出す。なぜなら、それらの基礎的実体は、一つであり、多様ではないからだ。この方法によって、世界中の宗教家は、同一と調和のところに到達し得る。』

再び彼いわく、

『愛された者達は他人を愛し、このために己の財産と生命を惜むようなことがあってはならぬ。そして他人を欲ばせ幸せにするよう努力せねばならぬ。そうして相手の方も、各自無私奉公の犠牲を払わねばならぬ。かくてこの朝日は燦あざとして世界を照らし、この妙えなる調べはすべての人を悦よろこせしめ、この神薬は万病を治癒し、この真理の精神は万人の命の源となるであろう。』

## 超 脱

神に献身することは神からのものでないものを超脱すること、すなわちすべての私欲、世欲、さら  
に來世についての欲をも超脱することを意味する。神の道は、富貴うきと貧賤ひんせん、健康と疾病、殿堂と牢獄、  
あるいはバラの園と拷問部屋をとおって通じているかも知れない。そのいづれに臨むとも、バハイた  
る者は「輝く黙徒」をもってその運命を受容することを学ぶであろう。そして、この超脱態度は決して  
各人の周囲に対する漠然とした無頓着さをも、不幸な境遇に対する受動的な諦念てんねんをも、さらには神の  
造った善きものに対する軽蔑をも、意味しない。真のバハイは無神経でも、無頓着でも、又は禁欲的  
でもない。ただ神の道において、無量の興味と活動と歓喜とを有するが、しかし快樂追求のためにこの道

を一步も踏み外すことなく、神が彼に禁ずるものを切望することは決してしないのである。人がパハイになると、神の意志がその人の意志となる。なぜなら、神意と相違することこそその人にとって最も堪え得ないことであるからである。神の道において、人はいかなる過失にも驚かされず、いかなる難渋にも狼狽させられることはない。愛の光明がその人の暗黒の日を照明し、苦悩を歡喜に、殉教を無上の法悦境に転ぜしめる。生命は大いに高揚され、死は喜ばしき經驗と變化する。パハオラはいわ

『我に非ざる物を愛する心、たとえ芥子の種ほどでも有るものは、我が王国に入ることを得ざる者なり。』——「スーラトウル・ヘイカル」

「おお人の子よ、もし汝我を愛せば、汝の自我に背を向けよ。またもし汝我が欲びを求むるならば、汝自らを重んずるな。さらば汝我がうちに死に、われ汝のうちに永遠に生きるを得ん。」

「おおわが僕よ、この世の束縛より自由になれ。また自我の牢獄より汝の魂を解き放て。汝の好機を掴め。そは再び汝を訪わざれば。」——「隠された言葉」

## 従 順

神への献身はその指令の理由が理解されなくても、神の啓示された「指令」に黙従することを意味している。水夫が船長の命令に対して、その命令の理由が分らなくてもこれに従い、しかもその權威の受容が盲目的でないのと同様である。水夫は船長がすでに航海者としての試験の功を積み、充分にその資格を表わした者であることをよく知っているのである。そうでなければ彼が船長の下に服従していることは全く愚なことであろう。同様に、パハイはその救済の船長の命に黙従するのであるが、

しかしもしまずこの船長が信頼するに足るといふ充分な証拠を確めない時は、それは愚なことである。そして一度その十分な確証を得た上は、その命を拒むことは、さらにより大きな愚事であろう。なぜなら、賢明な主人に対する聡明な活眼を開いた服従によつてのみ我々は、主人の知恵の恩恵にあずかり、その知恵をわがものとすることができからである。船長がどんなに賢明であっても、乗員に一人もこれに従う者がなければ、船はいかにしてその港に着き、水夫はいかにして航海の術を会得することができようか。キリストは、従順が知識の道たることを明らかに示している。

彼いわく、

『わたしの教えはわたし自身の教ではなく、わたしをつかわされたかたの教である。』

神のみこころを行おうと思ふ者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう。——「ヨハネ伝第七章十六—十七節」

バハオラも次のように言つておられる。

『神への信仰、神の知識というものは、神が命じたことと、「榮光の筆」によつて書かれた書に啓示された処をすべて実行することによる……以外、は十分にこれを達成することはできないものである。』——「タヂヤルリヤトの書簡」

現今の如き民主主義の時代においては、黙従といふことは人氣のある徳ではない。そして實際巷間（ちやうざん）の一庶人の意に全く服従することは、悲惨な結果となるものである。しかし人類の統合といふことは、ただ各人一人残らずすべてが神の意志に完全に調和することによつてのみ、得られるべきもので

ある。誠にこの「意志」が明らかに啓示され、人々がすべての他の指揮者を見限って、神聖なる使者に従わなければ、衝突、争闘は限りなく継続し、人々は「神の栄光」と、人類の共同の福利のために相協調して働くかわりに、相互に反抗を続け、その活力の大部分は、同胞の努力を無駄ならしめるために費されるであらう。

## 奉 仕

神への献身は、また我々人類同胞への奉仕の生活を意味する。そして我々はこの道を他に於て神に仕えることができない。我々が同胞に背を向けることは、すなわち神に背を向けることである。すなわちキリストは言われた。

『これらのいと小さき者の一人になさざりしは、すなわち我になさざりしなり』

(マタイ伝 第二十五章 四十五節)と。

バハオラもまたいわく、

『おお人の子よ、汝もし慈悲を求めるならば、己れの利益のみを考えず、汝の人類同胞の利益を考えよ。汝もし正義を求めるならば、己に欲する処のものを他人のために欲せよ。』「楽園の言葉」

アブドル・バハは言われる。

『パハイの大業においては、芸術、科学及びすべての工芸は、皆神の礼拝と考えられている。すなわち全能力を挙げて、熱心はその完成に全力を集中して、一枚の紙を製造する者は、神に讚美をささげつつある者といふべきである。約言すれば、人間の衷心に発するすべての努力と骨折は、それ

が最高の動機に出て、人類奉仕の意志に出づる限り、それは、神の礼拝である。すなわち人類に奉仕し、人々の求めに応ずることはこれ礼拝である。奉仕はまた祈りである。やさしく偏見なく、人類の協同を信じて患者を治癒する医師は、また神を讚美しつつあるといふべきである。」

—「アブドル・バハの知恵」

## 教 導

眞のバハイは、バハオラの教えを信ずるのみならず、その中に各自の全生活の指導と鼓舞を見出し、さらにまた喜んで各自の存在の源泉たる知識を他に伝えるであらう。これによって始めて「聖霊の威力と確証」を充分に受けるのである。万人がみな能弁な演説者、又はたっしやな文筆家たることはできないが、ただ総ての者は「バハイ生活を生きる事」によって他に教えることができるのである。バハオラは言われる。

『バハの民は、知恵をもつて主に仕え、自らの生活をもつて他に教え、その行為において神の光を現わさねばならぬ。誠に行爲の影響は言葉のそれよりも力強い。……教師の語る言葉の影響、その意図の純清なることと断絶的態度による。ある者は言葉だけで満足する者もあるが、しかし言葉の眞実は行為によつて吟味され、また生活態度に依存するものである。行為は人の地位を表わすものである。言葉は、神の意志の口より発したものと聖なる書簡に記録されたものに一致すべきである。』

しかしバハイは、耳を傾けようとしぬる者に、その考え方を強要するものではない。バハイは人々を「神の国」にひきつけはするが、決してこれに押入れようとはしない。バハイは、羊の群をひいて

行く善い羊飼のようである音楽をもって羊を魅すことはするが、背後から犬や棒をもって駆り立てるようなことをする者ではない。

バハオラは彼の「隠された言葉」の中で言っておられる。

『おおわが友等よ！ 汝等過誤の灯を消せ。そして汝等の心の中に聖なる導びきの永遠に消ゆることなき灯火を燃やせ。やがて人類の試験者等は、崇拜さるる者の聖き面前において、最も純潔なる美德と汚れなき神聖なる行い以外は、何も受けつけぬであろう。』

彼はまた「エシユラガト」の書簡中にいわく、

『おおバハの民よ！ 汝等は神の愛の発生地、神の恩恵の曙なり。悪口、呪咀じゆそをもってその舌を潰すことなく、見るに値いせぬものから汝の眼をそらせよ。ただ汝が持てる力（真理）を表わすべし。これにしてみし受け容れられんには、その目的達せられるなり。人もし受けずとも、彼を責め、あるいは干渉するは無益なり。彼をなすままにおけ。そうして、汝の加護者にして自存の神に向え。騒さわ擾じょうや鬭争とうそうは言うに及ばず、憂愁ゆうしゅうの因をなすことなかれ。予は汝等が神聖な恵沢の樹の下に養われ、神が汝等に望み給うように行動するよう望む。汝等はみな一樹の葉にして、また一つの海の水滴なり。』

## 礼儀と尊敬

バハオラいわく、

『おお神の民よ！ 予は汝等に礼儀正しからんことをのぞむ。まことに礼儀は……諸徳の主なり。』

身に正直の衣を飾り、礼儀の光に輝く者こそ祝福せられたるものなれ。礼儀（あるいは尊敬）の徳ある者はこれ大なる地位を受けたる者なり。我はこの被害者とみなが、等しくこれに到達し、これを把持し、これを遵奉せんことを望む。これすなわち最上名の筆端より溢れ出でたる反駁すべからざる命令なり——「世界に関する書簡」

彼はさらに繰返して言われる。

『世界中の諸国をして歡喜と芳香をもって、交わらしめよ。おお人々よ。汝等また諸々の宗教の民と、歡喜と芳香をもって交わるべし』

アブドル・バハも又アメリカのバハイに与えた書簡のなかで言われている。

『他人の心を悩ますことなきよう、用心すべし。用心すべし。』

他人の魂を害うことなきよう、用心すべし。用心すべし。

いかなる人にも不親切ならざるよう、用心すべし。用心すべし。

いかなる創造物にとつても失望の因となることなきよう、用心すべし。用心すべし。

いづれの心、いづれの魂を問わず、これが悲しみの因となる者は、この地上を歩むより、むしろ地下の最も深いところにひそむ方がよい。』

花がそのつぼみの中にひそんでいるように、外面はいかに醜くても、各自の胸中には神よりの精神が宿っていることをバハオラは教えておられる。それ故真実のバハイは、あたかも園丁が珍稀美麗な

植物を世話するように、すべての人々を待遇する。そして、自分の気短かな干渉がつぼみを開発せしめるものでなく、ただ神の陽光のみがこれをためし得るものであることをよくわきままえている。それ故、あらゆる暗黒な心と家庭に、この生命の陽光を注ぎ入れることを、バハイは目的とするのである。アブドル・バハはさらに言われている。

『バハオラの教えの中に、人はいかなる条件、境遇の下においても、寛大にしてその敵を愛し、悪意ある者をも善意あるものと見るべきであるという教えがある。これは他人を敵としておmoi、そして後、これをがまんすることではない……<sup>寛大</sup>勘忍することではない。これは偽善であって、真実の愛ではない。いな、むしろ敵を見ることがその知己の如く、悪意を持って来る者を善意者として、これを待遇すべきである。汝の愛と、親切とは真のものでなければならぬ。……単に勘忍するだけでは足らぬ。なぜならその勘忍がもし衷心より出るものでないなら、それは偽善に過ぎないからである。』

かくの如き忠言は、外面的、肉体的の人間が憎悪者であり、悪意を持つものであっても、なおすべての人々のなかに真の人間たる内面的な精神的な性質があること、そこからこそ愛と善意とが生ずるものであることを我々も悟るまでは、理解し難い矛盾と見える。我々が、我々の思考と愛とを向けなければならぬのは、我々の隣人のすべての内にあるこの真の内面的人間に対してである。この真実の人間が活動すべく目覚る時、外面の人間もまた変化更生するであろう。

## 罪を隠す眼

まず何よりも、バハイの教えは、他人をとがめ立てしないように厳格に要求する。キリストもまた



この同じ問題について力説しているが、今やその山上の垂訓すゐくんは、いわゆる「完全の教訓」として一般キリスト教徒が従うことを望み得ないものとされている。バハオラもアブドル・バハもこの点について言う所はすべて実行すべきものであることを、はっきりさせようと苦心された。

「隠されたる言葉」中に次の如く記されている。

『おお人の子よ！ 汝自身罪人である間は、他人の罪をささやくな。汝この命令に背くならば、呪われん。われこれを証言す。』

『おお実在の子よ！ 汝が自身の責任にされたくないことを他の何人の責任にもするな。また汝がいわれたくないことを言うな。これを守れ。』

またアブドル・バハいわく、

『他人の落度を言わず、ただこれがために祈り、親切をもって、これが改められるよう助けること。常に善を見、悪を見るなかれ。人もし十の善性ありて、一の悪あらば、その十を見て一を忘れよ。もし十の悪ありて一の善あらんには、その一を見て十を忘れよ。我等の敵に対しても彼らの悪を口にするを慎むべきなり。』

アメリカの一友に彼は次の如く書かれた。

『人間最悪の性質、また最大の罪悪は陰口である。ことに、もし神を信する者の口から陰口が出る時は、特にはなほだしい。もし陰口の門戸が永久に閉じられるならかの方法が発見せられ、すべての信者が惜みなく口を開いて他人を賞揚しょうやうするようになったならば聖なるバハオラの教えはたちま

謙遜

ち広く普及し、人心の光明、精神の榮耀えいぎょう、人間世界永遠の福祉はここに至って達せられるであろう。』

我々は、他人の欠点を観過し、その徳行を見るべきことを命ぜられている。一方では我々は己の欠点は見出し、自己の徳行は問題にしないように命ぜられている。バハオラはその「隠された言葉」中に次の如く言われている。

『おお実在の子よ、いかにして汝、自身の欠点を忘れ、他の人々の欠点を挙ぐるに急なるを得るや。何人がこれをなすも、わが呪いを受けん。』

『おお移住者等よ、舌はわれを語るために、わが立案せしものである。悪口をもって、それを汚すな。汝等自我の火によって襲われた時は汝等自身の過ちを思い出し、わが創りし者等の過ちを思うな。汝等は総て自身を他の人々より一層よく知る故に。』

アブドル・バハは語られる。

『汝の生活をしてキリストの王国より出たるものならしめよ。キリストは決して他の者に仕えられんがために来られたのではない。ただ仕えんがために来られたのである。……バハオラの宗教において、万人はみな僕と侍女、兄弟姉妹なり。わずかでも自分も、他に比してより優良なりと思う者は、危険な状態にあり。かくの如き悪心の種を棄てない限り、神の国の奉仕の道具とはなれない。』

『自己不満は、進歩の表徴なり。自己に満足する魂は、悪魔の顕現にして、自己に満足せざる魂は、慈悲深き者の顕現なり。人もし千の良性を有するとも、その人はそれ等を見るべからず。いなむし

ろ自らの欠陥と不完全とを探すべし。……いかに人は進歩するとも、さらに向上の余地あるが故に不完全たるを脱せず。自らの地位に満足せずば、たちまちその進歩の余地を見、これに達せんと希求するなり。自己称讃は自己主義の表徴なり。』——「ミルザ・アーマド・ソーラブの日記」  
一九一四年

我等はかく自己の罪過を自認し、後悔すべきことを要求されているが、それを僭倖その他に告白することは固く禁じられている。バハオラはその「吉報の書」中に次の如く言われている。

『罪人は、その心が神の他のすべてのものより自由であるから神のみに許しをこうべきである。僕（すなわち人間）に告白することは神の許を得る法ではなく道理もないので、許し得るべきものではない。神の造れる者（即ち人間）に告白することは、鬼下していることである。神——その栄光よ高かれ——は、かくの如き僕の屈辱を望んではおられない。誠に神は隣み深く、仁慈のものなり。罪ある者はすなわち神と自らとの間において、慈悲の大海より慈悲を乞い、寛恕の天上より容赦を請うべきである。』

## 正直と誠実

バハオラは「タラザト」の書簡中にいわく、

『誠に正直は世界のすべての者にとって平安の門であり、慈悲深き者の御前よりの栄光のしるしである。人がもしこれに至るならば、すなわち富裕の財を得たものである。正直は人類の安全と、平安への最大の門である。百般のものの安定は皆これにより、榮養、榮光、富裕の世界はその光に照

らされる。……

おおバハの民よ。正直は汝等の着用すべき最良の衣服、汝等の冠るべき最も光輝ある王冠である。されば汝等全能の指揮官の威令によってこれを守るべし。』

さらにいわく、

『信仰の要理は、すなわち言葉すくなくして行い多きにある。その言葉がその行為に過ぎる者は、まさに彼のなきことがその有ることにまさり、彼の死がその生にまさることを知れ。』

「知恵の言葉」

アブドル・バハイいわく、

『誠実是人类のあらゆる徳の根元である。誠実なくして進歩、成功を得ることは不可能である。この聖徳が一度人間の中に確立すれば他のあらゆる神聖な性質もまた表現される。』

「アブドル・バハの書簡集」第二卷 四五九頁

『正直と誠実の光で、汝等の兩貌りょうぼうを輝かしめよ。かくて、事業においても娛樂においても、汝等の言葉が信ずべく、確かなるものであることを、世に知らしめよ。自己を忘れるためのために働けよ。』

（「ロンドンのバハイへの書簡」一九二一年十月）

## 自己実現

バハオラはつねに人々を励まし、そのうちにひそむ完全なる賦性みせいを実現、発揚せしめんことを

期されている。すなわち制限された外面的自我とは區別された別の真の内面的自己を發揚せしめんとするのである。その外面的の自我は最良の場合で殿堂となり、多くの場合は真の人間の牢獄となるものである。「隠されたる言葉」の中に次の如く記されている。

『おお実在の子よ！ 權威の手もて、われ汝を造り、威信の指もて、われ汝を創り、なお、われ汝のうちに、わが光の真髓を置いた。汝それに満足せよ。そして他に何物も求むるな。わが業は完全にして、わが命令は免がれ得ざれば。何故と問うな。また疑いも抱くな。』

『おお心靈の子よ！ われ汝を豊かに創れるに、何故汝自ら貧しくするや。気高くわれ汝を造れるに、何故汝自ら卑しくするや。知識の精華もて、われ汝を生ぜしに、汝何故にわれより外の者に教化を求むるや。愛の粘土もて、われ汝を造りしに、汝何故に他のものに没頭するや。汝の眼を汝自らに向けよ。されば汝、汝のうちに威光に輝やき力強く自存しつつあるわれを見出さん。』

『おおわが僕よ！ 汝はよく鍛え上げられ、暗い鞞まなこに封じこめられた劍の如きものであり、その劍の価値は鑑定家に知られぬよう隠されている。それ故自我と欲望の鞞まなこより抜け出でよ。さらば汝の真価は輝き出で全世界に明らかとならん。』

『おおわが友よ！ 汝はわが聖なる天空の太陽である。世の汚れにより汝の光輝をおおい消すな。無思慮のベールを寸断せよ。されば汝雲の蔭より輝き出で、あらゆるものを生命の衣もて装わん。』

## 第 5 章

バハオラがその信徒等に望む生は、人間の能力の全範圍において、人の希求し得べき最高、最善なものと言うべき程、高貴なものである。我等のうちなる精神的自己の体得とは、我等は神より来るものにして、また神に還るものなりとの、崇高な真理の体得を意味するものである。この神へ帰還する

バハイとは何ぞや

ということとは、バハイの光栄ある目標である。しかしこの目的に達する唯一の道は、神の選び給える使者、ことに現在我々の住む時代における使者、すなわち新時代の予言者たるバハオラに服従することである。

## 第六章 祈り

祈りはそれによって誰もが天に昇り得るはしごである。——モハメッド

### 神との対話

「祈りは神との対話である」とアブドル・バハは言われた。神は、人間に、神の意志と心意を知らせるために、人間の理解する言葉で人間に語らねばならぬ。そして、これは神の聖なる予言者等の口を通じてなされる。これ等の予言者は肉体で生存している間は人々と面と向って話し、神の伝言を伝えるが、彼等の死後は彼等の記録された言葉や文章によって、人々の心にこれ等の伝言は引きつづき達するのである。しかし、これは、神が人間と語り得る唯一の道ではない。まだこの他に「精神の言葉」がある。これは演説や、文書とは全く独立したものであって、これに依って神は何れの処でも、いかなる人種、国語の人でも区別なく真理を求める人々の心と交通し、靈感を与え得るのである。この言葉によって顕示者は物質の世界を去って後も信者との会話を継続している。キリストは十字架上で死んだ後も、彼の高弟達と言葉を交わし、励ましてもいる。実際キリストは地上に存生していた時よりも死後に一層強い感化を及ぼしたのである。他の予言者達も同様であった。アブドル・バハもこの精神の言葉について、多く語られている。彼はたとえば次の如く言われている。

『我等は天の言葉——精神の言葉——で語らねばならぬ。なにゆえなら、精神の言葉すなわち心の

言葉があるからである。これが人間の言葉と異なるのは、ちょうど我々の言語が、ただ叫び声と音と  
とで意志を表示する動物の言語と異なるのと同じである。

神に話しかけるのは精神の言葉による。祈る時我等が一切の外界から離れて神に向うと、あたかも  
我等の心中に神の声を聞く如き感がある。言葉なしで我等は神と言葉を交わし、神と語り、神の  
答を聞く……我等のすべては、真に精神的状態に達した時に初めて神の声を聞く事ができるのである。』

—— エゼル・J・ロゼンバーグ嬢の伝えた談話による

バハオラは、もっと高い精神的真理はただこの精神の言葉によってのみ伝えられると言われている。  
口に言い、文字に書かれる言葉では全く不十分である。『七つの谷』という俗界から天上に至る旅人の  
歷程を述べた小著中に、彼はその旅程の進んだ段階について次のように言っておられる。

『舌はこれ等を叙述し得ず。言葉もまたこれに達し得ない。この場合には筆紙もその用をなさず。  
墨もまた黒点を止むるに過ぎず。……ただ心だけが心に知者の状態を知らせ得るなり。これは使者  
がなし得ることではなく、また文字に含まし得る処でもない。』

### 献身の態度

神との対談ができ得る精神的状態に到達するためにアブドル・バハは次の如く言われている。

『我等は、この状態に到達するため、すべからく万物を離れ、世の人々より遠ざかり、専念神に向  
うべし。その状態に到達するには幾分の努力を要するが、人間はそのために尽力努力せねばならぬ。  
ただそのためには物質的事物を離れて、精神的事物に専念すべし。前者を離れるに従って後者に近



づき得る。選択はただ我等の自由にあるのみ。

我々の精神的知覚、我々の心眼が開かれ、万事において神の証跡または痕跡が見られなければならない。万物は我々に聖靈の光りを反射し得る。——エセル・J・ロゼンバーグ嬢の伝えた談話による。

バハオラは次の如く書かれた。

『その求道者は……毎日夜明け時に……神と交り、全魂を傾むけて、彼の愛する者を求め続けるべきである。彼は全ての我ままたな考えを、神に対する愛の言葉の焰ほほもて焼き尽すべし……』

「落穂集」二二六五頁

同じ方法で、アブドル・バハは言われた。

『人間がその魂を通して、精神により、その理解力を啓発せしめる時、人はすべての創造を含む：しかし、他方、人間が精神の祝福に対し心意と心を開かず、その魂を物質面すなわち、人の性質の肉体的部分に向ける時、その高い所より墮ち、彼はより低い動物の国土の住人より劣る者となる』

バハオラはさらに次の如く書かれた。

『おお人々よ！ 自我の束縛より汝我の魂を救出せよ、そして我を除いた何物への愛着からも離脱せよ。我に付いての追憶は、汚よごれたものをすべて洗い清めるであろう。おお我が僕よ！ 神に近づける人々によりて吟ぜられし如くに汝により受け入れられし神の詩句を吟ぜよ。さらば、汝が調べの甘美は、汝自身の魂を輝かし、すべての人々の心を引き付けるべし。誰でも、私室において、神

## 媒介者の必要

より啓示されし詩句を誦するならば、全能者の遣わされた天使達は、その人の口により語られし言葉の芳香を広く飛散するであろう』

アブドル・バハによれば次の如くである。

『人間と創造者の間には媒介者が必要である。——神聖なる光輝からの満光を受け、これを人間の世界の上に放射する、それはあたかも地球の気体が太陽の光線の熱を受けて、またこれを分散するのと同様である。』

『もしも我々が祈ろうと欲するなら、先づ心意を一物に集中せねばならぬ。神に向うには心を一点に注がねばならぬ。もし人が神の顕示者によらずに、神を礼拝しようとするなら、まず自らの心意によって神の概念を造らねばならぬ。しかしながら有限者は無限者を理解し得ないように、神はかくの如き仕方では理解され得ない。それはただ人間が自己の心意によって、想像する処のもののみを、理解するからである。人の理解し得るものは、神ではない。人が自ら作る処の神の概念は、単なる幻影、影像、想像に過ぎぬ。かくの如き概念と神との間には何の関係もない。』

人がもし神を知ろうとするなら、すべからずキリストあるいはバハオラの如き完全なる鏡によらねばならぬ。そのいづれの鏡にも神格の太陽は反射せられてあることを見るであろう。

物理的太陽がその光輝、その光明、熱度によって知られるように、神、すなわち精神的太陽が顕示の殿堂を通じて輝く時、その完全なる品格、その性質の美、その光明の赫々たることによって我らはそれを知るのである。——一九〇九年アッカにおいてパーシ・ウッドコック氏との談話より

さらに彼は述べておられる。

『聖霊が媒介とならなければ、人は神の恵沢に直接参じ得ない。この明瞭なる真理を見過ぐすことのないように。なぜなら、小児は教師なくして訓えられず。そして知識は、神の恵沢の一つであることが明らかだからである。土地は雲から降る雨がなければ植物で覆われることはないから、雲はすなわち地と神聖な恵沢との媒介者である。……光は中心を持つが故にこの中心以外にこれをおつめようとしても不可能である。……キリストのありし日のことを想え。救世主の恩恵がなくとも真理は到達せらるべきものと思っていた者もあるが、かかる空想は彼等のだ落の要因となったのである。』

神の顕示者に向わずして神を礼拝しようとする者は、土牢つちろうにいる人間が、日光に浴しようとする空想するようものである。

祈りは欠くことのできぬものであり必須のものである。

祈りの習慣は、バハイにあきらかに命ぜられている処である。バハオラはその著「アグダスの書」中で次のように言っておられる。

『朝夕常に神の言葉を吟うた（又は吟誦）せよ。もしこれを怠らん者は神の聖約に忠実ならず。今日これを疎んずる者は神より顔を背ける者なり。おお我が民よ、神を畏敬せよ。しかも經典を多く読み、聖行を日夜勤むるをもつて誇ることなかれ。欣喜してただ一句を吟ずるは、不注意なる心で全能なる神の全啓示を通読するに優る。疲勞頹廢ひろうたいはいに陥らざる程に神の經典を吟ずべし。魂をして疲勞陰繁ひろういんぺん

せしめず、却ってこれを清新活発ならしめ、もってこれが啓示の翼を翺翺かかって証拠の發生地に至らんと事を期すべし。汝等ころを理解するものは神に近づく事を得べし。』

アブドル・バハはまた一通信者に寄せていわく、

『おお汝、精神の友よ。祈りはかくべからざる必須のものなることを知れ。そして精神的に欠陥があるか、あるいは不可抗的な障害がない限り、いかなる口実があろうとも、これから免除されるべきものではない。』

さらに他のある通信者は質問した。「なにゆえに祈るのですか。その真意はいかなるものでありますか。神は万物を設け、最善の秩序によつて万事を処置するものと思ひます。それ故人間が懇願祈願し自己の要求を陳べ、助けを求めるとの真意はどこにあるのでありますか。」

アブドル・バハはこれに次のように答えられた。

『誠に、かの強力なる者に弱者が祈願し、光榮ある恵沢多き者に、恵沢を求める者が懇願するのは似合しい。人間が主に祈願し、主に向い、その海より恵沢を求めるとき、この祈願は人の心に光をもたらし、目を明らかならしめ、魂に生命を与え、彼の存在に高貴を添える。』

神に祈願し『汝の御名は、我が治癒なり』と誦する時、神の愛の力によつていかに貴下の心が慰安を覚え、貴下の魂が愉悅を感じ、貴下の心意が神の国にひきつけられるかを省察せよ。この魅力によつて人の能力力量は増進される。容器が拡大されると共に、その受容する水量は増加し、口渴が増すに従つて雲霧の賜は人の口に快いものである。これが祈願の秘密で、人の要求陳述の真意で

ある。』——アリー・クリー・カーンによって譚訳されたアメリカの信者へ一九〇八年十月の書簡より

バハオラは三つの日々の必須の祈りを著わしておられる。そのどの一つを選ぶかは信者の自由であるが、バハオラによって規定された方法に従い、それを唱えることが義務づけられている。

### 祈り、すなわち愛の言葉

神は恐らく万人の願いを知るものであるのに、なぜ祈りは必要なかという他の質問に対して、彼は次のように答えられた。

『人がもしその友に愛を感じるなら、それを告げんことを望むであろう。たとえその友が、彼の愛を知っていると知っても、それでもこれを告げようと願うであろう。……神は總ての人心の願いを知っているが、祈りの衝動は自然のものであって、人の神への愛から湧き出るものである。……』

祈りは言葉に出すを要せず、心意と態度に出ればよいものである。もしこの愛と要求が無いならば、これを試み、強いても無駄である。愛なき言葉は何の意味もないものである。もし人、不快な義務として、諸君と会したことに愛も喜びも持たずに諸君に対して話しかける時、諸君は、その人と言葉を交わすことを欲するであろうか。』——一九一一年六月の「フオートナイトリ・レヴュー」中のE・S・スチーヴンス女史の論説より

また他の談話中に彼は次の如く語られた。

『最も高い祈りにおいては、ただ神の愛のみを乞うものであるが、これは決して神、あるいは地獄を

恐怖するためでも、恵沢、あるいは天国を望むためでもない。……人一度び人間を愛するに至るや、その愛する者の名を口にせざるを得ない。いわんや神を愛するに至った時、その御名を口にしないことがいかに困難なことか……精神的なる人は神を記念することを他に於て欲びはないのである。』

——アルマ・ロバートソン女史及びその他の巡礼者等の手記より。一九〇〇年十一月——十二月

## 会衆祈禱

バハオラによってバハイのための日々<sup>の日々</sup>の必須の祈りとして定められた祈りは個々で唱えられるべきものである。唯一つ、会葬の際の祈りは、バハオラにより会衆祈禱が命じられている。これは、その祈りが唱えられる時、その葬儀に会した一同が起立するというものである。祈りを唱える一人のエマムの後から全信者でそれを繰り返して行くという回教の習慣である会衆祈禱は、バハイ信教では禁止されている。職業的僧侶の廃止というバハオラの教えに従ったこれらの命は、礼拝のための集會を無価値とすることではない。

合同祈禱あるいは、会衆祈禱の価値について、アブドル・バハは次の如く述べておられる。

『人あるいは言うであらう。自分はいつでも、自分の心が神にひきつけられるのを感じる時、荒野にある時、市井シヤウにある時、あるいはその他どこにいても、神に祈ることが出来る。なにゆえ特定の日、一定の時を期して、他人の集るところに到って、私が祈る気持になっていない時でも、他人の祈りに自分の祈りを合せなければならぬのか、と。

しかしこのようなことを考えることは無意味な空想に過ぎない。なぜなら大勢寄ればその勢力は一層大なるものになるからである。単独に個人的に戦う兵士は、大勢集団となった軍隊の如き力を持

たない。もしこの精神的戦において、全兵士が結束すれば、その結合せられた精神的感情は相互に相助け、その祈るところは必ずや聴かれるものとなるのである。』

エセル・J・ロゼンバーク嬢の手記より

## 災難からの解放

予言者等の教えるところによれば、疾病しびその他一般の苦難は神の命に反することから起るものである。洪水、台風、地震等の災難でも、アブドル・バハは間接的にこれに原因するものとされて

いる。しかしかかる過失のために受ける苦痛は、復讐きやうせい的の意味のあるものでなく、ただ教育的矯正、治療的な意味があるものである。すなわちこれは人が正道を踏み外した事を声明する神の声である。苦痛がはなはだしいならば、それは非行の危害がさらにはなはだしいからである。なぜなら、「罪の償いは死である」からである。災厄が反抗に基くが如く、苦痛の救助は服従によってのみ得られるものである。これは一定した事実である。神から顔を背ければ則ち必ずわざわいが至り、神に向えば則ち必ず福が来るのである。

人類の全体は、一つの組織体であるから、各個人の福祉は彼自らの行動に依るのみならず、その隣人の行動にも依拠いよする。一人の非行は程度の差こそあれ、万人をなやまし、一人の善行は万人を利する。各人はある程度まで隣人の重荷を負うべきであって、人類中の最善なる者は、最も重い重荷を負う人々である。聖者たちは常に大なる苦悩をなめ、予言者たちは最上の苦難を受けて来た。

バハオラは「確信の書」中に次の如く言われている。

『神の総ての予言者やその仲間達の上に振りかかった試練、貧困、災難や凋落ヒヤラルクについて、汝は無論、知らされているであろう。汝は、彼らの信徒達の首がどのようにしてあちこちの町へ贈物として送られたか聞いているに違いない。』

これは決して聖者や、予言者等に罪があつて、他より以上に処罰されたのではない。否、むしろ彼等はしばしば他人の罪のために苦しみ、また他人のために苦しむことを自ら選んだのである。彼等の関心事は世界の福祉のためであつて、自分たちのためではない。人類を真に愛する者の祈りは、個人として彼が貧窮、病苦、惨禍さんかを免れんとすることではなくて、人類が無知、罪過及び必然的にそこに発する不幸から解放されんことを祈るのである。もし彼等に自身の健康と、富を望むことがあるとしても、これはただ神の国に奉仕せんがためである。そしてもし身体の健康と富が彼に許されなくても、神の道においては、彼にふりかかるいかなる事柄にも、その中に正しい意義のあることを知る故に、「輝く黙徒」の態度をもつて、その運命を受取るのである。

アブドル・バハはいつておられる。

『憂うれいや悲しみは偶然に来るものではない。それ等は我々を完成させるために神の慈悲により送られるものである。憂や悲しみが来る時は、その人をこの屈辱から救い得る天に在ます父なる神を思い起すであらう。試練しれん益々ますます加つてこれより受ける精神の徳の報いは益々大となるであらう。』

罪なき者が罪ある者のため、罰を受けるといふ事は、一見はなほだ非道のことに見えるが、アブドル・バハはこれについてこの不条理は単に見掛けだけのものであつて、結局は完全な正義の勝利とな



ることを我々に保証されている。彼は次の如く書いておられる。

「嬰兒や、児童や、病弱者が虐待者等の手で苦しめられるとき、……彼等の魂は別の世界において報酬を受けるものであるから……その苦痛は神の無上の慈悲である。誠に、神のかかる慈悲は、現世のあらゆる慰めや、遂にはすべてが死んでしまふこの世に所屬する生長や発達よりも遙かにまさるものである。」

### 祈りと自然の法則

多くの人々は、祈りに対する答えが、自然の法則に勝手な妨害を及ぼすものであるかのように考えているので、祈りの効果を信ずることに困難を感じているのである。次の比喻が、この困難を取り除く助けとなるであろう。すなわち鉄屑の上に磁石を持って行けば、鉄屑は磁石に飛上って吸い着けられる。しかし、これは決して重力の法則を妨害しているものではない。重力の法則は依然としてこの場合も鉄屑に働いているのである。ただ事實は一つのより大なる他の力が作用しているのに過ぎない。——この他の力の働きは、重力のそれの如く規則的で計量し得るものである。パハイの見るところで、祈りはすなわち未だほとんど知られていないより高度の力を働かしめるものである。しかし、この力は物質力よりも、その作用が、無法則であるとは決して考えられないものである。その差異はただこの力が未だ充分研究されておらず、実験的に研究されていないということであって、我々がこれを知っていないために、その作用が不思議に、また計り得べからざるものの如く見えるのである。

ある人々が当惑させられているもう一つの困難な点は、祈りが、しばしば生じさせると考えられているような、そんな大きな結果を生じさせるには余りに弱い力に見えるということである。この難点

もまた一つの比喻によって解明されるであろう。すなわち貯水池の水門を動かす小な力は、莫大な水量を放出し、調節するに足るものである。あるいはまた大洋を航行する船の操舵機（まねうり）に加えられる小な力は巨船の進路を支配するに充分である。バハイの見解によれば、祈りに効果を招来する力は、神の不尽（ふじん）の力である。祈願者の役割は、ただ神の恵沢の流出を開き、その方途を定めるに足るだけの微小な力を働かすだけである。この神の恵沢は、これを使用することを知る者には容易に与えられるものである。

## バハイ信徒の祈り

バハオラとアブドル・バハは種々な場合、種々な目的に臨んで、無数の祈を、信徒等の使用のために示しておられる。その見解の偉大さ、その靈性の深奥さは、眼識ある後輩の深き印象を捕えるものである。しかしその真意は、これを生活の規則だった重要な日課とすることによってのみ現われ、その善に対する力は実現されるのである。ただ遺憾とする点は紙面の都合上、これ等祈禱文の中の少数の、しかも短い見本のみがここにあげられることである。これ以上の実例については読者諸氏自ら他の書籍によって求められよ。

『おお主よ、あなたのお美しさを私の食物となし、あなたの御前であることを私の飲物となし、あなたのお喜びを私の希望となしあなたを讃えまつることを私の行動となし、あなたを想うことを私の伴侶となしあなたの御支配力を私の救援者となし、あなたの御宮居を私の家となし、また私の住むところを、あなたからヴェールで隔てられている人々には許し給わぬ祝福された場となし給え。

まことにあなたは全能に在し榮光にみち給い、また最も權威ある御方に在します。——バハオラ

『神様、あなたが私を造り給いましたのは、あなたを知りあなたを崇拜するためでありますことを証言いたします。いまこそ私の無力なことで、あなたのみ力の大きいなることを、また私の貧しさと、あなたのおん豊かさを証明致します。あなたの他に神はいまも、あなたは危難の中のみ救いに在り御自力にて存在し給う御方に在ります。』

バハオラ

『おお神様ノ 僕らの心一つに結び給え。また彼等にあなたの偉大な御目的を示し給え。あなたの御命令に従い御おきてをまもらせ給え。神様、彼等の努力を助け給い、あなたに仕えまつる力を与え給え。おお神よノ 彼等を見ず彼等の歩ゆみを知識の光で導き、彼等の心を御慈愛深くいつくしみ給え。あなたは彼等の救助者に在し、主に在ります。』——バハオラ

『おお慈悲深き主よノ あなたは、同じ元親からすべての人類を創り給いました。あなたは、人類がすべて同じ一つの家族になるようお仕組みになりました。あなたの聖なる御前では、人類はすべてあなたの僕であり、聖き御幕屋の下に護られるものであります。すべての人類が御恩寵の食卓に集り、御神意の御光を受けて居ります。神よノ あなたは、すべてのものに御慈愛深く、すべてのものに与え給い、すべてのものを護り給い、すべてのものに生命を授け給う。あなたは、すべてのものに才能と能力を賦与し給う。そして、すべてのものは、みめぐみの大海原に浸って居ります。おお愛情深き主よノ 人類がみな一つのものとなり、同じ祖国の子となることができまますよう、すべてをもの一つになし、宗教を和合させ、異国民たちを、一つの国の人民となし給え。彼等が一致と和合に結ばれますようになし給え。神よノ 人類はみな一つのものだといふ旗じるしを高く掲げ給え。神よノ 最も大いなる平和を確立し給え。神よノ 人々の心一つに結び給え。おお慈愛

深き父なる神よ！ 御慈愛の芳香により、人々の心を喜ばせ給え。御導きのみ光により、人々の眼を輝やかせ、聖なる御言葉のメロディで、耳をたのしませ給え。そして、御神意の祠ほくらに私共をかくまい給え。あなたは、全能に在し、御力にみち給う！ あなたは、赦し給う御方に在し、人類の短所を寛恕し給う御方にまします。——アブドル・バハ

『おお汝慈悲の神よ！ 鏡の如く汝の愛の光明もて輝きの心を我に与え、霊の恵もてこの世をばらの園となすの思想もて、我を力づけ給え。汝は、大慈だいじ、大悲だいひ、至仁しじんなるものなり』アブドル・バハ

これら種々の祈りの形式は必要だとは言うものの、バハイ信徒の祈りは決してこれらに限らるものではない。バハオラは、人間の全生涯がすなわち真の祈でなければならぬこと、正しい魂によってなされた仕事は、真の礼拝であること、神の栄光と人類同胞の福利のために捧げられたすべての思想と、言葉と行為は祈禱であること、しかも真の意味においてのものであることを教えておられる。

## 第七章 健康と治癒

神に顔を向けることによって肉体と心意と魂の治癒を獲得すべし。——アブドル・バハ

### 肉体と魂

バハイの教えによれば、人間の肉体は魂の発達のために一時的に必要なものであって、その目的が達せられた時は無用となるのである。あたかも卵のからは、ひなどりひなどりが孵化ひかするため一時的に役立つ、その目的が達せられた時は破棄はきされるが如きである。人の肉体は原子と分子とから組織された合成的なもので、永遠不滅の性質のものでないことは、他のあらゆる組立てられた諸物体と同様で、時来れば解体されねばならぬ、とアブドル・バハは言われた。

肉体は魂の従僕しよべであって、決して主人ではない。しかし、肉体は、何でも喜んで行うところの、従順にして、有能なる僕しよべであらねばならぬ。従ってよき下僕げぼとしての、十分な注意をもって取扱われねばならぬ。もし肉体が適当に取扱われねば、疾病や不幸を招き、主従ともに有害な結果を招来するのである。

### 総ての生命の一体性

総ての生命は、無数の形と範囲に区分されてはいるが、本質的には一体であるということは、バハ

オラの根本的教えの一である。我々の肉体の健康は知識、道徳、精神の健康と密接な関係を有し、又我々同胞の個人的及び社会的健康にも、いなむしろ他の動植物の生命とも大いに関係する。それ等は實際想像以上に、相互に広い範囲にわたって影響し合っているのである。

かくて予言者の命令は、本来それが生命のいかなる部分を指しているても、身体の健康に関係を持たぬものは無い。彼の教えのあるものは直接肉体的健康に関係を持っている。今我々はこれについて研究してみよう。

## 單純生活

アブドル・バハは言われる。

『節約するということは、人間繁榮の土台をなすものである。浪費家は常に苦勞が絶えない。何人であつても浪費することは許し難い罪である。我々は寄生植物のように他人のやっかいになって暮らしてはならない。各人は、たとえ、頭腦的なものであつても、又、肉体的なものであつても、一つの職業をもち、かつ他の人々の清廉びんけいの模範となるような、清潔で、人間らしい、正直な生活をなさなければならぬ。他人のふところによつて支払われる、大いに贅沢びんぜな正饗せいけいを享受するよりも、古くなつた一片のパン切れに満足することの方が、ずっと正々堂々としてゐる。足ることを知る者の心は常に平和にして、安息がある。』——「バハイ選集」四五三頁

肉食も禁じられてはいないが、アブドル・バハはそれについて次の如く言つておられる。

『将来の食物は、果実と穀類とであろう。肉食を取らぬ時代が来るであろう。今日の医学はなお幼

種であるが、人間の自然な食物は地上より生ずるものを適当とすると教えている。』

ジューリヤ・M・グランディ著「アッカーの光明に満てる十日間」より

## アルコールと麻薬

酒類や、麻薬を病氣の場合の医療以外に用いることはバハオラのかたく禁ずるところである。

## 娯楽

バハイの教えは、中庸にもとづいており、禁欲主義ではない。人生のために、物質的にも、精神的にも有益善美なものを楽しむことは、奨励されるのみならず命ぜられてゐる。バハオラは「汝等のために創造されしものを汝等より奪い去るなかれ」と言われた。また「大なる歓喜と吉報との情を汝等の顔に表示することは汝等の道である」とも言っておられる。

アブドル・バハはいわく、

『一切の物はただ万物の長たる人間のために創造されたものである。されば神の恩恵に対して常に感謝しなければならぬ。万物は我々のためにある。そこで我々は、喜びのうちに、この生命が神の恩寵であることを知らねばならぬ。もし我々が、生命に嫌悪を感じるなら、我々は忘恩者である。なぜなら、我々の物質的精神的存在は神の慈悲の外部的証拠だからである。されば我々は万物の中に神の恩寵を味いつつ讚美しつつ幸福な日を送らねばならぬ。』

賭博<sup>ヒギ</sup>を禁止するバハイの教えは、あらゆる種類の遊戯に対しても適用すべきや否やの質問に対して、

アブドル・バハは次の如く答えられた。

『いな、ある種の遊戯は無害であり、単に気晴しのためには差支ない。ただ多くの時間を空費するおそれのあるものは、つつしまねばならぬ。時間の空費は、神の大業において是認すべきではないが、体力を増進するような運動遊戯は望ましいことである。』——「天の見通し」九頁

## 清潔

「アグダスの書」においてバハオラは次の如く言われる。

『人類の中における清潔の本体にてあれ……如何なる境遇の下にあつても、清潔の習慣と一致せしめよ……汝等の着衣に、不潔の汚点があつてはならぬ……清浄なる水中に汝等を浸せよ。一度使用せし水を再び使用してはならぬ……まことに、我はそれにより、汝等から我が愛する者どもの心を喜ばす事柄が発散する汝等から地上における楽園の発現と見んことを望む。』

ミルザ・アボウル・フアーズルは彼の著書「バハイの証拠」中に清潔に関する訓戒のはなはだ大切な理由を示している。特に東洋のある地方では、いとも不潔な種類の水が家事のために使用され、風呂、はなはだしきは飲料にさえも使用され、この恐ろしい不衛生の状態に満ち、注意すれば防御し得る諸種の病氣や、不幸を惹起している。一般に流行している宗教の教えによつて、しばしば是認されているこれ等の状態は、神聖な權威を持つ人と一般から信じられる人の聖訓によつてのみ改善され得る。西半球の多くの諸地方でもまた、清潔は敬神につぐ、というよりはむしろ敬神の要点なりと一般に信じられる時驚くべき変化が生ずるのである。



### 予言者の命令に服従する利益<sup>りやく</sup>

單純生活、衛生、アルコールや、アヘンその他の禁止に関するこれらの命令の健康に対する意義は、注射を必要としないほど明白である。しかるに、それらの重要性は大いに、過少評価されやすい。もしこれが一般に守られるなら、伝染病やその他諸種の病気の大部分は跡を絶つに至るであろう。簡單な衛生上の注意を怠り、アルコールやアヘンに耽溺<sup>たんだく</sup>してひき出した諸種の病気の害は甚大である。その上これ等の命令を守れば健康を助長するは勿論、人間の品行行為の上<sup>うへ</sup>に及ぼす効果もまた実に大なるものである。アルコールやアヘンの飲用は、人々の足どりに影響し、顯然と病気をひき起すよりも前に、すでに人間の良心に悪影響を与える。故に禁酒禁アヘンの道德上及び精神上に与える利益は、肉体上の利益の比ではない。アブドル・バハは清淨<sup>せいじやう</sup>に関して次の如く言われた。

『外部の清潔は単に、肉体上の問題に過ぎないが、それが精神上に及ぼす影響ははなはだ大である。……肉体を清潔清淨に保つことは人間の精神に大なる影響を与えるものである。』

男女両性間の純潔に関する予言者等の訓戒が一般に実行されるなら、病氣の一つの重大な原因が除かれるであろう。無垢<sup>むこ</sup>な人間も、不品行な人間も、老いも、若きも、等しく破滅させられるかの忌むべき花柳病<sup>かろうびやう</sup>も、その時に至つて始めて、過去の物語となるであろう。

予言者等の教える正義、相互扶助、自己の如く隣人を愛する教訓が一度実行されるならば、一方には目に余る安賃金の労働と下劣な貧困、他方には、わがまま、怠惰<sup>たいだ</sup>、どん欲な奢侈<sup>せうぎ</sup>が、人間を精神的にも、道德的にも、又肉体的にも、破滅させようと活動しつづけることができるだろうか。

衛生上及び、道徳上の問題に関するモーゼ、釈迦、キリスト、モハメッド、あるいはバハオラの教訓を遵奉するならば、病氣予防方法において、世界中のあらゆる医者と公衆衛生上の諸規則によって完遂されたことよりも一層有効に、これらの諸病氣を防ぐことができる。すべての人々が、彼等の教訓を信じかつ守れば、一般の健康状態は必ず良好になることは明らかである。現今しばしば起る如く、人間の生命が病氣のために中途にむしばまれ、人生の成熟期に至らず、幼年、青年あるいは壮年期において突然死亡するようなこともなくなり、善い果物が充分成熟してから地に落ちる如く、人間も充分老成し、天寿をまっとうすることができるのである。

### 医者としての予言者

我等の生存する世界では、大昔から予言者等の教えはかえりみられず、神への愛よりもむしろ利己的愛がはなはだ強い。全体として、人類への関心よりも極限された党派的関心の方が強く、物的、官能的快樂の追求は人類の社会的精神的幸福の追求よりも尊重されて来た。その結果、激しい競争、衝突、圧制、暴政、極端な貧富の差を生じて、精神上にも、肉体上にも、種々の疾病を招来した。かくして人類という樹木は、病氣となり、すべての枝葉の未までことごとく、苦まねばならなくなった。遂には世の最も純潔にして、聖なるものまでが他人の犯した罪のために、苦しまねばならなくなった。この時、最も急務とするものは、人類全体としても、国民としても、個人としても、病氣を治療することである。そこでバハオラは彼以前の聖靈を受けた予言者等のなしたように、いかにして健康を維持し、いかにして一度失われた健康を回復すべきかを教えられた。彼は世界の肉体的及び心意的病氣

を治癒する偉大なる医者として出現されたのである。

### 物質的方法による治癒

現今西洋諸国に心意的、精神的、治癒法の効力を信ずるものがいちじるしく復活して来たことは明らかである。実際その多くの人々は、十九世紀に流行した病氣及びその治療法の唯物的觀念に反抗する者で、今や極端に、物的療法や医学的諸方法の価値までも否定する。バハオラは物的治療法も精神的治療法も、共に必要であるとして、両者の価値を認めておられる。彼は病氣治癒の科学及び技術が発達、奨励、完成され、治癒に関するあらゆる方法が各々その特性を發揮すべく最も有効に應用さるべきことを教えておられる。かつてバハオラの家族中に病人があつた時、専門の医者がまねかれた。そして彼の信徒等へも医者の治療をすすめられたのであつた。「汝等病氣にかからば、熟練せる医者に相談せよ」と彼は言われた。（「アクダスの書」）

これは一般的科学や、技術に対するバハイの態度と一致するものである。人類の福利増進のためのあらゆる科学も技術も、たとえそれが物的方法であっても尊重され、かつその發達普及のため努力さるべきである。人間は科学によつて物質を支配するものであつて、科学的知識のないものは物質の奴隷としてとどまるのである。

バハオラは次の如く書いておられる。

『必要の場合には医薬の治療を怠つてはならぬが、健康を回復すればやめるのがよい。医薬をさけてむしる食事療法をためし、あるいは単に葉草で間に合う場合には複雑な医薬にたよる必要はない。

……薬品は健康の時にさけて、ただ必要の時のみ用うべきである。』——「ある医師への書簡」

アブドル・バハはある書簡の中に次の如く書かれた。

『おま真理の探求者よ。病気の治癒に物的、精神的の二つの方法がある。前者は物的治療法を採用し、後者は神に祈り、神に向うのである。両方法が採用され実行されなくてはならない。……かつ両者は決して相反するものではない。最初医療上の知識を人間に賦与し、示したものは神であるから、物的療法もこれを神の慈悲と恩恵よりきたりしものとして感謝して受くべきである。されば神の僕たる人間は、この種の療法の利益にも浴すべきである。』

我々の本来の味覚や本能が、暗愚かつ不自然な生活法のために妨害されなければ、野生の動物の場合の如く、適当な飲食物と、薬用になる果物、草木及びその他の薬用品を選択する上において信頼すべき案内者となると、彼は教えておられる。「質疑応答集」中(二〇三頁)に治癒に関する有益な談話があるが、アブドル・バハはその結論に次の如く言われている。

『だから食物や栄養物や果実による病の治癒が可能であることは明らかである。だが、今日は薬剤学の不完全な時代であるから、いまだこの事実は充分理解されていない。薬剤学が完成の域に到達するならば、食物や栄養物、芳<sup>かほ</sup>わしい果実や野菜、熱湯や冷水といったさまざまな水による治療がなされるであろう。』

治癒の方法が物的な場合にも、その治癒力は全く神によるものである。なぜなら、草根木皮<sup>そうこんもくひ</sup>、または鉱物中の病気を治癒する要素は、神よりでたものだからである。「万物は神に依存する。医薬はたんに我々が天癒<sup>てんじゆ</sup>を得るための、外形的形式、あるいは外的方法にすぎないのである。」

### 非物質的方法による治癒

病をなおすには、物的療法以外にも多くの方法があると、彼は教えておられる。病気の伝染と同じく、健康の伝染もまたある。ただ伝染力が、前者は早くてしばしば勢いも猛烈であるに反して、後者は勢も緩慢で、影響も少ない。

一層強大な効力は患者自身の心理状態より現われるものであり、そして「暗示」はこの心の状態を決定せしめるに、大いなる影響をもっている。恐怖、憤怒、憂愁等は健康に大害があるが、希望、愛、喜悅等はこれに反してはなほだ有益なものである。

かくして、バハオラは次の如く言われた。

『いかなる境遇の下にあっても満足して生活することは、最も大切なことである。これによって人は病的不活発な状態から逃れることができる。憂悶悲観におちいるな。それは最大の不幸をもたらす。嫉妬は身心を消耗し、憤怒は肝臓を焼く。汝獅子を恐れるが如くこの二者を恐れつつしめ。』

——「或る医師への書簡」

アブドル・バハもまた次の如く言われた。

『歓喜は我等につばさを与える。歓喜の時は元氣おおせいであり、智力もまた鋭敏である。……しかるに悲哀の念が生ずるとき元氣はたちまち消失するのである。』

心意治癒の他の一方法について、その結果をアブドル・バハは次のように言われた。

『それは、強大な心意力を有する人がその全心意力を病人に集中し、病人はその強い人の精神力で治癒がなされるということに絶対的信仰を抱くので、この強健な人と病人との間には衷心からの交感が行われる。強健な人は病人を治癒すべくあらゆる努力をばらう、そして、病人はたしかに治癒されるものと確信する。この心意感動から、なにか神経の興奮が生み出される。そして、この感動と神経の興奮とが病人の治癒の原因となる。』——「質疑応答集」一九九頁

しかしこれらのすべての治癒方法は、その結果に、ある程度の制限があつて猛烈な疾病には効果を奏せぬことがある。

## 聖霊の力

最も有力な治癒法は、聖霊の威力によるものである。

『こうした治癒は必ずしも相接触し、また面接することを要しない。いかなる状態にも依存しない。病が軽微であろうと重症であろうと、両者の身体をふれあふ必要もなく治癒する者と病人との間に個人的な関係が成立しようとしなにかかわらず、こういう治癒はただ聖霊の力によるものである。』——「質疑応答集」二二〇頁

一九〇四年十月エセル・ロゼンバーグ嬢との談話のさい、アブドル・バハは次の如く言われた。『聖霊の力でおされるには、別に心意を集中し、また患者に接触する必要はない。ただ聖なる者の願望と祈りによる。患者は東洋に、治癒する者は西洋に、互いにはなれており、あるいは互いに

未知の間柄であっても差支ない。ただその聖なる者が、神に向って誠意をこめて祈るなら、病人は直ちになおされるのである。これは聖なる顯示者と最高の地位にある人々にぞくする天与の能力である。』

この種のものは、確かにキリストや、彼の使徒達によつてなされた治癒の方法であり、また各時代の聖者達によつて行われたものである。バハオラ、アブドル・バハ共にこの能力を有し、その忠実な信徒達にもまた同様の力が約束されている。

### 病者の態度

精神治癒の力が充分に發揮されるためには、病人も、治癒者も、病人の友人達もまた一般社会の人々も共に心得ておくべき要件がある。

病人としての第一の心得は、神はいかなることににおいても、その威力とその最善をなす意志とを有するものと確信して、誠心誠意、神に向うことが必要である。一九一二年の八月、ある米国婦人に向つてアブドル・バハは語られた。

『これらのあらゆる疾病は、總て取去られて、貴女は肉体と精神のまったき健康を得られるであらう。……バハオラの恵沢、バハオラの恩恵により、すべてが貴女のために喜びとなることを信じられよ。……しかし貴女は専念アブハ（榮光に充ちたる）の国に顔を向けなければならぬ。そしてあらゆる注意力——マゲダラのマリヤが聖なるキリストに向けたその同じ注意力——を神に捧げねばならぬ。その時貴女は肉体と精神の健康を得られるであらう。予はそれを保証する。貴女は価値が

ある。予は、貴女が、心清きが故に価値あるものなりとの吉報を呈する。…… 確信せよ。幸福なれ。喜びに満ちてあれ。希望に輝やいてあれ。……」

アブドル・バハはこの場合特に健康を回復して、健全な肉体になることを保証されたが、しかし彼はまた、時には病者に強い信念がある場合にも治癒することを保証されなかった。アッカにおいて一巡礼者に次の如く言われた。

『治癒の目的で書かれた祈りは、精神と肉体との治癒である。もしなおされることが、病者の最善のためである場合には、神は必ず祈りに応じ給う。しかし時としてその病者の治癒がかえって他の苦しみをまねくことがある。かような場合には、最上の知恵は、その祈りに答えられぬのである。おお神の侍女よ。聖霊の力は精神肉体共にそのわずらいを治癒するものである。』

「アッカにおける日々々の教訓」九五頁

またある病者に次の如く書かれた。

『時として、神の意志がいづれにあるかを測り知ることができないことが多い。後に至って、ようやくその原因と、理由が知られるのである。神を信頼し、一切を神の意志にゆだねよ。神は情愛厚く、あわれみ深く慈悲深い故に、…… 神の慈悲は必ず貴下にくだることであろう。』

彼は又教えておられる。精神の健康は、肉体の健康に資するものである。しかし肉体の健康は多くの要素による。その要素の中には個人の自由にならぬものもあると。個人としては、最も模範的な精



神状態にあつても、必ずしも肉体の健康を得るものとは限らない。時としては、いと聖なる善男善女も病気に悩むことがある。

それにしても正しい精神状態が、肉体の健康に及ぼす力は、一般に想像される以上に、有力なものであつて、多くの場合に、悪い健康を放逐するに足るものである。アブドル・バハは某英国婦人に次の如く書かれた。

『貴女は御身の虚弱なことについて、手紙を寄せられたが、予はバハオラの恵沢によつて、貴女の精神が強められ、貴女の精神の強められることにより、貴女の肉体もいやされ健全にならんことを祈る。』

また彼は次の如く言われた。

『神は人間に不可思議な能力を賦与し、もつて神を仰がしめ、その種々なる賜物の中に神の恵沢より発する治癒を受ける力をも与え給うた。されど悲しむべし。人間はこの無上の賜物に対して、神に感謝することを知らず、これをなおざりに付し、神が彼に示した大なる慈悲に注意せず、かえつて光から顔を背けたり、暗黒の路をたどるのである。』

## 治癒者

第 7 章 人によつて、程度の差はあるが、精神的に病気を治癒する力は、万人ごとく具有するものである。しかし、あたかもある者は数学、あるいは音楽に対して特別の能力を有する如く、特別に病気を治癒する能力をもつて生まれて来た者もある。これらの人々は病をなおすことを生涯の業とすべきで

ある。悲しむべきは世界は近世において、ますます唯物思想にかたむき、精神的治癒の可能性をほとんど全く忘却していることである。すべての他の能力と等しく、病を治癒する能力も、認識され、訓練され、教育されて、もつてその最高の發達を遂げ、その能力を充分發揮するに至らなければならぬ。事実現今の世界には病患を治癒する能力を充分にそなえている者が、おそらく無数にあるであろう。ただそのとうとい能力がいまは彼等の中に眠っており、不活發に止まっているにすぎないのである。心意的や精神的療法の可能なことが、さらに充分認められるに至れば、治癒の術も、一変され、高められて、その効果も大いに増すであろう。そして、治癒者のこの新しい知識と力とが、患者の強い信仰と希望とに結合する時、ここに驚くべき結果のあらわれることは期して待つべきものである。

『我等は神を信頼せねばならぬ。彼のほかに神はない。神は治癒者であり、全知者であり、救助者である……天にも地にも、神の統御にもれるものはない。』

おお医師よノ 病人に接しては、まず審判の日の主宰者たる、貴下の神の御名を唱えよ。しかる後、神がその創造物の病を治癒するために定め給うたものを用いよ。誠に、わが愛の美酒を飲みし医師の訪問は、病人の治癒であり、彼の息吹きは病人のために慈悲と希望である。身体の健康のため、彼を信頼せよ。彼の治療は神の保証するところである。

かくの如き知識（治癒の術の）は、すべての科学の中でも最も重要なものである。それはすべての人の身体を保証するために生命の本源なる神より与えられた最大の方法であつて、神はこれを他の科学や、知慮よりも上位におき給うた。今や我が勝利のために、貴下等のまきにつべき時代である。

『神様、あなたの御名は私の治癒であります。あなたを思ひまつることは私の医薬であります。あ

あなたの御側近くいることは私の望みであり、あなたへの愛情は私の伴侶であります。私へのみめぐみは私を癒し、この世においても来るべき世においても私の救いであります。まことにあなたは御慈悲にあふれ給う御方に在し、全知にしてすべてに賢き御方に在します。』

「或る医師に宛てたババオラの書簡」

アブドル・バハは次の如く書かれた。

『バハの愛をもって満たされ、心中他意無き者の唇より聖霊はきかれ、生活の精神はその者の心を充たすであろう……彼の唇よりもれる言葉は真珠の糸の如く、あらゆる病氣も、厄病もその手を触れることにより、治癒されるであろう。』

『おお純潔にして精神的なるものよ。神を愛するの念燃ゆるが如く、神を衷心より讚美し、神の国を仰ぎて、喜悅、熱中、愛、思慕、歡喜、芳香の心をもって聖霊より助力を求め、もって神に向うべし。神はその御前からの精神を通じて、もろもろの病患を癒し、汝を援け給う。』

『心と肉体の治癒に常に努めよ、そして至上の王国に向い、最大名の力を通じて、また神への愛の精神によって治癒を得んことに専心し、人々の病氣を治癒すべく努めよ。』

### 各人いかに相助くべきか

第 7 章 病を治癒する業は、病人と医者にのみ関するものではなく、すべての人々が関係する問題である。すべての人々が、同情と奉仕の心を持ち、正しい生活と、正しい思想を持ち、ことに祈りをもって、病人を助けなければならぬ。なぜなら、すべての治療中、祈りは最も効力のあるものだからである。

アブドル・バハは「他人のために祈願し、祈ることは、必ず聴かれる」と言われた。善悪ともに友人の感化力は最も直接的で、また有力である。故に病人の友人には、特別の責任がある。いかに多くの疾患の場合、その快癒のいかんが特に病者の両親や友人や、隣人の助力によることか。

社会の一人々々もまた病気のすべての場合に影響を持つのである。個人の場合は影響も大きく見えないが、集団の場合はその結果に従って甚大である。各人は、一般的に流行する信仰や、唯物思想や、道徳や、悪徳や、快活や、ゆううつをもって、生活している社会のふんいきに影響されている。そして各個人は、この社会のふんいきの状態の構成に各々その分前を持っている。現在の社会状態では何人も完全な健康を保持することは困難であろう。けれども人に健康を与える力である聖霊の心よりの通路となつて、自己の肉体と、また自分がまじわり接する人々のために、病気を癒す有効な感化を与えるよう尽力することは誰にでもできることである。

病人を治癒することほど繰返し強調して、バハイに負わされた重要な任務はない。そして治癒に関する多くの立派な祈りがバハオラとアブドル・バハによつて啓示されている。

## 黄金時代

病人と、治療者と、一般社会とが、協同調和し、健康のため物質的、心意的及び精神的の多くの適当な方法を用いるならば、人生の黄金時代は実現するとバハオラは保証された。その時は神の力により、「すべての憂愁は歡喜に、すべての病気は健康に変わるのである。」アブドル・バハは、「神の伝言が理解される時は、すべての災厄は消滅するであろう」と言われた。彼はまた次の如く言われた。

『物質の世界と、神の世界とがよく調和を保ち、人の心は天に向い、人の願望が清くなれば、この

両世界の完全な結合ができる。かくてこの力は完全な顕現を生ぜしめる。その時、肉体と精神との疾病は完全に治癒される。』

### 健康の正しい用法

この章の結論として、健康の正しい用法についてのアブドル・バハの教えを回想することは、最も適当なことと思われる。ワシントンのパハイに宛てた書簡中の一節に彼は次のように言われた。

『もし身体の健康と、福利が、神の国のために用いられるならば、真に望ましく、称讃すべきことである。もしそれが、全人類の福利のために用いられ、又、善をなす手段であるならば、たとえそれが彼等の物的（肉体的）福利のためであつてもまた結構である。しかしもし人間の健康や、福利が、肉体的欲望や、野獸的生活や悪魔的生活の追求のために用いられるならば、そのような健康であるよりも病氣である方がはるかに有益である。いな、むしろ死そのものの方がかくの如き生活よりもはるかにまさるものである。汝もし健康を欲せば神の国の奉仕のためにこれを求めよ。予は、汝が、完全な識見と、不屈の決心と、完全な健康と、強力なる精神と肉体とを得、もつて永遠の生の泉を飲み、神の確証の精神に助けられることを望む。』

## 第八章 宗教の融合

『おお、汝等地上に住む人々よ！ この最上の啓示の卓越した性質を示す特質はこのことである。つまり、我は一方において神の聖書の紙上より、人の子の間に争いと敵意と害意の原因であったものをすべて抹消したのである。また他方において我は、調和と理解と永続しうる完全な和合にとつて欠くことのできないものを宣言したのである。我が掟を守る者に幸あれ。』

バハオラ「世界に関する書簡」より

### 十九世紀の宗派主義

いまだかつて十九世紀ほど宗教的融合より遠ざかっていた時代は、なかつたであろう。何世紀もの間、大宗教団——ゾロアスター教、ユダヤ教、仏教、キリスト教、回教、その他が併行的に存在した。しかしその全体が一致した調和を保つことなく、かえって相互に敵対し、反目して来た。のみならず、その各々が、分裂に分裂を重ね、宗派いよいよその数を加え、それ等は相互に、しばしばはなはだしい抗争を続けて来た。しかもキリストは言った。

「互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう。」（ヨハネ伝第十三章三十五節）と。モハメッドまたいわく、

『この汝等が宗教は唯一の宗教なり。……すなわち神がノアに命じ、また我汝に啓示し、又、我がア

ブラハム、モーゼ、キリスト、に「この信教にしたがえ。しかして、分裂して宗派を造るなかれ」と言つて命じた信教を神は汝等に命じた」と。大宗教の創始者は、皆その信徒等の互に相愛し、合一せんとことを求めた。しかしそのいづれの場合においても、これ等創始者等の目的はなほだしく狹量、頑迷、虚体、偽善、背徳、虚説、分立、争論の動搖の内に隠されていた。程度の差こそあれ、相反目する諸宗派の総数は、ハイ時代の初期においては、人類有史以来恐らく最大なものであった。当時の人はあたかもあらゆる種類の宗教的信仰と、儀式や儀礼の式法と、道徳的法典をためしていたかのようになつた。

これと同時に自然法則と、信仰の基礎についての、大胆な研究と、批判的觀察に、努力する人々が漸次数を増して来た。新科学的知識は、急速に獲得され、生活の諸問題に対して新しい解決が発見された。汽船、鉄道、通信組織、印刷、等の發明の進歩は、思想の拡大、多様な思想生活の形態の豊富な接触を大いに促した。

しかして、いわゆる「宗教と科学の衝突」は恐るべき斗争となつた。キリスト教界においては、聖書の批評論は自然科学と結んで、聖書の權威と、すなわち永い間一般に受容られて来た信仰の基礎をなす權威をある程度まで反駁するに至つた。教会の教義に疑義をはさむ者は、急速にその増加率を加えた。多くの僧侶達すら、各々の宗派に固着した信条に対して、ひそかに、又は公然と懷疑や隠し立てを抱くようになった。

古い正教、古い教条の不十分さに対する認識が増すと共に、完全な知識と理解の探索、追求をともないかくの如き見解意見の沸騰流動は単にキリスト教国においてのみでなく、程度の差こそあれ、種々な形をもつて、すべての国土、総べての宗教の人々の間に、あらわされていた。

## バハオラの伝言

正にこの衝突紛糾の状態が、その極点に達した時に、バハオラは人類に向つて、偉大なる呼びかけをされたのである。

『総ての国々が信仰において一体となり、総ての人々が同胞として一体となること、人々の間に親愛と結合の盟約が促進されること、種々な、宗教の多様性が消滅し、人種の差別がなくなること。

……これ等の闘争や流血や不和はやめられねばなりません。そうして全人類は一家族、一親族の如くならねばなりません。』——「ブラウン教授への談話」

これは誠に光榮ある伝言である。しかしこの提議はいかにして遂行されるべきであろうか。数千年にわたつて、これ等のことについて予言者等は宣教し、詩人等は歌い聖者等は祈つたにも抱らず、宗教の騒動は廃止されず、争い、流血の惨事、軋轢等は廢除されなかつた。今に至つて、何をもつてこの奇蹟が成就されるであろうか。なんらか新しい要因がこの局面にあるのであろうか。人間性はいぜんとして、同じではないだろうか。またそれはこの世の続く限り同様なものとして継続するものではないであろうか。もし一人の人に、あるいは二国間に同一の欲求物ありとすれば彼等は従来同様、将来においてもそのために闘うのではないであろうか。モーゼ、釈迦、キリスト、モハメッド、にして世界統一の試みを達成なされざるものをバハオラは果してこれに成功されるであろうか。また従来のあらゆる信教が類廢し、多くの宗派に分裂したならば、バハイ信教もまた同一運命をたどらずにすみ得ようか。これ等の同様な質問に対して、バハイの教えはいかなる答をなすであろうか、を次に述べる。



## 人間性は変化し得るか

教育と宗教は等しく、人間性が変化し得るものであるという仮定の下に立っているものである。実際、我々が、いかなる生物についても確言できることは、生物は変化しないではないということであり、それはほとんどならぬの研究も要しないところである。変化なくしては、生命はあり得ないのである。鉱物でさえも変化することをまぬがれないので、我等が存在物の圏内において、高く上げれば上がる程、この変化は多種多様で、複雑奇観の度を増すものである。さらに、あらゆる種類の創造物の間の進歩発展において、我々は二種の変化を見出す。——すなわち一は緩慢で、漸進的で、ほとんど知覚しがたい変化であり他は急速で、突然でまた劇的なものである。後者はいわゆる発達の「臨界期」と称する場合に起るものである。鉱物の場合においてかくの如き臨界期は溶解点および沸騰点にあり、たとえば固体が急激に液体となり、あるいは液体が気体となるが如くである。植物においてはかかる臨界期は、種子が発芽し始め、あるいは芽が葉になる場合にある。動物界においても同じことがいたるところに見られる。たとえば、幼虫が突然蝶に変化したり、雛が卵殻より出現したり、あるいは嬰兒が母の胎内より出誕生するの類である。より高い魂の生活において、我々はしばしばこれに似た変化を見る。人が「再生する」時、その人の全存在はその目的において、性格において、その活動性において、根本的の変化をきたす。また春、あらゆる種類の植物がいつせいに新生命を得るが如く、かかる臨界期はしばしば全種あるいは多種にわたって同時に影響することがある。

あたかも下等生物が新しい完全な生命に突然変化する時期を有する如く、人間においてもすでに、「臨界期」すなわち「再生期」の近くにある事をバハオラはのべておられる。すなわち人間歴史の曙光

以来、今日まで持続し続けた生活様式は、急速に突然的に変化し、人生はあたかも蝶が毛蟲と異り、鳥が卵と異るが如く、古いものから新しい生の局面に転入するであらう。太陽が昇るとき全国土が照らされ、万民も今まで総てが暗黒朦朧もろろとしていたものを、今や明瞭に眺め得るに至る如く、全体として人類は、新しい啓示の光の中に真理を感じするの新しい視力に達するであらう。「これは人間能力の新しい週期である。世界の全地上は明るく輝き、世界は誠にバラの園と化し、楽園となるであらう」とアブドル・バハは言われている。この自然の類似は、皆かくの如き見地においてうなづけるものである。古えの予言者等は、皆一樣にかくの如き栄光ある日の出現することを予言しており、人間の思想および制度において、深遠にして革命的变化が、今日においてさえ發展途上にある事を時代の徴候ちゆうこうは明らかに示している。

万物は変化するのに、人間性のみは変化するを得ずとの厭世論えんせいろんほど、無益無根な説はないのである。

### 融合への第一歩

宗教的統一を進める方法として、バハオラはあたら限り慈愛、寛容ならんことを鼓吹し、その信徒等に対して、「総ての宗教信者等と、こころよく、楽しく、あいまじわらん」ことを求めておられる。彼の「遺訓いしゆん」にいわく、

『論争や闘争は、神が彼の「アグダスの書」中にて厳しく禁ずるところにして、かくの如きは、この至高なる啓示における主の命である——この命は彼が廃止し得ないとしたものであり、彼が確証の装飾もて飾りしものである。』

おお汝等世界の民よ。神の宗教は愛と和合のためにありし、これをして怨恨、衝突の原因となす

ことなかれ。……我が望みは、バハの民が絶えず『視よ、すべては神のものなり』という神聖な言葉に向ふことなり。これこそ水の如く、胸懐に燃ゆる憎怨の焰を消し止むる最も榮光ある言葉なり。このただ一つの言葉によって、世界の異つた宗派は眞の統一の光に達する。誠に彼の語るところは眞理であり、彼は唯一の道に導く者である。また彼は強大にして恩寵深く、かつ至美なる者なり。』

アブドル・バハはいわく、

「すべての人々が偏見をすて相互の教会、寺院にすらも出入すべきである。何故ならこれ等のすべての礼拝所において神の御名が述べられてゐるからである。すべての人々が神を礼拝するために集るのに、そこに何の相異があるであろうか。誰も悪魔を礼拝する者はない。回教徒はキリスト教徒の教会に、あるいはユダヤ人の会堂におもむき、また反対にその他の人々は回教寺院にゆくべきである。彼等が互いに遠ざかるのはただなんらの根拠もない偏見と独断に出るのである。アメリカにおいて、予はしばしばユダヤ人の会堂を訪れたがそれはキリスト教教会と同様のものである。予は彼等がいたるところにおいて、神を礼拝するのを見たのである。

多くのこれ等の場所で、予はしばしば神聖な諸宗教の本来の基礎について述べ、また神の予言者、並びに聖なる顯示者の確實性の証拠を説明した。予は彼等に盲目的な模倣を廃すべきことをすすめた。すべての指導者等はひとしく相互の教会におもむき、神聖な諸宗教の基礎と、根本的原理とを語らねばならぬ。各自相互の礼拝所においては無上の一致と調和の下に彼等は神を礼拝すべきであり狂信はすてねばならぬ。』

もしこれ等の第一歩が成就され、友情的な相互寛容の状態が種々の宗教宗派の間に建設されたとすれば、いかにすばらしい変化がこの世にもたらされることであろうか。しかし真実の融合に至るには、なお、これ以上が必要とされる。宗派分裂の疾病には、寛容は重要な緩和剤であるが、しかし根本的の治療ではない。それでは決して混乱の原因が除去されるものではない。

### 権威の問題

過去において種々な宗教団体が一致連合に失敗したのは、その各々の帰依者等が各自団体の開祖を唯一最高の権威者とみなし、その掟を神の掟とみなした故である。それ故、異った伝言を宣言する予言者は真理の敵とみなされたのである。同一教団内の諸宗派も、かような理由によって、相互分離したのである。各派の帰依者等は、ある附属的な権威者を奉じ、開祖の伝言のある特殊な見解、あるいは解釈をもって、唯一の誠の信教となし、他のものは皆不当のものとなしたのである。かくの如き状態の存続する間はいかなる真の融合も不可能であることは明らかである。一方、バハオラはすべての予言者等は、皆神より信すべき伝言を託された者であり、そして彼等は皆その時代において、人々が受け得る最高の教えを伝え、彼等の後継者よりさらに教えを受け得るような教育をしたものであることを教えておられる。バハオラはあらゆる宗教の信徒等に向って、彼等自身の予言者の神聖な靈感を否定しないばかりではなく、他のすべての予言者等の神聖な靈感をも認め、もってすべての教えは本来調和の中にあり、人類の教育、統合の一大計画の諸部分をなすものであると宣言されている。彼はすべての宗派の人々に対して、すべての予言者等が努力かんなんして求めたこの統合の完成にその身命を捧げる事によって予言者等に尊敬を表すべく教えられた。彼はヴィクトリヤ女皇への書簡において、

世界を一人の病人にたとえ、彼の病気が無能な医師の手にあるが故に、ますます悪化させられることを述べ、さらにかに治癒がその効力を現すかについて次の如く言われた。

『主が全世界の治癒のため、最上の療法と、最強の道具として定め給うたものは、総ての民族を一つの普通の大業、一つの共通な信教の下に統一することである。この事は熟練した、全能の、そして靈感を持つ医師の力にあらざれば、決して達せられ得ない。これ真理そのものにして他にあるは誤ちである。』『落穂集』二二五頁

### 累進的啓示さいしんてき

宗教統一の途上において、多くの人々のために最大のじゃまものとなるのは、種々な予言者によってされた啓示の相異である。一者が命ずるところは、他者が禁ずるありさまである。それ等はいかにして両者ふたつながら正しくあり得、共に神の意思なりと宣言することを得ようか。もちろん眞理は一にして、変化することを得ざるものである。しかし、絶対的眞理は一であつて変化することはできない。しかし絶対的眞理は、人間の理解力の現在の限界の無限のかたにあり、これに対する我々の概念は不断の変化をまぬかれぬ。すなわち我々の早期の、不完全な思想は、神の恩寵によって、時の進むに従い、ますます完全な概念と變つて行くであらう。イランのあるバハイに与えた書簡中に、バハオラは次の如く言われた。

『お人々よ。教えはこれを受ける者の能力に応じて啓示される。かくて初心者等も進歩をなし得る。世界の嬰兒が崇高な領域に入ることができ、一体性の官庭に定住できるためには乳は適度に与えられねばならない。』

嬰兒を丈夫にし、次第にかたい食物を消化し得るようになるのはすなわち乳である。ある予言者が、ある時代に説いた教えが正しいと云う事の故に、他の予言者が他の時代に他の教えを説くことが誤っているに違いないというのは、乳が新しく生まれた嬰兒の最良の食物である故に、成人にもまた食料たるべきであり、他の食餌じきじを与えることは誤っているというに等しいものである。

アブドル・バハいわく、

『あらゆる神の啓示は、二つの部分に分けられる。その第一は本質的のものであって、永遠の世界に属するものである。これは神聖な真理と根本的原則の説明である。それは神の愛の表現である。これはすべての宗教中において同一たるもので、しかも不変不易なるものである。第二の部分は永遠なものではない。それは実際的な生活、取引、業務に関するものであって、人間の発達、および各予言者の時代の要求によって変化する。たとえば……モーゼの時代においては、わずかなぬすみの刑罰として人は手を切斷されたもので、眼には眼を、齒には齒をもつてつぐなう法律が行われた。しかしこれ等の法律はキリストの時代には便宜でなかったものでそれらは廃止された。同様に離婚は一般的風習を成し、結婚に対する一定した法律がなかったので、聖なるキリストは離婚を禁じたのである。』

時代の緊急な要求に従って聖なるモーゼは死刑にかんして十カ条の掟を啓示した。なぜなら當時はイスラエルの民は、なんら確立した法廷も刑務所もない未開のターと言う荒野に住み、これ等の厳格な法規がなくては到底その団体を援護し、社会的安全を維持することが不可能であったからである。しかしこの処罰の法典はキリストの時代には必要がなくなった。宗教の第二の部分の歴史は単にこの生活の風習にかんするものである故に重要な意義を持たないものである。しかるに神の宗

教の基礎は一であつて、聖なるバハオラはその基礎を更新したのである。」

神の宗教は唯一の宗教であつて、すべての予言者等は皆それを教えたのであつた。しかもそれは生きて成長するものであつて、生命のない不変のものではない。我々はモーゼの教えにつぼみを見、キリストのそれに花を、バハオラのそれに果実を見る。花はつぼみを破壊せず、果実もまた花をほろぼすものではない。それはなにもをも破壊するのではなく、かえつて成就せしめるのである。花が開くためには芽苞は凋落し、果実が成熟するためにははなびらは凋落せねばならぬ。芽苞と、はなびらは、悪くて不用なものであるためにすてられるのであろうか。そうではなく、むしろこの二つはひとしくその時期においては正しくあり必要なものであつたのだ。これ等がなくては到底果実はあり得なかつたのである。いろいろな予言的教えもこれと同様である。これらの外觀は時代に従つて変化したが、しかしどの啓示もみなその先行者等の完成にあつた。それ等は別々のものでもなければ、ふつりあいのものでない。ただ種子となり、つぼみとなり、花となつて現われ、今や果実の段階に到達したこの唯一の宗教の生きた歴史における異なる段階にすぎない。

### 予言者等の不謬性ふびょうせい

予言者の地位を受けた者は皆、その使命について十分な証拠を与えられ、万人の服従を要求する資格を持ち、先行者等の教えを改廢追加する權威を有することを、バハオラは教えておられる。

彼は「確信の書」中に次の如く書かれた。

「神が自ら創り給うたものを教え導くために、すべての人々の間から一人の人を選び出されたにも

抱らず、その者には神の素晴らしい証言を十分に示さず、他方では神が選び給うた者から眼をそむけたという罪科で人々に厳しい懲罰を与えるなどというようなことは、慈愛に満ちた御方の御恵（みめぐみ）からしても、また神の慈み深い御意やお優しい慈悲心からしても、およそあり得ることであらうか。

いやそれどころか、生きとし生けるもの総ての主在す御方の豊かな恩恵は、神々しい神の本質を顕示するもの達を通して、いつも大地と、そこに住むすべてのものをおおい包んでいるのである。』

『しかも、人類の性格を根本から一変させるのが、それぞれの啓示の目的ではなかったのか。その性格の転換は、外面的にも内面的にも現われ、また人類の精神生活にも外的環境にも影響を及ぼすものなのである。それ故、もし人類の性格が変えられなかったとしたら、神の普遍の顕示者達の空しさが判然たるものとならう。』

神は唯一不謬性ふびつせいがある権威者にして、予言者達もまた不謬性がある。なぜなら、彼等の伝言は、神が彼等を通じて世にあたえ給うた伝言だからである。この伝言は、同一の、あるいは他の予言者によって次の伝言が与えられるまでは有効なのである。

神は、世界の疾病を正しく診察し、適当の療法を指定し得る唯一の大医学者である。ある時代に指定された治療法は、後に至って患者の状態が変化した場合、もはや適応しないものである。医師が新しい処方方を命じた時、なお古い療法を固守するのは医師に対する信用を示すものでなく、かえって不信を表わすものである。三千年の昔、モーゼが世界の疾病のために命じた療法の中のあるものは、もはや時代おくれで不適當のものであると言えば、ユダヤ教徒は多分驚くことであらう。キリスト教徒も同様に、キリストが命じたところに、モハメッドが必要か、あるいは価値のある事項を付加した



と聞けば驚くであろう。同様にイスラム教もまた、バブとバハオラにモハメッドの命じたところを改める權威があることを承認すべく求められる時、また驚くであろう。しかしバハイの見解によれば、神への真の献身とは、すべての神の予言者等への尊崇、我々自身の時代の予言者によって与えられた神の最新の命に絶対服従する事を意味する。かくの如き献身によつてのみ、真の統合は達し得られるのである。

## 至上の顯示者

他のすべての予言者の如くバハオラもまた最も明瞭な言葉で彼自身の使命を述べておられる。特にキリスト教徒にあてた「ロウヘ・アグダス」と言う書簡中に彼は次の如く書かれた。

『実に天父は来つて、神の国において汝等に約束されたことを成就したのである。これは、神の子が、その周囲の人々にいまだ人々がそれに堪え得ないため、単に黙示したにすぎない言葉である。されどその時代は過ぎ、時至つてその言葉は意志の東天より輝き出たのである。心せよ、おお神の子の群（キリスト信者等）よ。すべからくこれを拋棄することなく、確固として支持せよ。我は汝等の目前にあるすべてのものにすぐれるものなれば……実に真理の精神はすべての真理に汝等を導かんがために来た。実に、彼は彼自ら語らず全智の聡明な者より出でたることを語る。彼こそは神の子が讚美したものである。……おお地上の人々よ、汝等の目前にあるものをすてよ、しかして威力あり信義あるものの命ずるところを取れ。』

一八六七年、アドリヤノーブルよりローマ法王に宛てた書簡中に彼は次の如く書かれた。

『祝うことによつて祝われるものからかくれ、礼拝することによつて礼拝されるものからかくれざるよう努めよ。強大な、全智の主を視よ。彼は世界の生命に奉仕せんためにまた地上に住むあらゆるものを和合せしめんために来たのである。おお人々よ、啓示の發生地に來れ。一時といえども躊躇することなかれ。汝等は福音書を学びてしかして未だ榮光の主を見得ざるや。おお學識ある人々よ、これは汝等に似合わしからず。汝等もしこれを否定せんには如何なる証拠によつて神を信するや。その証拠を提示せよ。……』

キリスト教徒等にあててたこれ等の書簡中、福音書の約束が成就されたことを發表すると同様に、回教徒、ユダヤ教徒、ゾロアスター教徒、およびその地の信教の人々にも、彼は、各々その經典中の約束が成就されたことを聲明された。彼はすべての人々を、従来別々の羊の群となして別々の羊圍いで保護された神の小羊であると呼ばれた。バハオラは、御自身の伝言は神の御声であると言われた。善き羊飼いは、時まさに熟した時、散乱していた羊群を一つの群として集め、彼等の間の妨柵を取り去るために來る、「一つの羊群と一人の羊牧者」とならんがために。

## 新しい状況

あらゆる予言者達の中でバハオラの位置は、先例のない独特のものである。それは彼の出現時代の世界の状況がそうであつたためである。宗教、科学、芸術、文明の久しい間の交錯せる發展の過程をへて、世界は遂に熟して融合の教えを迎える時代となつていた。長期にわたつて世界の融合を不可能ならしめていた障害物も、バハオラの出現された時は、すでに瓦解の機運にあつた。そして一八一七

年の彼の誕生以来、特に彼の教えの宣布以来、これ等の障害物は最も驚くべき状態において崩潰して  
いた。その説明はいかにあつても、その事実は疑うよちがない。

前代の予言者達の時代においては地理上の障害だけでも、世界の融合と妨害するに充分であつた。  
今やその障害は除去された。有史以来初めて、地球の両端にいる人々が、迅速容易に通信し得る。昨  
日欧州に起つた事件が、今日は世界各地のすみずみにまで報道され、今日アメリカでなされた講演が  
明日はヨーロッパ、アジア、アフリカにおいて読まれるのだ。

次の大なる障害は言語上の困難であつた。幸い外国語の研究教化の負うところにより、この言語上  
の障害も大いに減ぜられた。そして近い将来に一つの補助的世界語が採用され、世界中の各学校に教  
えられる時の来るであろうことを信ずべき充分の理由がある。その時、この障害もまた完全に除去さ  
れるであろう。

第三の大なる障害は、宗教上の偏見と偏狭である。しかしこれもまた順次消失しつつある。人心は  
漸次開かれつつある。民衆の教育は宗派的僧侶等の手から次第に離れつつある。そして新しくさらに  
自由な思想が、最も排他的、保守的な社会にまで浸透することを、もはや防禦できなくなっている。  
かくてバハオラは彼の伝言を比較的僅少な歲月の間に、ほとんど各地に知らしめた最初の偉大なる  
予言者である。久しからずして、彼の權威ある著書より翻譯された彼の根本的教えは、男女老少を問  
わず、いやしくも文字を解する者には直接親しむことができるに至るであろう。

### バハイの啓示の完全性

バハイの啓示は、その權威ある記録が豊富で、完美な点において、各信教中古今無比であり、独特

のものである。キリスト、モーゼ、ゾロアスター、釈迦、クリシュナ等が確実に自ら言い残した記録は極くわずかで、多くの主要な現代の未解答問題を残している。これらの諸宗教の開祖等の教えとして一般に伝えられるもの多くは、真偽不定である。あるものは確かに後世に添加されたものである。回教徒は、彼等の經典であるコーランおよび多くの伝承の中に彼等の予言者の伝記と教えの、より豊富な記録を有する。しかしモハメッド自身は、神の靈感は受けたが、彼の最初の多くの信徒達の如くまったくの無学であった。従って彼の教えを記録し、宣布する<sup>せんぷ</sup>ために用いた方法は、多くの点において不十分であった。そしてその伝承の多くは、非常に疑わしいものである。その結果として、すべての前代の諸宗教の場合と同様に回教においても幾多の異った解釈や、互に衝突する意見が、多くの教派とあつれきを發生せしめたのである。

これに反して、バブ、バハオラ、共にはなはだ雄弁にして、權威ある多くの筆録を残されている。両者共に、公に語ることを妨げられ、(その使命宣言の後)ほとんど獄中で生活されたので、大部分の時間は著述に費された。その結果バハイの啓示は、その經典の確實豊富な点において前代宗教中のいかなるそれもおよぶところでない。前代の啓示でばくぜんとだけ予示した多くの真理にかんして明確な、そして充分な解釈があたえられ、すべての予言者等の教えた真理の永遠の諸原理が、今日世界の直面している實際問題に適用している。——これ等は最も複雑困難な問題で、その多くは前代の予言者等の時代には起きなかつたのである。この充分な、かつ信すべき啓示の記録は、将来の誤解を防ぐ大なる力であり、諸宗教の統一を妨げる過去の誤解を一掃する力である事は、明らかである。

## バハイの聖約

バハイの啓示はなお、他の点からみても、独特無比のものである。バハオラは、逝去式に先だつて、「聖約」を書きその中に度々、彼がしばしば枝あるいは最大の枝として引用したその長子アブドル・バハをこの教えの權威ある解釈者として指名された。そしてこの長子によって与えられるいかなる説明あるいは解釈も、バハオラ自身の言葉と同じ權威を持つものとして受けいれられるべきであると宣言された。「遺訓」に次の如く彼は書かれた。

「我が最も聖なる書に啓示したことについて考えよ。」

『我が出現の海原の潮が退ぎ、我が啓示の書が終らば、汝等は、神の意図し給うたこの古來の根莖から分岐せる彼に、汝等の面を向けよ。』この聖句が意味するのは、最大の枝（アブドル・バハ）に他ならない。」

また彼がアブドル・バハの地位を説明された「枝に関する書簡」中に次の如く書かれた。

『お人々よ。汝等は彼の出現の故に神を讚美せよ。実に彼は汝等のためにいと大いなる恩恵と完全なる祝福なり。彼によってあらゆる朽ちたる骨も生命を得ん。まことに彼に向うものはすべて神に向い彼より顔を背けるものはすべて我が美より顔を背け、わが証拠を否定し、かつ疑をおかす者なり。』

バハオラの死後、アブドル・バハは彼の家において、又その広範囲にわたる旅行において、世界の各方面の、各種の色彩の意見の人々に接触する多くの機会をもたれた。彼はそれ等の人々の質問や困難とする点や、又は反対の意見等をことごとく傾聴し、一々充分な説明をあたえられた。それは正確

に記録されている。アブドル・バハは、その長い生涯を通じて、教えの説明、及びその近代生活のあらゆる問題への適用を示す事に力を注がれた。信者間に起った種々な意見の相違は彼に持ち来され、彼は権威をもってこれを解決し、かくしで将来起らんとする誤解の危機を大いに減少された。

更にバハオラは次のように定めておられる。……大業の事業一切を司り、余ての活動を統制監督し、分派分裂を防止し、あいまいな問題を説明し墮落や誤伝から教えを守るために世界中の全バハイを代表する万国正義院が選ばれるべきであると。この最高の行政体は、教えの中に規定されていない全ての事柄についてその法を定めることができるのみならず、新しい条件が異つた方法を要求する場合には、制定されたものを取消することもできる。このことにより、信教は生きた器管のように移り変わる社会の必要に応じ、適することができる。

また、バハオラは何人であろうと、アブドル・バハはその遺訓の中で、シヨーギ・エフエンデイを彼のなき後の信教の守護者として定められ、聖典の解釈者としての権力を与えられた。

一千年余りが経過し、バハオラの影の下に次の顕示者が自らの使命についての明白な証拠をもって現われるまでは、バハオラ・アブドル・バハ、守護者の言葉と、万国正義院の決定が、全信者が教導を求めて向うべき権威者として続くのである。バハイは、教えに対する特殊な解釈、あるいは何らかの天啓を受けたとして、それに基づき、基づく学派・宗派を創始することはできない。誰であれ、これらの規定に違反する者は、「聖約破壊者」として見なされるのである。

アブドル・バハは次の如く言われた。

『バハオラの言葉にかつてな解釈をこころみ、その能力に応じて、それに着色しつつ、その周囲に人々を集め、異つた宗派を作り、自らの地位を高くし、この大業に分裂を来たさんことをくわだて

るものは、大業の仇敵である。』

また他の書簡中に彼は次の如く書かれた。

『これ等の人々（分派の首唱者）は、海の表面に集るあわの如きものである。彼は聖約の海中より打寄せて、アブハの国の力をもってそれを海浜に打ちつける……個人的な悪念より発するこれ等の腐敗せる思想はことごとく消散して、ただ神の聖約のみ確実に安全に存続するのである。』

もし人が宗教をすてようと欲すなら、なにもものもそれを妨げるものはない。アブドル・バハは次の如く言われた。

『神自身も魂が精神的になることを人に強制はせぬ。人間の自由なる意志活動こそ必要なのである』と。ところが精神的聖約は明らかに、バハイ共同体内において、宗派分立を生ずることを、まったく不可能ならしめるものである。

### 職業的僧侶なし

バハイ組織のもう一つの特徴は、職業的僧侶の制度が存在しないことで、これは特筆すべきことである。教師等の教導費に対して自発的寄附は許す処であり、この大業のために常に多くの奉仕を捧げている。ただすべてのバハイは、皆、各自の機会と能力に応じて、教導事業につくすべきことを期待されており、別に僧侶の職分や特権を専門に行使することによって一般の信者から区分された特別な階級はもうけられていない。

昔は人民が無学無教育であったため、彼等の宗教教育、宗教的儀式、典礼の執行、裁判事務の取扱等は、僧侶等に依頼していたので僧侶の必要があった。けれども今は時代が一変している。並通教育が普及されている。もしバハオラの命令が行われるなら、世界中の少年少女等はことごとく立派な教育を受けられるであろう。従って各個人は自由に自分で経典を研究し、自分で生命の水を、水源からくみとることが出来る時代になっている。特別な職業、あるいは階級の奉仕を要するきわめて荘厳な儀式典礼は、バハイ組織中にはない。そして、正義における行政は、その目的でもうけられた行政体に委任されている。

小児のためには教師が必要であるけれども、真の教師の目的は教師なしに生徒をして、生徒自身で学ばしめ、自分の目で事物を観察し、自分の耳で聴き、自分の心意で理解せしめることにある。それと同様に、人類の幼児時代にも僧侶は必要である。しかし、僧侶の真の職務は、人民が僧侶を依頼せず、自己によって行動し、自らの眼によって神聖な事物を見、自らの耳によって聴き、自らの心意によって理解する如く教育することである。今やすでに僧侶の職分はほとんど達成された。そして、バハイの教えの目的は、その職分を完成せしめ、人間をして神の他の一切のものより独立させることにある。かくすれば彼等は、直接に神に、すなわち神の顕示者に向うことができる。全人類がことごとく、唯一の中心に向う時、そこにはなんらの誤解も混乱もない。そしてすべてがますます中心に近づいて、従って彼等はますます相互に相接近するであろう。



## 第九章 眞の文明

『おお神の民よ。汝等自身のこと心するな。世界を改善すること、各国民を教育することを意と

せよ』——バハオラ

### 宗教即ち文明の基礎

バハイの見地に從えば、人生問題は、個人的なものにせよ、社会的なものにせよ、普通の人知では独力でこれらの問題を正しく解釈することの不可能なほど、想像以上に複雑である。ただ全智の神のみ天地創造の目的と、その目的の如何にして遂行さるべきかを知る。予言者等を通じて、神は人生の眞の目的、進歩の正しい階程かたてを人類に示す。そして眞の文化の建設は、予言者によってなされた啓示に導かれ、これに忠実に従うことによつて遂げられる。バハオラは次の如く言われた。

『宗教は世界の秩序と、總ての存在する者の平安とを維持する最大の道具である。宗教の柱石しちうせきの弱くなることは、愚民を煽動して、無法な傲慢なものにした。我は眞に言う、宗教の高貴な地位を低め

るものは、それが何であっても邪悪者の不謹慎を増し、ついに無秩序の状態を招来する。

西洋人の文明をかえり見るが良い。それが世界人類にいかなる騒乱と動揺をひきおこしたのか。悪魔の道具が数多く発見され、世界の眼がいまだかつて見ず、世界の耳がいまだかつて聞かなかったほどの残忍な行為が人間の生命を破壊するのに用いられた。これ等、言語道断の邪悪を改善するには、唯、世界中の人々が或る一つのものに結合するか、あるいは又一つの宗教の下に統合されるかでないならばならぬ……。

おおバハの民よ。啓示された命令の一つ一つは、世界を保護する最強の要塞である。』

——「樂園の言葉」

ヨーロッパおよび世界一般の現状は、ずっと以前に書かれたこれらの言葉が真理であることを、雄辯に確証するものである。豫言者の命令を無視したり、無宗教の流行することは、最も大なる無秩序と破壊とをもなった。そして真の宗教の根本的特徴である、心と目的とを交えることなしには、社会の改革は不可能なことに思われる。

## 正義

バハオラは簡単に豫言者としての教えの真髓よんぶを述べられた「隠された言葉」という小さな本の中で、彼の第一の勸告を、個人生活に関してなされている。すなわち「純粹にして優しく、また輝かしく心を持て」と。第二に、彼は真の社会生活の根本原理を示された。

『おお心霊の子よ、総てのものうち、わが目に最愛なるものは正義である。汝もし、われを求むるならば、正義にそむくな。またわれ汝を信頼し得るよう、それを等閑にするな。その助けにより、汝、他人の眼ならぬ汝自らの眼にて見、隣人の理解力ならぬ汝自らの理解力にて知らん。このことを汝の心のうちに熟考せよ。いかにそれが汝に必要なかを。まことに正義こそは、わが汝への贈り物であり、わが慈愛のしるしである。されば、それを汝の目前に置き。』

社会生活の第一の要素は、各個人が真偽正邪の区別を知り、事物の真実のつりあいを見ることができようになることである。精神的、社会的盲目の最大原因、社会進歩の最大の敵は、利己心である。バハオラは次の如く言われる。

『お、汝等、智慧の子等よ。わずかの厚さのまぶたすら眼をお、い、世界とその中の真相を見るを妨げている。しかるをすべからく貪欲のカーテンが心眼をお、うの結果を考えて見よ。』

お、人々よ。貪欲と怨恨のあんこくは、雲が太陽の光線をさえぎる如く、魂の光を暗黒ならしむ。』  
——イランの元ゾロアスター教であつたあるバハイへ宛てた書簡

長い間の経験によつて人間は遂に、豫言者の教えが真実であつたことを確信するに至つた。すなわち利己主義の人生觀と利己主義の行動は、必然的に、社会の秩序を乱すに至る。もし人類が不名誉の滅亡を欲しないならば、各人は隣人の事をも、わが事と同様に重要なものとみなし、全体としての人類の利害を、己れの利害に優先せしめなければならぬ。かくて、各人と全体の利害は終局において好結果を得る。バハオラは次の如く言われる。

## 政治

『お、人の子よ！ 汝もし慈悲を求めんとせば、己れの利益のみを考えず、汝の人類同胞の利益を考  
えよ。汝もし正義を求めんとせば、己に欲する所のものを他人のために欲せよ。』——「樂園の言葉」

真の社会秩序の問題に関するバハオラの教えは、二つの種類の説明を含んでいる。第一のものは諸  
国の王候キョウにあてられた書簡の中に見られるようなもので、バハオラ在世中に、この世にあったま、の  
政治の問題を取扱っている。他のものは、バハイ共同体の中において展開せらるべき新秩序に関するも  
のである。

従って、次に引用する如き章句間にはいちじるしい対照が表われるのである。すなわち、「彼の栄光  
は高貴なるかな、唯一の真の神は人々の心を昔もまた未来も彼自身のもの、彼の独占的な所有物とな  
し給う。これ以外のものは、それが地上のものであれ海中のものであれ、富であれ栄光であれ、こと  
ごとく、彼が地上の王候支配者のためにつかわされたのである」と。又、「最大名をしつかりと手がか  
りにして、全人類の統合を実現することは、今日において、すべての人がなすべきことである。神の他  
に人が逃げ込む場所はないし、求め得るいいこの場所はない。」——「落穂集」二二〇三頁、二二〇六頁  
これら二つの見解の間の表面上の矛盾は、我々がバハオラによりなされた「小平和」と「最大平和」と  
の間の区別を見ると解消する。王候にあてた書簡の中でバハオラは、彼等が力をあわせて、政治的  
平和の維持、軍備の縮少、貧弱の苦悩と不安との除去のために方策をとるべきことを命じられた。し  
かし一方、彼の言辞げんじは、王候達がこの時代の要請に應ぜず、その結果、戦争と革命とが起って、古い

秩序をくつがえすに至るであろうことを極めて明らかに打ち出している。従つて、彼は「今日人類が必要とするものは権力の座にあるものに服従するということである。」という一方、又「現世の虚栄と虚飾を積み神を侮蔑し、顔を背ける者は、現世と来世とを失うものである。遠からずして、神は威力の手もて、彼等からすべての持ち物をはぎとり、彼の恵みの衣をはぎとることであろう。お、人々よ。われは汝等のために定まった時を置く。汝もし、指定された時に神に向わないなら、誠に汝は彼のはげしく捕える処となり、あらゆる方向から、おそいかゝる激しき苦悩を感じるに至るであろう。……現行の秩序があわれにも不完全である故に、近すぎつゝ、ある大変動と混沌との徴候が、今や、見分けられる程になった。……われは警う。この世に汝の勝利を確立し、汝に向う王候は一人もなからうとも、我が大業をすべての人の上に高く掲げんことを。」——「落穂集」二〇九頁、二一四頁、二二六頁、二四八頁

「偉大なる存在者は、世界の平和と平穩およびその民の進歩の先決要件となるものを啓示せんとして、次の如く記した。廣大にして、すべてを包蔵する集合をすることが絶対に必要であると一般が気付く時は必ず来るに違いない。この世の支配者や王候達は、必ずこれに参加し、その評議に加わつて、人々の間に世界の最大平和の礎石を置く方法と手段とを熟考しなければならぬ。このような平和は、各国列強が、この世の人々の平安のために、意を決して完全に解け合うことを要求している。もしある王候が他の王に対して兵を起すようなことがあれば、すべては團結して立ち上り、彼の意企を妨ぐべきである。」「落穂集」二四九頁

かゝる助言によりバハオラは、この神の日に公の責任が解放せらるべき諸条件を明らかにされた。

一方において、国際間の共同を訴えながら、彼は世の支配者達に、断えざる紛争は彼等の力を破壊するに至るであろうことを明らかに警告された。しかして、今や現代史はこの警告の正しいことを確認したのである。すなわち、すべての文明諸国において、かかる破壊的なエネルギーを獲得した如き強圧的な運動の発生と戦争知識が発達して、いずれの側にもはや勝利は達成されえなくなったことがそれである。

『汝等最大平和を拒もうとも、汝等と汝等の家族の生活条件を多少改善し得るために小平和は、固執すべし。……主が全世界の治癒のため、最上の療法と、最強の道具として定め給うたものは、すべての民族を一つの普遍の大業、一つの共通な信教の下に統一することである。このことは熟練した全能の、そして靈感を持つ医師の力にあらざれば決して達せられえない。』——「落穂集」

小平和が諸国の政治的統合を意味するのに対し、最大平和は、政治的並びに経済的要素と共に精神的要素をも包括する統合を意味する。

「やがて今日の秩序は巻きたたまれ、代って新しき秩序が展開されん。」——「落穂集」

以前においては、政府が外的な事象じじょうや物質的な事柄のみを問題とすれば足りた。しかし今日の政府の機能は、神に向う者以外には持ち得ないような指導、献身、並びに精神的知識の性質を要求しているのである。

## 政治上の自由

地方的にも国家的にもまた国際的にも、理想としては代議政体を推奨しているが、これはたゞ人間が個人的にも社会的にも、充分に高い程度に發達した時にのみ可能なのだ、パハオラは教えておられる。民衆が、利己的欲望に支配され、国政を取扱うに經驗不十分であるのに、教育もせず、突然彼等なる自治制を許すのは、害のみ多きことであろう。それを賢く運用することを知らぬ民衆に、自由をあたえるほど危険千萬なことはない。パハオラは「アゲダスの書」中に次の如く書いておられる。

「人間の心のつまらなさを考えて見るがよい。彼等は己れをきずつけるものを求め、しかして、己れに利益をもたらずものを遠ざける。実に彼等は遠く踏み迷いたるものにも似たるかな。我々は、或る人々が自由を要求し、自らその中にあるを誇りとするのを見るが、これは明らかに無智の業だ。自由はついに混亂を來し、その火は何びともこれを消すことが出来ぬに至るに違ひない。決算者として、又全智なるものとしての神は斯く汝等に警告する。自由の具体化ならびに象徴は動物であることを知れ。人間らしさは、その無知と裏切者の加害から防禦してくれる如き制限に服従することにある。自由は人をして節度の範をこえしめ、人間の尊嚴性を侵さしめる。そして人間を甚だしい腐敗と邪惡とに陥れる。人間を羊の群として考えよ。彼等を保護するためには牧者がいなければならぬ。これは実に疑うべからざる事実である。我々は或る場合には自由を尊重するが他の場合にはそうではない。誠に、われはすべてを知るものなり。言挙げよ！ 汝知らざるも、眞の自由とは、我が命に従うことにあることなり。もし人々が我が啓示の天よりつかわした者に従うならば、彼等はきつと全き自由にあることを發見するであろう。全ての創造物の中には神の意志が浸透している。そして神の意志の天より啓示されたも

のの中に神の目的を知り得た人は幸福である。言挙げよ！ 汝等を益する自由は、永遠の眞理としての神に奉仕しつくすこと以外には見出しえない。そしてひとたびその甘味を知ったものは、天と地との支配をそっくり以ってしても、これと交換することは無いであらう。」

進歩におくれた人種や国民の改善には、神の教えが最上の良薬である。人民も、政治家も、共にこれらの教えを学んで、実際に実行するなら、その時こそ初めて諸国は総ての束縛から脱することができるのである。

## 支配者と臣民

バハオラは最も力をこめて虐政と圧制を禁じられた。「隠されたる言葉」中に彼は次の如く書かれた。

「おゝ地上の圧制者等よ！ 圧制より汝等の手を引け。われ如何なる者の不正も許さじと誓いたれば。これわが保管中の書に確固として定め、わが栄光の封印もて閉じたる聖約である。」

法律や規則を制定し、執行することを委託された人々については次のごとく書かれた。

「協議の繩を固く握り、人民の安全、富裕、厚生、安泰を増進する如きものを決定実行すべし。しからざる時は不和と混乱をもたらさるべし。」——「世界に関する書簡」

また一方では、人民は、正当なる政府の法律を尊重し、かつ忠誠をなさねばならない。国民の生活状態



を改善するには、教育的方法を信頼し、暴力によらず、善き模範力によらねばならない。バハオラは次の如く言われる。

「いずれの国にあつても、この共同体の人々の居住する所においては、人々は忠誠、真実、服従の態度をもってその国の政府に臨まねばならぬ。」——「吉報の書」

「お、神の民よ。信任と正直の衣をもって汝の身を飾れ。しかして善良なる行為と有徳の業なる軍隊をもって汝の主を助けよ。実に我が書物において、我が使徒書において、我が文書において、及び我が書簡において、動乱と争いとを汝等に禁じた。そしてこれによって我はたゞ汝等が向上し、高貴にならんことを望むのみ。」——「エシユラガトの書簡」

## 任命と昇進

人を任命する唯一の標準は、その位地に最適のものを選ぶことである。この主要な考慮の前には年長とか、社会的または財産上の身分格式とか、家族的または友誼的関係とか、言うような問題は考慮する余地はない。バハオラは「エシユラガトの書簡」の中に次の如く言われた。

「第五のエシユラグ（輝き）は、被統治者の状態に関する政府要人等の知識である。そして功績に応じて階位を与えることである。この点は総ての長官や主権者等に厳かに命ぜられておる処であつて、叛逆者等が信頼すべき人々の位置を奪い、略奪者等が保護者等の座を占めることのないよう、警戒しなければならぬ。」

## 經濟問題

この原則が一般に採用され、実行される時は、我々の社会生活が驚くべき変化を受けることは勿論明らかである。各個人が、その才智と能力に、最も適した職を与えられるとき、各人はその職に心を打ち込み、その領域において一個の芸術家となることができる。そしてこのことは、彼自身並びに世間一般に無限の利益をあたえることになるのである。

バハイの教えは最も強く貧富間の經濟關係の改善の必要を主張する。アブドル・バハは次のように述べられた。

『民衆の生活状態の整理は、貧困が消滅して、誰でもが、その位置と階位に應じて、できるかぎり安んずる幸福を享受できるようにならねばならぬ。我々は、我々の間で、一方にはあり余る富を積みすぎている人々があり、他方には無一物で飢餓に苦しむ不幸な人々があるのを見る。又一方には多くの善美を極めた邸宅や別荘を所有するものがあり、他方にはまくらする処もない人々がある。……かゝる状態は不正であつて、改善されなければならぬ。しかししてこの改善は周到の注意をもつて行われねばならない。人間の間に絶対的平等をもたらすことは解決にはならない。平等は幻想だ。それはまったく実行されないものである。たとえ平等が実現してもそれは永続することができない。そしてもしそれが存続するとすれば、世界の全秩序は破壊されるであらう。人間の世界には、常に秩序の法則が行われなくてはならない。天は人間を創造する時にかくのごとく命令したのである……人間の社会は、ちょうど大規模な陸軍において、おのおのの任務を有する各階の将官、尉官、下士官及び兵を必要とするのと同様である。秩序ある組織を維持するには、絶対的に階級の必要がある。軍隊は大将だけあ

るいは佐官だけでは成立しない。また権力を有する長官のない兵士だけでも勿論軍隊は存在しない。

勿論、ある人は無限に富み、他の人々はなげかわしい程貧苦する世の中には、制限し、かくの如き状態を改良するために、一つの組織が必要である。貧富いづれをも制限することを要する。いづれの極端もよろしくない。……貧困が飢餓の状態にまで達するのを見るときは、必らずどこかに暴虐が行われているしるしである。人間はこの点に奮起すべきで、天下大多数の民衆を窮貧の状態に陥らしめる今日の状態を一日も黙視しているべきではない。

富者は彼等の余りあるものを施与すべきである。また心からの同情を養い、生活の絶対必需品の欠乏に苦しんでいる気の毒な人々のために考えてやらねばならぬ。

貧富の両極端に走るのを防ぐ特別の法律がなければならぬ。……諸国の政府は全人類に平等の正義を賦与する神の掟に従うようにせねばならぬ。……これが実現するまでは、神の掟が行われたとは言われない。』

## 公 共 財 政

第 9 章  
アブドル・バハは、財政問題の管理に関しては、できるだけ各町村もしくは地方が、各々その範囲内において管理を委託され、そして中央政府の一般費用のために、適当な比例で、費用を負担すべきものであるという意見を述べておられる。収入の主な財源の一つは、累進所得税である。もし人の所得が、その人の必要な生活費以上に上らなければ少しも税金を支払う必要はないが、生活費以上に収

入がある場合には必ず収入から必要な生活費を差引いた金額により累進する税金を支払うべきである。他方、病氣、収獲不良、その他不可抗力の原因等で、その年の生活費を支持するに充分な所得を得ることができない場合は、彼と家族の生活を支えるに不足の額は、公けの基金から供給さるべきである。

またその他の公けの財源としては、例えば遺言のない遺産、鉱山、掘出物等及び有志の寄附等がある。これに対し公けの歳費の中には、病弱者、孤児、学校、聾盲の人々、公衆衛生の維持などのための補助金が含まれている。かくて、一般民衆の幸福と、安寧が保証されるのである。

(注) なお一層くわしくは、アブドル・バハの講演集、特に米合衆国においてなされたのを見よ。

## 任意の分配

一九一九年、「永久平和のための中央機関」にあてた書簡中にアブドル・バハは次の如く書かれた。

「バハオラの教えの中には、人間が他人に対して自己の財産を任意に分配することがある。この任意分配は法律で命じた平等よりも一層大なる意味を持つものである。そして、こゝには、人々自分のために他人の事を忘れてよいものではなく、他人のためには自分の生命や財産をも犠牲にすべきものであるという意味が含まれている。しかしこれは強制的になされ、人間が絶対に従わねばならぬ法律とされるべきではない。否、むしろイランのバハイ間に行われている如く自発的に、任意に自己の財産や生命を他人のために犠牲にし、自己の意志で貧困者に金を与えるのでなければならぬ。」

## 万人に職業

經濟問題に関するバハオラの最も重要な教えの一つは、すべての人々が有益な仕事に従事せねばならぬということである。社会という蜂巢の中には、一匹の雄蜂すなわち遊食者もあつてはならぬ。社会の中には働きに堪え得る立派な体格の寄食者があつてはならぬ。彼はいわれる。

『汝等はみな、何等かの業務——技術、手職、その他——に従事すべき義務を有する。予は汝等の業務は眞の神を礼拝すると同一のものであると認む。おゝ人々よ、神の慈悲と恩恵をかえりみて朝夕神に感謝せよ。安逸と怠惰に、汝等の時間を空費することなく、己れを利益し、また他人を益するんらかの仕事に常に従事せよ。その東天から知恵と神聖の発言との太陽が輝き始めるこの書簡において、このように命ぜられたのである。神の御前に最も卑しむべきものは、何事をもなさず座して人に乞う者である。諸原因の原因者なる神を信頼しつつ、生活の綱を固く把持せよ。』——「吉報の書」

今日の実業界では、いかに多くの精力が無益な競争のために、単に他人の労力を消耗し、打消すことだけに使用されていることであろう。そして、それよりもっと有害なことののためにも人間の労力が空費されていることであろう。バハオラの命の如く、万人ことごとく働き、頭脳をもつてすると手足をもつてすると論なく、等しく人類の利益となる仕事に従事するならば、健康で愉快な、そして、高貴な生活に必要な諸物資の供給が、すべての人に充分に行きわたるのである。そして貧民窟も、飢餓も、貧窮も、産業上の奴隷も、健康を害する苦役も、必要がなくなる。

## 富の倫理

バハイの教えによれば、正しい方法をもつて得られ正しく使用される富は、とおとく賞讃すべき価

値をもつものである。功勞は適当にむくいらるべきものである。バハオラは「タラザトの書簡」中に次の如く書かれた。

『バハの民は、他人に適当な報酬を支払うことを拒んではならない。そして才能の所有者等を尊敬せねばならぬ。……人間は正義をもって語り利益の価値を認めねばならぬ。』

金銭の利子の問題についてバハオラは「エシユラガトの書簡」に次の如く書いておられる。

『大低の人々は、この問題の必要を感じている。もし金利の制度が認められない場合には、事業は拘束され障害をきたすからである。……ガルデ・ハサン（字義は好い貸附、即ち無利息にて用立てられ、借用人は随意に返却する金銭貸借）によって金銭を他人に用立てる人はほとんどないであろう。故に僕に恩恵として、人々の間に実行されているほかの商業取引の中でと同様、金銭の利息制度が行われることを我は許した。即ち……金銭に利息を請求することは認容すべく合法的でもある……たゞ注意すべきは、適度と正義をもって取扱われねばならぬということである。栄光の筆は神の御前よりの知恵として、また僕等の便益のために、利息の範囲を限定することをさしひかえた。我は公正と正義とをもって、又、神の愛する人々の慈悲とそのあわれみとが互に示される如く、神を愛する者等がこの問題を取扱わんことを勧告する。……』

これ等の実行は、時の必要に応じて、事務が賢く運ばれるために、正義院の所管とされている。』

### 産業上の奴隷を認めず

バハオラは「アグダスの書」中で、奴隷制度を禁じている。      アブドル・バハもまた、動産物件

としての奴隷は勿論のこと、産業上の奴隷も、神の掟に背くものと説明された。彼は一九一二年米國でアメリカの人々に次の如く語られた。

『一八六〇年から六五年にかけて、諸君は驚くべき大事業を達成した。諸君は動産としての奴隷を廃した。しかし今日諸君はなお一層の大事業を成し遂げねばならぬ。すなわち諸君は産業上の奴隷を廃さねばならぬ。……』

經濟上の問題は、資本が労働に對抗し、また労働が資本に反抗する争いや紛争の方法では解決されないであろう。たゞ勞資双方の自発的善意によってのみ眞実の解決はできる。その時こそ眞実の、そして永久的な正しい状態が保証されるであろう。……

バハイの中には、強奪することも、欲得づくの行動をなすことも、不逞な要求をすることも、現政府に対して革命的暴動の蜂起を企てることも、存在しない。……

将来においては、他人の労働によって、多大の富を蓄積することは人間にとって不可能になるであろう。金持ちは喜んで分配するであろう。これは彼等の自由意志によって徐々に、自然に、行われるであろう。それは決して戦争や、流血によっては成し遂げられないであろう。』

第 9 章  
資本と労働の利益に最もよく貢献するのは、たゞ、友誼的相談と協力とによるものであり、正当な協同と利益分配の方法によるのである。同盟羅業や事業場閉鎖の劇烈な手段は、当該事業そのものの上に悪影響を及ぼすばかりでなく、一般社会を毒すること多大である。それ故紛争を解決するためのかかる野蛮な手段にうったえることを防ぐ適當な方法を考案することは政府の仕事である。アブドル・バハは一九一二年、ニュー・ハンブシャー州のダブリンにおいて次の如く語られた。

『さて予は神の掟を諸君に語らうと思う。神の掟によれば、雇人は単に賃金を支払われさえすればよいのではない。いな、むしろあらゆる事業において、彼等は協力者でなければならぬ。社会化することとはなほだ困難な問題である。それは賃金のためのストライキによっては解決されないであろう。すべての国の政府が合同して会議を組織し、その議員は国会及び各国の有徳者の中から選出される。これらの議員達は知恵と権力とをもつて、資本家も莫大なる損失を招かず、労働者も貧窮することのないような方法を講じなければならぬ。彼等は最も穩健に法律を制定し、労働者の権利が有効に保証され、同時にまた資本家の権利も保護されることを公衆に発表すべきである。かくの如き一般的法律が、労使二者の意志によつて採用される時、万一罷業の起る如き場合があれば、各国政府は協同してこれを取締るべきである。さもなければ事業は多く破壊される。特にヨーロッパにおいてその危険が多い。恐るべき事件が勃発するであろう。

全欧州を一体とする戦争が起るとすればその諸原因の一つは、この問題であろう。所有地、鉱山、工場等の所有者等はその所得を、雇人等と共に分理すべきである。雇人等もその労銀の他に、工場的一般所得の幾分を受くるように、雇主は利益をその利潤の中から、かなり決定的な割合を働く人々に分配すべきである。かくすれば、雇人等は、その仕事に全生命をかけて働くであろう。』

## 遺贈と相続

人は生存中好きなように自分の財産を処分する自由を持ち、死後その財産がいかに処分されるべきかを指定する遺言状を書いて置くことは各人の義務であると、バハオラは言われた。人がなんらの遺



言もなく死んだ場合は、財産の価格が見積られて、七等級の相続者、すなわち子女、妻または夫、父、母、兄弟、姉妹及び教師に、ある一定の比率によって分配されるべきである。その分配は、第一等のものから最後の者に、次第に減少するものである。これ等の七等級の中の一つ、あるいはそれ以上の者を欠く時は、それ等の人々へゆくべき分配は、公けの収入となる。これによって貧困者、父なきもの、寡婦が救われ、あるいは有益な公共事業がなされる。もし故人に遺産相続者が一人もないときは、その遺産はみな公庫の収入となる。

バハオラの掟では、もし人が欲するならば、その全財産をことごとく一人にゆずることも妨げはしない。しかしバハイは、その遺言をなすにあたって、バハオラが遺言のない遺産について示されたたくさんの遺産相続人の間に財産を分配するやり方に自然と影響されるであろう。

## 男女の平等

バハオラが大いに強調された社会原則の一つは、婦人も男子も同等のものとして認められ、同等の権利と特権、同等の教育、同等の機会を享有すべきものということである。

婦人解放の実現のために彼がとうとうとされた大なる方法は、教育の普及である。女子も男子と同等の教育を受くべきである。実際、女子の教育は、男子の教育以上に大切ですらある。それは女子はやがて母となるであろうし、また母として、次代の人々の最初の教師となるからである。子供は青々としたやわらかい樹の如きものである。もし最初の教育が正しければ真直に成長するが、もしそれが誤っているならば彼等は曲って成長する。そして一生涯、彼等は幼児の教育に影響されるのである。それ故女子がよく賢く教育されることはいかに大切なことであろうか。

西洋諸国の旅行中に、アブドル・バハはこの問題に関してしばしばバハイの教えを説明する機会を持たれた。一九一三年一月ロンドンにおいて婦人自由同盟会の会合の席上で彼は次のように述べられた。

『人類は二つの翼を持つ鳥の如くである。一は男性であり他は女性である。この両翼が強く、その協力で駆り揚げられるのでなければ、鳥は空に飛びあがることができない。現代の精神によれば、婦人もその位置を高め、男子と同等になって、人生あらゆる方面にその使命を十分に果さねばならぬ。彼女等は男子と同じ位置に立ち、同等の権利を享受しなければならぬ。これは予が切に望む処であり、同時にこれはバハオラの根本原則の一である。』

ある科学者等は、男子の脳髓（うづみず）は女子のものより重量が重い、これは男子がすぐれている証拠であると主張する。けれども我々が周囲を見まわす時、我々は頭が小さくて脳髓も軽そうな人が非常な知恵者でまた偉大な理解力を持つものを見受ける。また他方では頭が大きくて脳髓も確かに重そうな人がしかも愚鈍無能であるのを見る。それ故、脳髓の重量の重いことが、智力や優秀の眞の標準ではない。男子がその優越性の第二の証拠として提出するものは、女子は男子ほどの仕事をなさなかつたという断定であるが、これは歴史の事実を無視した薄弱な議論である。もし彼等がもつと忠実に歴史の教える処を研究するなら、過去において幾多の偉大なる婦人が現われて大事業を成就し、現代においても大事業をなしつゝあることに気付くであらう。

こゝにアブドル・バハはゼノビヤその他過去の婦人の功績を述べ、使徒等の信仰が動揺しても厳然としてその信仰を保つた大胆なマグダラのマリアに對する讃辭をもつてこの項を結ばれた。彼は次の如く続け

られた。

『現代の婦人の中に、一イスラム教の僧侶モウラビの娘であるゴルラトウル・エインがいる。バブ出現の時に彼女は異常な勇氣と權威を示し、彼女の言葉聞いた人々はすべて驚嘆したほどだった。彼女はイラン人の間では、太古よりの風俗であるヴェールを取り去り、男子と議論することは無作法の行為であるとして一般から考えられていたにもかゝらず、この勇敢な婦人は最も知名の学者達と議論をまじえ、各所の会において彼等を説服した。イラン政府は彼女を獄に投じた。彼女は街で石を投げつけられ、呪咀じゆまされた。町から町へ追放され、死をもって脅かされた。しかし彼女は決して、姉妹たる婦人の自由のために働こうとする彼女の決心を動かさなかった。彼女は最も偉大な英雄的精神をもって、あらゆる迫害にも困難にも耐えて、獄中にあってもなお改宗者をえたのであった。彼女が監禁されていた家はイランの一大臣の家であったが、彼女はその大臣に向つて、『閣下はいま直ぐにでも私を殺すことがおできになります。しかし閣下は婦人の解放を妨げることは出来にはなりません』と言つた。遂に彼女の悲劇的な生涯の最後が来た。彼女はある庭園に運ばれて、絞殺きりころされた。その時、彼女は花嫁の列に参加するかのようになり、一番立派な衣服をまといつていた。かくの如き大胆さと勇氣をもって彼女は死につき、これを見たすべての人々を驚ろかしたのであった。誠に彼女は偉大な女丈夫にじぶであつた。今日イランのパハイの中には、いかなることにでも決して屈せぬ勇氣ある婦人や、偉大な詩的才分を持つ婦人がある。彼女等は最も雄弁で、群衆の中でもゞからず演説する。

婦人も向上せねばならぬ。彼女等も人類完成のために、科学、文学、歴史の知識を發達させねばならぬ。彼女等は久しからずして、その權利を獲得するであらう。婦人が氣品を身につけ、市民生活、政治生活、を改善し、戦争に反対し、投票權及び同等の機会を要求していることを男子は眞面目に見

るであろう。予は生活上の各方面に諸姉の向上發達を期待する。かくて諸姉の頭上には光榮ある王冠がかゞやくであろう。」

## 婦人と新時代

婦人の意見が適当に考慮され、婦人の意志が社会政策上に十分表現されることが許容されるときには、男性支配時代の旧政治下においてしばしばいちじるしくみすごされていた健康、節制、平和、個人の生命の価値に対する尊敬等の問題に対して、大なる進歩を期待することができるとであろう。これ等の改善ははなだ遠大有益な効果を持つてであろう。アブドル・バハは次の如く言われた。

『過去の世界は力で支配された。そして男子は身心共に女子よりも強く攻撃的であるという理由で、女子の上に支配権をもっていた。しかるに今やその位置は變じつゝある。腕力はその勢力を失い、かえって婦人の長所である心意的注意力や直覺や愛と奉仕の精神的性情などが勢力を得つゝある。それ故、新時代は男子の勢力が減少して、もっと婦人の理想によって支配される時代、あるいはより正確に言えば男女両性の文明の要素が、すべてにおいて平衡する時代とたなうであろう。』——「スター・オブ・ザ・ウエスト」第八卷 第三号 四頁 ニューヨーク到着の時、セドリック号の船内においてのアブドル・バハの評言を報じたものより。

## 暴力手段の廃棄

婦人の解放を実現するにも、他の場合と同じく、バハオラは暴力の手段を避けるようその信徒等に勧告された。社会改善に対するバハイの手段の立派な実例は、イラン、エジプト、及びシリヤ等のバハイ婦人たちによってあたえられている。これ等の諸国においては、回教徒の婦人達は屋外では常にヴェールで覆面かくめんをするのが、古来からの習慣になっている。しかるにバブは、新しい宗教制では常にこの窮屈な風習から解放されるべきだ、と教えられた。しかしバハオラは信徒等に対して、道德上重大な問題でもないことで、共に生活している人々を憤慨ふんがいさせたり、要もない敵愾てきざい心を起させるよりは、民衆が啓発されるまでは従来じゆんらいの風習をつづけるよう勧告された。それ故、バハイの婦人たちは、覆面かくめんの旧くさい風習は啓発された人々には何の必要もなく、また不便なものと良く承知しているが、ヴェールなしに公衆の面前に立って、かえって熱狂的憎悪心や反抗心を挑発ちょうはつするよりは、不便をしのいで静かにヴェールの風習を守っている。この古い習慣の遵守は、決して恐怖の念からでなく、教育の力と、真の宗教の改善力並びに生活規範力を十分に信ずるからである。これ等の地方にあるバハイは、彼等の子弟の教育、特に女子教育につとめ、バハイの理想の普及と推進すいしんとに精進しんじんしている。そして彼等は、春が来て葉や花が陽光の中に開らく時、自然に、また必然的にそのつばみつばみのがわが落ちるように、新しい精神的生せい活くわつが民衆の中に成長発達すれば、古い習慣や偏見は、徐々に消滅することをよく知っている。

(注)このことは、トルコ共和国の治制下における社会の進歩が明瞭に物語っている。

教育——人間の訓育、指導、およびその天賦の諸能力の訓練發展——は、世界創生以来の、すべての聖なる豫言者等の、最高の目的であつた。そしてまたバハイの教えの中でも、教育の根本的重要性と、無限の發展可能性とは最も明白に宣言されている。教師は文明の最も重要な要素であり、その仕事は人間の熱望する最も高貴なものである。教育は母の胎内より初まり、人間の一生を通じて終る時のないものである。教育は正しい生活を送るに永久に必要であり、また個人および社会の幸福の基礎である。正しい教育が普及すれば、人類は改善され、この世界は楽園と化するのである。

現在眞に善く教育された人間は最もまれな現象であつて、ほとんどすべての人間は、産れ落ちる時からしみこんだ誤つた偏見や、間違つた理想や、誤謬の概念や、そしてまた悪い習慣などを持つてゐる。子供の時から心を傾けて神を愛し、生涯を神に捧げ、人類に奉仕することを人生最高の理想と信じ、全人類の幸福のために最もよく自己の諸能力を發達せしめようと考えるように教つた人々のいかに少ないことよ。しかもこれ等のものは善き教育の根本的要素である。数学、地理、文法、国語等の事実を、単に記憶の中に詰め込むのは高尚有為の人物を造るには比較的益する処が少い。

バハオラは、教育は普及されねばならぬと言われた。

『人の父たるものは皆その子女に読み書きの学問と、經典によつて命じられた教えとを絶対に教育しななければならぬ。この点に関して命じられた義務をおこたる者があつて、もし彼が富んでいるなら、彼の子女を教育するに用なだけの金額を彼より徴収することは、正義院理事の責任である。しからざる場合（即ち親にその力がない）はこの問題は正義院に託さねばならぬ。実に予は正義院を貧困者等の拠るべき場所とした。

己れの子、あるいは何人かの子女を教育する者は、予の子女の一人を教育するに等しいものである。』

——「エシユラガトの書簡」

『男子も婦人も、子女の教育訓練の資に供するために、商業、農業、その他の仕事で儲け得た所得の一部を、誰か信用できる者の手に委託しおく必要がある。その委託されたものは正義院の理事（あるいは役員）の指導の下に、子女の教育費に用いらねばならぬ。』——「世界に関する書簡」

## 天性の相違

バハイの見地よりすれば、子女の天性は教師の意志次第に、いかなる形にでも意のままに、自由にかたちづくられ得る蠟ろうの如きものではない。否、むしろ、子供は最初から各々個々の、神より賦与された性格と個性を持ち、それは各々特別な方法によってのみ、最も有効に発達することができ、その方法は各々の場合に独特無比である。二人の人間がまったく同一の能力才能を有することは絶対にない。それ故、真の教育家は、二人の人間を、同一の型かたに入れようと無理に教育することは決してしない。実際、彼はいかなる型の中にも、何人をも強いることをしないであろう。むしろ彼はつつしんで若い人々の天性を発達せしめることに注意し、それを奨励し、保護し、それに必要な養分と援助とを供給するであろう。彼の役目は種々な草木を世話する庭師の如きものである。ある樹木は日当りのよい所を好み、あるものは涼しい日蔭を愛し、あるものは水ぎわを好み、あるものは乾いた小丘を善しとする。またあるものは砂地に最もよく繁茂し、あるものは肥沃な土を必要とする。各自はその必要とするものを適当に供給されねばならぬ。さもなければその完成は決して充分には現われない。アブドル・バハは次の如く言われた。

『人類に及ぼす教育の力が偉大であることを予言者等は知っている。されど人間の真意と理解力は生来から各々異っていると彼等は宣言する。同年の子供で、生地も人種も勿論のこと、同じ家庭で、同じ教師の下にありながら、心意と理解力が異っているのを我々は見る。貝殻はいかに教育（即ちみがかる）されても光輝ある真珠とはならぬ。黒色の石が世界に燦たる寶石に変ずることはないであろう。刺多いサボテンは、いかに養い育て、も立派な樹木に変化し得ない。これは即ち、教育によって、人間という寶石の本来の性質を変化させることは不可能であるが、しかもそれは驚ろくべき効果を持つものであるということである。この効力によって人間本来の隠れた徳性や、能力等を外部に発揚せしめることができるのである。』

## 品性の訓練

教育の主眼とするところは、品性の訓練である。この点においては、実例は訓話よりも効果的であり、子供の両親や教師や絶えず交わる友達等の生活と性格が、最も大切な要素である。

神の予言者等は、人類の大教育者である。そして彼等の教訓や、彼等の生涯についての物語は、子供達がそれを理解し得るようになるや否や、直ちに彼等の心に浸み込まれるべきである。特に大切なのは、最上の教師であるバハオラの言葉である。彼は将来の文化がその上に建設されるべき基礎的原則を示しておられる。彼は次の如く言われた。

『栄光の筆を通して啓示されたるものを汝等の子供等に教えよ。偉大と威力の天より下りしものによつて彼等を教育せよ。彼等に慈悲深き者の書簡を暗誦させ、マシユレゴウル・アヅカルの講堂にて最



も妙なる音調をもつてそれを吟ぜしめよ。』

## 芸術、科学、技術

芸術、科学、技術、その他有益な職業の教育は大切であり、必要であると考えられる。バハオラは次の如く言われた。

『知識は生物（人間）の羽翼の如く、また高きへ登るはしごの如きものである。知識を得ることは万人の義務である。しかし地上の人類を益するところは諸科学の知識を言うのであって、単に言葉で初まって、またそれで終る如き科学を意味するのではない。科学や芸術を身につけているものは、世界中に大なる権利を有するのである。実に人間の眞の宝庫はその知識にある。知識は名譽、繁栄、喜悅、愉快、幸福及び誇りの手段である。』——「タヂャルリヤトの書簡」

## 犯罪者の取扱

犯罪者を取扱う正しい方法について談話中、アブドル・バハは次の如く語られた。

『しかし、人びとがおよそ罪を犯すことのないように人びとを教育することが最も必要なことである。多くの人びとを教育し、もう罪を犯すまい、罪を犯すことなど到底できない、罪と言っただけで既に最大の懲罰であり、この上もない罵倒であり、苦しみであると思つて教育することは可能である。そこで、罰せられるような罪を犯すことはなくなるであらう。』

たとえば、ある人が他の人を抑圧し、危害を与え、虐待する場合、虐待された人が仕返しをする、これは復讐であり、非難すべきことである。もし、アムルの息子がザイドの息子を殺すとしてもザイドはアムルの息子を殺す権利はない。もし彼がアムルの息子を殺すならば、これは復讐である。そして、きわめて非難すべきことである。いな、むしろ彼としては悪に報いるに善をもつてし、赦すばかりでなく、できれば、加害者に対して奉仕しなければならぬ。こうした行為こそ人間にふさわしい行為である。と言うのは、復讐によって人間はいかなる利益が得られるであろうか。二つの行為は同じ行為である。一方が非難すべきものであるとするならば、双方とも非難すべきものである。ただ相違するのは、先に罪を犯したか、後に犯したか、だけである。

しかし、国家社会は防衛、自己防衛の権利をもつ。しかし、殺害者に対して憎悪の念も敵愾心も持たない。ただ、他の人びとの保護と安全のために彼を罰するのである。

そんなわけで、キリストが「なんじ右の頬を打たれば左の頬をも打たしめよ。」と言ったのは、人びとに人間は個人として復讐すべきではないことを教えるためであった。それは、狼が一群の小羊にとびかかり、それらを絶滅しようとする場合、それら狼が助長されるという意味ではない。断じてそうではない、もしもキリストが、狼が羊檻に入って小羊たちを絶滅しようとしていることを知っていたならば、かれもそれを防禦したであろうことは確かなことである。

要するに、国家社会の構成は正義に依存する。そこでキリストの寛恕という意味は、諸民族が襲来し、家を焼き、財産を掠奪し、妻子や親戚のものをおそい、名譽を侵害しても、こうした残酷な敵の前に屈服し、彼等に残酷と抑圧とをほしいままにさせておかなければならない、ということではない。断じてそうではない。キリストは二人の人間相互の間のことを言っているのである。すなわち、一人

の人が他におそいかかるとき、被害者は加害者を赦すべきである、と言っているのである。しかし、国家社会は人権を擁護しなければならない。

わたしはあとひと事言わなければならない——それは国が刑罰の法律の制定や刑罰の方法手段の立案定立に日夜専念しているということである。獄舎を建て、懲役人の鎖をつくり、追放流刑の場所を手配し、いろいろな苦役拷問を考え、こうした手段によって犯罪人を懲罰することを考える。ところが実際のところは、道徳の破壊と邪悪な性格とを生み出している。国はこれとは反対に、人間の教育の完成に全力をつくし、彼等が日に日に進歩発達し、科学や知識を増大し、徳を高め、悪徳を避けて善なる徳をつみ、犯罪が起らぬよう日夜努力すべきである。——「質疑応答集」二二一—二二六頁

## 新聞の勢力

知識を普及し、民衆を教育する手段として新聞の重要性、およびそれが正しい方向に向けられた時の開化力としての力をバハオラは十分認めておられる。彼は次の如く書いておられる。

『今日では、地上のあらゆる秘密は目前に展開され、すみやかに現われる新聞紙の各頁は、実に世界の鏡である。これ等は諸国民の百般の出来事を報じ、これを図示し説明し人の耳目に伝える。新聞紙は聴覚、視覚、言語を賦与された鏡の如く、それ等は実に驚くべき現象であり、偉大なものである。

しかし新聞の記者および編集者等は利己主義や貧慾の偏見から清められ、公正と正義をもって飾られねばならない。彼等は真の事実を知るために十分に事件の真相をきわめて事実をのせねばならぬ。

慮げられし者について新聞に発表されたことの大部分は真実性を欠いているのである。良い論説と誠

実は、地位と品位との高さにおいて、知識の東天から登る太陽の如きものである。』——「タラザト  
の書簡」

## 第十章 平和の道

今日、この僕は、確実に世界に新生命を与え、地上にあらゆるものを融合せしめんとして来た。その欲する処は実現し、地上もアプハ（最も栄光ある）の樂園となるを見るであらう。——バハオラ、  
「ラ―イスへの書簡」

### 闘争対協調

十九世紀には、科学者等は動植物界における生存競争の研究に多大の努力をほらい、かゝる下級自然界に適用される原則をもって、複雑な社会生活の問題解決の手引とする者が多かった。かくて彼等は、対抗闘争は生の必然事となし、強者が社会の弱者を殺戮することは種族改良のために正当であり、あるいはまた必要な方法であると考えに至った。しかるに、バハオラは我々に、もし我々が、進歩の段階を登ろうと欲するなら、動物界をかえりみる代りに前方を、そして上方を見つめ、動物ではなくて豫言者達を指導者としなければならぬと語られた。予言者等の教える融合、協調、憐み等の原則は、自己保存のために動物界を支配する原則とは正反対のものである。そしてこの両者は相互相いれぬものであるから、我々はそのいずれかを選ばねばならない。アブドル・バハは次の如く言われた。

『自然界における支配的特徴は、生存競争である——その結果は適者生存である。この適者生存の原

則はあらゆる困難事の根原である。それは人類間に戦争や、闘争や、憎悪や、怨恨等を惹起する。自然界には暴虐や、我慾、侵犯や、横柄や、他人の権利の侵害や、その他動物界の欠陥である非難すべき多くのものがある。それ故、かゝる自然界の要求が人の子の間に重要な役割をなす限りは、成功と繁栄は不可能である。自然は戦争を好む。自然は血に渴いている。自然は暴虐である。なぜなら自然は全能なる神を知らないからである。それ故これ等の残忍な性質も、動物界には自然なのである。それ故偉大な愛と慈悲を有する人類の主なる神は予言者等を遣わし、経典を啓示し、かくて神聖な教育によって人類を自然の墮落と愚昧の暗黒から救い、理想的徳性および精神的品性によって確証し、慈悲心の発生地となすようにした。

しかるにあゝ、この無知な偏見や、不自然な不和や、主義主張の対立等が依然として世界の諸国民の間に互に示され、一般的進歩の妨害をなしていることか。この遲滞は神聖な文明の原則が全く拋棄され予言者等の教えが忘却された事実から来るものである。』

## 最大平和

あらゆる時代において神の予言者はいつも「地上の平和と人間の間の善意」の時代の到来を予言した。すでに我々は、バハオラが最も熱烈な、そして確信ある言葉でこれ等の予言を確証し、その実現もまた近きにあることを宣言されたのを見た。アブドル・バハは次の如く言われた。

『この不思議な周期には、地球は変化し、人類は平和と美に装われるであろう。調和と誠実と融和は、闘争、闘争、殺戮に代り、各国民や民衆や種族や国家間には愛と友情が現われるであろう。協力と同

盟が樹立され、遂には、戦争は全く絶滅されるであらう。……世界的平和は地球の真中にそのテントを掲げ、幸せな生命の木は地球の東西に影を落すほど繁茂するであらう。狼と小羊、豹と仔山羊、獅子と子牛の如くである強者と弱者、富者と貧者、敵対する宗派や敵対する国家は、相互に、最も完成した愛と友情と正義と公正をもって行動するであらう。世界は、科学と、生物の秘密の現実の知識と、神の知識をもってみだされるであらう。」——「質疑応答集」

## 宗教的偏見

いかにして最大平和が樹立され得るかを明かに見るために、まず我々は過去における戦争の主要原因を検討し、これら各々に対してバハオラがいかに考えられたかを見よう。

戦争の最大原因の一つは、宗教的偏見であった。これに対してバハイの教えは、相異なる宗教宗派の人々の間の怨恨、闘争は、常に真の宗教のためでなく、否、むしろその欠乏のためであり、そしてまたこれが誤った偏見や模倣や誤説に代っているためであると明白に教えている。

パリにおける講演中の一つに、アブドル・バハは次の如く語られた。

「宗教は万人の心を融和し、戦争、争論を地上より消滅せしむべきものである。そして精神性に誕生を与え、あらゆる魂に光明と生命をもたらすべきである。もし宗教が憎悪や分立のもととなるならそんな宗教はない方がよい。そしてかゝる宗教から遠ざかることこそ、真の宗教的行爲とすべきであらう。治療の目的がなおすことであることは明白である。もし治療が病気を悪化させるのみなら、それは放置しておく方がよい。愛と融合の原因とならない宗教は宗教ではない。」

彼はさらに言われた。

『人類歴史の発端より今日に至るまで、世界の諸宗教は、相互にのしり合い、互に邪道であると非難し合つて来た。かたくなにお互を避け、憎悪し、怨恨をこゝとして来た。宗教的戦争の歴史を考へて見よ。最大の宗教戦争の一たる十字軍は、二百年の年月にわたつた。時に十字軍戦士が勝てば、回教徒等が殺戮され、略奪され、捕虜にされた。時に回教徒等が勝てば、反対に侵入者等が虐殺され滅ぼされた。

そして彼等は、欧州の宗教家が、彼等の後に荒廢の焼灰を残しつゝ、東方から徹退し、彼等自身の国家が動乱と激変の中にある事を見出すまで、交互に、時には猛烈に又時には弛緩しつゝ、戦い続けた。しかもこれは聖なる戦争の一つといわれたのである。

宗教戦争はこれまで多くあつた。九十万の新教徒殉教者等がキリスト教の新教と旧教との鬭争軋轢の記録である。その他、いかに多くの者等が牢獄で命を落した事よ。いかに無慈悲な待遇を捕虜等は受けた事よ。すべてが宗教の名によつて行われたのである。

キリスト教徒と、回教徒はユダヤ教徒を悪魔の徒、神の仇敵であると考えた。それ故彼等はユダヤ教徒等を呪咀し迫害した。無数のユダヤ教徒が殺戮され家を焼かれ、略奪され、子女等はつれ去られ捕虜にされた。ユダヤ教徒はまたキリスト教徒を不信心者となし、回教徒をモーゼの掟の仇敵であり破壊者であるとなした。それ故彼等は報復を願ひ、今日に至るまでなお、呪咀している。

パハオラの光明が東方から曙光を放つた時、彼は人類統合の約束を宣言した。彼は全人類に呼び掛けて言った。『汝等は総て一本の樹の果実なり。神の慈悲の樹と、悪魔の樹との二本の樹は存在せず。それ故我々は相互に最善の愛をもつて交わるべきである。いかなる人々をも悪魔の民と見てはならず、



万人を唯一の神の従僕従僕として認むべきである。もし誰か無知な者があればその者は補導訓練されねばならないということにすぎない。無知なものは教えられねばならぬ。子供のような者は、大人になるまで助けられねばならぬ。疾病のように道德的状态の悪しき者はその徳行が浄化されるまで治療されねばならぬ。病者は病氣だからと言って憎悪さるべきでなく、小児は小児だからといってすてられるべきでなく、無知な者は知識を欠くからと言って侮蔑みべつさるべきではない。彼等は愛をもって治療され、教育され、訓練され補助されねばならぬ。全人類が最も安全に、至福に神の慈悲の蔭に住み得るためには、あらゆることがなされねばならぬ。」

### 人種の並びに愛国的偏見

人類の一体性というバハイの教義は、戦争の他の原因、即ち人種的偏見を打破しようとするものである。ある人種は、自ら他に比して優秀なりと信じ、「適者生存」の原理により、自己の利益のために弱少人種を食い物にし、あるいは根絶する権利があると考えるものがある。世界歴史にある汚点の多くはこの原則の残忍な適用の実例である。バハイの見解によれば、すべての人種の民は神の眼に同等の価値があるものである。すべては、たゞ彼等の發展のための適当な教育が必要とされているだけで、彼等は驚ろくべき内在的能力を持っており、人類社会のすべての構成員の生活を貧困化する代りに豊かにし完成する役割を演ずる事ができる。アブドル・バハは次の如く言われた。

『人種的偏見についてであるが、それは一つの幻想であり、一つの単純な迷信である。なぜなら、神は我々すべてを一の種族として創造したからである。……また最初、諸国間には、区域境界というも

のがなく、いかなる土地もある種の民族に専属してはなかつた。神の眼には、人種間に何の差別もない。なぜ人間はかくの如き偏見を發明せねばならぬのだからか。いかにして我々はかくの如き幻想によつて起された戦争を支持し得ようか。神は、相互にほろぼし合うために人間を創られたのではない。すべての人種や、種族や、宗派や、階級は、みな等しく、彼等の天の父の恵沢にあづかるものである。

唯一の眞の差別は、神の掟に対する忠誠と従順の程度中にのみある。ある者は燃えさかるといふつゝの如くであり、また一方には人類の天上に輝やく星の如き者もある。

人類を愛する者等は、国籍、信条、顔色を問はず、これこそ優れた人間である。——「アブドル・バハの知恵」

人種的偏見と同様に有害なのは、政治的、あるいは愛國的偏見である。今や偏狹なる愛國主義は世界をその國とするさらに広大なる愛國主義に没入すべき時代となっている。バハオラは言われた。

「かつては『自國を愛することは神の信教の一部なり』と啓示されていたが、壮大の舌はその顕示の日において次の如く声明した。即ち『誇りは自國のみを愛する者にはなく、人類同胞を愛する者にはあり』と。彼はこれ等の高遠な言葉によつて、魂という鳥に新しい飛翔を与え、『啓示の書』より束縛と盲目的な模倣を抹殺した。』——「世界に関する書簡」

## 領土的野心

二国、あるいは二国以上の敵対国の切望する領地所有権の争奪から、多くの戦争が起つた。所有欲は個人間におけると同様に、国家間においても、重大な闘争の原因をなすものである。パハイの見解によれば、土地は決して個人にも、また個々の国家にも属するものでもなく、全体としての人類に属するものである。否むしろ、それは神のみに属し、万人はその借地人にすぎないのである。

ベンガジの戦に際して、アブドル・バハは次の如く言われた。

『ベンガジの戦報は予の心を悲しませる。予は今日なお世界に存在する人間の野蛮性を不思議に思う。いかにして人間は朝から夜になるまで戦い同僚の血を流したり、互に殺し合つたりなし得るのであるか。そして何のために。地上の一部分を獲得せんがために。動物すら戦うときには、その戦いの直接的な、かつよりもつともな原因をもっている。万物の長たる人間が、わずかな土地を所有せんために同僚を殺戮し、災厄をつくる程に情落する、即ち、最高の創造物が最下級の形の物質、即ち、土を獲得するために戦うとは、何んという恐ろしいことであろう。

土地は一民族に属するものではなく、すべての民族に属するものである。地球は人間の家庭でなくてその墓である。

勝利者がいかに偉大であっても、いかに多くの国々を隷属化し得ても、彼はその侵略したる国土の極くわずかな部分——墓を除く他はいかなる部分をも保持し得ないのである。

民衆の状態を改善するために、文明の繁殖のために、もしより広い土地が必要なら……たしかに必要なだけの領地は平和に得られるであろう。しかし戦争は人間の野心を満足さすためになされる。少数者の世俗的利得のために無数の家庭に恐るべき悲惨事がもたらされ、百千の男女の心を痛めた。……

予は諸君がみな心を愛と融合の上に集中されんことを訓示する。戦いの考えが起つたならより強力

い平和な考えによつてこれに対抗せよ。憎悪の心は愛のより有力な心によつて破壊せよ。世界の兵士等が殺すべく剣を抜いたら、神の兵士等は互に固く手を握れ。そうすれば人間のあらゆる野蛮性は、心の純潔と魂の誠実な者を通して働く神の慈悲によつて消滅するであろう。世界の平和を到達し得ざる理想と思つてはならない。神の神聖な仁愛には何の不可能なものもない。もし諸君が衷心より地上のあらゆる民族と親しむことを望むなら、諸君の思想は精神的にも實際的にも広く伝わるであろう。それは他の人々の欲する処となり、次第に強くなり、やがては万人の心に達するであろう。」

## 国際共通語

戦争の主要原因を一瞥し、そしていかにすればそれ等を避け得るかを見た我々は、今最大平和の獲得のためにバハオラが建設的に提議された処を検討して見よう。

その第一は世界的補助語の設定である。バハオラは「アグダスの書」や、多くの彼の書簡中にこれについて述べておられる。即ち「エシュラガトの書簡」中に次の如く述べられている。

『第六のエシュラグ（輝き）は人類間の融和と一致である。一致の光りによつて世界の各地は常に照らされる。それに至る最上の方法は互に文書や談話を理解することである。さきに我は、文書中において、現代の通用語の一つを選ぶか、あるいは新しい言語を創出するか、また同様に一つの共通文字を採用して、世界中の学校でこれを児童等に教え、世界を一国となし、一家となすよう正義院のメンバーに命じた。』

バハオラのこの提議が初めて世に出たころ、その実現に主要な役割を演ずべく運命づけられていたルドヴィグ・ザメンホフという男児がポーランドに生れた。そして幼い頃より国際共通語という理想がザメンホフの生涯の大きな目標となった。そして彼の献身的な努力の結果は、エスペラントとして知られる言語の発明と伝播となり、以来三十五年余の試練を経て、国際的交際の満足な媒介者として認められるに至った。この言語は英語、フランス語、ドイツ語等の国語習得に要する約二十分の一の短時間で熟達できるという特長を持っている。一九一二年二月アブドル・バハはパリにおけるエスペラント同好会の人々の宴会に臨んで次の如く語られた。

『今日ヨーロッパにおける軋轢の主要原因の一是国語の相違にある。我々は、この人はドイツ人だ、あの人はイタリヤ人だと言う。また我々はイギリス人に会い、さらにフランス人に会う。彼等はみな同じ人種に属しているが、しかも言語が彼等の間の最大の障壁となっている。もし補助的世界語が使用されれば彼等はみな一国民のように考えるであろう。』

聖なるバハオラは約四十年前も前にこの国際語について書かれた。彼は、国際語が用いられない限りは世界各地間の完全な融合は実現されないであろう、といわれた。なぜなら、誤解は人々相互の交際を妨げ、そしてこの誤解は補助的国際語によるほかに到底除去し得ないものだからである。

一般に東洋人の全体は西洋に起る諸事件について十分知らされず、西洋人はまた東洋人に同情を持つ事ができない。彼等の思想は手箱にひめられている——国際語のみが、これを開く合鍵であろう。我々がもし世界語を持つていれば、西洋の書籍は容易に世界語に翻訳され、東洋人はその内容を容易に知り得るのである。同様に、東洋の書籍も西洋人の便宜のために世界語に翻訳され得るのである。

東西融合への発達の最大の手段は共通語であろう。それは全世界を一家となし、そして人類発達のた

めの最大刺劇となるであろう。これは「人類の一体性」の旗を掲げるであろう。地球上を一つの世界共通国となすであろう。それは人の子の間の愛のもとをなすであろう。それはもろもろの人種間の良き交友の源泉となるであろう。

さて、ザメンホフ氏が 에스ペラント語を発明したことは、まことに神を讃うべきことである。これは国際的交際の方法としてのあらゆる可能性を具備している。我々はみなこのどうとい努力に対して彼に感謝すべきである。なぜなら、このようにして彼は人類同胞に立派に貢献したからである。 에스ペラント語使用者のたえない努力と自己犠牲によってこれは世界的のものとなるであろう。それ故我々は誰でも皆この言葉を学び、できる限りこれを広め、日毎にこれが一般から認められ、世界のすべての国や政府から受け入れられ、そしてあらゆる公立学校において学課の一つとなるようつとめねばならぬ。予は 에스ペラント語が未来におけるすべての国際会議の用語となり、万民がその自国語と、この国際語の二語のみを会得すればよい、ということになるように望む。そこで完全な融合が世界万民の間に樹立されるであろう。今日種々な国民と交際することがいかに困難であるかを思い見よ。もし人が五十の国語を学ぶとしても尚その国語に通ぜざる国を旅するであろう。それ故予は諸君が全力をつくしてこの 에스ペラント語が広く世に行われるようになるために努力されんことを切望する。』

エスペラントに対するこれ等の引喩は明確であり、又奨励的であるけれども、正義院がバハオラの教えに従いこの問題について決断するまでは、バハイ信教は 에스ペラントもまた、他の既存の、あるいは、人造語をもとり決めないであろうということは事実である。

アブドル・バハは「エスペラント語に注がれた愛と努力は失われることはないが、一個人による

国際語創作は不可能である——「ロンドンでのアブドル・バハの講話」——と言っておられる。それが既にあるものであろうが、あるいは、創られる言語であろうが、どの言語を採用するかは、世界の全ての民族が行うべき決定である。

(注) ザメンホフ氏の娘・リディアさんがバハイとして活躍されていることは興味深いことであろう。

## 国際連盟

バハオラがしばしば唱導されたもう一つの提案は、国際平和維持のために世界国際連盟が設立されねばならないということであった。バハオラがまだアツカ注の牢獄に囚人として捕われの身であった頃書かれたヴィクトリア女王への書簡中に次のようにある。

「お、地上の主権者等よ。汝等の間の軋轢あつちを調停せよ。さればもはや大勢の軍兵も軍備も要せず、ただ汝等の領土と人民を保護するのみ……。お、地上の主権者等のつどいよ、同盟せよ、それにより汝等の間の不和の嵐はおさまり、汝等の周囲の民は安息を得ん。……汝等の中の一人が起って他を攻撃したら、汝等こそぞって彼に対して起て。なぜなら、これこそ明白に正義の表明であるからである。」

一八七五年にアブドル・バハは世界国際連盟設立の予想をなされたが、それはこのような連盟を設立すべく熱心な試注が現在なされているのを考える時、とくに興味あるものである。彼は次の如く書いておられる。

「まことに、真の文明がそのはたじるしを世界の中心に掲げる日は、高い理想を持つある高貴な主権

者等、即ち、献身と決断の輝かしい模範者達が、全人類の福利のために、決然として明確な展望をもつて立ち出で世界平和の問題について会議をもつ時であろう。彼らは平和について討議をし、持ち得るすべての力を用いて、世界の諸国家の連合を樹立する。そして回避すべからざる条件の上に立ち、相互の確信たる条約を締結しなければならない。全人類がその代表等を通して評議し、真実に世界平和のための条約であり、地上のすべての民族によって神聖視されるこの条約を確証するように招かれたる時、この大条約を強調持続することが、世界同盟国の義務であろう。

かくの如き世界的条約において、各国の境界が決定され、政府間関係についての原則が確立されなければならぬ。そして、すべての国際的条約や義務事項が確立されなければならない。各国の軍備の限度もまたかくの如く決定的に評定されるべきである。なぜなら、一国の軍備の増大は他国の恐慌のもととなるからである。この有力な同盟の基礎は、後に至って一国がその条約のどの一つを破つても、世界の他のすべての国は一斉に起つてこれを屈服する程、確固としたものでなければならぬ。しかり、全人類はその力を一つにしてその政府を征服するであろう。

もしこの病める世界に対して、この大療法が適用されたなら、世界は確実に病より回復し、永遠に安全な状態を保つことができるであろう。——「神聖な文明の秘密」

世界平和の確立にとって不可欠であるとバハオラによって言われている制度に比較した時、バハイの見解では、<sup>注三</sup>国際連盟には種々の問題点がある。

かくして、一九一九年十二月十七日——アブドル・バハは次のように語られた。



## 国際仲裁

「現在世界平和は非常に重要な問題であるが、良心の融合は、この問題の基礎を保障し、その設立を確固としその機構を強大にするために必要欠くことのできないものである。……国際連盟は存在するに到つたが、それは全世界的平和を確立することはできない。しかし、聖なるバハオラの記述になる最高裁判所が最大の強大と威力をもつて、この聖事を果すであろう。」

〔注一〕バハオラがアッカの牢獄におられたのは一八六八年から一八七〇年にかけてである。

〔注二〕著者はこの文を一九一九年から一九二〇年の間に書いた。

〔注三〕国際連合についても同じようなことが言えよう。

バハオラはまた国際仲裁裁判所の設立をとなえられた。かくて、国際間の軋轢は戦争の手段に訴える代りに、正義と道理に従つて調停されるようになる。

一九二一年の八月、アブドル・バハは国際仲裁に関するモホンク会議の書記への書簡中に次の如く言われた。

『約五十年前、バハオラは「アグダスの書」中に記して民衆に世界的平和を樹立すべく命じ、万国を国際仲裁の聖宴に召集された。かくて、すべての境界、国家的名譽、並びに財産、および諸国家間の死活的利害に関する問題が正義の仲裁裁判所によつて調定され、又一國といえどもかく到達した決定を守る事をあえて拒否しないであろう。もし二国の間にかなる紛争でも生じた場合は、この国際裁判所によつて審判さるべきで、あたかも二人の個人間に裁判官が与える判決の如く仲裁され、決定さ

れねばならぬ。もしいつでも、この決定を破る国があったら、他のすべての国々はこの不韙<sup>ふび</sup>を屈服すべく起たねばならぬ。』

また一九一一年のパリにおける講演中に次の如く言われた。

『あらゆる国家及び政府より選ばれた代表者等によって組織される最高裁判所があらゆる国々の政府と民衆とによって設立されねばならぬ。そしてこの大會議の委員等は一致協力すべきである。すべての國際的性質をおびた紛争は皆この法廷に陳述<sup>ちんじゆ</sup>さるべきであつて、戦争の原因となる一切の事件を仲裁調定するのがその本務である。この裁判所の使命は戦争を防止することにある。』

國際連盟設立に先だつ二十五年間、常設仲裁裁判所がヘーグに設けられ（一九〇〇年）、多数の仲裁条約が調印されたが、これ等の中の多くは、バハオラの遠大な提案には、はるかに及ばないものであつた。二大強國間のあらゆる紛争事件に適用する仲裁条約を結ぶことはなかつた。各国の死活的利害、名譽および独立等に関する対決は意識的に除外されていた。その上、諸國家が、参加した条約箇条を遵守するであろう効果的な保証に欠けていた。しかるに、バハイの提案には、國境の問題、國家的名譽の問題、死活的利害の問題等は明らかに包括されており、そのような条約には、國際連盟による最上の保証がある。これ等の提案が完全に実行される時にのみ國際的仲裁は充分な眞価を發揮し、戦争の災禍<sup>さいか</sup>は遂にこの地上より姿を消すであらう。

## 軍備制限

アブドル・バハは次の如く言われた。

『世界のすべての政府は全体的条約によって同時に軍備を廃止すべきである。一国がこれを廃棄しても他国がそうすることを拒むなら何の効果もない。世界各国は互にこの最も重大な問題について一致し、等しく人類殺傷の凶器を抛棄すべきである。一国がその陸海軍の予算を増加する限り、他の国々も余儀なくその實際の、並びに仮想的の利益のためにその狂気な競争を強要されるであろう。』——  
一九一四年、五月十一日——十四日のミルザ・アーマド・ソーラプの日記

## 無抵抗

バハイは、一つの宗教体として、バハオラの明白な命令によって、自己の利益のために、全く自衛のためすらも完全に武力を抛棄する。イランにおいては、幾万人のバビと、バハイがその信仰のために殺された。その大業の初期にはバビ等はしばしば剣をもって勇敢に自らとその家族の身をまもった。しかしバハオラはそれを禁じられた。アブドル・バハは次の如く書いておられる。

『バハオラが出現された時、彼はかくの如き手段によって真理を公布することは、たとえ自衛の目的においてすらも許されざるものであることを宣言された。彼は剣の支配を廃し聖なる戦争の掟を廃止された。いわく、『もし汝等が殺されるならば、これは他人を殺すにまされることなり。主の大事が世にひろめられるは信者等の堅固と確信を通じてなされるべきである。信者達は、果敢、大胆に、絶

対的超越をもって神の御言葉を賞賛すべく起ち、現世より眼を離して、主のためにまた主の力によって、奉仕の生活に入る時、真理の言葉に勝利を得しめる原因となるであろう。これ等の幸な魂は、その生血をもって大業の真理を証言し、また彼等の信仰のまこと、その献身と変わりない心によってそれを証明する。主はその大業をひろめ、剛情者を破り得る。我々は神の他に保護者を求めず、生命を投げうって敵に当り、殉教をむかえる。』——この本のために執筆されたアブドル・バハの手記

バハオラはかつてその大業の迫害者の一人に次の如く書き送られた。

『神は恩寵深きかな。この民は世界を改造するために準備している故に破壊のための武器を要せず、その軍隊は善行の軍隊であり、その武器は即ち善事の武器である。その将等は即ち畏敬である。公正なる者こそ幸なれ。

神の正道により、これ等の者はその忍耐、平静、諦念、足るを知ることによって、正義の顕現となった。その柔順は他を殺すよりも自己が殺されるといふ点にまで達し、そしてこれ等地上の虐げられた者等は、世界の歴史が未だ記録しなかつたようなものを、諸国民が未だかつて見なかつたような苦難にもかかわらず、甘受したのである。

いかにして彼等は自己を護ろうとせずかくの如き恐るべき試煉にたえ得たのであろうか。彼等の諦念や平静の原因は何であつたか。その真の原因は、栄光の筆が絶えず賦課せんと欲した禁制と、我が全人類の主たる神の強大さと威力とによつて統治権を受けていることにある。』——「狼の子への書簡」シヨウギ・エフエンディ英訳七四―七五頁

バハオラの無抵抗主義論の正確さはすでに結果によって証明された。なぜならイランにおいて一人の信者が殉教する毎に、バハイ信教はその宗門に百人の新しい信者を得た。そしてこれ等の殉教者等が歡喜勇躍して主なる神の足下に生命の冠を投げたのは、まことに彼等が死をも恐れない新しい生命、無限の富豊と愉悅のある生命を発見したことを証明するものである。そしてこれに比すれば地上の快樂は埃に等しく、殘忍極まる肉体的苛責も空気の如く取るにも足らぬ軽いものに過ぎなかったことの証拠である。

## 正道の戦争

バハオラは、キリストの如く、信徒等に個人としてまたは宗教団体として、その敵に対して無抵抗と寛恕の態度をとるべく勧告するが、しかし不義暴虐を阻止するのは社会の義務であると教えておられる。もし個人が迫害損傷されたなら、それはゆるして報復をはからないのが正しい。しかし社会が、その内部において略奪殺戮の行われるに委すことは誤っている。悪業を抑止し、犯罪者を罰するのは良き政府の義務である。これはまた社会国家においても同様である。もし一国が他の国を迫害するか侮辱するかしたら、かくの如き圧迫を防止するために、他のすべての国々は協力すべきであってそれは義務である。アブドル・バハは次の如く書いておられる。

『ある時には好戦的で、野蛮な民族が猛烈に国家を攻撃し、その国家の民衆を大仕掛に虐殺せんとすることが起り得る。かかる場合は防禦が必要である。』

ある国が他の国を攻撃することがあっても、その他の諸国は中立傍觀し、直接自国と利害關係がな

い限り、その事件に対して責任を負わないのが人類の今に至るならわしであった。いかに弱少で望みがなくても、攻撃される国に防禦の重荷の全部が委ねられていた。バハオラの教えはかゝる位置を顛倒するもので、防禦の責任は単に攻められる国にあるのみでなく、個別的にまた団体的にすべての他の諸国にあるとされる。人類全体が一つの社会であるから、どの一国に対する攻撃もその社会を攻撃することであつて、それは社会によつて処置さるべきものである。もしこの主義が一般に認められ、実行されれば、いかなる国が他国侵略の企図を持つても、あらかじめ、被侵略国のみならず世界各国の反抗を受けねばならぬことを前もって知るであらう。これを知るのみでも、最も大胆で、好戦的な国をも抑制するに足るであらう。平和を愛好する諸国家間に、充分有力な連盟が成立されれば戦争は過去のものとなるであらう。國際的無秩序の旧状態から國際協同の新状態への過渡期においては、なお侵略的戦争が行われ得る。そしてかかる場合には、兵力その他の高圧的行動は、國際的正義、融合、平和のために絶対的義務であり得よう。この点に關してアブドル・バハは次の如く書いておられる。

『征服は賞讃に値することがある。戦争は平和の強力な礎となる時もあれば、破壊が再建の手段となる時もある。例えば、もし、氣高い領主が、暴徒や侵略者達の攻撃を阻止するために自分の軍隊を結集するならば、あるいは戦争に繰り出し、分割された国家と民族を統合させるために奮闘するならば、要するに、もし、彼が正しい目的のために戦争を行うならば、この激怒の如く見えるものは慈悲そのものであり、外見上暴政に見えるこれは、正義の実体そのものであり、この戦争は平和のための柱石なのである。今日において、偉大な君主達に相應しい任務は、世界平和の建設である。何故ならこの中にこそ全人類の自由があるからである。』——「神聖な文明の秘密」

## 東西の融合

世界平和の招来に資するもう一つの要素は東西両洋の連帯にある。最大平和は単なる敵対行為の停止ではなく、従来分散していた地球上の諸民族を豊かにする結合と和解的協力にある。かくて人類はより多くの貴重な果実を結ぶであろう。アブドル・バハはパリにおける講演中に次の如く述べられた。

『過去においても現在の如く、精神的真理の太陽は常に東洋の東天より登った。モーゼは東洋に現われて民衆を指導し教訓した。キリストもまた東方の東天に起った。モハメットも東洋の民につかわされた。バブも東方イランの地に現われた。バハオラもまた東洋に生活し、教えを伝えた。偉大な精神的教師等はみな東洋に出たのである。』

しかしキリストという太陽は東洋に曙光を放ったのだが、その光輝は西洋において明かに輝きその栄光の光彩はそこにおいて一層歴然とした。彼の教えの神聖なる光明はより偉大な力をもって西方の世界に輝やき、その生誕の地におけるよりもより速かに進展をなしている。

現在東洋は物質的進歩を必要とし、西洋は精神的理想を必要としている。西洋は東方に光明を求めその代りに科学的知識を与えたらよいであろう。こうした進物の交換がなくてはならぬ。東西両洋は共に互に欠乏するものを与うべく融合せねばならぬ。この融合によって精神的なものが物質的なものに表現され、実現され、かくて真の文明がもたらされるであろう。かくの如く相互に、相受けることによって偉大な調和が行われ、万民は合同し偉大な完成の状態に到達するであろう。そこには確固たる結合がもたらされ、この世界は神の属性を反射する輝きに満ちた鏡となるであろう。

東洋人および西洋人として我々すべては日夜全心全魂を挙げてこの高貴な理想を実現し、地球上の

あらゆる国の合同を固めることに努力せねばならぬ。かくてすべての心は新鮮にされすべての眼は開かれ、最もすばらしい力が与えられ、人類の幸福が保証されるであろう。……これは、全人類が栄光の国における合同の天幕の下に一緒に集る時にこの地上に来るべき樂園であろう。」——「アブドル・バハの知恵」一七頁

⊕ 又第九章中の「犯罪者の取扱い」部を見よ。



## 第十一章 諸々の掟と教え

いついかなる時代にもいかなる宗教制においても、神のすべての掟は時代の要求にしたがって変化する。改められることを知れ。たゞ泉の如く常にこんくとして決して変ることなき愛の掟は例外である。

——バハオラ

### 僧院生活

バハオラは、モハメットが説いたと同様、その信徒等が出家遁世の生活に入ることを禁じておられる。ナポレオン三世への書簡中に次の如く言われている。

『お、僧侶等の集合よ。汝等独房僧院に身を隠すなかれ。むしろ我が命に従ってそれをすて、汝自身と人類の魂を利することに従事せよ。』

我、汝等に不貞を禁じたのであり、貞節を示すものを禁じたのではないのであるから、汝等婚姻生活に入り、後継ぎを得よ。汝等はすでに自己の定めた規準をたどり、主の規準を放棄した。汝等主を恐れ、愚かな者となるな。人間なくして誰か我が国土に我が名をあげ、いかにして我が性質と属性が示さるべきか。熟考せよ。そして被いに包まれ熟睡の中にある者となるな。結婚しなかつたキリスト

は住む処もなく、また枕すべき場所もなかったのだが、それはみな反逆の徒のいたすところであった。彼の魂の神聖は、汝等が知り空想するようなものではなく、むしろ我が持つ処のものにあり。されば汝等世上に住む万人の憶測を超越する彼の地位を理解できるように質問せよ。知るものに幸あれ。』

キリストが既婚者をその高弟として選び、彼自らその高弟等が世人と親密に交際し進んで恩恵をほどこしたことを見れば、後世のキリスト教派が隠遁生活と僧侶の独身生活を強制化したことは奇異とすべきではなからうか。

モハメッドのコーラン中に次のような言葉がある。

『我はマリアの子イエスに福音を与え、この信徒等の心に親切と憐みとをそゞぐ。しかし隠遁生活は彼等自身で案出したものである。たゞ神の意にかなわんと欲することを我は彼等に命じたが彼等は、これを、その通りには、守らなかった。』——コーラン 第五十七章 二七節

昔の場合の僧院生活のためには何らかの口実があつたかも知れないが、バハオラはもはやそんな口実は通用し得ないことを宣言されている。また実際、多数の最も敬虔な神を畏敬する人々が同胞との交際から離れ、人の親たる義務と責任から逃れるなら、人類の精神的貧窮をもたらしことが明白なように思われる。

## 結 婚

バハイの教えは一夫一婦制を規定し、バハオラは婚姻はその当事者双方並びにその両親の同意を条

件として成立すべきものとされている。即ち「アゲダスの書」中に次の如く述べておられる。

『まことに、バヤンの書（バブの啓示）中には、婚姻は両者花嫁と花婿の同意によってのみ成立することが述べられてある。我々は愛と友情と人々の融和をもたらそうと希願する故に、我々は両親の同意をもその条件とする。かくてうらみと悪感情は除かれるであろう。』

この点に関してアブドル・バハはある質問者に対して次の如く書かれた。

『婚姻問題については、神の掟によれば、あなたがまず一人を選び、つぎに父母の同意を得るべきである。あなたが選択する前に、彼等は干渉する権利はない。』

バハオラのこの注意によって、キリスト教国やイスラム教国に一般にある婚姻による親子親戚間の面白からざる関係というのは、ほとんどバハイの間には見られず、離婚もまたはなはだまれなことをアブドル・バハは述べておられる。彼は婚姻について次の如く書いておられる。

『バハイの婚約は両者の完全な同意一致による。彼等は最上の注意を払って、相互の性格を知らねばならぬ。相互の固い約束は永遠の結合となり、その目的は親和と、交友と、一致と、永遠の生命への到達でなければならぬ。』

花婿はその付添人や少数の他の人々の前で『まことに、我々は神の意志に満足する』と言い、花嫁はまた『まことに、我々は神の願い給うところに満足する』とこれに附加しなければならぬ。

バハイの婚姻は、男女が精神的にも肉体的にも一致し、神の諸々の世界において永遠の一致を得、相互の精神生活の改良をすべきものであることを意味する。これがバハイの婚姻である。』

バハイの結婚の儀式は非常に簡潔である。新郎、新婦の行うべき只一つの前で、各々が「我々は皆、神の御意に従いまつる」と述べることである。

## 離 婚

結婚と同様、離婚に関しても、豫言者の教える処は時代の状態に従って異っている。離婚に関してアブドル・バハは次の如く教えておられる。

『バハイの友は、相互の嫌悪により分れる余儀ない事情が起らないかぎり決して離婚すべきものではない。もしかゝる場合になつたら二人は精神行政会の承認の下に別居を決めることができる。その場合は彼等は満一年氣長く待たねばならない。もしこの間に調和が再び得られなかつたら彼等の離婚は實現され得るのである。……神の国の基礎は、調和と、愛と、統一と、親族関係と、融合にあり、決して軋轢あやふし、特に夫婦間の軋轢にはないのである。もし二人のうち一方が離婚の原因となるなら、その者は必ず窮境におち、恐るべき災禍わざかにあい深く後悔することであらう。』——「アメリカのバハイへの書簡」

離婚に關しても勿論、他のこと同様、バハイはバハイの教えのみならず、そのバハイが居住する国の法律にも従うべきである。

## バ ハ イ 曆

異つた民族間や異つた時代に、時を計算し時日を定むる方法として多くの異なる方法が用いられてい

る。そうして数種の暦が今日もなお行われている。たとえば西欧におけるグレゴリー暦、東欧諸国のジュリアン暦、ユダヤ人の間のヘブライ暦、および回教徒間の回教暦等である。

バブは新暦法を制定することによって彼が世に先駆者として伝えられた宗教制の重要なことを顕著に表明された。この暦においてはグレゴリー暦におけると同様太陰月が廃されて太陽年が採用されている。

バハイの一年は毎月十九日の十九ヶ月（即ち三百六十一日）で、この暦を太陽年に合致せしめるために、第十八と第十九の月の間に「閏日」を（平年は四日、閏年は五日）入れる。バブは月々を神の屬性によって命名した。バハイの新年は、古代イランの新年同様、天文学的に定められている。それは三月の春分（三月二十一日）に始まり、バハイ紀元はバブの宣言の年（即ち西紀一八四四年・ヘヂュラト紀元一二六〇年）に始まる。

近い将来において世界のすべての人々が共同の暦を用いることが必要となるであろう。

そこで、この新しい世界統合の時代には、種々な妨げや異議があつて、世界の全民衆に受け入れられない旧来の種々な暦とは全く別な新しい暦が用いられるべきであろう。そしてバブが提出されたこの暦の簡易便利なるに優るものは容易に見出せないであろう。

バハイの暦の月は次の如くである。

月	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
アラビヤ名	バハ	ジャラル	ジャマル	アザマト	ヌール	ラーマト	カレマト	カマル	アスマー	エツザト
訳名	光輝	栄光	美	壮大	光	慈悲	言葉	完全	御名	強大
朔日	三月二十一日	四月九日	四月二十八日	五月十七日	六月五日	六月二十四日	七月十三日	八月一日	八月二十日	九月八日
月	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	
アラビヤ名	マシイヤト	エールム	ゴードラト	ゴウル	マサーエル	シャラフ	ソルタン	モールク	閏日二月二十六日より三月一日中	アラ
訳名	御心	英知	威力	發言	探究	榮譽	主權	支配	高尚	
朔日	九月二十七日	十月十六日	十一月四日	十一月二十三	十二月十二日	十二月三十一日	一月十九日	二月七日	三月一日	

### 精神行政会

アブドル・バハは、彼の地上の使命を果す以前にバハオラの文書の中に確立されている行政秩序の発展のための基盤を提示した。精神行政会という制度に帰せらるべき高度の重要性を示すため、アブドル・バハは、彼自身がその原文を校閲し訂正したのであっても、その翻訳が出版される前にカイロの精神行政会によって認可されなければならないとある書簡の中で宣言された。

精神行政会とは、各地方のバハイ共同体によって毎年選出される九人の人からなる共同体を意味するものであり、それはその共同体の代表として相互活動についてあらゆる問題に対して決定権を与えられている。この名称は一時的なものである。なぜなら将来には「精神行政会」は「正義院」と言われるものであるからである。

教会の組織と異りこれらバハイの機関は、教會的制度というよりむしろ社会的なものである。即ち、彼等は民事裁判所には提示しないように勧告されている。バハイ間に起る諸問題や難事に協議の掟を適用し、かくして共同体全体の正義と統一を増進するよう努めるのである。

精神行政会は、決して僧侶や牧師に当るものではなく、それは教えを支持奨励すること、実際の奉仕を刺戟すること、集会を催すこと、統一を維持すること、バハイの財産を共同体のために信託保管すること、又、公的や他のバハイ共同体との関係において共同体を代表するなどの責務があるのである。

地方又全国精神行政会の性質は、最後の章でアブドル・バハの「遺訓」を取扱っている部分にもっとくわしく記述してあるが、その一般的機能は、シヨールギ・エフェンディによって次の如く定義された。

布教の問題、その方向、その方法や手段、その拡張、その強化等は、それ等が大業のために重要不可欠のものであつても、決してこれ等行政会の全注意を受けるべき唯一の問題を構成しているわけではない。バハオラやアブドル・バハの諸書簡を注意深く研究すれば、大業の福利にとって同じ様に重要な他の業務が各地方におけるバハイの友によって選出された代表者達に果せられていることが理解できるであろう。彼等は注意深く慎重で、いつも大業の聖堂を邪まなる者の投げ矢や敵の猛襲から守

らなければならぬ。

彼等はバハイの友の間の親睦や和合を増進し、各人の心から不信、冷淡、疎隔等のあらゆる残跡をとり去るよう努力し、その代りに大業への奉仕のために活動的で心からの協調を確保しなければならぬ。

彼等は常に色、階級、宗教等に關係なく貧者、病人、不具者、孤児、未亡人等に助けの手をのべ最善をつくさなければならぬ。

彼等は彼等のでき得るあらゆる手段をもって青年の精神的または物質的啓蒙をし、また子供の教育のための方法に最善をつくさなければならぬ。可能なきにはいつでも、バハイの教育機関を設立し、そしてその教育機関の組織を監督し、それらの進歩發展のため最善の手段をつくさなければならぬ。

彼等はバハイの友のため規則的な集會と記念會以外に、さらに人類の社会的、知的、精神的利益に供し、またその振興を目的とする特殊な集會の用意をしなければならぬ。

彼等は大業が未だその幼児期にある今日において、あらゆるバハイの出版物や翻訳を監督し、全般においてすべてのバハイ文献の正統で正確な表示やそれらの一般大衆への配布を留意しなければならぬ。

バハイの制度に特有の諸可能性は、近代文明が精神力の欠乏によりいかにすみやかに崩壊しつつ、あるかを我々が悟る時にのみ評価され得るものである。又この精神力のみが指導者達に責任や謙遜（ひんげん）という必要な態度や社会の個々の構成員に欠くことのできない誠実さをもたらし得るのである。



「バハイ祝祭、記念日、断食」

- バブの誕生 一八一九年十月二十日。
- バブの宣言 一八四四年五月二十三日。
- バブの殉教 一八五〇年七月九日。
- バハオラの誕生 一八一七年十一月十二日。
- レズワンの祝祭（バハオラの宣言） 一八六三年四月二十一日—五月二日。
- バハオラの昇天 一八九二年五月二十九日。
- 聖約の日 十一月二十六日。
- アブドル・バハの誕生 一八四四年五月二十三日。
- アブドル・バハの昇天 一九二二年十一月二十八日。
- 断食の期間 三月二日より始まる十九日間。
- ノウ・ルーズの祝祭（バハイ元旦） 三月二十一日。

祝 祭

バハイ信教の喜びの精神は一年を通じて行われる種々な祝祭日に現わされる。

一九二二年にエジプトのアレクサンドリヤでのノウ・ルーズの祝祭会についての講演で、アブドル・バハは次の如く言われた。

『すべての周期や宗教制においては、神の神聖な掟により聖なる祝祭があり、安息日があり、休日がある。』

ある。その日には農工商等すべての職業は休業さるべきである。

すべての人々が一緒に喜び、一般的な集会を催し、一つのものゝ如くならねばならぬ。かくて国家的統一、一致調和が万人の眼に示されるであらう。

これは聖なる日であるから決してなわざりに付せられたり、単なる歓楽の追求に使われてしまつてはならない。こういう期日の中に民衆の永久の福利のために種々な機関が設けらるべきである。……現在民衆指導に優る効果はない。神を愛する者はかくの如き日に、単にバハイのみならず、全人類に及ぶ確実な博愛と理想の証拠を残さねばならぬ。この驚くべき宗教制における博愛の事業は神の慈悲の現れである故に、例外なく全同胞のためのものである。そこで、予の希望は、神を愛する者等が各々全人類のための神の慈悲の如くなることである。』

ノウ・ルーズ（新年）と、レヅワンの祝祭、バブ及びバハオラの誕生日、バブの宣言の記念日（それはまたアブドル・バハの誕生日でもある）は、共にバハイにとつては一年中の喜びの日である。イランにおいてはこの日の祝いはピクニックやにぎやかな集りをしたり、音楽や、詩や、聖なる書簡の朗吟、その他適當な短い演説等が参会者等によつて行われる。八月と九月の間にある閏日（即ち二月二十六日から三月一日まで）は特に友人等の歓待や、贈答や、病貧者への施興等に用いられる。バブの殉教日や、バハオラおよびアブドル・バハの逝去の記念日は、適當な集會や、講演や、祈りの書簡の朗吟等によつて厳肅に祝われる。

## 断 食

閏日の歎待に引続く第十九月日は断食の月である。その十九日間は日出から日没まで飲食を絶する断食が行われる。そして断食の月は春分の日に終るので、断食は常に同一の季節に際会する。即ち北半球の春で、南半球の秋である。種々困難を生じ易い酷暑や嚴寒を避けている。その上、この季節には地球の人類が生存し得る地帯の日出から日没までの時間がほとんど同一である。即ちだいたい午前六時から午後六時までである。小兒や、病人や、旅行者や、あるいは老衰者や、虚弱の者（妊婦や乳児を持っている婦人も含む）にはこの断食の義務がない。

バハイの教えが命ずる如き定期的断食は身体の衛生手段として有益なことを示す多くの証拠がある。しかしバハイの断食の実体は物質的食物の消費云々にあるのではなくて、我々の精神的食物である神を祝うことにあるように、バハイの断食の実体は、たとえそれが身体の浄化を助けるとしても、物質的食物を断つことだけにあるのではなくて、それ以上肉体的欲望を断ち、神の他の一切のものから断絶することにある。

アブドル・バハは次の如く言われた。

『断食は一つの象徴である。断食は欲情を断つことを意味する。物質的断食はこの禁欲の象徴であり、これを思い出させる手段である。これはあたかも、食欲を断つた人が自我欲や情欲から離れると同様のものである。しかし単に食物を控えることは精神上に何の効果をももたらさない。それは単に象徴であり、思い出す手段に過ぎない。さもなければ何等重要な意味を持つものではない。この目的のためにする断食は全くの断食を意味しない。食物についての玉条は過不足なきことである。中庸が必要である。インドに極端な絶食をする一派の宗旨があつて、次第に食物を節し、遂にはほとんど何物をも食せざるに至るものがある。しかし彼等の智力は衰弱する。もし飲食の欠乏から衰弱するなら、そ

## 集 会

の人は心身を献げて神に奉仕することには適しない。その人の眼は明らかにものを見ることができないからである。』——E・S・スチーヴンズ嬢によって「フォートナイトリ・レヴェー」一九一一年六月に、引用されたもの。

アブドルエバハは、合同の礼拝や教えの発表および研究や運動発展に対する協議等のために信者等が定期に集会することを重要なものとしている。その書簡の一つに次の如く述べておられる。

『神の願い給うところにより、神を愛する者および慈悲深き者の侍女等の中に日毎に一致と調和が増進していくであろう。これが実現されるまでは、何事もいかなる手段をもってしても進行しないであろう。そしてあらゆるものゝ一致と調和への最大の方法は精神的の集会である。これは極めて重要なもので磁石の如く神の確証をひきつけるものである。』

バハイの精神的集会においては争論および政治並びに俗事に関する議論は避けられねばならぬ。信者等の唯一の目的は、神の真理を教え、かつ学ぶこと、神の愛をもって見たされた心を抱くこと、神の意志により完全に従うこと、および神の国の到来を促進せしめることにある。一九一二年ニユー・ヨークにおいてなされたアブドル・バハの演説中にいわく、

『バハイの集会は最上の集合の集会でなければならぬ。それは最上の集合の光によって照されねばならぬ。人々の心は明鏡の如く、そこに真理の太陽の光が示されるべきである。各人の心は電信局の

如くでなければならぬ。即ちその電線の一端は魂中こんちゆうにあり、他端は最上の集合の中にある。そして通信がその間に交換されるのである。かくてアプハの国より靈感がくだり、あらゆる討議に調和が君臨しなければならぬ。……諸君の間に和合、一致、愛、が普及すればするほど、神の確証は諸君を助け、祝福された美なるバハオラの援助もまた諸君を鼓舞するであろう。」

彼はその書簡の一つに次の如く言われた。

『これ等の集會中は外部に関する談話は全く禁止されねばならぬ。そして集會者等はたゞ、詩句を吟じ經典を読み神の大業に関する事、たとえば証據の解釈や、明確な証言の提示や、創造物の最愛の者の証跡の探索等のみ専心すべきである。この集會に參會する人々は、まず身なりを清潔にし、アプハの國に向い、しかる後に温順、謙遜の態度をもつて會場に入るべきである。そして聖なる書簡を讀む間は靜肅にしていなければならぬ。もし発言したいと欲するなら、參會者の満足と許容とを得て懇懇に能弁流暢になすべきである。』

## フイースト

11 章  
第 11 章  
アブドル・バハの昇天以來バハイ行政秩序の發展にともなつて、各バハイ月の最初の日に舉行されるフイーストは、それが合同の祈りや經典の朗誦のためのみならずすべてのバハイ業務に関する一般的協議のための機會であるので、非常に特別な重要性を引受けるようになった。この祝祭会は精神行政會がその報告を共同體に対して行い、そして計画に関する討議や奉仕のための新しいより良い方法

に関する提案を出さしめるためのものである。

### マシユレゴウル・アズカル（礼拝堂）

バハオラは信徒等の手によってあらゆる国あらゆる都市に礼拝堂が建立さるべきことを遺命いみづめされている。彼はこれを名づけてマシユレゴウル・アズカル即ち「神の讚美の發生地」と言う。このマシユレゴウル・アズカルは九面にして一円蓋たにおゝわれ設計技術共に善美をつくした建築物たるべきである。それは泉水や樹木や草花で飾られた大庭園の中に建てらるべく、教育、慈善、社会的諸事業のために設けられた附属建築物によって囲まれ、堂内における神の礼拝は、常に自然と芸術の美に対する敬虔な愉樂うれと密接に関連していなければならない。そうして社会状態の改善に対する實際的事業と密接に関連していなければならない。

イランにおいては、現在までバハイは一般礼拝のための殿堂を建築することを禁じられているので、第一のマシユレゴウル・アズカルはロシヤのエシユガバドに建立された。第二のバハイの礼拝堂はアメリカ合衆国のシカゴの北方数キロのミシガン湖の岸に立っている。

この礼拝堂は一九五三年に完成した。  
この西岸の母なる礼拝堂についてアブドル・バハは多くの書簡を書いておられるが、そのなかで次のように言っておられる。

『神は讚ほむべきかな、今や、世界各国よりそれぞれ資力に相應して、アメリカのマシユレゴウル・アズカルの資金として絶えず寄進が送られている。……アジヤの最も遠隔の地より寄附がアメリカに送られる如きことはアダムの日から今日までいまだかつてなかつたことである。これは神の聖約の力に

よるものである。実にこれは理解すぐれた人々にとつても驚ろくべきことである。神を信ずる人々の寛大さで、この建築のために大金を調達せんことを望む。……予は各人が自由に行動することを望む。もし誰か、他のことに金を使いたいなら、彼にそうさせるがよい。いかなることでも干渉してはならない。しかし現在最も重要なことはマシユレゴウル・アズカルの建築にあることを充分知っていないければならない。

この建築物の神秘は大である。しかもそれはまだ発表することのできないものである。しかしその建立は今日の最も重要な事業である。マシユレゴウル・アズカルは重要な附属施設を有し、これらもまた基本的建築物である。これらは孤児のための学校や、貧窮者のための病院、障害者のためのホームや、高等科学教育の学校、及び参拝者の宿泊所等である。あらゆる都市に大マシユレゴウル・アズカルがかくの如く建立さるべきである。マシユレゴウル・アズカルでは毎朝礼拝が行われるであろう。管内にはオルガンはないであろう。饗宴、礼拝、大会、公開集会、および精神的集会等のみな附属の建物で行われるであろうが、本堂内においては吟詩讚歌カバダは伴奏アコされまいだろう。全人類に礼拝堂の門を開放せよ。

これ等の学校や、病院や、宿泊所や、痲疾者等のための建設物や、大学院を含む高等科学のための大学や、その他博愛慈善のための建築物等が建立された時は、あらゆる国民や、あらゆる宗教にその門戸は開かれるであろう。こゝには一線の差別区画も絶対に存してはならない。その慈恵は皮膚の色とか人種の別にかゝるることなく行われるであろう。その門戸は広く人類に開放されるであろう。何人にも偏見なく、万人に愛が及ぶべきである。本殿は祈りと、礼拝のために捧げられるであろう。かくて……宗教は科学と調和し、科学は宗教の侍女となり、両者はその物質的並びに精神的の贈物を全

人類に振り撒くであらう。」

注一、マチュレゴウル・アズカルに関して、テニソンの詩を想い出すのも興味がある。

一石また一石私は神殿を建てた、と夢みた。

塔でも、寺院でも教会でもない殿堂を。

より高くより単純な、常に天来のあらゆるものへ扉を開放し

真理と平和と愛と正義が来たってその中に住んでいる。(アクバルの夢 一八九二年)

注二、この建物は一九四八年の地震で大きな被害を受け、後に止むなく取りこわされた。

注三、この礼拝堂は一九五三年に完成した。その後、以下の場所にも礼拝堂が建設された。ウガンダのカンパラ市、オーストラリアのシドニー市、ドイツのフランクフルト市、そして中米のパナマ。一九六九年現在、各地において五十もの礼拝堂用地が購入されている。

## 死後の生命

バハオラは肉体の生命は我々の生存の未完成な段階にすぎず、肉体よりの脱出は人間の精神がより完全なより自由な生命に入る新しい誕生の如きものであると教えておられる。彼は次の如く書かれている。

「魂は肉体を離れてのち進歩し遂に神の御前に至り、年月や世紀の流れも、この世のいかなる変化もそれを交えることができぬ状態にまで到達させるといふ真理を知れ。魂は神の御国、神の主権、神の支配力、神の威力が永遠なる如く永遠につづくものである。そしてそれは神の証跡と、属性とその慈



愛と恵沢とを現わすであろう。我が筆の動きは、かくまで高い、地位の高尚と栄光を叙述しようとする時止とどつてしまうのである。慈悲の手で人間の魂にあたえられる名譽は、いかなる舌も、適切に言いあらわし得ず、いかなる地上の者も叙述できない。肉体を離脱した時に世界の人々の空虚なる妄想より聖別されている魂こそ祝福すべきかな。このような魂はその創造者の意志にしたがつて動き至上の樂園に至る。至上の大邸宅の住人たる天国の乙女等はそれを待ち受けて取りまき、その魂はすべての神の予言者等や彼が選んだ者等と交わるであろう。彼等とその魂は語り、彼等に諸々の世界の主なる神の道において受けたことを話すであろう。

もし誰でも、天上の王座と地上との、主なる神の諸々の世界において、そのような魂のために定められたものを告げ知らされるなら、その人の全存在は直ちにその最も高貴な、聖別された栄光の地位に到達しようとする彼の最大の願いに燃え立つであろう。……死後の魂の性質は記述し得ない。またそれに会ったり、その全部の性質を人間の目に明らかにすることは許されていない。神の予言者と使者等は人類の真理の真直ぐな道に向って導くためのみに来たのである。彼等の啓示の包蔵たくわする目的は人類を教育することであった。彼等が、その死の時に、最上の清浄と神聖と絶対の超越をもって、最高者の王座に上がることができるようにすることであった。これらの魂が発する光明は世界の進歩と、その人類の進歩の原因となるのである。彼等は存在の世界に感化影響を与える酵母酵母であり、世界の芸術と驚異を現わす活力となるのである。彼等を通じて、雲はその恵沢を人々にそそぎ、地はその果実をもたらすのである。すべてのものは原因を、原動力を活力の元を持たねばならない。これらの魂と超越の象徴は、この存在の世界の最上の原動力でありつゞけるであろう。

かの世とこの世との差異は、胎児の世界とこの世界との差異の如きものである。』——「落穂集」

一六六―五七頁

同様にアブドル・バハも書いておられる。

『人間はこの世で気付かない神秘を天国において発見する。そこで真理の神秘を知り、従来知っていた人々をいかにによりよく理解しあるいは発見するであろうか。うたがいのもなく、純粹な眼を見出し、洞察力をめぐまれた清い魂は、この光明の国において、あらゆる神秘に通じ、恵沢としてすべての偉大な魂の真相をきわめることを願うであろう。彼等はその世界において明瞭に神の美を認めるであろう。また彼等は過去あるいは現在に神を愛するすべての者等を、その天の会合に見出すであろう。』

人間の間の差異差別はこの世を去った後に自然と現われてくる。しかしこの差別は地位に關するものではなくたゞ魂と良心に關するものである。神の国は時と所から聖別され（あるいは自由にされ）ているので、それは全く別の世界、別の宇宙なのである。神の諸々の世界では、たしかに精神的に愛される者等は相互に認め合い、互いに結合を求めるが、これは精神的結合であることを知れ。同様に現世において誰かに対して抱いた愛は神の国の世界において忘れられるのではなく、諸君の現世における生活も、また忘れられないものである。』——「アブドル・バハの書簡集」第一卷 二〇四頁

## 天国と地獄

バハオラとアブドル・バハは古い宗教書のあるものに記された天国と地獄の話を聖書の創世記の話のように、象徴的なものと見られ、字句通り真実なものとは解されない。彼等に從えば天国は完全な

状態であり地獄は不完全な状態である。天国は神の意志と同胞との調和であり、地獄はかゝる調和の欠乏である。天国は精神的生活の状態であり、地獄は精神的死滅のそれである。人間は肉体を持って生きているあいだも天国か地獄かの何れかにあり得るのである。天国の喜びは精神的喜びであり、地獄の苦痛はかかる喜びの欠乏にある。アブドル・バハは次のように言われた。

『彼等が信仰の光によってこうした悪徳の暗黒から解放され「真理の太陽」の光輝によって照され、あらゆる善徳を以って敬仰されるとき、彼等はこれを以て最大の報酬となし、これを真の樂園と知るであろう。同じように彼等は、精神的刑罰、すなわち、現存世界の苦しみや罰とはこの自然の世界に属すること、神からさえぎられていること、動物的であり無知であり、肉欲に耽溺し、動物的無節操に陥り、虚偽、残虐、残忍、世俗への執着、悪魔のような思想、觀念に没頭するといった暗黒の諸性質をおびることであると考える。彼等にとつては、これらのことがこの上もない大いなる罰であり、苦しみである。』

来世における報酬とは、死してこの世を去ってから精神界で獲得する完成と平和である。一方この世の報酬はこの世で表現される現実のかゞやかしい完成であり、それは永劫の生命を得る根源である。なぜなら、この世における報酬の表現こそ生存の進化にほかならないからである。それは恰も人間が胎児の世界から成熟の状態に到り、彼がまことにも「神に祝福あれ、至高至善の創造者なればなり」という神の創造礼讃の言葉の化身とも言うべき人間になるごとくである。来世における報酬とは神の国の平安であり、精神的優雅であり、さまざまな精神的賜物であり、心魂の希望を達し、そして、永劫不滅の世界で神と会合することである。同じように、来世における罰、すなわち、来世における苦しみや悲しみは、神の特別な祝福と絶対的な恵沢を得ず、最低の生存状態に転落することである。こ

れら聖なる神の恵沢のないものは、死後なお生存を続けると云えども、真理の人たちから見れば死滅したのと同様である。

来世の富は神への親近である。したがって、神の聖殿に近く侍る人たちはとりなしを許される。そして、神はこのとりなしを善しとなしたもう。

罪深く、無信仰のまゝ死んだ人たちの状態でさえ変化してしまうことは可能である。すなわち、彼等も神に寛恕されることができる。それは、神の正義によってではなく、神の恵沢をおして寛恕されるのである。なぜなら、恵沢とはそれを受けるだけの価値のないものを与えることであり正義とは受くべき価値のあるものを与えることだからである。われわれは今ここでこうした人たちのために祈る力をもっているように、神の国であるところの来世においても、われわれは同じ力をもつであろう。来世のあらゆる人びともすべて神の被造物ではあるまいか。だから来世においてもまた、彼等は進化発達することができる。現世において人びとは、切に祈り求めることによって光りをうけることができるように、人びとは来世においてもまた寛恕を乞い願ひ、切に祈り求めることにより光りをうけることができる。

こうした物質的な形体から離脱する前でも、後においても、完成への進歩発達があるのであって、地位が進歩発達するのではない。だから、あらゆる存在物は完全無欠な人間において極端に達する。完全無欠な人間ほど高き存在はない。しかし、人間がこうした完全無欠な人間の地位に到達しても、なおその完成のために進歩発達する、だが、人間という地位には進歩発達はない。なぜなら、人間がみずから移行させるのに、完全無欠な人間の地位ほど高き、地位はないからである。人間が進歩発達すると言ってもそれはただ人間の地位の中で進歩発達するのみである。なぜなら、人間の完成は無

限だからである。このように一人の人間がいかにも学問があつても、われわれはそれ以上に学問のある人を想像できる。

それ故、人間の完成は無限であるから、人間はこの世を去つてからも、その完成のため進歩発達することが出来る。』——「質疑応答集」一五九—一七二頁

## 二つの世界は一つである

バハオラによって教えられた人類の一体性の精神は、単に肉体を持つ人間についてのものではなく、生死にわたつて全人類に通ずるものである。現在地上に住んでいる全部の人間のみならず、精神界におけるすべてのものが同一組織体の部分をなし、これ等の二つの部分は相互に密接に依存しているものである。この両者の精神的交通は不可能不自然なことではなく、常にあるべきものであり、なくてはならぬものである。精神的諸能力がまだ発達していない人々は、この肝要な関係を覺らないが、諸能力が発達するに従つて幽冥のかなたの人々との交通は次第にもつとほつきり意識するようになり、明瞭になつて来る。豫言者や聖者達にはこの精神的交通は、一般の常人が人を見、それと会談する如く普通のことでもたまた實際のことである。

アブドル・バハは言われた。

『予言者等の幻視は夢ではない、否、それらは精神的発見であつて、実在性をもつ。たとえ彼等は言う。「自分はある人をかくかくの形で見た、自分はかく言つた、そして彼はかく答えた」と。この幻視は覚醒の世界のもので、睡眠の世界のものではない。いやそれは、あたかも幻視であるかのよう

に表現された一の精神的発見である。

精神的な魂の間では精神的理解や発見、想像や妄想を超えた清らかな精神的交通、時間と空間とから聖別された精神的交際がある。そこで福音書中にはタボル山上のキリストの許にモーゼとエリヤが来た事実が記されてあるが、これは物質的な会谈でなかったことは明白である。それはなにか形ある会谈として表現された精神的な状態であった。

エリヤのキリストとの会谈といった聖書に言われる幻視のようなものである。これは真実なものであり、人間の心意や思想に驚くべき影響を与え、彼等の心をひきつけるものである。』——「質疑応答集」一九五—一九七頁

彼はこの「異状な」心靈的諸能力の真実性を認めておられるが、しかしそれを時期が至らぬのに無理に発達させようとする試みには不賛成である。これ等の諸能力は、豫言者等が我々のために示した精神的発達の道を追うならば、適当な時が来れば自然に開發されるであろう。彼は次の如く言っておられる。

『この世界にあって、心靈的諸力によけいな手出しをすれば、来世における魂の状態に妨害をきたすことになる。これ等の力は真実なものではあるが、普通現世においては活動しないものである。子宮にある胎児は、眼、耳、手、足等を有するが、それ等は活動しない。この物質の世界における生活の全目的は、これ等の力を活用する所である實在の世界に達することにある。それ等の力はその世界に属する。』——アブドル・バハによって校訂されたバックトン嬢の手記より

彼はまた次の如く言われた。

『昇天した者等は、まだ地上にある者等とは異なる属性を有するが、しかしそこには實際的分離はない。祈りには地位の混合があり、境遇の混合がある。彼等が諸君のために祈る如く諸君も彼等のために祈

死者と霊との交通は、決してそのことそのもののためや、好奇心を満足さすために求むべきものではない。しかし、幽冥の一方にある者が、あなたにある者を愛し助け、その人々のために祈ることは特権でもあり義務でもある。死者のために祈ることはバハイに命じられた処である。アブドル・バハは一九〇四年に E・J・ロゼンバーグ嬢へ次の如く言われた。

『効果のあるとりなしを成し得る恩寵は進歩した魂および神の顕示者に属する完成の一つである。キリストはこの世にあった時この敵を寛恕するためにとりなしをする力を持っていた。そして勿論今もなおこの力を有する。アブドル・バハは死者の名をあげる時は必ず『神よ彼を寛恕し給え』と言うか、あるいは類似の言葉を唱える。予言者等の信徒達もまた魂のゆるしを願うこの能力を有している。それ故、我々はいかなる魂も絶対に神を知らないために永久に苦悩と損失の状態に置かれると考えるはならない。彼等に対する効果あるとりなしの能力は常に存在するのである。……』

あの世においても富者が貧者を助け得ることはこの世におけると同様である。どの世界においても、すべては神の創造物である。彼等は常に神に依存する。彼等は決して独立なものでなく、かつ決して独立し得ざるものである。彼等が神を必要とするかぎり、万人は祈願すればするほど富んでくる。彼等の財や富は何か。あの世における助力および扶助は何であるか。それは執り成しである。未発達魂はまず精神的富者の祈願によって進歩し、後には自分自身の祈願によって進歩し得るのである。』

るように。」——「ロンドンにおけるアブドル・バハ」九七頁

この新しい啓示を聞かずにこの世を去った人々に、信仰と愛をもってこれを知らせることが可能か否かの質問に対し、アブドル・バハは次の如く答えられた。

『しかし、勿論である。誠実な祈りは必ずその効果をもつものであり、それは他界に対して大なる影響を与えるからである。我々は決してそこにある人々と分離されてはいないのである。真の影響はこの世にあらずしてむしろあの世にあるのである。』——パリにおけるメーリ・ハンフォード・フォードの手記 一九一一年

また一方、バハオラは次の如く書いておられる。

『その者のために命じられた処に従って生活する者のためには、最上の集合や、至上樂園の民衆や、また偉大な宮殿に住むすべての人々が至愛にして讚美すべき神の命によって祈るであろう。』——アリ・クーリ・カインによって翻訳された書簡

アブドル・バハはかつて、いかにしてしばしばの人の心がすでにあの世に去ったある友人の方へ本能的にひかれることがあるかについて問われた時、次の如く答えられた。

『弱い者が強い者に依存することは神の創造の掟である。諸君が心を向ける人々は、たとえ現世にあつても同様に、神の力を諸君に仲介する人々であろうが、全人類を強めるものは唯一の聖靈である。』

——「ロンドンにおけるアブドル・バハ」九七頁



## 悪は実在せず

バハイの哲学によれば、神は唯一なりという教えに従って、積極的な悪と言うものは存在しないと  
言うことになるのである。一つの無限と言うものだけが存在し得る。もし宇宙にその唯一なるもの、  
他にあるいはこれに対抗する力があるとすれば、この唯一なるものは無限ではあり得ないであろう。  
あたかも暗黒が光明の欠乏かあるいはその程度の低いものであるように、悪は善の欠乏かあるいはそ  
の程度の低いものであり、その未発達の状態である。悪人はその本性より高度な面が未だ発達してい  
ない者である。もし彼が利己的であるとしてもその自己愛に悪があるのではない。——あらゆる愛、  
自己愛でさえも、善きものであり、神聖なものである。悪は彼がかゝる貧弱な不十分な間違つた自己  
愛を持ち、他人や神に対する愛を欠くことにある。彼は自分を優秀な動物としてのみ考え、自己の低  
級な性質をあたかも愛犬を甘やかす如くほしいまゝにならしめるが、——自己に対する場合その結果  
は犬に対するよりも害悪をとまなうのである。

アブドル・バハはある手紙の中に次の如く言われた。

『アブドル・バハがある信者等に悪は決して存在せず、否、むしろ実在するものではないと言つたと  
貴下が言われたことについて真理である。これは最大の悪は人間が道を外れ、真理から眼をふさがれ  
ていることであるから、過失は指導の欠乏であり、暗黒は光明のないことであり、無知は知識の欠乏  
であり、虚偽は真実の欠乏であり、盲目は視力の欠乏であり、聾は聴力の欠乏である。それ故、過失、  
盲、聾、無知などは実在の事物ではない。』

彼はさらに次の如く言われている。

『神の創造には悪は無い、すべてが善である。ある人びとに生来あるあきらかに非難すべきある種の性向、性質は実際は悪ではない。たとえば、乳児の中に、人生の最初から慾望や怒りや、癩癩の徴候が見られる。しからは、善と悪とは本来人間の实体に生得なものである。そしてこれは創造と性質の完き善に背反すると言われるかもしれない。この疑問に対する解答はもっと欲しいと求める慾望は若しそれが適切に用いられるならば、称讃すべき特質である。だから、もし人が科学を学び、知識を得ようと望むならば、あるいは情深く、寛大に、正しくなろうと望むならば、それは最も称讃すべきことである。もし怒りや憤怒をどう猛な野獣にも等しい残忍な暴君に対して爆發さすならば、それはきわめて称讃すべきことである。が、こうした特質を正しく用いなければ、非難すべきことである。

人生の資本とも言うべき人間の生来固有の諸性質の場合も同じであり、それらが悪く用いられるならば、非難すべきものとなる。それ故、神の創造は完き善であることは明らかである。』——「質疑応答集」一四八頁

悪は常に生明の欠如である。もし人生の下級な性質がふつりあいに發達した場合その療法はその性質の生活力を減ずることではなく、むしろより高貴な性質の方へ生活力を増加させることである。かくすれば平衡がとれるであろう。「我が来たのは羊に生命を得させ、豊かにさせるためである。」（ヨハネ伝 第十章 十節）とキリストは言った。それこそ我々が求めるものである。——生命、もつと生命を。まことに生命たる生命を。バハオラの伝言もまたキリストのそれと同じである。彼は言う「今日この僕のきたるは、真に世に生命をあたえんがためなり。」（ライイスへの書簡）と。また

その信徒に向つて言う。  
王への書簡)

「来れ、汝我等をして人々を覚醒させる者とならしめん。」と。  
(ローマ法

## 第十二章 宗教と科学

モハメットの婿養子アリは言った。「科学と調和する処のものはまた宗教とも調和する」。人智が理解し得ざるものは宗教もまた受け入れてはならぬ。宗教と科学は相提携すべきものであって、科学に相反する宗教は真理ではない。——「アブドル・バハの知恵」より

### 衝突は誤謬ゴミョウに由来ユライする

バハオラの基本的教えの一つは、真の科学は真の宗教と常に調和すべきものであることである。真理は一つである。そしていつでも衝突が起れば、それは真理ではなく誤謬にもとづくものである。いわゆる科学といわゆる宗教の間には古来から劇烈な衝突があったが、真理の光明をもってこれ等の衝突をかえりみると、それ等が常に無知や偏見や虚栄や貪欲や偏狭や頑固やその他類似のもの即ち科学と宗教の真の精神に添わないものがその原因をなしているのを発見する。なぜなら科学と宗教の精神は一にして衝突の余地がないからである。ハックスレーの言う処によれば、哲学者達の大事業も彼等の知力の結果というよりも、そのすぐれた宗教心により知力を指図した結果である。真理は彼等の論理的聡明さよりも、彼等の忍耐や愛や純真や献身の精神によって得られたものである。数学者ポール

## 予言者等の迫害

も次の如く証言している「幾何学の帰納推理はまったく祈りの過程——すなわち有限者が有限の事柄に対して無限者に光明を求めることである」と。宗教の大豫言者等と科学の大豫言者等はいまだ決して相互に非難し合ったことはない。後世の予言者等を迫害し、進歩の最悪な敵対者となつた人々は、これ等の世界的大教師等の不肖な弟子達である。——彼等の教えの精神を解せず、たゞその字句の崇拜者達であつた人々である。彼等は自ら神聖とする特殊な啓示の一点を学んで、自分達の限られた眼に映じたものを非常に注意深くかつ精密に定義しその教えの本質であり特性となした。これは彼等にとっては唯一の真なる光明であつた。もし神がその無限の恵沢から、他の場所より一層明かな光明を送り、そして新しい灯を持つ人から前よりも一層明るい靈感の灯が燃えたと、彼等はこの新しい灯を歓迎し、新しい感謝をもつてよるよるの光の父を崇拜する代りに、憤怒し、警戒するのである。この新しい光明は彼等の定義と一致しない。これは正常の色彩を有せず、また正常の地より輝やき出さなぬそれ故、人々を異端の道へ迷い込ませないためには、いかなる代償を払つても消し止めなければならぬと彼等は考へる。予言者の多くの敵はこの種の型のものである。——盲を指導する盲の指導者達で、自分達がこれこそ真理だと信ずるもの、仮定的利害のために、新しい、より明らかな真理に反対するのである。その他のもの等はより下賤の人々で、自己の利欲のために真理に敵対し、あるいは精神的麻痺と惰性のために進歩の路をふさぐのである。

宗教の大予言者等は常に、その出現に當つて、人間から侮辱され排斥された。彼等も彼等の初期の信徒等も共にむちうたれ、また神の道のために所有物を犠牲にし、また生命をも捧げたのである。我

々の時代においてすらもこうした事情であった。西暦一八四四年以来、イランの数千のバビとバハイがその信仰の故に虐殺され、さらにそれ以上の人々が投獄され、流刑にされ、貧窮下賤の境涯におとされた。近代の大宗教中最新のものも、先進者より以上の血の洗礼を受け、殉教はいぜんとして今日までつゞいている。科学の豫言者達についても同様の事件が起った。ジオルダノ・ブルーノは西暦一六〇〇年に、地球が太陽を周転するなどと言った理由によって異端者として焚刑にされた。その後数年、老巧な哲学者ガリレオは同様の難を避けるために同様な学説をひざまづいて否認しなければならなかった。後に至って、ダーウィンや近代地質学の先覚者達は、およそ六千年の昔この世界が六日間で造られたという聖書の教説に反対したために、猛烈に非難された。しかし新しい科学的真理への反対はすべて宗教から出たのではない。科学における正統派は宗教における正教と同様に進歩の敵であった。自分自身の満足のために、もし船が地球の反対点に下って行くことができた場合、再び帰って来ることは絶対に不可能であると主張していた当時のいわゆる科学者達からコロンブスは嘲罵された。電気科学の先覚者ガルヴァニも、学識ある同僚達から嘲笑され「蛙の舞踊師」と言われた。また血液循環の発見者ハーヴィは、その異端性の故に同職の朋友達から愚弄され、迫害され、ついに教職から追われた。ステイヴンソンが機関車を発明した時、当時の欧州の数学者達は、自ら眼を開いてその事実を研究しようとしてずに自己満足のために、機関車は平滑な軌道の上では車輪がすべって車輛が進行しないために決して貨物を運送することはできぬと、数年間言いつづけた。かくの如き例は古代近代の歴史、さらに現代においてさえも枚挙にいとまない処である。エスペラント語の発明者ザメンホフもその素晴らしい国際語のために、コロンブス、ガルヴァニ、ステイヴンソン等の受けたと同様の、嘲笑や軽蔑や愚昧な反抗と戦わねばならなかった。一八八七年という最近に世に

出たエスペラントさえもそのための犠牲者等を出しているのである。

## 和解の敵

しかるにこの半世紀ばかりの間に、時代の精神に一変化をきたし、前世紀の論争を不思議にも無意味ならしめる新しい真理の光が出現した。最近まで、宗教を世界から駆逐しようとした高慢な物質主義者や独断的な無神論者等は、いまだどこにいたのであろうか。またどこにその教条をうけいれない者を断乎として地獄の劫火や苛責にわたす宗教家があろうか。彼等の喧騒の余韻をなお我々は聞き得るかも知れぬが、彼等の日はすでにかたむき、彼等の教義は不信を受けつつある。彼等の論争が激しく戦わされていたかの教義は眞の科学でも、眞の宗教でもないということは今や我々は知るのである。近代心理的研究の成果を前にしてどの科学者がなお「頭脳は肝臓が胆汁を分泌する如く思想を分泌する」と主張し得るか。あるいはまた肉体の死滅は必然的に魂の死滅をともしうものであると主張し得るか。我々は今や、思想が眞に自由であるためには、それが決して物質的現象のみに局限されることなく心霊的、精神的現象の境にまで至らねばならぬことを知る。我々が現在自然について知るものは、発見されずにいるものに比較すれば、大海の一滴にすぎないことを知る。それ故我々は自然の法則に逆行する意味ではなく、電気やエックス線等が我々の祖先にとつて未知であつた如く我々にもなお未知な微妙な力の作用の現われとして、奇蹟の可能性を否定はしない。一方また、現在の主だつた宗教家達の中に、いままなお世界が六日間に造られたことや旧約聖書の出エジプト記にあるエジプトの疫病の記述が文字通り事実であることや、あるいはヨシユアに敵を追跡させるために太陽が天に静止してゐること（即ち地球がその廻転を止めたこと）等を信ずることが、救いのために必要だと言ふ者があ

るうか。あるいは、もし人が聖アタナシウスの信条を受けなければ「彼は必ず永久に滅ぶべし」と言う者があろうか。かくの如き信仰は形式的になお繰返されているかもしれないが、しかし誰がそれを文字通りの意味において無条件に受け入れるであろうか。それ等が人心を攪む力はすでになくなつたか、あるいはまさになくなろうとしている。宗教界はかくの如き頹廢した信条と教義を破棄し、真理を自由に出現せしめた恩義を科学界の人々に負っているのである。しかしそれより以上に科学界は、世評の善悪にかゝらず精神的体験の生きた真理を把持し、生命は肉にまさり、無形のものには有形のものにまさることを疑い深い世界に証明した真の聖者達や神秘主義者に対して、負うところをもつ。これ等の科学者、聖者達は、朝日の光線をまっさきに受け、これを下界に反射する山頂の如きものであったが、今や太陽は仲天ちゆうてんに昇り、その光線は世界に照破しつゝある。即ち我々はバハオラの教えの中に心情と理性をみだし、宗教と科学を合一するとその真理の栄光ある啓示を持つのである。

## 真理の探求

我々が真理を探求するに當つてとるべき方法についてのバハイの教えには科学との完全な調和といふことがある。人間はあらゆる偏見から離脱し、まったくの白紙となつて真理を探求すべきである。アブドル・バハは次の如く言つておられる。

『真理を発見するためには我々の偏見と、卑小な見解を抛棄せねばならぬ。開放的であつて包容力のある態度こそが大切なのである。もし我々の杯が自我で満されていれば、生命の水をいれる余地はない。自分自身を正しく、他人はすべて間違つていると思ふことは、融合への道の最大の障碍である。そして真理は一つであるから、もし我々が真理に達しようと思ふなら融合は必要なものである。…』



一つの真理が他の真理に矛盾し得るものではない。いかなるランプの中で輝やいても光はよいものだ。ばらばらなる花園に咲こうともやはり美しい。星は東から輝いても西から輝いても同じ光彩を放っている。偏見を去れ。その時諸君は地平線のどこから昇るうとも真理の太陽を愛するであろう。諸君は、もし真理の神聖な光がキリストの中に輝いていたとするならば、それはまたモーゼにも、釈迦にも、輝いていたのであることを知るであろう。それが真理の探求の意味なのである。

これはまた我々がかねて学んだものゝすべてを、あるいはまた真理の道への歩みを妨害するあらゆるものを進んで放棄しなければならぬことを意味する。必要によつては我々は教育を始めから全部新しく受けなおすことをも辞してはならぬ。我々はある一つの宗教や、あるいはある一つの人格に愛をかたむけて、迷信にとらわれるほど盲目になつてはならない。これ等すべて束縛から脱して自由な心で探究する時、我々は必ず目的地に到達し得るであろう。』

## 眞の不可知論

神の本質は人間の理解力を全く超越したものであると主張する点において、バハイの教えは科学や哲学と一致する。ハックスレーおよびスペンサーが造物主の本質は不可知であると力説する如く、バハオラもまた「神は全知であるが、決して知られ得べきものではない」と教えておられる。神の本質を知る「道はふさがれ通過し得ない」のである。なぜならいかにして有限なものが無限なものを理解し、いかにして一滴の水が大洋を含み得、あるいは日光の光線中に踊る一片の塵埃が宇宙を抱擁し得ようか。しかも全宇宙はよく神を語るものである。一滴の水中にも意味の大洋は隠され、一つの塵埃

にも意味の宇宙が包含されていて、それは最も学識ある科学者といえども理解し得ざるものである。物質の本質に深く研究の歩を進めてゆく化学者や物理学者等は、物体より分子へ、分子より原子へ、原子より電子、エーテルへと分析を進める。しかしその一歩々々に探求の困難を加え、遂に最も深玄な知力もはやとうてつすることができず、たゞ永久に詮索し得べからざる不可解な「無限」の前に沈黙して額づくものである。

壁の割目にさく花よ

われ、さけ目より汝をひけり。

根も共にわが手にもちて

小さき花よ、されどわれもし、汝を

根もすべて、そのことごとくを知り得なば、

われ神と人とを知り得ん。

——テニソン

もし壁の割目に咲く花が、あるいは物質の一原子が持つ神秘が、最高の知力をもつてするも理解できないものであるならば、いかにして人間にこの大宇宙を理解することができようか。いかにして人間があえて万物の無限な原因を説明し叙述すると主張し得ようか。かくて神の本質についてのあらゆる神学的理論は無益なものとして一掃される。

## 神についての知識

しかし本質は不可知だとしても、その恵沢の顕現は到るところに明かである。もし第一原因が想像し得ざるものだとしても、その影響は我々のあらゆる能力に感じられる。あたかもある画家のかいた絵についての知識が、その芸術家に関する真の知識を鑑賞者にあたえる如く、あらゆる形体における宇宙を知ること——自然、あるいは人間の性質を知ること、有形、無形の事物を知ること——は神の御業みわざについて知ることであり、神の真理の探求者に神の栄光の真の知識をあたえるものである。

『もろもろの天は神の栄光を表わし、おゝぞらは御手みての業わざを示す。この日は言葉をかの日につたえ、

この夜は知識しちをかいの夜につげる。』——詩篇 第一九篇 一—二節

## 神の顯示者

あたかも日光にさらされたあらゆる物体が程度の差こそあれ日光を反射する如く、万物も程度の差こそあれ、明らかに神の恵沢を表現する。煤煙ばいえんのかたまりは少し反射し、石はそれよりよく反射し、石炭はさらによく反射する。しかしこれ等の反射のいづれにも太陽の形と色とを見出し得ない。しかし完全な鏡は太陽そのまゝの形と色とを反射する。従って鏡を見ることは太陽そのものを見るが如くである。万物が神について我々に語る場合にもこれと同様のことがいえる。石は神の屬性のあるものを語り得、花はさらに多くを語り得、動物はその驚くべき感覚や本能や運動力等をもっているのだから、お一層多くを語る。我々人類同胞の中の最下級のものにも創造者について語るところの驚くべき能力を見得るのである。詩人や聖者や天才の中には我々は一層高い啓示を発見する。しかし偉大な予言者や宗教の創始者等は完全な鏡であって、それによって神の愛と智慧が他のすべての人々に反射される

のである。他の人々の鏡は、自我や偏見などのきずや塵埃<sup>チホカ</sup>で曇っているが、彼等の鏡は清らかで汚れなく、神の意志に完全に捧げられているのである。かくて彼等は人類の最も偉大なる教育者となる。彼等より出づる神の教えと聖靈の力は人類發展の原因をなしたものであり、また現在その原因をなすものである。なぜなら神は人によって人を助けるものだからである。人生の道のりにおいてより進んでいる者は低い者を助ける手段である。そして万人に比し非常に進んでいるこれ等の人々は全人類の扶助者である。万人はあたかも弾力性のあるひもでつながれているようなものである。もしその一人が仲間の標準の高さから少しでも上に上げれば、ひもはしまる。その仲間は彼を引戻そうとするが彼の方はそれと同等の方で彼等を引き上げる。高く登れば登るほど全世界が彼を引き戻そうとするのを感じ、そしてまた彼よりも上にいる少数者を通して彼に達するところの神の支持にますます頼るようになる。あらゆるもの、最高者は偉大な予言者や、救い主、すなわち神の顕示者でこれ等の完全な人々は各々、その時代において、同伴者も仲間もなく、全世界の重荷にたえず、たゞ神のみに支持されたのであった。「我々自身の罪の重荷は彼の上にある」ということは彼等の中の誰にも事実であった。彼等はみなその信徒等にとっては「道、真理、および生命」であった。各々は神の恵沢を受けようとする者等の通路であった。各々は人類向上のための神の大なる計画中に、それぞれの役割を演じたのである。

## 創造

バハオラは、宇宙には時間のはじめがないことを教えている。それは第一原因からの不断の流出である。創造者は常にその創造物を所有し、また常に所有するであろう。天体と太陽系は生滅変化するであろうが、宇宙は残る。組織された万物は時至れば分解するが、その組織要素は残る。一つの世界

や、一輪の雛菊あるいは一人体の創造は「無より生ぜるもの」ではなくて、離散していた諸要素が一つに集合されたものであり、かつて隠れていたものが可視のものとなるのである。やがてこれ等の要素は再び離散し、形体は消失するであろう。しかし何物も決して失われたり、消滅されるものはない。永久に新しい結合と形体が古い廃跡から生れ出るのである。バハオラは世界創造の歴史は六千年のみのものにあらず億兆年を経たものであるとする科学者達の説を認めている。進化論は決して創造力を否定するものではない。それはたゞ創造力の顕現の方法を説明せんと試みるものである。また天文学者や、地質学者や、物理学者や、生物学者等が漸次に我々眼前に展開しつつある驚くべき物質宇宙の物語は、正しく評価され、ば、ヘブライ教典にあるような粗雑で露骨な天地創造の記事より遙かに深い尊敬や崇拜の念を起さしめるのである。しかし、旧約創世記の記事は、大胆な象徴のわずかの筆致をもつて、物語の本質的な精神的意味を表わしている特長を持ち、これはあたかも常人では、非常な注意を微細な点にまで払つても写し得ない表情を、画家ならばわずか数筆の彩管で表わすということにもなっているのである。もし物質的詳細が、我々をして精神的意味を失わせるなら、それはない方がよい。しかしもし我々が全体の組織の本質的意味を一度把握するならば、詳細の知識は我々の着想に驚くべき一層の豊富さと光彩を加え、それを単なる写生的輪廓となす代りに、すばらしい絵画となすであろう。

アブドル・バハは次の如く言われた。

『存在の世界、すなわち、この無限の宇宙に初めなしということは、最も玄妙な精神的真理の一であることを知るべきである。

学長が任命されることはない被造物なくして創造者はあり得ない、施与されるものなくして施与す

る者を考えることはできない、ということを知るべきである。なぜなら、あらゆる聖なる名称や屬性は生存物の存在を必要とするからである。もしわれわれがあらゆる者が存在しなかった時代を想像できるとするならば、この想像は神の聖なる屬性を否定するものであろう。その上、絶対的非存在は存在とはなり得ないのだ。もしあらゆる存在物が絶対に非存在であったなら、存在は存在とはならなかったであろう。それ故「一体性の本質」、すなわち、神の實在は永劫不滅である——すなわち、神の實在に初めも終りもない。——従って、この存在の世界、この無限の宇宙に初めも終りもないことは確実である。なるほどこの宇宙の一部分、たとえば天体の一個が発生し、あるいは崩壊することがあるかも知れない。しかし、それでも他の天体はなお存在している、そのため宇宙全体の秩序は乱れず、破壊もされない。それどころか、その存在は永遠にして不滅である。それぞれの球体には初めがあるから必然に終りはある。と言うのは、複合にせよ単独的にせよ、すべての組成物は必然的に分解するからである。たゞ相違するところは、あるものは早く分解するし、あるものは徐々に分解するだけである、が、結局において組成されたものが分解しないということは不可能の事である。」

——「質疑応答集 一〇二頁」

## 人類の進化

バハオラはまた人体の歴史が数百万年もの人類の発達にまでさかのぼるとなす生物学者の説に賛成している。極めて簡単な、外見上何の意味をもなさない形から、人体は一段々無数の世代を経て発達して、ますます複雑化し、ますますよく組織され、遂に現在の人間にまで到達したものと想像され

る。各個人の身体もかくのごとく多くの段階を経て、液状の一小微片から完全に発達した人間になるのである。しかしてこれが一個人について真実で疑う余地なしとする以上、人類に達しても同様の発達を認めることが人類の威厳を毀損するものだと、どうして考えられようか。これは人類が猿より来たれるものなりとすることとは全く違つてゐる。人間の胎児はある時にはえらの裂目や尾を持つ点で魚類に似ているがしかし決して魚ではない。それは人間の胎児である。かく人類はその長い発達の様々な段階において外観的には数多くの下級動物に似得るが、しかしそれはなお人類であつて、我々が今日見る如き人間に発達する不思議な潜在力を持つてゐる。いな、さらに未来に向つてより高級なものに発達する神秘的な潜在力を所有するものである。

アブドル・バハは次の如く言われた。

『この地球が一拳にして現在の形体で発生したのではなく、今日の完全に至るまでには漸次種々な状態を経過したものであることは明らかである。……人間はその存在のはじめ、あたかも母胎における胎児の如く、地球の母胎において漸次発育、発達して、一つの形体から他の形体に転じ、ついに今日のこの美と完全と精力と能力を獲得するに至つたのである。最初から人間はかくの如く愛すべく、典雅で、美しかったのではなく、漸次にこの形体と美と典雅さを得たものであることは確かである。……この地球上の人間の存在の最初から現在の程度と形体と状態とに至るまでには必然的に長い時代を経たものである。……しかし人間はその存在の当初から自ら別個の種をなしていたものである。……(人体において)すでに姿を消してしまつた器官の痕跡が実際にいまあることを認めたらちと言つてこれが種の非永遠性や非原始性を証明するものではない。せいぜいそれは人間の形体や恰好や器官が進化したことを示すに止まるものである。人間は常に独自の一の種であつた。即ち人間であつて、決

して動物ではなかった。』——「質疑応答集 一〇四頁」

アダムとイブの故事について彼は次の如く言われた。

『もし我々がこの話を、一般的に解されている如く外見の意味にとればそれはまことに途方もないことである。知識はかゝる事を真に受けたたり信じたりあるいは想像したりすることもできない。何故ならかくの如きやり方や、内容や、説話や、非難等は一切有識者等の関せざる処で、いわんやこの無限の宇宙を完全な形体に、その無数の住民を絶対の整然と力と完全をもつて組織した神に關せざる処である。……』

それ故、禁断の木の実を食い、樂園を放逐されたアダムとイブの物語は単に象徴として考えらるべきものである。それは神聖な神秘と普遍的な意味を包含し、驚くべき解釈の余地の存するものである』

——「質疑応答集」

## 肉体と魂

バハイの教えは、肉体と魂及び死後の生について心靈学的研究の結果と全く一致する。それはいままで我々が見て来た如く、死は単に新しい誕生であり、肉体の牢獄よりさらに広大な生に入る脱出であつて、死後におけるこの進歩は無限である、と教える。

多くの科学的証拠が序々に集積され、公平で冷静な探求者の意見では、死後の生命即ち物的肉体が分解した後も、意識的な魂は生き続け活動すると言うことは疑いの余地のないことであると信じられ



るまでに至った。F・W・H・マイアーズが心靈研究会の多くの研究を要約した「人間の性格」中の次の如く述べている。

『觀察、実験、推理等は私等多くの探究者等をして単に地上にいる人間の心意の間のみならず、地上に生存する者と死者との心意、あるいは靈魂の間に直接あるいは以心伝心的やりとりの存することを信するに至らしめた。かかる発見は、同時に啓示の可能性の証明ともなったのである。……多くの惑わしや、自己欺満や、詐欺や、幻想の中にも、墓のあなたより真の表明がわれわれに達することのあるのを我々は示した。……』

発見や啓示によつて、我々が邂逅し得た死者の靈に関して、ある仮定的学説は立てられた。まず第一に、少くとも私は、これ等の靈の状態が智慧と愛において無限に発達するものであることを信すべき根拠があると思う。彼等のこの世界に対する愛、とりわけ尊崇や礼拝となつて現われる最高の愛は、存在し続けるものである。……罪悪とは彼等にとつて恐るべきものよりも抑圧するものとして写る。それは決して力ある大王に具現化される如きものではなく、むしろそれは人を孤立させる狂気となり、こゝからより高い精靈は道を踏み迷つた靈を解放させようと努力するのである。こゝには劫火の懲罰の必要はない。自覚がその刑罰であり賞である。即ち自覚と靈魂仲間の親密あるいは疎隔がこれである。なぜならこの世界にあつては現実に愛こそ自己保存である。『聖者等の交際』は永遠の生命を飾るのみならず、その本質をなすものだからである。否、以心伝心的交通の法則の結果、かゝる交際は現在こゝで我々がなし得るものである。現在でも死者の靈の愛は我々の祈りに応ずる。我々の愛の思い出は——愛はそれ自身祈りである——現在でもこれ等の解放された魂の向上を扶助し、督励する』

周到な科学的研究にもとづくこの見解と、バハイの教えの見解とがよく合致する点は、真に注目し得る。

## 人類の一体性

「汝等は一樹の果、一枝の葉、一園の花なり」、「誇は、自國を愛する者ではなく、人類同胞を愛する者にあり」とは、いづれもバハオラの最も特色ある言葉である。一体性——即ち人類の一体性およびすべての創造物の神の下における一体性——こそこの教えの眼目である。こゝにもまた真の宗教と科学との間の調和が明らかである。科学の進むに従って、宇宙が一体であること、およびその各部分の相互依存がより明瞭になってくる。天文学者の領域は物理学者の領域と、物理学者の領域は化学者のそれと、化学者の領域は生物学者のそれと、生物学者の領域は心理学者のそれという風に不可分の結合されている。どの分野の新発見も必然的に他の分野に光明をもたらす。宇宙の物体の各微粒はいかに微小なものであれ、あるいはいかに遠隔なものであれ、他の微粒を牽引し、これに影響をあたえるものであることを物理学が証明した如く、心靈学もまた宇宙のすべての魂が他のすべての魂に作用し影響することを示した。クロポトキン公爵は、その著「相互扶助論」の中で、下級動物界においてすらも相互扶助は生命保存のために絶対的に必要であること、又、人間の場合は文明の進展は、相互扶助が次第に相互憎悪にとって代ることに伴もなうということを最も明瞭に示している。「各人は万人のために、万人は各人のために」とは人類社会の栄ゆべき唯一の原理である。

## 融合の時代

現代のあらゆる徴候は、我等が人類歴史の新時代の始まりに立っていることを示している。いま、で人類の若き鷲は利己主義と唯物主義なる巖頭の古巢にとじこもっていた。そしてまだ小心で、試験的に翼を動かそうと試みる。それはまだ獲得しないものを常に求めていた。そしてますます古い教義と伝統の拘束に苦しんで来た。しかし今やその拘束の期は終り、信仰と理性の翼に乗って、精神的愛と真理の天界に舞上ることが出来る。それはまだ翼が成長しなかつた時のように、地上に止つてはいないであろう。そして心ゆくまゝに広大な見晴しをもつ、かつ輝かしい自由な天地に翼を張るであろう。しかしてその飛翔が確實であるためにはなお一つのことが必要である。その両翼は強いばかりでなく、完全な調和と協調をもつて動かねばならぬ。アブドル・バハは次の如く言われた。

『それは一つの翼では飛ぶを得ない。もし宗教のみの一翼で飛ばんとせば、それは迷信のどろぬまに墮ち、もし科学のみの一翼で飛ばんとせば、唯物論という暗澹たる沼沢に陥るであろう。』

宗教と科学の完全な調和は、人類の高貴な生活に不可欠条件である。もしこの調和が獲得され、すべての子供が科学技術を学ぶのみならず、全人類への愛と、進化の発展過程および豫言者等の教えの中に啓示された神の意志への輝く黙従とを共に学ぶならば、こゝにおいて始めて「神の国」は来り神の意志は天においてなされる如く、地にもなされるであろう。またこゝにおいて始めて最大の平和はその祝福をこの世に贈るのである。

アブドル・バハは次の如く言われた。

『宗教がその迷信、しきたり、荒唐なる教条をすて、科学と一致するならば、そこには大なる融合力と浄化の力が現われ、それはあらゆる戦争、衝突、軋轢、争いの一切を世界から掃除するのである。かくて始めて全人類は神の愛の力において融合されるであろう。』

## 第十三章 バハイ大業によって果された予言

最大名の顕示者（バハオウ）に関していえば彼こそ神が聖書、福音書、コーラン等すべての經典や啓示の書において約束されたものである。——アブドル・バハ

### 予言の解釈

予言の解釈は周知の如く困難なもので、学者にとつてこれほどに種々な意見の相異をもたらしめるものはない。これは決してあやしむべきことではない。なぜなら、啓示された諸文書それ自身によれば、多くの予言はそれが果されるまでは十分に理解されない様な形においてあたえられ、そしてそれが果された時においてすらも、心の清明な偏見のない者にのみ理解されるものだからだ。かくて予言者ダニエルはその夢の終りに次のように告げられた。

『ダニエルよ、あなたは終りの時までこの言葉を秘し、この書を封じておきなさい。多くの者は、あちこちと探り調べ、そして知識が増すでしょう。』……私はこれを聞いたけれども悟らなかつた。私は言った、『我が主よ、これらのことの結末はどんなでしょうか。』、彼は言った、『ダニエルよ、あなたの道を行きなさい。この言葉は終りの時まで秘し、かつ封じておかれます。』——ダニエル書

もし神が指定したときまで予言を封じ、それらを述べた予言者にさえその解釈が十分に啓示されなかつたら、我々はただ神の命じたる使者のみがこの封緘を破り、予言的寓話の手箱に納められた意味を開明し得るであろうということを想像し得る。予言の歴史と、そして前代の宗教制におけるそれ等の誤った解釈と、予言者等自身の厳肅な警告とを結びつけて考えてみると、その顯示者の述べられた事と、それ等の実現の方法の真の意味に関して、我々は、神学者の理論を受け入れるに充分用心せねばならぬ。また一方、自ら予言を実現すと称する者が現われた時は、我々は寛大な偏見のない心で彼の主張を吟味することが大切である。もし彼が詐欺師なら、そのいつわりを直ちに発見し、危害を避けねばならない。しかし神の使者は思わぬ姿で思わぬ時にくるので、そのために彼を不注意にも門前から追い返す人々はわざわざいである。

バハオラの生活と言葉は彼がすべての經典の約束された者であり、予言の封緘を破り、聖なる神秘の封じられた最良の銘酒を注入する力のある者であることを証拠立て、いる。我々はまず彼の説明を聞こう。そしてこれにかんがみて古えの予言者達によって語られた親しいがしばしば神秘的な言葉を再び吟味することにしよう。

## 主の出現

「最後の日」における「主の出現」はすべての予言者等が待望し、それに付いて最も栄光ある讃歌を捧げる遠い未来の神聖なる事件である。さて、「主の出現」とはいかなる意味であろうか。確かに

神は常にその創造物と共に、すべてのものの中に、すべてのものを通じて、またすべてのものを超えて存在する。「神は我等の呼吸よりも間近く、また我等の手足よりも近いものである」。しかし、だが人間は、内在的で超越的である神が目に見える形をとって顕われ、人間の言葉で彼等に語るまでは、見ることも聞くこともできず、その臨場を実感し得ない。神は白らの高い属性を啓示するために常に人間を用いた。すべての予言者等は、媒介者であり、彼等を通じて神は、その民を訪問し、又語りかけられた。キリストはかくの如き媒介者であった。そしてキリスト教徒は、彼の出現を神の出現なりと見たことは正しい。彼等はキリストのうちに神の御顔を見、彼のくちびるを通して神の御声を聞いたのである。バハオラは我々に告げて言う。すべての予言者達によれば終末の時に起るはずである万軍の主、永えの父、世界の創造者および救世主の出現は、神が人間の体を通じて顕現する事にはかならぬ事を意味する。それは神がナザレ人のキリストの体を通じて顕現した如く、たゞこの度はキリストやすべての予言者達がそれに対して人間の心と心意を準備するために来た所の、さらに一層完備し栄光ある啓示を持って来るのである。

### キリストについての予言

救世主の支配に関する予言の真意を理解しなかった、めに、ユダヤ人はキリストを拒絶したのであった。アブドル・バハは次の如く言われた。

『ユダヤ人は今なお救世主の出現を待ち望み、その一日も早くきたらんことを日夜神に祈っている。キリストが現われたとき彼等はキリストを否定し、殺害していうに、『これは我等が期待したのではない。見よ、救世主がきたるときは必ず徴候と奇蹟が現われて彼が誠にキリストであることを証拠

だてるであろう。救世主は人の知らない町から現われるであろう。彼はダビデの王座に着き、鋼鉄の剣を持ち、鉄の笏をもつて統治するであろう。また彼は予言者等の掟を実現するであろう。彼は東西両洋を征服し、その選民たるユダヤ人に栄光を与えるであろう。彼は彼と共に平和の治世をもたらし、獸類すらも人間に敵対することを止めるであろう。狼と小羊は一つの泉から飲み、そしてあらゆる神の創造物は安息するであろう。……』と。

かくの如くユダヤ人は考え、かつ語った。それは經典を理解せず、またその中に含まれている栄光ある真理を解さなかつたからである。彼等は字句を暗記している。しかし生命を与える精神については一語すらも解さなかつたのだ。

諸君、我はいまその意味を示そう。キリストはいうまでもなく、世に知られたナザレからきたものだが、彼はまた天国から来たものである。彼の肉体はマリヤから生れたが、彼の精神は天国からきたのである。彼のたずさえて来た剣は彼の舌の剣であつて、それによつて彼は悪より善を、偽より眞を、不信より信義を、また闇より光を分けた。彼の言葉は実に鋭い剣であつた。彼が座した王座はそこから永遠に支配する永遠の王座であり、天国の王座であつて、地上の王座ではない。何故なら地上のものは消滅するが、天国のものは消滅しないからである。彼はモーゼの掟を解釈し、またこれを完成した。そして予言者等の掟を実現した。彼の言葉は東西両洋を征服した。彼の王国は永遠なものである。彼は彼を承認したユダヤ人達を高めた。彼等は下賤に生れた男女であつたが、キリストとの接触によつて偉大にされ、永遠な品性を与えられた。共に棲息する動物とは、かつて戦つてきた種々な宗教および民族を意味するもので、いまは愛と慈悲の中に住み共に永遠の泉であるキリストから生命の水を飲んでゐる。』

ほとんどのキリスト教徒がこれらの救世主の豫言の解釈をキリストに対して適応されるとして受け入れた。しかし後世の救世主に付いての同様な豫言に関しては、それを文字通り果たすであらうと物質的方面の奇蹟的開示を期待しつつ、彼等の多くはユダヤ人と同じ態度をとっている。

### バブ及びバハオラについての予言

バハイの解釈によれば終末の時、後の日、万軍の主の出現や、永えの父についての豫言は、特にキリストの出現を指すものでなく、バハオラの出現を指すものである。例えばかのイザヤ書の有名な豫言を例にとろう。

『暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照った。これはあなたが彼らの背っているくびきと、その肩のつえと、しいたげる者のむちとを、ミデアンの日になされたように折られたからだ。すべて戦場で、歩兵のはいたくつと、血にまみれた衣とは、火の燃えくさとなって焼かれる。ひとりのみどりごがわれわれのために生れた。ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、その名は、「靈妙なる識士、大能の神、とこしえの父、平和の君」ととなえられる。そのまつりごとと平和とは、増し加わって限りなく、ダビデの位に座して、その国を治め、今より後、とこしえに公平と正義とをもってこれを立て、これを保たれる。万軍の主の熱心がこれをなされるのである。』——イザヤ書 第九章二―七節

これはしばしばキリストに関する予言とされるものの一つであって、この多くは、このようにまったく公平に適応されてよい。しかし少し調べてみるとそれがバハオラに適合するものであることが分



## 神の栄光

るのであろう。實際、キリストは光明の招来者であり救い主であったが、彼の出現以来二千年近く経っているが、この地上の人類の大部分はなお続け、イスラエルの子等やその他多くの神の子等は「压制者の杖」の下に苦しみ続けている。しかるに、バハイ紀元の数十年ならずして真理の光明は東西を照らし、神の父たることおよび人類が同胞たる福音は、世界の到るところにもたらされ、大軍国主義的専制は打倒され、世界中すべての虐げられ、圧迫されてきた民族に対しては、終局の救済の希望をもたらす世界統合の意識が生れた。一九一四年から一九一八年に起きた世界を震撼せしめた大戦は、銃砲、焼夷爆弾、エンジンの燃料等の未曾有の使用をもって、實際「火のもえくさとなって焼かれる」となった。バハオラはその文書中に政治、行政の問題を広範囲に取扱い、それ等がいかにせば最もよく解決さるべきかを示し、キリストが未だなまなかつた方法によって、彼は「政事はその肩にあり」とした。「永えの父」とか、「平和の君」とかの称号に関して言えば、バハオラはしばしば自らをキリストやイザヤがこれをいつて語った「父」の顕現なりと繰返した。これに対してキリストはいつも自分自身を「子」であるといった。バハオラは自分の使命は地上に平和を建設することであると宣言されている。ところがそれに対して、キリストは「平和ではなく、つるぎを投げ込むためにきたのである」(マタイ伝第十章 三十四節)と言ひ、事實キリスト教の時代には戦争や宗派の争いがおびただしかった。

「バハオラ」という称号はアラビヤ語で「神の栄光」である。そしてこの称号こそヘブライの予言者等によって後の日に出現すると約束された者に対してしばしば用いられたものである。イザヤ書第

四十章一—五節には次の如く書かれてある。

『あなたがたの神は言われる、「慰めよ、わが民を慰めよ、ねんごろにエルサレムに語り、これに呼ばわれ、この服役の期は終り、そのとがはすでにゆるされ、そのもろもろの罪のために二倍の刑罰を主の手から受けた」。呼ばわる者の声がする、「荒野に主の道を備え、さばくに、われわれの神のため、大路をまつすぐにせよ。もろもろの谷は高くせられ、もろもろの山と丘とは低くせられ、高低のある地は平らになり、険しい所は平地となる。こうして主の栄光があらわれ、人は皆ともにこれを見る。』

前記の予言同様、これもまたキリストと彼の先駆者たる洗礼者ヨハネの出現によって部分的に果された。しかしそれは単に一部分であつた。なぜなら、キリストの時代にはエルサレムの戦は終らなかつた。そして残酷な試練と屈辱はなお何世紀間もこの地に残されていたからだ。しかしバブとバハオラの出現によって、さらに一層完全な実現が現われ始めた。何故なら既にもうより明るい日々がエルサレムのために曙光を放ち、平和で、栄光ある将来の見込はいまや確實に見えるからである。

他の予言はイスラエルの贖い主、主の栄光に付いて、日出る東方より聖地に來ると語る。さてバハオラはパレスチナの東方、日出るかなたイランに現われて聖地に來たり、その地でその晩年二十四年間を送られた。彼がもし自由な人間としてそこに行かれたならば、あるいは故意に予言に合致させるための詐欺師の策略だと言われたかも知れないが、しかし彼は追放者として囚人としてこの地に來られたのである。彼はそこに、イラン皇帝およびトルコ皇帝によって送られた。しかし我々は彼等がバハオラの主張を支持するための証拠をあたえんとする意図のもとに行つたとは考えられない。その主

張とは彼が予言者達によって予示された来るべき神の栄光であると言う事である。

## 神の日

神の日とか終末の日とかの語句の「日」という言葉は宗教制の意味として解釈される。あらゆる大宗教の開祖等はみな各自の「日」を持っている。その各々が太陽の如くである。彼等の教えには黎明があり、彼等の真理は次第に民衆の心意と心を照らして遂にその影響の頂点に達する。それから次第にその光を失い、曲解され、腐敗し、再び新しい日の太陽が昇るまでは闇黒が地をおおうに至る。神の至上の顕示者の日は終末の日である。何故ならこの日は終りのない日であり再び夜にとつてかわることのない日だからだ。彼の太陽は決して没しないであろう。そして現世においても来世においても人間の魂を照らすであろう。事実、精神的の太陽は没することがない。モーゼ、キリスト、モハメッドおよびその他すべての予言者等の太陽は、今なお天において不滅の光をもって輝いている。しかし地上に生じた雲霧うんむがそれ等の光輝を地上の民衆から隠した。バハオラの至上の太陽はついにそれ等の暗雲を一掃し、あらゆる宗教の民があらゆる予言者等の光明に歡喜し、あらゆる予言者等がその光を反映した唯一の神をこぞつて礼拝するようになるであろう。

## 枝についての予言

イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ゼカリヤ等の予言に枝と言われる人について幾つかの言及がある。これ等の言及はしばしばキリスト教徒等によってキリストにあてはまるものとされた。しかしバハイはこれ等を特にバハオラに適應するものと見る。

枝に関する聖書中最も長い予言はイザヤ書第十一章一〜十二節である。

『エッセイの株くさから一つの芽めが出、その上に主の霊がとゞまる。これは知恵と悟りの霊、深慮とんしゆと才能の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。……正義はその腰の帯となり、忠信はその身の帯となる。おおかみは小羊と共にやどり、ひょうは小やぎと共に伏し、子牛、若じし、肥えたる家畜は共にいて、小さいわらべに導かれ。……彼らはわが聖なる山のごにおいても、そこなうことなく、やぶることがない。水が海をおくっているように、主を知る知識が地に満ちるからである。……その日、主は再び手を伸べて、その民の残れる者をアッスリヤ、エジプト、パテロス、エチオピア、エラム、シナル、ハマテおよび海沿いの国々からあがなわれる。主は国々のために旗をあげて、イスラエルの追いやられた者を集め、ユダの散らされた者を地の四方から集められる。』

アブドル・バハはこの予言および他の枝えだに関する予言について次の如く言われた。

『かの無比の枝えだの顕現けんげんする日に起るべき大事件の一つは、あらゆる民族間に神の旗印が掲揚されることである。それはあらゆる国民や民族がこの神聖なる旗、即ち氣高い枝えだそのものの下もとに集い単一なる国民となるであろうことを意味する。かくて信教と宗教の反目、人種と民族の敵愾てきざい心、愛国的軋轢あつり等らは彼等から根絶されるであろう。総てが一つの宗教となり、この地球を一つの故郷として住むようになるであろう。世界平和と一致が万国の間に実現されるであろう。無比の枝えだはすべてのイスラエルの民を集めるであろう。即ちこの週期にはまた東西南北に離散しているユダヤ人も、みなこの聖地に集合するであろう。

まことに、これ等のことはキリストの週期には起らなかつた。何故なら諸国民はこの神聖な枝えだであ

## 審判の日

一つの旗印の下もとにこなかつたからだ。しかし今の万軍ばんぐんの主しゅの週期においては、万国の民等はこの旗の下に集るであろう。同様に、世界各地に離散したイスラエルの民も、キリストの週期にはこの聖地に集められなかつたが、バハオラの週期の始めにおいて、あらゆる預言書に明らかに述べられているごとく、この聖なる約束が実現され始めたのである。諸君は今や世界各地よりユダヤ民族が聖地を目指して来るのを見得る。彼等は、彼等自身のものとして建設した村落や所有地に居住し、日々その数を増し、やがて全パレスチナ地方は彼等の住家とならうとしている。』——「質疑応答集」

キリストは偉大なる審判しんぱんの日ひに關しては多く寓話うたをもつて語り、その日に「人の子は父の栄光のうちに来るが、その時には、實際のおこないに應じて、それぞれに報いるであろう。」（マタイ伝 第十六章 二七節）と言っている。彼はこの日をもつて毒麦どくむぎは焼かれ、小麦は納屋に収められる、收穫の時にたとえている。

『世の終りにもそのとおりになるであろう。人の子はその使たちをつかわし、つまづきとなるものと不法を行う者とを、ことごとく御国からとり集めて、炉の火に投げ入れさせるであろう。そこでは泣き叫んだり、齒がみをしたりするであろう。そのとき、義人たちは彼らの父の御国で、太陽のように輝きわたるであろう。』——マタイ伝 第十三章 四〇―四三節

前述の聖書および類似の章句中に用いられた「世の終り」という語句は、多くの人々をして、審判

の**日**が来る時は、地上はたちまち壊滅するものと考えさせた。しかしこれは明かに誤りである。この句の眞の訳は「時代の完成（あるいは終局）」となるべきである。キリストは、父の**王国**が天における如く、地上にも建設さるべきであると教える。彼は「御国の来らん事を。御心の天の如く、地にも行われん事を」と祈ることを我々に教える。彼の「ぶどう園」の寓話で、「父」即ち「ぶどう園の主人は邪悪な農夫どもを破滅さすべくきたる。しかし、彼はぶどう園（世界）を破壊することはしない。たゞ「果期におよびて果を納むる他の農夫どもに」貸すであらう。地上は破壊さるべきものではない。たゞ新しく造り変えらるべきものである。キリストはまた他の機会にその日について「世あらたまりて人の子その榮光の座位に坐する時」と言っている。聖ペテロはこれを「慰めの時」、「神が聖なる助言者たちの口をおして、昔から予言しておられた万物更新の時」（使徒行伝 第三章 二十一節）と言っている。キリストが語るところの**審判の日**とはイザヤその他の旧約予言者等によって予言された**万軍の主たる父の出現と明白に同意義である**。即ち邪悪な者が嚴罰される時であり、また天における如く地上にも正義が確立され、正道が支配する時を指すのである。

バハイの解釈によれば、あらゆる神の**顯示者等**の出現は、**審判の日**である。しかし至上の**顯示者**バハオラの出現は、我々が生きているこの世界週期の最大の**審判の日**である。キリストやモハメッドやその他多くの予言者等の語るらっぱの**声**とは、天上にある者、地上にある者——**生者も死者も**——すべてのための**顯示者**の呼声である。神の**顯示者**を通して神と会合することは、これを欲する人々にとつては、神を知り、神を愛し、また神のすべての創造物と愛の中に生きる「樂園」に通ずる門である。一方、**顯示者**によって啓示された神の道を去って自らの道を選ぶ者は、それによって自分自身を我欲、錯誤、憎悪等の地獄に落すのである。

## 大 復 活

審判の日はまた復活の日であり死者の甦る日である。聖パウロはコリント前書中に次の如く書いた。

『こゝで、あなたがたに與義を告げよう。わたしたちすべては、眠り続けるのではない。終りのラッパの響きと共に、また、く間に、一瞬にして変えられる。というのは、ラッパが響いて、死人は朽ちない者よみがえらせられ、わたしたちは変えられるのである。なぜなら、この朽ちるものは必ず朽ちないものを着、この死ぬものは必ず死なないものを着ることになるからである。』——コリント前書 第十五章 五十一—五十三節

死者の復活に関するこれ等の章句の意味についてバハオラは「確信の書」中に次の如く書いておられる。

『聖典の中で述べられている「生」とか「死」とかいう言葉は、信仰の生命と不信仰の死を意味している。これらの言葉が把握できないため、大抵の人達は、顕示者を拒否したり軽蔑したりして、その聖なる御導きの光を受ける機会を逸し、あの永遠の美の模範に従うことを拒んだのである。

イエスはまさしくこう述べられた、「汝ら新に生るべし」と。(ヨハネ伝 第三章七節) 更にまた、「人は水と霊とによりて生れずば、神の国に入ることを能わず。肉によりて生るゝものは肉なり、霊により生るゝものは霊なり」と。(ヨハネ伝 第三章五—六節) これらの言葉で示されることは、どの宗教制においても、霊から生れ、聖なるものを顕示する者の息吹によって蘇ったものは誰でも、誠に「生命」と「復活」に到達し、神の愛の「樂園」に入ったものの仲間になる、ということである。そ

して、その仲間に入れなかったもの達は皆、「死」と「剥奪」、不信心の「火」、また神の「激怒」に責められる。

各時代、各世紀の、神の予言者達や、彼等の選ばれた者達が目指すところは、「生命」、「復活」、「審判」という言葉の、靈的な義をはつきり述べること以外の何ものでもなかったのである。

……もし汝が、神の知識の清澄なる水を、ほんの一滴でも飲めたなら、眞の生命は、肉体の生命ではなく靈の生命であることを容易に悟ることができよう。というのは、肉体の生命は、人間にも動物にも共通なものであるが、靈の生命は信仰の大洋の水を飲み、確信の果実を食べた、心の純潔なものだけがもつものだからである。この生命は死を知らず、またこの存在は不滅の榮冠を頂いている。まさしく次のように語られている、「眞の信従たるものは、現世と来世に共に生きる」と。もし「生命」という語が、この世での生命を意味するものであれば、死が必ずその生命に追いつくことは明白である。」

バハイの教えによれば、復活とは、粗雑な物質的肉体とはなんのか、わりもないものである。肉体は一度死ねばそれまでである。それは分解され、その原子は再び同じ肉体として組織されることはない。

復活は、神の顯示者を通じてあたえられた聖靈の賜物による個人の精神的生命の誕生である。死者がたち上る墓は、神に対する無知と怠慢の墓である。彼が醒める眠りとは、多くの人々が神の日の曙を待望している眠れる精神の状態である。この曙光は肉体を持つといなとに拘らず、この地上に住んでいたあらゆる人々を照らす、たゞ精神的に盲目な人々はこれを感じることが出来ない。復活の



日は二十四時間の一日ではなく、現在に始まり今の世界週期の継続する限り続くところの一つの年代である。現代文明の痕跡がごとごとくこの地上からぬぐい去られてもなお続くであろう。

### キリストの再現

キリストはその多くの会話中ではしばしば未来の神の顕示者について第三人称で語ったが、また時には第一人称を用いている。彼は言った「あなたがたのために、場所を用意しに行く。そして、行って、場所の用意ができたならばまたきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。」（ヨハネ伝第十四章二一三節）。使徒行伝第一章一一節に、キリストが昇天せるとき、使徒等に次の如く語られたことが書いてある。「あなたがたを離れて天上に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう」かくの如き言葉があるために多くのキリスト教徒等は「人の子」が「天の雲に坐し大なる栄光もて」来るとき、彼等は二千年前エルサレムの街路を歩み十字架上に血を流し、苦悩したそのキリストを同じ肉体的形において、見ることができようと思つている。彼等は自らの指でキリストの手足に残る釘の傷跡に触れ、自らの手でキリストの側腹の槍傷に触れ得るものと思つている。しかし確かにキリスト自身の言葉を少し反省してみればかくの如き考えは直ちに消え去るであろう。キリスト在世時代のユダヤ人はエリヤの再来についてちょうど同様の考えをもつていたが、キリストは、「エリヤまず来るべし」という予言は、昔のエリヤの人格と肉体が再来することによってでなく、「エリヤの精神と力をもって」来た洗礼者ヨハネの人格において果されたことを示しつゝ、彼等の誤りを説明した。そして次の如く言つた。もし汝等我が言葉を受けたいと願うなら、来るべきエリヤはこの人なり。耳ある者は聴くべし。」（マタイ伝第十一章

十四—十五)それ故エリヤの「再来」は異った父母から生れる他の人の出現を意味したが、しかし同じ精神と力を神によってあたえられた。同様に、キリストのこれらの言葉は、キリストの再現は、他の母から生れる他の人の出現により成就されるが、たゞ、キリストが成した如く神の「聖霊」と「力」を現わす者を意味すると解釈されるべきである。バハオラは、キリストの「再現」はバブの出現とバハオラ自身の出現によって実現されたものであると説いておられる。彼は次の如く言われた。

『太陽を例にとつて考えてみよ。

もし太陽が今、「我は昨日の太陽である」と言ったとしても、それは真実を語っていることになる。また時の経過を心に抱いて、それはあの太陽とは違ふといったとしても、それもまた真実を語っていることになる。同様に、毎日毎日が全く同一のものでしかないと言つたとしても、それはまさしく真実である。また、毎日それぞれ特定の呼び名や名称を持つために、同一ではないと言つたとしても、それも真実である。その訳は、そのものは全く同一であつても尚、人々はそれを別な呼び方で呼び、そのものの持つ特質や特性を認めようとするからである。従つて、聖なる顕示者達がそれぞれ持つている個性や相違点や共通点について考えてみるならば、總ての名称や属性を創造された御方によつて言及された、違つていて同一であると言ふこの不可解な神秘を理解でき、あの永遠の美が、いろいろな時に御自身を違つた名称や称号で呼ばれた理由について、不審に思つていた汝の疑問に対する回答が発見できよう。』——「確信の書」

アブドル・バハも次の如く言われた。

『キリスト再度の出現は民衆が信ずる如き意味ではなく、むしろ彼の後にくる約束された者を意味す

## 終末の時

る事を知れ。彼は神の国と、世界にある神の力とをもつてくるであろう。この支配は心と精神の世界にあり、物質の世界にあるものではない。何故なら、神の目にはこの物質の世界ははえの一翼に比すほどの価値もないのである。汝それを知るや。まことにキリストはその国と共に始めなき始めよりきたり、また永遠の永遠に至るまでその国と共にくるであろう。なぜならば、この意味においてキリストは始めなき終りなき純粹の本質であり、天国の本体たる神聖な実在の表現である。これはいづれの週期にも出現し、立ち上り顕現し没入する。』

キリストとその使徒達は人の子が父の栄光をもつて再現する時を区別する多くの徴候に付いて語った。キリストは言った。

『エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たならば、そのときは、その滅亡が近づいたときとりなさい。それは、聖書に示されたすべての事が実現する刑罰の日であるからだ。地上には大きな苦難があり、この民にはみ怒りが臨み、彼らはつるぎの刃に倒れ、また捕えられて諸国へ引きゆかれるであろう。そしてエルサレムは、異邦人の時期が満ちるまで、彼らに踏みにじられているであろう。』——ルカ伝第二十一章 二十一—二十四節

また彼は次の如く言った。

『人に惑わされないように気をつえなさい。多くの者がわたしの名を名のつて現れ、自分がキリスト

だと言つて、多くの人を惑わすであろう。また、戦争と戦争のうわさを聞くであろう。注意していなさい、あわててはいけない。それは起らねばならないが、まだ終りではない。民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう。またあちこちに、ききんが起り、また地震があるであろう。しかし、すべてこれらは産みの苦しみの初めである。そのとき人々は、あなたがたを苦しみにあわせ、また殺すであろう。またあなたがたは、わたしの名のゆえにすべての民に憎まれるであろう。そのとき、多くの人がつまづき、また互に裏切り、憎み合うであろう。また多くのにせ予言者が起つて、多くの人を惑わすであろう。また不法がはびこるので、多くの人の愛が冷えるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。そしてこの御国（みくに）の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣（の）べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである。』——マタイ伝 第二十四章四—十四節

これ等二つの章句においてキリストは何のおおうところもなく明らかに人の子の到来に先立つて起るべきことについて予言している。キリストがかく述べて以来の長い年月の間、これ等の徴候はことごとく実現された。これ等のどの章句の終りにも彼が再現のときを証示するであろう事件が述べられてある。その一つはユダヤ人追放の終ることとエルサレムの再建である。また他は全世界に福音の宣伝がなされることである。今日これ等二つの徴候が字句通りに実現されつゝあることは実に驚異すべきことである。もしその予言のこの部分が他の部分と同様に眞実なものであれば、明かに我々はキリストが語つたところの終末の時に住んでゐるはずである。

モハメッドもまた復活の日まで継続するであろうある徴候を示している。コーランに次の如く書いてい

る。

『神は言われた。』お、キリストよ。実に我は汝を死せしめるであろう。そして汝を我が方へ高めるであろう。しかしして信ぜざる者等の告訴より汝を清め、「復活の日」までそれ等不信仰の人々（即ちユダヤ人その他）の上に、汝に従う人々（即ちキリスト教徒）を置くであろう。すると汝は我に帰るであろう。我は汝等が相異していたことについて汝等の間に決定を下すであろう。』——コーラン

### 第三章 四八節

『ユダヤ人は言った。』神の御手が繋がれん。彼等自身の手が繋がれるであろう——そして彼等が言ったことのために彼等は呪われるであろう。然り。神の両手は伸ばされている。神自身の望みにより神は贈物を与える。汝の神より汝に降されたものはきつと彼等のうちに多くの反逆と不信仰との心を増すであろう。併して彼等は「復活の日」まで続くであろう嫉妬と憎悪を彼等の間に置いた。彼等が戦争のために烽火をあげるとき、神はそれを消し給うであろう。』——第五章 六九節

『そして、「我等はキリスト教徒なり」と言う人々については我等は聖約を受容れた。併し彼等はまた彼等が説いた処の一部を忘れてしまった。それ故彼等は「復活の日」まで続くであろう敵対と憎悪とを彼等に教唆した。最後に神は彼等の行為について彼等に語るであろう。』——第五章 一七節

第 13 章  
これ等の言葉はまたユダヤ人のキリスト教徒および回教徒への服従によって、またモハメットがかく語って以来全世紀間においてユダヤ教徒、キリスト教徒はそのいづれも内部に宗派分立し、互に抗争したることによって文字通り実現されている。バハイ紀元（復活の日）が始まってから、初めてこれ等の状態の終りに近づこうとする徴候が現われたのである。

## 天地の徴候

ユダヤ教やキリスト教や回教その他多くの經典中、**約束された者の出現**にともなう諸々の徴候について書かれてあることに不思議な類似がある。

ヨエル書中には次の如く書いてある。

『わたしはまた、天と地とに<sup>し</sup>るしを示す。すなわち血と、火と、煙の柱とがあるであろう。主の大きな恐るべき日が来る前に、日は暗く、月は血に<sup>変</sup>る。見よ、わたしがユダとエルサレムとの幸福をもとに返すその日、その時、わたしは万国の民を集めて、これをヨシヤバテの谷に携もえくだり、その所で彼らをさばく。群衆また群衆は、さばきの谷におる。主の日がさばきの谷に近いからである。日も月も暗くなり、星もその光を失う。主はシオンから大声で叫び、エルサレムから声を出される。天も地もふるい動く。しかし主はその民の避け所、イスラエルの人々のとりである。——ヨエル書

第二章 三十一—三十一節、第三章 一—二節、十四—十六節

キリストは次の如く言った。

『しかし、その時に起る患難の後、たちまち日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。そのとき、人の子のしるしが天に現れるであろう。またそのとき、地のすべての民族は嘆き、そして力と大いなる栄光をもって、人の子が天の雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。』——マタイ伝 第二十四章二十九—三十節

コーランにも次の如く書いてある。

「太陽が おゝわるゝとき

星も落ちなんとき

山も消えさせたとき……

書籍の紙葉も解かれたとき

天も覆かきを去られたとき

地獄もまた炎上してあらんとき。——第八十一章一―十二節

バハオラは「確信の書」中に太陽や月や、星や天や地に関するこれ等の予言は象徴的なものであって、単に文字通りに解すべきものではないと説明されている。予言者等は主として精神的事物に関するものであって、物質的事物に関係するものではなく、精神的光明に関係し、物質的光明に関するものではない。審判の日に関して、太陽と言う時、それは正道の太陽を指すのである。太陽は光明の至上の源泉であって、その意味においてモーゼはユダヤ教徒の太陽であり、キリストはキリスト教徒の太陽であり、モハメットは回教徒の太陽であった。太陽が光を失ったと予言者等が言う時、それはこれ等精神の太陽の純粹な教えが誤釈や誤解や偏見等によって曇らされ、民衆が精神的暗黒にいることを意味するものである。月と星とは太陽に次ぐ光明の源泉であり、民衆を指導し鼓舞すべき宗教上の指導者あるいは教師を意味するものである。月がその光を発たずと言ひ、あるいは月が変じて血となると言ひ、また星が天より落ちると言うのは、教会の指導者等が不和鬭争をなすことによつて墮落し、僧侶が俗事のみに関係し、天国のことにならずさわらず全く世俗的になることを意味するのである。

しかしながら、これ等の予言の意味は単なる一つの説明をもつてつくすことはできない。これ等の象徴は他の種々な意味においても解釈され得る。バハオラは太陽や月や星と言う言葉が他の意味で、各宗教において制定された掟と教訓に適用されることを述べておられる。何故なら後に來たる各々の顯示者によって先行の顯示者の儀式や形式や慣例や教訓等は、その時代の要求に応じて改変されるのでこの意味においても太陽や月は変化し、星は消散するのである。

多くの場合、これ等の予言が外面的意味において文字通り實現されることは、不条理であるか、不可能であるかである。たとえば月が血に変わり、星が地におちるといふ如きである。實際我々の見ることのできるもつとも小さい星は地球より数千倍の大きさである。もしその一つが地上に落ちたならば、もはやさらに他のものが落ちるべき地球はないであらう。しかしながらまた他の場合には精神的と同様、物質的實現が行われる場合もある。例えば、予言者等によって予言されたように聖地は文字通り何世紀間も荒蕪荒廢（ウツクサカサカサ）に帰していた。しかし復活の日より、イザヤの予言の如く、それは「ばらの如く歡び榮えん」としつゝある。半世紀前までは砂原に過ぎなかつた地に今や豊かな農場が創設され、土地は灌溉耕作され、ぶどう畑、オリーブの林、花園等が次第に繁茂（ハルカ）しつゝある。人間が劍を鋤（カ）に、槍を鎌にうち換える時に至つて、疑いなく、世界各地の荒野荒蕪は開墾されるであらう。砂漠から吹いて來て、附近の住民をほとんど住むにたえないように苦しめた熱風や砂のあらしはもはや過去のものとなり、全地球の氣候はさらに溫和となり、おだやかとなり、諸都市はもはや煤煙と毒臭によつて空氣を汚すことなく、外面的物質的意味においても新天地が實現するに至るであらう。



## 出現の仕方

時代の終末における彼の出現の仕方についてキリストは次の如く言った。

『またそのとき、地のすべての民族は力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の雲に乗って来るのを見るであろう。また、彼は大きなラッパの音と共に御使たちをつかわして、(その時)彼はその栄光の座につくであろう。そして、すべての国民をその前に集めて、羊飼が羊とやぎとを分けるように、彼らをより分けるであろう。』——マタイ伝第二十四章三十一—三十一節、第二十五章三十一—三十一節

これ等の章句および他の類似の章句に関して、バハオラは「確信の書」中に次の如く書いておられる。

「『天上』という語は、それが古来の栄光の曙である聖なる顯示者の啓示の座であるから、高貴と崇高とを意味するものである。これら古来の人物達(顯示者)は、いずれも母の胎内から産れて来たとはいえ、実は神の御意の天上から降りて来られたのである。彼等はこの地上に住んでいるとはいえ、「その本来の住居は、天上の領土にある栄光の隠れ家なのである。死すべき運命を持った人間達の間を歩いていながら、彼らは神のいます天上を舞っているのである。彼らは、脚なくして靈魂の道を歩み、翼なくして聖なる和合の崇高な高所に昇って行く。瞬間に、彼等は無限の空間をのり越え、一瞬にして、眼に見える王国や眼に見えない王国を横切って行く。……」

この「雲」という語は、人々の行動や願望とは相反するものを意味しているのである。既に引用し

た聖句の中でこう述べられている。「汝らは、己が氣にくわぬものを携えた使徒が現われるたびに、傲慢不遜の態度を示し、あるものをば嘘つきよとののしり、またあるものを殺害した」と。(コーラン 2・87)と。これらの「雲」という語はある意味では、旋の効力の喪失、これまでにあった宗教制の廢棄、人々の間に流布されていた儀式や習慣の廢止、信教に反対する学識者達より無学で信心深い人達の方を賞揚すること、を意味している。またもう一つの意味では、その「雲」という語は、かの不滅の美(顯示者達)が人々の心の中に疑いを投げかけ、人々が顔をそむける原因となるような飲食、貧富、榮華と没落、睡眠と覚醒などの人間的制約を受け、必滅の人間の姿をして現われる事を意味している。このような、覆いとなるものごとを総て象徴的に「雲」と呼ぶのである。

地上に住む総てのものの知識や理解の天空を、切れ切れに引き裂くのはこの「雲」である。まさしく彼は、こう述べられた。「その日に、蜜雲たちこめて、天空が引き裂かれるであろう」(コーラン 25・25)と。丁度、雲は、人々の眼が太陽を見ることを妨げるように、これらのことは、人々の魂が聖なる発光体の光を認めることを妨げるのである。次に述べる聖典中の不信心者達の言葉がこのことを証明している。即ち「また彼らはこう言っている『何とこれが使徒のすることだろうか。彼は、飯を食べたり、町を歩き回ったりしている。天使が遣わされ、一緒に警告者とならなければ、我々は信用しないであろう。』と」。(コーラン 25・7) 他の予言者達も同様に、貧困、苦惱、飢餓、この世の不幸や災難を受けて来た。これらの聖なる人達が、このような困窮や欠乏に悩まされていたので人々は不安や疑惑の荒野に迷い、当惑や混乱に陥つたのである。人々は不思議に思った。どうして、こんな細な世事からも逃れることのできない者が、神から遣わされ、地上の人々と同族達を支配すると表明し、「汝のためでなければ、我は天地にある総てのものを創ることはなかった」と、神が述べられている

様に、自らを全創造の目標であると宣言できるのであろうかと。神の総ての予言者やその仲間達の上に振りかかった試練貧困、災難や凋落たうらくについて、汝は無論知らされているであらう。汝は、彼らの信徒達の首がどのようなにちこちの町へおくりものとして送られたか、また信徒達が命じられたことが、どんなに痛ましくも妨害されたか聞いているに違いない。彼らは一人残らず神の大業の敵達の手の餌食となり、その敵達の下す判決に堪えなければならなかったのである。

最高の栄光に輝く御方が、正しいものと邪なものとを区別し、信心深いものと不信心なものを見分けられるように、邪な者達の欲求とは正反對なるこれらのことを、僕等を試すための試金石や基準として定め給うたのである。

さて、彼の言葉「そして神は、天使達を遣わすであらう……」について話そう。この「天使達」とは、聖靈の力によって援助され、神の愛の火で、総ての人間的特性や制限を消滅させ、最も崇高なお方達や、智天使の属性を身につけた人達を言うのである。

イエスの信徒達は、これらの言葉の中に隠されている意味が全く分らず、その上、彼等と、彼等の信仰の指導者達が予期している色々の御兆が現われなかつたので、彼らはイエスの時代以来、明らかになされて来たあの聖なるものを顕示する者達の真理を今もって承認することを拒んでいるのである。

このようにして彼等は、神の聖なる恩恵や、彼の聖なる言葉の不思議が降り注がれるのを拒んで来た。復活の日である今日においても、彼等の低級な状態はこの程度である。各時代に、神の顕示者の御兆が、既に言い伝えられている伝承の原文通りに、眼に見えるこの世に現われるとしたら、誰も、敢えて否定したり、顔をそむけたりできる筈はないし、祝福された人々と憐れな人々を見分けることも、また罪人達と神を畏敬する者とを区別することもできないということに、彼らは気づいていないので

ある。公正な判断をせよ。もし福音書中に記載されている数々の予言が、文字通りに実現して、マリアの子イエスが、天使達を従えて雲に乗り、眼に見える天上から降りて来たとしたら、一体誰が敢て疑い、誰が敢て真実を拒み、また、軽蔑しようとするであろうか。いやそれどころか、地上に住む総ての人々は忽ち非常な驚きに陥ってしまい、誰一人として一言も言えなくなり、ましてや、真実を拒否したり受け入れたりすることなど、とてもできはしないであろう。」

上述の説明によれば、いやしい人間の形体をもつて女性から生れ貧困で教育もなく、地上の権力者等から軽蔑された人の子の出現は、実に彼が地上の民を審判し、放羊者がその緬羊を山羊から區別する如く、地上の民をそれぞれにわけける試金石である。精神の眼が開いている人々はこれ等の雲を透視して、彼が顯わそうとして来た処の「能力と大なる栄光」即ち神の栄光そのものを喜ぶことができる。また偏見と錯誤に眼を閉じている他の人々は黒雲を見得るのみで、幸な陽光のない暗黒裡に摸索を続けるであろう。

『見よ、わたしはわが使者をつかわす。彼はわたしの前に道を備える。またあなたがたが求める所の主は、たちまちその宮に来る。その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう。彼は金をふきわけける者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである。』

見よ、炉のように燃える日が来る。その時すべて高ぶる者と、悪を行う者とは、わらのようになる。しかしわが名を恐れるあなたがたには、義の太陽がのぼり、その翼には、いやす力を備えている。」

マラキ書 第三章一一二節 第四章一一二節

## 第十四章 バハオラとアブドル・バハの予言

あなたは心のうちに『われわれは、その言葉が主の言われたものでないと、どうして知り得ようか』  
と言うであろう。もし予言者があって、主の名によって語っても、その言葉が成就せず、またその事  
が起らない時は、それは主が語られた言葉ではなく、その予言者がほしいままに語ったのである。そ  
の予言者を恐れるに及ばない。——申命記 第十八章二十一—二十二節

### 神の言葉の創造力

神のみがたゞその欲するままをなす力をもつ。神の顕示者の最大の証拠は、その言葉の創造力——  
即ち人事百般を改造し変革する力でありかつあらゆる人間の反対に打勝つ力である。豫言者の言葉を通じて  
神はその意思を表明する。そしてその言葉が速やかにあるいは漸次に実現されることは豫言者の主張  
の証拠であり、また、彼の靈感が純粹なことの最も明らかな証拠である。

『天から雨が降り、雪が落ちてまた帰らず、地を潤して物を生えさせて、芽を出させて、種まく者に

種を与え、食べる者にかてを与える。このように、わが口から出る言葉も、むなしく私に帰らない。

私の喜ぶところのこをなし、わたしが命じ送った事を果す。』——イザヤ書第五十五章十一節

洗礼者ヨハネの子弟がキリストの許に行き、「来るべき者は汝なのか、あるいは他に待つべきか」と問うた時、キリストの答は単にキリストの言葉によってなされた結果を示すものであった。

『行って、あなたがたが見聞きしていることをヨハネに報告しなさい。盲人は見え、足なえは歩き、らい病人はきよまり、耳しいは聞え、死人は生きかえり、貧しい人々は福音を聞かされている。わたしにつまづかない者は、さいわいである。』——マタイ伝第十一章四―六節

さてこゝで我々はバハオラの言葉が神の言葉特有のこの創造力を有するものであるかどうかを示すためにどのような証拠があるかをみよう。

バハオラは、為政者達に世界平和を設立することを命じられた。そして一八六九年ないし一八七〇年以來の戦争政策のその延長は、幾多の古来の王朝を覆した。一方相続いた戦争のどれをとってみても、勝利に終わったところで、実となったもの即ち、それから得たものはますます少なくなった。そして遂に、一九一四年から一九一八年にかけての欧州大戦では、勝者に対しても負者に対しても同様に戦争が悲惨なものであるという歴史的に驚くべき事実を示した。

バハオラは同様に、支配者達が政治的権力を真の一般福祉に対する手段として、彼等の支配のもとにある人々の信任者と成り行動することを命じられた。社会立法に向つての進展は、前例なき程のものとなり、そして、この精神的命令に応えなかつた諸国にあっては、革命により新しいより多くの代表による政府が権力を持つようになった。

彼は貧富の極端を制限することを命じられたが、それ以来最低生活の標準を設け、収入や遺産という富に対して累進的に課税する法令が絶えず問題となつて来た。彼は奴隷の廃止を命じられたのであ

るが、それ以来解放への進歩は世界のすみずみにまでひろがって来てゐる。

バハオラは平等の責任や平等の権利、特権によって表される男女の平等を宣言されたのであるが、その宣言以来、久しく婦人を束縛した鎖は打ち破られ、婦人は男子と同等の者であり、また同伴者として正しい地位を急速に獲得しつゝある。

彼は宗教の根本は一つであると宣言された。そしてその宣言につづく期間に、世界中の真面目な心のある人々が寛容や、相互の理解や世界の目的のための協力を増すために、敢然と努力しているさまが見られたのであり、何処にあつても宗派心は弱まり、その歴史的立場がますます維持し難くなつた。宗教における排他的基盤は、排他的国家主義を破壊すると同じ力によって破壊されていった。

彼は一般教育を命じられた。そして真理の独立探求を、精神的活力を有する証拠とした。現代の文化はこの新しい酵母により深く覚醒したのである。幼児のための義務教育や、大人のための教育の便宜の拡張は一般政府の基本政策となつた。市民間の独立精神を故意に束縛しようとする国家は、その政策によって内には革命を惹起し、その隣国には疑念と恐怖をあたえた。

バハオラは国際補助語の採用を命じられた。そして、ザメンホフや他の者は、彼の呼びかけに応えて、この偉大な仕事と機会に対して彼等の生命と才能を捧げた。

さらに、バハオラは、人心に新たな希望を、そして社会に新理想を起さしめる新精神を人類に吹き込まれた。歴史を通じて、一八四四年のバハイ紀元の夜明け以来の出来事程に、劇的で印象的な事柄はない。すべての分別ある人々は、人類が最も恐るべき危機を通り抜けつつあることを認める現在に至るまで、使い古された理想、習慣、態度、制度により引延ばされた<sup>ば</sup>びし過去の権力は、年々弱められていった。一方において、我々は、進化の眞の道を啓示せられたバハオラの教えの光がある処に、

新しい創造が起りつゝあるのを見、他方において、我々は、その光が妨げられ無視されたすべての処に、災害と失望を見る。

しかし、信仰の厚いバハイにとつて、これらの数えきれない証拠は、印象的ではあるが、バハオラの精神的崇高さを、はっきりとした尺度で表し得ない。地上における彼の生命と、彼の靈感を受けた言葉の抵抗し難い力は、神の意志の唯一の眞の標準として存在する。

バハオラのより詳細な豫言とその実現についてさらに研究するならばなお有力な確証を得るであろう。これ等の豫言の中からその權威についてもはや議論の余地があり得ない数個の実例を次に述べてみよう。それ等はいずれもその実現の前に広く公表され熟知めづらされたものである。これ等の豫言の多くを記載した各国元首への彼の書簡は一卷の書籍として編纂されその第一版は十九世紀の終りにポンペイにおいて出版された。その後数版を重ねている。我々はまた注目すべきと思われるアブドル・バハの豫言をもいくつか例示するであろう。

### ナポレオン三世

一八六九年バハオラはナポレオン三世に書簡をよせ、彼の戦争欲とさきにバハオラの送られた書簡に對して加えた彼の侮辱を戒めておられる。その中には次の如き手厳しい警告がある。

『汝のなす処は汝の国土を混乱におとし入れ、その報いとして主権は汝の手より離れたり、汝が明らかに誤っていたことを知るであろう。起ち上り、この大業を助け、この正しき路において神の聖靈

(キリスト)に従わなければ動乱はやがてその他の全民の上に至らん。汝、虚榮心に自惚れるや。我が命にかけて言う、誠にそれは持続しないものである。汝もしこの強き綱にすがらねば、それは汝を



去らん。屈辱は当に汝の背後に迫っているが、汝はこれをかえりみない。」

当時その権力の頂点にあったナポレオン三世がこの警告にいささかの顧慮をも払わなかったのは言うまでもない。彼はその翌年プロシヤと戦端を開いた。彼はその軍隊が一挙ベルリンを落すであろうことを確信していた。しかるにバハオラが豫告された悲劇はたちまち彼の上に降りかかった。彼はザールブルックにおいて敗れ、ヴァイセンブルグに敗れ、メッツに敗れ、遂にセダンにおいても壊滅の悲運に陥った。彼は遂にプロシヤにとられの身となり、二年後にはイギリスにおいて悲惨な最後を上げるに至った。

## ド イ ツ

バハオラはその後同様の厳肅な警告をナポレオンの征服者等にあたえられたのであったが、彼等もまた同様に耳を傾けずみなひとしく悲惨な運命に陥った。アドリヤノーブルにおいて筆を起し、アツカの監禁生活の初年頃に終った「アグダスの書」中に、バハオラはドイツ皇帝に対して次の如く書かれた。

「ベルリンの国王よ……その地位において汝にまさりし者（即ちナポレオン三世）、その地位において汝より高かりし者を記憶せよ。彼は今何処にありや。彼の財産は今何処にありや。覚醒せよ。しかして睡れる彼等の徹を踏む勿れ。我嘗つて、迫害の「万軍」より我等にいかなる圧迫を加えるかを彼に知らせしに、彼は神の聖なる書簡」を抛ちたり。かくて汚辱は四方より加わり、遂に彼は破滅のままたその身を果たせり。国王よ彼に就いて、また諸都市を攻略し、しかして神の僕を支配しきたれる

汝の如く彼等についても、深く考えよ。神は彼等を宮殿より墓穴に落せり。惧れよ注意深くあれ……。  
 おおライン河畔よ。我、汝が流血に浸れるを見たり、そは復讐の刃が汝に向つて抜かれ、汝もまた報復を図らんとすればなり。我、また今日ベルリンの栄華に輝やくを見れども、しかもその動哭の声を聞く。」

一九一四年より一八年にかけてのドイツ戦争の期において、特に一九一八年春のドイツ最後の大攻撃の期間中、この名高い豫言は、イランにおけるバハイ信教の反対者等によつて盛んにバハオラ不信の手段として引合いに出されたのであつた。しかるに勝ち誇つたドイツのこの勢力がたちまち敗退の悲境に陥つた時、バハイ攻撃の敵等の努力は徒勞に帰し、彼等がバハオラの豫言に対して放つた悪評は、そのまゝ、かえつてバハオラ賞讃の有力な手段となつたのである。

## イ ラ ン

横暴なる皇帝ナセルディンがその權威の頂上にあつたときに書かれた「アグダスの書」中に、バハオラはイランの主都にして彼の生誕地たるテヘランの市を祝福しこれについて次の如く言われた。  
 『タの地(テヘラン)よ。汝なにごと悲しむ勿れ。神は汝を世界の歡びの泰明所とせり。もし神にして欲せんか、神は正義をもて統治し、狼群にけ散らされたる神の小羊を集むる者を以つて汝の王座を祝福せん。誠にその者は歡喜と喜悅とをもてバハの民に顔を向け鑿應せん。その者は神の眼には人々の中で宝石の如く貴重なり、彼に神の榮光。又神の啓示の国に住む総ての者の榮光永く宿らん。  
 大いに喜べ、神は汝の中にその榮光の顯示者を生むことにより、汝を「彼の光の曙」となしたればな

り、汝に与えられし御名に喜べ。その名を通して恩寵の「昼の星」はその光輝を奔出せり。又その華麗さを通し天地共に照り映えぬ。やがて汝の内部は変化し、権力の支配は民衆の手に落ち至らん。まことに汝の主は「全智」にして、彼の権威いかなる物をも抱擁す。汝の主の恩寵深き恵沢に心安らけくあれ。まことに神の慈愛の眼は永遠に汝を視守り給う可し。汝の騒ぎ立つ心の、平和と全き平穩に変われん日、近づきつゝあり、これ「不可思議の書」に定められたる処なり。」——「落穂集」

一一〇一一頁

イランはバハオラの豫告された混乱よりようやく脱し始めたが、既に立憲政治はその緒につき、光明の時代が近きにあるという徴候は歴然としている。

## トルコ

バハオラはトルコの獄に監禁されていた時（一八六八年）トルコ皇帝およびその首相アリ・パシヤに最も厳肅莊重な警告をあたえられた。アッカの兵舎よりトルコ皇帝にあたえた書簡には次の如く書かれた。

「自らを人間最偉の者となす者よ。久しからずして汝の名は忘却され、汝は敗残の身とならん。汝の意見によればこの「世界に生命を与うる者」「平和を召来する者」は犯罪者で、反逆者である。婦女や小児や、泣き叫びつつある嬰兒等は汝が憤怒と圧迫と憎悪に値いするいかなる罪を犯せしや。汝の国に反抗せず政府に対して革命の煽動をなしたることのみならず、日夜平和に神の名を称えて祈りし多くの魂を汝は迫害せり。汝は彼等の財産を略奪し、横暴により彼等はすべてのものを奪われた。：

：神の前には一握のちりといえども汝の国土と栄光と主権と支配とにまされり。もし神が欲するなら、神は汝を砂漠の砂の如く駆逐せん。久しからずして彼の怒りは汝が上に来たり、革命はいいついで汝の手中より起り汝が国土は分裂せん。そのとき汝慟哭悲嘆すとも汝を救い汝を庇護する者はあらざるべし。……心せよ。神の憤怒は近きにあり。久しからずして「指令の筆」によって記されたものを、汝は見るであらう。」

また彼はアリ・パシヤに次の如く書かれた。

『お、首領よ、汝のなす処は神の予言者モハメッドをして「至上の樂園」に嘆息せしむ。世は汝をして傲慢ならしめ、その驕りいと高ければ汝「御顔」より顔を背けたり。その「御顔」を通し「最上の集合」の人々は御光を受け居りしに。汝はやがて破滅に至らん。汝は我に危害を加うるためにイランの君主と相結ぶ。しかも我は偉大なる全能者の発生地より神の愛し給う人々の眼を淨むる処の大業を汝に持ち来りしなり……』

汝は神が宇宙に点じ給える「火」を消しうると思いたるや。彼の眞の魂に誓つて言う。否、そのよるなことはない。汝、それを理解するならば。汝がなしたる処によりて、その焔火は消されるどころか、一層さかんになる。やがてそれは世界とその民を包むに至らん。……やがて神秘の地（アドリヤノール）とその周囲に変動が起り、その地は国王の手より離れ、動乱が相い次ぎ、慟哭が起り、頽敗は各地に出で、事態は混乱に陥る。これらのことは、幽囚の人々（バハオラとその追隨者達）に迫害の方軍を加えられた処より起るのである。秩序は変化し、事態は悲しむべきものとなり、砂石は人氣のない丘になき、樹木は山上に泣き、あらゆるものは涙を流し、人々は大いに困窮する。

かくのごとくそれは聡明な「計画者」によって決定された。その指令は天地のいかなる軍兵をもつてしても逆うことができず、あらゆる国王や統治者をもつてしても彼の欲する処を曲げることはいできない。災禍はこの「ランプ」のための油であり、これ等の災禍を通じてその光は増されん。それは汝等のよく知る処なれば。圧迫者等によつてなされるあらゆる圧迫はまったくかゝることのまえぶれであり、それ等によりて神とその大業との出現は世界の人々の間に拡まらん。』

彼はさらに「アグダスの書」に次の如く書いておられる。

『おゝ二つの海の岸に臨める地点（即ちコンスタンチノーブル）よ。不正の王座は汝の中に置かれたり。併して汝の中に憎悪の火は点ぜられ、「最高の集合」と「高尚な王座」を廻り侍る者はそれがために嘆く。我等は汝の地において賢者の上に愚政が行われるを見、光明を覆う暗黒を見る。しかも汝は得々たり。汝の外飾が汝をして自負せしめるや。汝は間もなく創造の主によりて滅亡されん。しかしして汝の妻子や汝の民もまた嘆かん。かく聡明なる全智な者は汝に予言せり。』

これ等の警告が発せられてから、この偉大な帝国を襲った度々の災厄は、まさにこの警告の予言的意味を雄辯に説明するものである。

## アメリカ

一八七三年頃書かれた「アグダスの書」において、バハオラはアメリカに対して次の如く呼びかけ

ておられる。

『おゝアメリカの統治者よ、共和国の大統領よ、支配者よ、……かの高き發生地よりの呼び声を聞け。即ち發言人、全智者なる我の他に神はなし。望むらくは、傷める四肢を正義の手をもって纏帯し、  
 圧政者の強き手足を汝の主、統治者、全智者の指令の鞭をもって破砕せよ。』

アブドル・バハはアメリカおよびその他の地でなした講演で、国際平和の旗印がまずアメリカに起てられるであろうという希望と、祈りと、確信とを述べられた。一九一二年十一月五日オハイオ州シンシナティにおいて彼は次の如く述べられた。

『アメリカは高貴な国家で平和な旗手であり、世界のあらゆる地方にその光明を送るものである。この国の如く他国よりの妨害をうけず、侵略を免かれ世界平和を助ける可能性のある国は他にない。幸にアメリカは全世界の国々と平和であり、世界平和と同胞愛の旗をかかげるに相応しい国である。国際平和の声がこの国によつて発せられる時、各国は賛同するであろう。そして各国は五十年前に啓示されたバハオラの教えを受け入れるであろう。彼はその聖なる書簡中に、諸民族間の問題を決裁し、平和を樹立する国際会議には最上最智の者を派遣すべきことを世界の各国の議会に對して要求された……かくて我々は始めて予言者等が夢想した処の人類の議會を有することになるであろう。』

バハオラとアブドル・バハのアピールはすでにアメリカ合衆国において大なる反響を見た。そしてこの国の如くバハイの教えを快速に受け入れた処はなかった。しかしながら諸国家を国際平和へと喚起するアメリカの役割はいまなお部分的であるに過ぎない。バハイはその将来の發達を期待している。

## 世界大戦

注 国際連合の創立総会が米國サンフランシスコ市において開かれたのは興味ある事實である。

バハオラおよびアブドル・バハは共にしばしば一九一四年より一八年にわたる世界大戦が起るべきことを、驚ろくべき的確さで豫言されている。一九一二年十月二十六日カリフォルニア州サクラメントにおいてアブドル・バハは次の如く語られた。

『今日歐洲大陸は一つの兵器庫の如きものである。点火をまつ火薬庫の如きものでたゞ一閃の火花によつて全歐洲は燃えあがらんとする状態にある。特にバルカンの問題が世界の問題になつて今日、危険は一層切迫している。』

アメリカおよびヨーロッパにおける多くの講演で、彼はまた同様の警告をなしている。一九一二年十月カリフォルニア州においてさらに次の如く講演された。

『我々は今黙示録第十六章に示されているハルマゲドンの戦の前夜にいる。今より二年の後一閃の点火は全歐洲を燃えたゞせるであろう。あらゆる国々の社会的不安と、黄金時代に先たつべき宗教的懷疑の増大は、——すでにこゝにあるが——ダニエルの書およびヨハネの黙示録に予言された如くまさに全歐洲を燃えたゞせようとしている。一九一七年までに諸王国は崩壊し、大變動は地上を震動せしめるであろう。』(一九一四年九月二十六日合衆国シカゴ「ノース・ショーア・レヴュー」誌にてコリン・トルー夫人が報道せる処による)

大戦の前夜彼は次の如く言われた。

『文明諸国の大乱戦は目前に迫っている。ものすごい大衝突は今まさに勃発しようとしている。世界は今や最も悲惨な戦闘の先端にある。……巨大なる軍隊——数百万の軍隊——は、今動員され、その国境に配備されている。彼等は恐るべき戦闘の準備をしている。今やただわずかな衝突を機としてたちまち戦乱がひきおこされようとしており、このようなことは過去の人類歴史にはかつて記録された事がない。』(一九一四年八月二日ハイファにおいて)——「スター・オブ・ザ・ウエスト誌第五卷一六三頁

## 大戦後の社会的紛争

バハオラ、アブドル・バハは共にまた世界一般に広がった無宗教、偏見、無知、迷信等の必然的結果として大なる社会的動乱、闘争、災厄の時代があることを豫言された。大なる国際的軍事的衝突はこの動乱の一面を語るものにすぎない。一九二〇年一月に著した書簡中にアブドル・バハは次の如く述べられた。

『お、汝等真理の愛好者よ、お、汝等人類の僕等よ、汝等の思想やいと高き意向の甘美なる芳香は我に吹き渡ったので、我の魂は汝と交わろうとして止まない。』

世界が巻き込まれている混乱の何と悲しい事を、又地球上の諸国家が人間の血で汚され、否彼等のその土地が凝血に変わっていることかを汝の心に深く考えよ。戦火は非常に荒々しい大火をひきおこした。古代、中世、又現代の世界はこれと同類の物を決して目撃しなかった。戦争という名の榨は幾多の人類頭脳を砕き、おしつぶした。否これ等犠牲者の運命はもつと苛酷だった。栄華を極めた諸国は



荒廢した国と化し、諸都市は平坦な地面となり平和な村々は廢墟と化した。父親は息子を失い、息子は父を失ってしまった。母親は自分の息子の死を悲しんで血涙をしぼり、いとけなき子等は孤兒となつた。婦人は家なきさすらい人となつた。一言にしていへば人類はあらゆる面で墮落した。みなし兒の悲しみの叫びは非常に高い、又大空に反響する母親のなげきは傷ましい。

これ等すべての出来事の第一の原因は、人種的、国家的、宗教的、政治的等の偏見である。そしてその偏見の根は、たとえ宗教的、人種的、国家的、又政治的なものであつたとしても、それは、使ひ占されしかも深く根ざされた伝説である。これ等の伝説が続く限り、人類の組織の基礎は不安定で、人類それ自身が絶え間ない危機にさらされているのである。さてこの輝かしき時代に、——即ちすべての存在物の本質が表わされ、すべての創造物のかくされた秘密が明らかにされ、真理の朝日が輝き始め、世界の暗黒を明るく変えた時——世界に取り返しのかかぬ破滅をもたらすような恐ろしい大殺戮が可能だという事は適當なことであるか、又有り得る事だろうか。いや、そんな事はありえない。キリストは世界中の諸民族に和解と平和を求めた。彼はペテロに、彼の劍をさやに納めよと命じた。彼の希望や助言はかくの如き物であつたが、彼の名を持つ人々が刀のさやをはらつてしまつたのだ。彼等の行爲と福音書の明白な経句の間の差の何と大きい事か。

六十年前、輝ける太陽の如くバハオラはイランの高空高く輝き渡つた。世界が暗黒に包まれ、この暗黒が悲惨な終末をはらんでおり、恐しい闘争に通ずる事を述べられた。彼のいた獄市アツカで、バハオラは誤解の余地なき言葉でドイツ皇帝に呼びかけ宣言された。即ち恐しい戦争が起つてベルリンは悲しみの呼び声を上げるだろうというのである。同様に、トルコ皇帝によつて害を受けた囚人としてアツカの岩の中にいた時、彼は、はつきりと力を込めて、コンスタンチノープルは重大な争乱のえじき

となり、それ故に婦人や子供は悲しみの声を上げるだろうという書簡を皇帝に送られた。約言すれば彼は世界中の主なる支配者や君主に書簡を送られたのであり、彼の予言は見事に実現した。彼の栄光の筆より戦争防止の教えが噴流し、これ等は遠く広がっていった。

彼の第一の教えは真理の探求である。盲目なる模倣は人間の心を殺すが、これに反して真理の探求によって世界は偏見の暗黒から解放されると彼は宣言された。

彼の第二の教えは人類は一つであるという事である。あらゆる人々は唯一の羊の群であり、神はそれを愛する羊飼である。彼は最大の慈悲を人類に与え、人類すべてを一つと見なした。『汝は神の創造物の間に何等の差異を見い出すことはできない。』彼等はすべて神の僕であり、誰もが神の恵沢を求めている。

彼の第三の教えは、宗教は最も力強い砦だというのである。それは敵意や、憎悪の原因であるよりはむしろ統一を導くだろう。もしそれが敵意や憎悪に通ずるなら、それを持たない方がよい。というのは宗教は薬のような物で、もしそれが病を一層重くさせるならむしろ捨てた方がよいのである。

同様に宗教的、人種的、国家的、又政治的な偏見はすべて人間社会の基礎を破壊し、流血に通じ、人類の上に廃墟を積み上げる。これ等の物が続く限り戦争の恐怖は続く。唯一つの療法は、世界平和である。そしてこれは諸政府や民族を代表する世界裁判所によってのみなしとげられる。あらゆる国家的および国際的問題はこの裁判所へ委ねられ、そのいかなる決定も施行されるべきである。もしある政府や民族が賛同せぬ場合、全世界は打って一丸となり、それに対して立ち上るべきである。

又バハオラの教えの中には男女の権利の平等があり、その他の類似の教えの多くが彼の筆によって啓示された。

現在に至り、これ等の原則は世界の生命の本質であり、眞の精神の具体化である事が明確となった。今や汝等人類の僕は、世界を神の都の光で照すために、世界を物質主義と人間偏見の暗黒から解放するように心から努力すべきである。

バハオラを称賛せよ、汝等は世界中の色々の学校や制度、原則等に遁脱とんぱくしている。今日において、これ等聖なる教え以外にない。人類に、平和や平穩を保証し得るものはこれ等の教えなくしてこの暗黒は決して去らず又これ等の慢性的疾病は決して癒やされまい。否これ等は日一日とひどくなるだろう。バルカン半島は不安定のままであろうし、その状態はますます悪化するだろう。征服された者達は服従することなく、新しい戦火の口火となるあらゆる機会をとらえるだろう。現代の世界的運動はその目的と意向とを遂行すべく全力を上げるだろう。左翼運動は大なる重要性を持ち、その影響は広がるだろう。

それ故に啓発された心、天上の精神と神聖な力を持ち、バハオラの恩寵により助けられて、汝等神の恵沢多き賜物、即ち全人類に対する慰安と安らぎの賜物を世界に与えるよう努力せよ。』

一九一九年十一月の談話中に彼は又次の如く語られた。

『バハオラはしばしば無宗教およびそれに必然的な無秩序状態が発生するであろうと予言している。この混乱は未だ自由に対して用意のない人々の間に余りに大きな自由が与えられることに原因する。その結果民衆自身の利益のためと、この無秩序と混沌状態を防止するために、一時強制的政府が現出するであろう。各民族が完全な自決と行動の自由を欲することは明らかである。しかし彼等の中にはまだその用意のないものがある。世界の姿勢は概して無宗教であつて、これは必然的に無秩序状態と混乱を

きたすゆえんである。この大戦に続く平和の提案はたゞ一道の黎明の光に過ぎず、平和の日の出でないことは、予の常に言う処である。』

### 「神の国」の出現

しかしこの不安を極めた時代にもなお神の大業は栄えるであろう。個人生活あるいは党派、宗派、国家的利益等のための利己的競争より起る災厄は人々を失望せしめ、「神の言葉」によって与えられる救いに向わしめるであろう。災厄が多ければ多いほど人々は真の救いに向うであろう。バハオラはイラン皇帝に送った書簡中に次の如く書いておられる。

『神は苦難をこの緑の牧場の暎の雨となし、天地を照す彼の「ランプ」の灯心となし給うた。……苦難によつて、彼の灯火は輝き、彼の讚美は不断に明るい。これは古来から今に至るまで変らない神の手段である。』

しかし、バハオラもアブドル・バハも共に最も確信をもつて精神的態度が急速に唯物論に勝ち、その結果として最大平和が到来することを豫言されている。一九〇四年アブドル・バハは次の如く書かれた。

『知れ、艱難や不幸は日々に加わり、人々は難澁する事を。歡喜や幸福の門は四方に閉されるであろう。そして恐るべき戦争が起るであろう。失望や落胆はあらゆる方面から人々をかこみ遂に神に向うの余儀なきに至らしめるであろう。そのとき大なる幸福の光が東天を染め「ヤー・バハー・オール・アブ

ハ」の叫びは四方に起るであろう。』——「戦争と平和についての編纂物」(二八七頁)に引用され  
たL・D・B氏への書簡。

一九一四年二月に、世界列強国のうち信仰に入る国があるかと問われたとき彼は次の如く答えら  
れた。

『世界のすべての人々がみな信者となるであろう。この大業の始めの頃と、今日の状態とを比較すれ  
ば神の言葉がいかに速かな影響を与え、又いかに神の大業が世界にゆき渡っていくかが分るであろう。  
……必ずやすべてが神の大業の下に集るであろう。』

世界の統合は今世紀中に達成されるとアブドル・バハは宣言された。

ある書簡の中で彼は次のように述べておられる。

『人類家族の全メンバーは、ますます相互に依存し合うようになってきている。このことにかんして  
は国民も政府も、都会人も田舎の人も同様である。というのも、政治的連りが全ての人民、民族を統  
合させ、商工業・農業・教育のきつなは毎日の如く強化されているので、誰も自給自足をすることは  
できなくなつたからである。この故に、今日全人類の統合を達成することが可能である。誠にこれは、こ  
の不可思議な時代、この栄光ある世紀における驚異の他の何ものでもない。過去の時代はこのよう  
な驚異を有することはなかった。つまり、今世紀は光の世紀であり、無比にして前例のない栄光と威力  
と光明がこの世紀に賦与されているのである。この故に、毎日のように新しい不思議が驚異的に展開  
され、ついに人間間とそのローソクがいかに輝やかしく燃えたつかを示すようになるであろう。』

ダニエル書の最後の二節に次の如き隠語がある。

『待っていて千三百三十五日に至る者はさいわいです。しかし、終りまであなたの道を行きなさい。あなたは休みに入り、定められた日の終りに立って、あなたの分を受けるでしょう。』

これらの言葉の意味を解こうとして多くの試みが学者等によってなされた。この著者が出席した席での卓話で、アブドル・バハは、ダニエル書の豫言の成就を、回教の時代の始まりの日から数えられた。

アブドル・バハの書簡に、この豫言がバクダッドにおけるバハオラの宣言の百年目、即ち一九六三年を指すものであることが明示されている。

『さて汝が解説を求めたダニエル書の聖句、『待っていて、一千三百三十五日に至る者はさいわいである』に関して、これらの日は大陰暦ではなく太陽暦で数えられたものである。そしてこの計算によれば、真理の太陽の夜明から一世紀が経過した時、神の教えが至上にしっかりと樹立され、聖なる光明が東から西に世界中に溢れるであろう。それから、この日に、信仰厚き者は喜悅するであろう。』

### アッカとハイファ

ミルザ・アーマド・アに関するアブドル・バハの豫言をミルザ・アーマド・ソーラブは彼の日記に次の如く記している。これはアブドル・バハが一九一四年二月十四日ハイファのバハイ巡礼宿舎のまどしたに坐して語られた言葉である。

『この巡礼宿舎よりの眺望は非常によい。ことにバオラの聖なる靈屋を望む点ははなはだよい。將來アッカとハイファの間はつながり両市は一大首都の両区をなすであろう。予はいまこの風景を見渡してこれが世界屈指の商業中心地となる事がはつきり分る。この大なる半円形の湾は最上の海港となり、世界船舶の避難所となるであろう。各国の最大の船舶は世界各地より無数の男女を乗せてこゝへくるであろう。丘陵と平地には最も近代的な建物がたち並ぶであろう。産業は盛になり、種々な博愛的設備が設けられるであろう。文化文明の精華は各国よりこの地にもたらされ、それらの芳香は集つて、人類兄弟愛のみちしるべをなすであろう。すばらしい花園、果樹園、密林、公園等は到る所に設けられるであろう。夜はこの大都市に電灯がかまやき、アッカ、ハイファ間の沿岸は電飾の一道をなすであろう。カルメン山の両側より強力な探照灯が海上船舶の往来を照らすであろう。カルメル山そのものが山麓より頂上まで灯火の海に没するであろう。カルメル山上に立つ者とこゝに来る船客等は世界で最も崇高なそして神々しい夜景に目をみはるであろう。

この山の到る処から『ヤー・バハール・アブハ』のシンフォニーが起り、夜明け前には調子のよい声をとまなう恍惚たる音楽が全能者の王座に向つて奏されるであろう。

実に、神のなす処は神秘にして測るべからざるものである。シラズとテヘランと、バクダッドとコンスタンチノーブルと、アドリヤノーブルとアッカおよびハイファとの間にいかなる外的な関係があるか。しかし予言者等によつて語られた予言は果されるために神は忍耐強く一步步々その確固としてしかも永遠の計画に従つてこれ等の都市を通して働いた。救世主の黄金時代に關するこの約束の金糸は聖書を一貫している。そして神はその欲する時にそれ等を出現せしむべく決つてゐる。一語といえども無意味で表現されないものはない。』

## 第十五章 回顧と展望

「おゝ友等よノ恩恵は完全であり、論証は満たされ、証拠は現わされ、また証明は実証されたことを証言する。今や世俗超脱の道に於ける汝等の努力は、何を示さんとするか見せよ。かくて聖なる御恵みは、汝等と、また天と地にある者等に十分与えられている。全世界の主なる神に御栄えあれ。」  
「隠されたる言葉」

### バハイ大業の進展

世界中のバハイ信教の進展を詳細にこゝに述べる余地のないことは遺憾である。この興味ある問題およびこの大業の開拓者や殉教者に関する多くの感動すべき物語については多くの章が必要である。しかし我々は極く手短かにその概略を述べるに止めよう。

イランにおいては、この啓示の初期の信者等はその同国人等の手で極端な反対、迫害、虐待を受けた。しかし彼等はみな勇敢と堅実と忍耐とをもってあらゆる災厄や試練に直面した。彼等の洗礼は彼等自身の血の中においてであった。なぜなら無数の人々が殉教者として殺されたのである。またさらに、それ以上の人々がむち打たれ、投獄や略奪や追放やその他の虐待を受けたのであった。イランにおいて



は六十余年間も、バブやバハオラに従うことを承認するものはみなその財産や自由やまたは生命をも犠牲にする危険にさらされていた。しかもこの徹底した凶猛な圧迫も塵埃の雲が朝日の出る事をささざる事ができないのと同様に、この信教の進展を阻止することはできなかった。

注現在においてはイラン全土を通じて都市村落はては遊牧の民の中にまでバハイ信教を発見する。

ある村々は全村こぞってバハイであり、また他の村々ではその住民の大部分がこの信者である。互いに激烈に相反目していた多くの宗派から集ってきて、彼等は今や互いに相親愛するに至り、それは単に信者間のみならず、人類の融合向上のために、すべての偏見と鬭争の廢除のために、世界に神の国を建設するために働くあらゆる地方のあらゆる人々にまで及んでいる。

これより大なる奇蹟があり得ようか。たゞ一つある。それはこれ等の人々が目的とする処が全世界を通じて実現されることである。しかもこのより大なる奇蹟が進展しているという徴候は十分に見える。この信教は驚くべき活力を示し、あたかも小麦粉に対する酵母酵母の作用のように、人類と社会を変化改善しつゝある。

古来の諸宗教の信徒に比して比較的少数のバハイは未だ取るに足りないものに見えるかも知れないが、しかし、バハイは、近き将来、東洋や西洋の大衆が殺到する新しい秩序に奉仕するという最上の特権を聖なる力が彼等に与え、祝福していることを確信している。

それ故にもろもろの国において未だその光の起源を知らない清純な心の持ち主により聖靈が反射されていくことは確かである。又バハイ信教の成長がバハオラの教えの中のいくつかをおし進めんとするバハイ共同体以外の多くの努力の中にも立証されうる。しかしながら古い秩序には、恒久的基盤の欠陥があるため、神の国の理想はバハイ共同体の機構の中にのみ実を結ぶということは確かである。

注 カルゾン卿は一八九二年バハオラ<sup>バハオラ</sup>逝去の年に出版した著書「ペルシャおよびペルシャ問題」中に次の如く書いている。

「ペルシャにおけるバビ信者の現在の数は最低に見積つて五十万人はある。私はある信すべき人物との会談からその総数は百万に近いと思う。彼等はあらゆる方面にある。大臣や、宮中の貴族から街の掃除夫や馬丁<sup>ばてい</sup>に至るまでである。彼等の活動の場所は回教僧侶のものの中にまで及んでいる。

もし現在の割合でバビ教が膨張してゆけば、恐らくペルシャの野から回教を駆逐する時代がくる。

一つの敵対的な信教の旗の下に現れたものならばこれはありそうもないことのように見える。しかし、その信者はそれが攻撃している陣営の最良の精兵からかち得たものであるから、バビ教は遂には勝利を博するものであることが一層強く信じられるようになった。」——第一卷 四九九―五〇二頁

### バブとバハオラの予言者たること

バブとバハオラの生活と教えを研究すれば研究する程我々は彼等の偉大さが神聖な靈感に基づくものと説明するほかの言葉を見出せない。彼等は狂信と偏見に満ちた環境の中に育つた。彼等は極めて初歩の教育を受けたのみであった。彼等は西洋の文化と接触することはなかった。彼等には政治的な権力もあるいは経済的勢力もなかった。彼等は人間に何物も求めず、受けたものはただ不法と圧迫とであった。地上の有力者等は彼等を無視あるいは反対した。彼等はその使命の実現のためにむち打たれ、拷問され、投獄され、慘禍<sup>さいか</sup>にさらされた。彼等はたゞ独り世俗に反対して立ち神の他には何の援

助もなかった。しかも彼等の勝利はいまや既に明白かつすばらしいものである。

彼等の理想の壮大さ崇高さ、彼等の生活の高貴さと自己犠牲的なこと、彼等の勇気と確信の強さ、彼等の驚くべき智慧と知識、彼等の東西両洋の民族の要求に対する把握、彼等の教えの範圍の広いことと適切さ、その信徒等の間に熱烈な信仰の發奮とを呼び起す彼等の力、彼等の感化力と透徹さ、彼等が創始した大業の進展——たしかにこれ等はみな宗教の歴史が示し得る処の最も有力な豫言者たる証拠である。

### 栄光ある前途

バハイの告報は神の恵沢と人類の未來の進歩のヴィジョンを提供する。これはたしかに人類にあたえられた最大にして最も栄光ある啓示であり、前代のあらゆる啓示の發達であり實現である。その目的は人類の更新、新天新地の創造のほかの何ものでもない。それはキリストやその他のあらゆる豫言者等が生命を捧げたのと同じの事業である。そしてこれらの偉大な教導者等の間にはなんらの競争もない。この事業が成就されるのは、この一顯示者とかの顯示者とかによるのでなく、全体が一致することによるのである。

アブドル・バハは次の如く言われた。

『キリストを高しとするために、アブラハムを低しとする必要はなく、バハオラのことを広めるためにキリストを低くする必要はない。我等はどこから現われようとも神の真理を歓迎せねばならぬ。問題の要点は、これ等のすべての偉大な使者等は完全の神旗をかかげるために来たことである。彼等はみな神の意志の同じ天の天体として輝く。彼等はみな光をこの世界に送るものである。』——「スタ

この事業は神のものであって、神はたゞ豫言者等を召し給うのみならず、この創造的過程の協働者として全人類を召し給うのである。もし我々が神のお召しを拒絶してもこの事業の進行を妨げることはいできない。なぜなら神の欲し給う処は必ずとげられるからである。もし我々が我々の役割をなし得ないとしても、神はその目的を達するために他の方法をとることができる。しかし我々は我々自身の生活の真実の目的と目標を失うであろう。神との合一——神の愛する者となり、僕となり神の創造力の熱心な通路となり、手段となり、以って我々のうちに神聖にして豊饒な生を宿すの他、何もものもない境地——は、バハイの教えによれば、人類生活の口には言いがたい光榮ある完成である。

しかしながら、人類は本来健全なものである。なぜなら「神の姿に似せて」造られたものだからである。そして一度真理を体得すれば決して愚昧の路に立ち止ってはいないであろう。パハオラはやがて間もなく神の呼声が一般に受け入れられ、全人類が正道と従順に向うであろうと保証されている。「そのときはあらゆる悲しみが喜びに代り、あらゆる疾病が健康に代るであろう」。そして「この世の国は、われらの主とそのキリストとの国となった。主は世々限りなく支配なさるであろう」。〔黙示録第十一章十五節〕地上にあるこれ等のもののみならず、天地における万物はみな神において一つとなり、永遠の喜びを得るであろう。

## 宗教の刷新

今日の世界の状態は明らかに、すべての宗教の民が極く少数の人々をのぞいて、各々その宗教の真

の意義を覚醒<sup>かくせい</sup>する必要がある。そしてこの覚醒がバハオラの事業の主要な一部である。彼はキリスト教徒をより一層キリスト教徒たらしめ、回教徒をして真の回教徒たらしめ、あらゆる人々を彼等の豫言者等の呼び起した精神に立ち戻すためにこられた。彼はまたこれ等すべての豫言者等によってなされた約束を果し、彼等の努力を成就完成するため「時節<sup>ときせつ</sup>到れば」出現すべくあつたさらに栄光ある顕示者の役目を果すものである。彼は前代の豫言者等よりもより一層の精神的真理をあたえ、今日我々が直面する個人的並びに社会的生活のあらゆる問題に関して神の意志を啓示する。彼はよりよい新しい文明が建設さるべき確固たる基礎をなす処の世界的教えをあたえ、今や開始せんとする新時代の要求に最も適合する教えをあたえる。

### 新しい啓示の必要

人類世界の統一、世界各宗教の綜合統一、宗教と科学の調和、世界平和、国際仲裁裁判所、国際正義院、国際語等の建設、女性の解放、教育の普及、動産的および産業上の奴隷廃止、各個人の権利自由を考慮した人類を一体とする組織——これ等はみなキリスト教徒や、回教徒や、その他各宗教徒等が各方面からしばしば激しく反対した処の大きなかつ非常に困難な問題である。しかしバハオラは一般に適用されればそれによって世界を明らかに楽園となすであろうところの明白なはっきりした原則を啓示されている。

### 真理は万人のためなり

バハイの教えはイランおよび東洋の民にとってはすばらしいものであるけれども、これを西洋の諸

国民には不必要であり、かつ不当であると想像することは多くの人々が認めがちなことである。かくの如き意見を述べたある人に対してアブドル・バハは次の如く答えられた。

『バハオラの大業の意味について言えば、世界の利益のためになされるものは神のものであり、神のあらゆるものは世界の利益となるものである。もしそれが真理であればそれは万人のためである。もしそれが真理でなければそれは何人のためでもない。それ故世界的利益のための神の大業は単に東洋あるいは西洋に極限さるべきものではない。なぜなら真理の太陽の光は東西両洋をあまねく照し、その温熱は南北をあまねく温める——両極間に何等の差がないからである。キリストが出現した時、ローマやギリシャの民はその大業をもつばユダヤ人のためのものと考えた。彼等は完全な文明を有し、なん等キリストの教えの中に学ぶものなしと思ひ、その誤った考えのためにキリストの恩寵に洩れた人々が甚だ多かつた。同様に、キリスト教の原則とバハオラの掟とは同一であり、その道もまた同一であることを知らねばならぬ。日々進歩がある。この神聖な制度、即ち累進的に啓示された宗教にも胎児であつた時代がある。それから誕生して、小児となり、知能ある青年となつた。しかしそれはいまや燦然たる美に輝き、無上の光彩を放つに至つた。

この神秘に透徹し、聡明を受けた者の世界に住する者こそ幸福である。』

## 第十六章 アブドル・バハの「遺訓」

### 新 局 面

バハイ信教は、敬愛する指導者アブドル・バハの逝去せいきによって、その歴史の一新局面に入った。

この新局面は同じ、精神的有機体の存在において、より高い状態すなわち、その信者達によって感じられた信仰の、より成熟し、従ってより責任のある表現を表わしている。アブドル・バハは、彼の超人的活動力と無類の能力をもって、彼のバハオラへの愛を東西両洋に広める仕事に専心された。彼は、無数の人の魂に、信教の烛光しかりを点された。彼は、個人の精神生活の特質について、彼等を教え導かれた。バハオラの宗教の特別の使命は世界秩序の設立でありその秩序のひな型又は中心と呼ばれる行政秩序を設立すべき時がアブドル・バハの逝去により来た。

アブドル・バハの「遺訓」は従ってバハイ歴史の転換期を示しそれは未成熟と無責任の時代から、個人的経験の領域より、社会統一と協力の領域までその範囲を拡大する事によって、バハイ信者自身が、その精神性を実現すべく定められた時代へと転換した時である。アブドル・バハによって残された行政計画の主要な三つの要素は次の如くである。

- 一、神の大業の守護者。
- 二、神の大業の翼成者。
- 三、地方、全国、及び国際的正義院。

注 地方と全国の正義院は現在精神行政会と呼ばれている。

### 神の大業の守護者

アブドル・バハはその第一の孫ショージ・エフェンディを「大業の守護者」(ワリエ・アムロウ  
ルラー)として責任ある地位に任じられた。ショージ・エフェンディはアブドル・バハの長女ジアイ  
イイー・カノムの長男である。彼の父ミルザ・ハデはババの親戚であった。(ババの独り子は幼に  
して死亡したのでその直系ではないが。)ショージ・エフェンディは、祖父の逝去の時二十五歳で、  
オックスフォードのバリオル学寮に勉学中であった。彼の任命はアブドル・バハの「遺訓」中に次の  
如く発表されている。

『お、我が愛する友等よ、この被害者の逝去後は、神聖なるロートの木のアグサン(枝)とアフナン  
(小枝)、神の大業の翼成者(柱石)及びアブハの美に愛される者は皆、この二本の聖なる木より分  
枝した若年の枝であり聖木の二本の枝の結合により成育した果実であるショージ・エフェンディに向  
わなければならない。真に彼は神の証であり、選ばれた枝であり神の大業の守護者である。アグサン  
・アフナン、神の大業の翼成者及び神に愛される者等すべてのものは彼に向わなければならない。彼  
は神の言葉の解釈者であり、彼のあとには直系の子孫の長子が後を継ぐだろう。

神聖な若年の分枝、神の大業の守護者は全世界から選出され確立される万国正義院と共にアブハの  
美の保護の下にあり、聖なる高遠の人の庇護と誤りのない指導の下にある。(我が命がこの者の為に  
捧げられん事を)。彼等の決裁した事は全て神による裁決である。……

お、汝等、主に愛される者よ、神の大業の守護者は、彼の死後に不和が生じないように存命中に後



継者を指命しておかねばならず、指命された者は、あらゆる世俗の事物より超脱して純粹さの精髓となり、神への畏敬、知識、賢明さと学識を示さなければならぬ。しかし乍ら神の大業の守護者の長子が「子はその祖先の秘密の精髓である」という言葉の眞実を表わさず、即ち彼（父である神の大業の守護者）に内在する精神性を継承せず、その栄光ある伝統に相應しい品格を具えない場合は彼（神の大業の守護者）は継承者として他の枝を選ばなければならぬ。

神の大業の翼成者は神の大業の守護者の仕事に常に重要な奉仕をする為に、その中から九人を選ばなければならぬ。これ等九名の選挙は神の大業の翼成者の中から満場一致、又は多数決で決定されねばならず、選ばれた九名は、神の大業の守護者が後継者として選んだ者に満場一致か多数決で同意を与えなければならぬ。この同意を求めるとき、賛否する者の見分けが付かないように旋行されねばならぬ（即ち秘密投票）。

### 神の大業の翼成者

バハオラは生前確實な信用ある四人の友を選ばれ大業の活動の指導、啓発に協力せしめ、これ等に「アヤディエ・アムロウルラー」（神の大業の翼成者）なる称号をあたえた。アブドル・バハはその「遺訓」中に、大業のために奉仕し、その守護者に助力すべき常設の組織に関する規定を述べておられる。

『お、友等よ、神の大業の翼成者は神の大業の守護者により指名、任命されなければならない。

神の大業の翼成者の義務は神の芳香を放散し人々の魂を啓発し、学問を促進し全人類の性格を改

善し、常に如何なる境遇に於ても世俗の事物より聖別し、超脱している事である。彼等は行爲、態度、行動、発言によって神への畏敬を示さなければならぬ。

この神の大業の翼成者の一団は、神の大業の守護者の下にある。守護者は絶えず彼等が全力を尽して神の甘美な芳香をまき散し、全人類を指導するように激励しなければならない。何故なら全世界を照らすものは神の指導の光だからである。」

## 行政秩序

バハイ行政秩序に関する次の言葉は、「バハイ世界年鑑」第五巻百九十一頁より成る部分より引用した。

宗教一般の性質として、宗教の組織化はその真の精神の影響力を妨害し、世界にその本来の目的を果すことをさまたげてきた。例外なく、組織は宗教自体の代替になってしまい、その宗教の効力を増大するための手段や道具としては使われなかった。人類が異った伝統によって分裂させられ、平和的かつ、建設的交流がなかったことがこれを不可避なものとした。今までは、どの宗教の創始者も、自身が設立した信仰の行政組織の指針となる原則を明記したことはなかった。

バハイ大業において、世界行政の原則はバハオラによって述べられた。そして、これ等の原則は、アブドル・バハの書物、特に彼の「遺訓」において発展した。

この組織の目的は、異った民族、階級、利益、人格、それに祖先より伝った信条を持つ人々の間に、真に永続する統一を確立すべく可能ならしむるためである。バハイ大業のこの方面の綿密で同調的な

研究は、バハイ行政の目的と方法が、非常に完全に啓示の基本的精神に適應されているので、それは行政が啓示に対するのはあたかも肉体が魂に対するのと同様な關係にある事を示すであろう。本質において、バハイ行政の原則は、協力の正しい知識を代表し、適應において、それは、世界的広範における、新しく、より高い道徳の型を供給している。

バハイ共同体は、他の自発的集りと異なる。なぜなら、その基礎が深く根ざされ、広範囲に広がっているから、それはいかなる誠実な人も包含する事ができる。もし意図しなくとも実際に、もし理想からでなくとも方法において、他の団体は排他的であるのに対し、バハイの交りはいかなる誠実なる人に対しても、親しみの門を閉じずに、包含的である。すべての集りにおいて、そこには、隠された又は明らかである選択の基準がある。宗教におけるこの基準は、その起りの歴史的性質に限定された信条であり、政治におけるそれは政党や綱約であり、経済におけるそれは、共通の不幸な者、恵まれない事又は共通の力がある事、芸術と科学におけるこの出発点は、特別の訓練あるいは活動あるいは関心よりなる。これらすべての事柄において、選択の方法が排他的であればあるだけ、その活動は強力になる。以上のような状態は、バハイ大業の状態とは全く反対している。

だから成長と進歩の精神があつても、バハイ信教は、その活動力信徒の數に關係して、徐々に發展する。なぜなら人々は、すべての分野において、排他と、分立に慣れているので、一般が重視した考え方はいつも社会的分裂の認可と、口実になるのである。バハイの活動に参加する事は、これ等の因習を置き去りにする事であり、かゝる経験によって始めの内に人間の自我が人類愛の至高の掟に反抗するほどその人が新しい試練と苦しみに必らずさらされる。長い間存在した、うぬぼれや、特権の有利性を取り除いた基礎の上に、科学的な者は、單純な者や無学な者と、金持は、貧乏な者と、白人は、

有色人種と、神秘的な者は、文学主義者と、キリスト教徒は、ユダヤ教徒や、回教徒や、ゾロアスター教徒と相交わらねばならぬ。

しかし、この困難な経験に対して、すばらしい報酬がある。芸術が共通の人間性から離れた時それは、無益となり、哲学も同様に、孤独になった時その観察力を失い、そして、政治や宗教は、人類の全体的要求から分離すると決して成功し得ない事を想い出そうではないか。人間性はまだ知られていない。なぜなら我々は皆、知能、道徳、感情、あるいは社会的防壁の状態において生活して来た。そして防壁の態度は、抑制の態度である。しかし神への愛は恐れを除去し、恐れは、潜在的な力を確立し、そして、精神的愛にもとづく他人との交りは、これらの力に活気ある積極的な表現を行なわしめる。バハイ共同体は、この時代において、この過程を行う事ができる集合体である。新しい推進力が力を集めた時の最初は、ゆっくりと、しかし、信徒が人類の統合の花を開く力に気付いた時はもっと急速に……

地方バハイ問題の管理と責任は、精神行政会として知られているものに帰属している。この精神行政会（九人に限定される）は、毎年四月二十一日、即ちレズワン（バハオラの宣言を記念する祭）の最初の日に、その共同体内の登録した成人信者によって選ばれる。そして、その投票者名簿は、前記の精神行政会によって作成される。この精神行政会の性質と任務に関して、アブドル・バハは次のように書いておられる。

『すべてのバハイ信者は、精神行政会に協議せざる可なるバハイ活動をも行う事が無いように、義務付けられている。そして、彼等は、精神行政会によって云われた事に心と魂から、確信を持ってそれに従順に従わねばならぬ。そうすれば万事は適当に命令され、良く取り決められるであろう。それで

なければ、各個人は、独立して、各自の判断のもとに行動するであろう。又各自の欲望に従い、大業に害を及ぼすであろう。

集合し、協議を行うそれ等の者にとって、最重要の必要事項は、動機の純粹性、精神の輝き、神を除いたすべての事柄からの超越、神の聖なる芳香に引き付けるもの、神の愛する者の間における謙讓で謙遜、困難に対しての忍耐力と辛抱、そして高遠な闘に対する奉仕などである。彼等は、これ等の屬性を獲得するため恩恵によって助力を得るならば、又見えざるアブハの国からの勝利は、彼等に与えられる事を約束されている。今日において協議を目的とする、精神行政会は最も重要で、極めて必要である。それに対して従順である事は必須であり、また義務である。それに付いて精神行政会の一員は、悪感情や、不和が起きるような理由がないような方法のもとに各自の意見を述べ、議論を説明した時に到達する事がい。これには、すべての精神行政会員が完全自由のもとに各自の意見を述べ、議論を説明した時に到達する事ができる。もし誰かが反対したとしても、誰も感情を害される理由があるはずがない。なぜなら問題が十分に討議されないまでは、正しい方法を知る事ができようか。真理の輝く火花は、異なる意見の衝突の後にだけ現れる。もし討議の後、全員一致で議決されれば良いし、しかし、もし意見の相異が生じたとしても（そのような事がない方が望ましいのだが）、過半数の意見が採用されねばならぬ。

第一の必要條件は、精神行政会員の間の完全な愛と調和である。彼等は充分に不和から解放されねばならぬ。また、彼等自身の内に神の一体性を顕わさねばならぬ。なぜなら、彼等は、一つの海の波であり、一つの川のしずくであり、一つの天上の星であり、一つの太陽の光線であり、一つの果樹園の木々であり、一つの庭の花々であるからである。もし思想の調和と、完全の統一が存在しないならば、その集りは、分散すべきであり、その精神行政会は、無益に終るであろう。

第二の必要条件は、集る時、彼等の顔を最高の国に向け、栄光の国土からの助力を求めねばならぬ。討論は、すべて精神的事柄すなわち魂の訓練、幼児の教導、貧困者の救済、世界に住む総ての階級において弱き者に対する助力、総ての民族に対する親切、神の芳香の発散、それに、神の聖なる言葉の高揚などに関するものに限定されねばならぬ。もし彼等が、これ等の条件を成就するよう尽力すれば、聖霊の恩恵は、彼等に与えられ、そしてその精神行政会は、神の祝福の中心となるであろう。また、神の確証の軍勢は、彼等を助けに来るであろう。そして彼等は、日日精神の新しい流出を受けるであろう。」

この主題を説明して、シヨーギ・エフェンデイはかく書いた。

『どのような事でも、その地域における精神行政会によって十分に熟考され、承認されなければ、バハイの友のいかなる個人によっても、大衆に公表されるべきでない。そして、もしこれ……が、その国における大業の一般的利害関係に属する事柄であれば、その地方精神行政会を代表する全国精神行政会の熟考と承認のために、これを提出する事は、各地方精神行政会の義務である。個人的あるいは団体的なその地域における大業の利害関係に関し、出版に関する事だけに限らず、例外なくその地域の精神行政会に問合わすべきである。地方精神行政会は国家的利害の問題でない限りそれを決定する。又それが国家的利害に関するものであれば全国精神行政会に問合わすべきである。またこの全国精神行政会には、ある問題が、地域的のものであるかあるいは、国家的利害関係を持つものであるかどうかの判断が委託されているからである。(国家的問題と言う言葉によって、政治的である問題を意味しない。なぜなら、全世界の神を愛する者は、どのような方法においても、政治問題に関与する事は固く禁じられているからである。国家的問題というのはむしろその国における一般バハイ共同体の精神

的活動に影響するものを意味する。) ]

しかしながら、種々の地方精神行政会や信者達自身間、特に各々の地方精神行政会と全国精神行政会との協力と充分なる調和は、最も重要である。なぜなら、その上に、神の大業の融合、バハイの友の間の結束、神を愛する者達の精神的活動の充分で、急速で効果的な動きが依存しているからである。

地方や全国等いろいろの精神行政会は今日の基礎を構成し、その基礎の力の上に、未来における万国正義院が確固として設立されるはずである。これらの行政会が力強く調和的に機能するまでは、その過渡期は終りを見ない。……神の大業の主旨は、独裁的権威でなく、謙讓けんじやうな交友であり、勝手な権力でなく、卒直で調和的協議の精神である事を心に止めよ。真のバハイ精神を除いた何物も、慈悲と正義、自由と服従、個人の権利の尊厳と、忍従、また一方に警戒、思慮、慎重、他方交友、卒直、勇氣等の原則を調和する事はできない……。」

一 国の諸地方精神行政会は、他の選挙された九人よりなる団体、即ち全国精神行政会によって連合し調整される。この全国精神行政会は、各々の地方バハイ共同体から選挙された代議員によって行われる毎年の選挙を通じて組織される。この代議員達は、精神行政会がある処の共同体のすべての登録した成人信者達によって選出される。代議員が集合する全国大会は比例代表制の原則にもとづき構成される選挙母体からなる。これらの全国大会はレズワンの期間中に開かれる事が望ましい。(レズワンの期間とはバハオラによってバグダッドの近辺にあるレズワンの園においてされた宣言を記念する四月二十一日から十二日間である。) 代議員の認可は前期の全国精神行政会に一任されている。

全国大会は、バハイ活動についての個人の認識を深めまた前年度の国家的並びに地方的活動の報告を行い合う機会である。バハイ代議員の任務は、全国大会の期間中および、新しい全国精神行政会の選挙に参加する事に限られる。集合している間は、その代議員達は、協議団そして諮問団であり、彼の勧告は、新しく選ばれた全国精神行政会員によって注意深く熟考されるべきである。

全国精神行政会の地方精神行政会や、その国における一般の信者達との関係は、大業の守護者の手紙の中に次のように定義された。

『全国精神行政会の設立に関しては、状態が都合良く、バハイの友の数が相当の大きさに成長、到達したすべての国においては、その国全体のバハイの友を代表する全国精神行政会が、直ちに設立される事は極めて重要である。』

その直接の目的は、しばしば行われる協議によって、地方精神行政会と同様にバハイの友の多方面の活動を刺激、統合そして調整するためであり、そして聖地との密接で絶え間ない接触を保つ事によって行動を起し、一般的に、その国における大業の業務を管理する事である。

それはまた最初の目的と同じ位に必要な他の目的に役に立つ。なぜならやがてそれはアブドル・バハの「遺訓」の中に「第二位の正義院」として言及されている全国正義院に発展すべきであるからである。それはアブドル・バハの「遺訓」の明白な原文によればバハイ世界を通して他の全国精神行政会と共に、万国正義院のメンバーを直接に選挙せねばならない。その万国正義院は、即ち全世界を通してバハイ活動を指導し組織化し、統合する最高理事会である。

この全国精神行政会は、万国正義院の未設立中に年に一度再選されねばならぬ。それはまた明らかに重大な責任を持つ。なぜなら、それは、その管轄地におけるすべての地方精神行政会に対して充分



なる権限を行使せねばならぬし、又バハイの友の活動を指導し、神の大業を注意深く保護し、大体において、バハイ活動を統制管理しなければならぬからである。

その国における大業の利害に影響する重大問題、たとえば翻訳や出版、マシユレゴウル・アズカル、布教活動、そして全たく地方だけに關する問題から明確に區別した他の同様な事柄は、全国精神行政会の充分なる権限の下にあらねばならぬ。

地方精神行政会と同様に全国精神行政会はこれらのすべての問題を一つ一つ特別委員会に問合わせなくてはならない。かかる委員会はその国のすべてのバハイの友の中から選ばれ、その全国精神行政会との關係は地方委員会が、各々の地方精神行政会に対して持っている關係と同じである。

また全国精神行政会に、ある論争点がある、その根本において、明白に地域的であり、地方精神行政会の考慮と判断のために保留すべきかどうか、あるいはそれが全国精神行政会自身の管轄に該当すべきで、その特別の配慮をわすらわすべき問題であるかどうかの判断がまかされている。

我々のすべてが愛しそして仕える大業の利益のため、全国大会で、代議員達によって選出された新しい全国精神行政会の本務は集団的にも個人的にも、集合した代議員達の助言、熟慮された意見あるいは真の感想を求め、それに最大の関心を持つ事である。彼等の中より、秘密、過度の沈黙、独裁的無関心等の証跡のすべてを追放し、彼等は、彼等の計画、彼等の希望、彼等の関心事を彼等を選出した代議員の目の前に輝かしく、充分に打明けるべきである。彼等は、その任期中に考慮されねばならぬ種々の問題を代議員に熟知させるべきである。そして、代議員の意見と見解を、冷静にして良心的に研究し、吟味すべきである。全国大会開催期中の数日間や代議員達が解散した後、新しく選出された全国精神行政会は、理解力の養成と、意見の交換の促進、保持と、確信を深めるための方法と手

段を求め、そして、すべての明白な証拠によって、彼等の唯一の願いが共通の福利に奉仕し、そしてそれを促進させる事であることを証明する。

しかしながら、しばしばにして、長く継続される全国大会の召集に供なう避けられない不便さのため、全国精神行政会は、その責任として、大業の利益に影響するすべての問題に關しての最終決断即ち、いかなる地方精神行政会が、大業の行動と発展のために記された諸原則に従って、役目を果しているか、どうかと言う判断を下す権利の如きものを保持しなければならぬであろう。』

毎年の地方バハイ選挙において使用されるべき選挙名簿の作成に關しては、これに對する責任は各々の地方精神行政会に任せられ、そしてこの事柄の案内書として、守護者は次の如く書いた。

『ある人が眞の信者と考えられるか否かの判断を下す前に、熟慮しなければならない重要な要素を、ごく簡単に、現在の状態がゆるすだけ充分に述べよう。アブドル・バハの「遺訓」に現わされたようなバハイ大業の先駆者、創始者、それに眞の具現者の地位を充分に認識すること。彼等の筆によつて啓示されたどんな事柄でも卒直に受け入れ、服従すること。我々の愛する者の聖なる「遺訓」のすべての条項に對して忠実に又、確固として信奉すること。今日のバハイ行政の形体と精神の双方の緊密なる理解——これ等は私が、このような重大なる決断に到達する前に、公平に、用心深く、思慮深く、確かめねばならない基本的で主要な考慮すべき事柄であると思う。』

アブドル・バハの指示は、バハイ組織のより一層の發展に對しても規定してある。

『さて、神が、すべての善の源であり全ての誤りから解放されたものとして定めた正義院に關して、

それは全世界に住む信者達により選挙されねばならない。正義院の委員は、神への畏敬を示し、知識と理解の曙であり、神の信教に不動で、全人類の幸を祈るものでなければならぬ。この正義院とは万国正義院の事を意味する。そして各々の国に第一位正義院が設立されねばならず、この第二位正義院が万国正義院を選挙するのである。この万国正義院に、全ての事柄が照会されねばならず、それは明解な聖典に見出せない全ての法令や規則を制定する。この万国正義院によってすべての困難な問題が解決されなければならず神の大業の守護者は、その神聖な頭であり終生特別委員である。もし彼が自らその協議に出席しない場合は、彼を代表する者を指名しなければならぬ。もし委員の誰かが罪を犯しそれが公共の福利に害を及ぼす場合は神の大業の守護者は、任意にその者を除名する権利があり、その時は人々は誰か他の者を選挙しなくてはならない。この正義院は法律を制定し政府行政部がそれを施行する。立法部は行政部を補強し行政部は立法部を援助して、この両者の密接な結合と調和を通して公平と正義の基礎が確固となり世界中の全地域が楽園そのものになるであらう。

全ての者は最も聖なる書に向わなければならぬ。そしてその聖なる書に明白に記録されていない全ての事柄は万国正義院に照会されねばならない。この正義院が満場一致又は多数決で決定した事は、実に真理であり神自身の御目的である。それより逸脱する者は真に不和を好む者であり、悪意を示し聖約の主の背を向ける者である。

今日においてさえ、全世界のすべての地域にあるバハイは、規則的な通信や、個人的訪問の手段によって、親密で心からの交りを続行している。この異なる人種や国籍や宗教的背景を持つ信徒の交際は、偏見の負担や分派の歴史的要素が、バハオラによって設立された、一体性の精神を通じて、完全

に克服されると言う具体的証明である。

### バハオラの世界秩序

この秩序のより大なる暗示は、一九二九年の二月から、バハイ共同体に宛てられた相繼ぐ通信の中に、シヨージ・エフエンデイによって説明されている。

『私はこの信教の信者として知られている人々に対し、今日支配的な考えや、つかのまのはかない流行をかえりみることなく、かつてなかったように、現代文明の論破された理論や虚弱な頼りない種々の制度は、これ等制度の崩壊の上にかかるように運命づけられた神与の制度とはいちじらしい対照をなして現われるべきであることを悟るように訴えずにはいられない……』

なぜなら、バハオラは：単に人類に新しい再生的な精神を吹きこまれたばかりではない。彼はただある一般的原則や特殊な哲学を、それ等がいかに力強く健全で普遍的であろうとも、宣言し、提議されただけではない。これに加えて、バハオラは彼の後継者アブドル・バハと同様に過去の宗教制とは違つて、法典を明確に制定し、決定的な制度を確立し、神聖な組織について重要なことを規定された。これ等は将来の社会の軌範（はたけ）として「最大平和」を確立するための至高の手段として、また世界統一との地上においての正道と正義の支配の宣言の唯一の力であるべく定められている……。

キリストの宗教制と異り、モハメッドの宗教制と異り、いわば過去のすべての宗教制と異りあらゆる国にいるバハオラの使徒はどこで彼等が努力していても、彼等の目前には、はっきりと疑いのない力強い言葉で彼等の任務遂行のために必要なすべての法や規律、原則、制度、指導を持っている……。そこにこそバハイの啓示の顕著な様相が存している。又そこにこの信教の一体性の力、又以前の諸啓

示を破壊したり軽視しないで、それ等の啓示を結合し統合し実現を主張するこの啓示の妥当性の力が存している……。

たとえ我々の信教が、これを回教の一派として非難したりあるいは西洋によくあるあいまいなくつかの宗派のもう一つぐらいだろうと軽べつ的に無視する人々の目には弱々しく映るかも知れないが、この神の啓示という貴重なすばらしい宝石は、現在はまだその萌芽期にあるが、バハオラの といふ殻の中で発展し、それが全人類を抱合するに至るまで分裂することなく又弱め損われずに進展していくであろう。バハオラの崇高なる地位を既に認識している人々のみが、又その心がバハオラの愛によって触られ目覚めバハオラの精神の力を熟知しているもののみが充分にこの神聖な組織、すなわちバハオラの人類に対する計り知れない賜物の価値を評価することができるのである。(一九三〇年三月二十一日)

この目標に向ってこそ悩み苦しんでいる人類は努力し進まなければならない——即ち、この目標はその起源が神であり、その範圍はすべてを包含し、その原理において公正であり、その特徴は注意を要求する新世界秩序である……。

時代の精神を全く無視して、昔日の自己自足的な国に相應しい国家の道を、バハオラによって予示された世界統合を成就するか、さもないと滅亡するかという現代にあてはめようと努力している人類社会の指導者達の努力は何んと実に悲愴なことであろう。文明の歴史におけるかくも重大な危機にあつて、世界のすべての国の、それがたとえ小国でも大国でも、東洋におけるかきも重大な危機にあつても、また征服国でも、被征服国でも、その指導者はバハオラの音吐朗々なするとい呼びかけに注意を払わ

わなければならぬ。そして世界の一致共同という考え、即ちバハオラの大業への忠誠に必要な事のできないことを完全に同化、彼、即ち、神聖なる医師が病んでいる人間に処方した治療法をそのまま勇敢に遂行するために起き上がりなければならぬ。彼等をしていさぎよくきっぱりと、すべての先入主や国家的偏見を捨ててバハオラの教えの權威ある解釈者アブドル・バハの崇高なる勧告に注意を払わせよう。

『貴下はもし世界市民として、世界の人々や国々の間に現存する種々の關係に貴下の国の政府の基礎をなしている連邦制度の原理の終局的應用とすることに助力すべく努力するならば、最も良く貴下自身の国につくすことができる』と。これはアブドル・バハにその政府と人民の利益を増進する最善の方法について問うたアメリカ合衆国連邦政府に職を奉ずる一高官に対するアブドル・バハの答である。(一九一二年において)……

何らかの形の世界超国家が形成されなければならない。そのために世界の国々は自発的に戦争をすするすべての権利主張、ある程度の課税権、また各国それぞれの領土の内部的秩序を維持する目的以外の軍備を持つすべての権利を譲らなければならない。かゝる世界国家はその圏内にその連邦のいずれの不従順な構成国の上にも最高不屈の権力を施行するに適當な國際執行部と、各国の人々によって選出され、その選挙はそれぞれの政府によって認証された議員によって組織される世界議會と、その判決は關係国双方が自発的に事件を裁判に委ねることに同意しない場合でも拘束力を持つ世界裁判所を含まなくてはならない。あらゆる經濟的障害は永久的に除去され、勞使の相互依存は明確に認められ、

宗教的狂信なる騒ぎや争いは永遠にせずめられ、人種の憎悪敵対は遂には消滅され、またさらに、唯一の国際法典——世界連邦代議員達の熟慮された判断の成果——が連邦各構成国の結合した兵力をもって制裁として即時的、強制的干渉力をもち、そして最後には気まぐれな軍事的国家主義は世界市民という永遠の自覚へと変えられるかかる世界共同体こそ、實際概略においてバハオラによって、予期された秩序であり又、徐々に成熟していく時代の最もすばらしい成果としてみなさるようになるべき秩序である。……

バハオラの世界包括的「法」に活気を付ける目標に関して疑惑を残すなかれ。その目標は社会の現存する基盤を破壊しようとすることとは遥かに異り、不斷に変わりつつある世界の必要に応じてその基盤を拡張しその制度を作り上げることを追及することである。それはいかなる本来の正統な忠誠と背反するものではないし、また本質的忠節を阻害するものでもない。その目標は人間の心中の真正な理智的で愛国的熱情を抑圧することでもなく、また過度の中央集権化の弊害が避けられるなら、非常に重要な国家自治の組織を廃止することでもない。またそれは世界の民族や諸国家を区別し特徴づける種族的起源、風土、歴史、言語や伝統、思想や習慣の相違を無視するものではないし、また抑圧しようとして試みるものでもない。それはこれまで人類を活気付けたいかなるものよりもっと広い意味の忠誠とさらに大きな抱負を要求する。……

バハオラの呼びかけは主にすべての偏狭主義島国根性や偏見に対して向けられている……なぜなら、法律の標準や、政治的、経済的論争は全く一般人類の利益を保護するべく考え出されたものであり、人類をしていかなる特定の法や主義の完全さのために犠牲に供せられるべきではない。……人類の一体性という原則——その周圍にバハオラのすべての教えが展開する中軸である——は単なる無智な無

情主義の爆發でもなければ、またあいまいなそして敬虔な希望の表現でもない。……その含蓄する意味と主張は過去の予言者達の唱道すべく許されたよりもっとも深遠でまた偉大である。その伝言は単に個人にあてはめられるばかりでなく主に至るべきすべての国家や民族を一つの人類家族の構成員として統合すべき本質的關係の性質に係るものである。……

人類の一体性という原則は人類進化の極致を意味している。……

世界的破壊の力のみがかかる人間の思考の新しい局面の到来を促し得るということは、悲しいかな、次第に明らかとなつてきている。……激烈な試練——そこから人類は洗練され準備されて現われるのであるが——を除いては何ものも新生時代の指導者達の双肩（まがひ）に荷（か）つて起ち上るべき責任感を植えつけ得ない……。アブドル・バハは明瞭な言葉で「以前よりもさらに強烈な戦争が確かに起る」と主張されていたではないか。（一九三一年十二月二十八日）

この行政秩序はその構成要素や有機的機関が能率と勇氣をもつて機能し始めるにつれて機が熟せば、全人類を包含すべく定められていた新世界秩序の中心としてだけでなく、正にその軌範（はて）としてみなさるべき権利を主張しまたかかる能力を示すものである。……

この信教が設立しえた構造は過去に現われた諸啓示の中で唯一のものである。この構造は……行き詰り崩れ去った宗派の困惑したる信徒が充分に近づき、可能性がある中にこの世界包含的庇護のゆるぎない保護を求めた方が良いであろう。……

この行政秩序——それは未来のすべてを包含するバハイ連邦の基本である——が現わすべき威力と尊厳に対してではなかつたなら、バハオラの次の言葉は何を暗示すると云えようか？ 即ち『世界の



均衡はこの最も偉大な新世界秩序の鼓動的影響により混乱し、人間の定型化せし生活はこの比類なき驚異的組織の力——かくの如き組織はかつて人間の目のあたり見しことなきものなり——によりて革新化されり。』……

この巨大な行政秩序がその唯一の機構である将来のパハイ連邦は理論と実際の双方において、単に政治機構全体の歴史において比類ないばかりでなく、どのような世界に認められている宗教制の記録の中にも類例を見出し得ないものである。どんな形の民主政治でも、君主制あるいは共和制であろうが専制政治あるいは独裁政治の組織でも、また純粹な貴族制の中庸的な組織でも、いかなる神政な認められている型体であっても、たとえヘブライの連邦でも、種々のキリスト教会組織でも、イスラム教におけるエマム制やカリフ制であっても、これ等のうちのどれも完全なる建築家の手が持ち来たらした行政秩序とは比較し得ないし、また一致するとも云えない。……

この組織がまだその搖籃期にある間は、いかなる人もその意義を軽視したりその目的を誤り伝えないようにしよう。この行政秩序が築かれた床岩は現代において神が人類に望み給う不変の意図である。この行政秩序がその鼓舞を得る根源はバハオラ自身に他ならない。……それを活気付ける中心的、基本的目標はバハオラによって予示されたような世界秩序の確立である。その用いる手段や、その教える軌範は東洋あるいは西洋にも、ユダヤ人あるいは異教徒にも、金持あるいは貧乏人にも、白人あるいは有色人にも偏向しない。その合言葉は人類の統合でありそのしるしは「最大平和」である。

(一九三四年二月八日)

神の信教の行政秩序の進捗に随伴する累積的不断的統合の証跡と移り行く社会の組織を打ち崩す分

解力との対照は著しく明瞭である。バハイの世界の内外に不可思議な工合くわいにこの世界秩序——その設立は神の大業の黄金時代をしるすものであるが——の誕生を告げる種々の徴候が日毎に増大している。……

又バハオラ自身の言葉がそれを宣のたましている。即ち、『やがて今日の秩序は巻きたまわれ、代つて新しき秩序が展開されん。』……

バハオラの啓示は……その出現によって全人類の成熟したことを示すものとみなさるべきである。それは単に不斷に変転する人類の運命における今一つの精神復活としてだけでなく、また一連の累進的の啓示の一步進んだ段階としてとか、さらに回帰する予言的週期の一連と一つの極致としてみなさるべきでなく、むしろ、この地球上の人間の集団生活の驚嘆すべき進化における最後のかつ最高の段階をしるすものとして考えられるべきものである。世界共同体の出現、世界市民という自覚、世界文化や文明の確立は……それは人間個人としては、実際にはむしろかかる極致の結果として無限に進歩発展を続けるのであるけれども、この地球上の生活に関する限り人間社会の機構における最高の限界とみなさるべきものである。……

バハオラによってえがき出された人類の一体性はすべての国家、民族、宗派、階級が密接にまた永久的に統合され、その国家構成員の自治権やそれ等国家を構成する個人の自由や個人意志が確定的にかつ完全に擁護される世界連邦の設立を意味している。この連邦は我々の具象化ぐさうかできる限りでは、世界立法部を含まなくてはならない。そして立法部の議員は全人類の受託者として究極的にすべての構成国の全資源を統轄し、すべての人種や民族の生活を規整し、要求を満しかつその関係を調整するた

めに必要とされるような法律を制定するであろう。また国際兵力によって支持される世界執行部は、世界立法部によって制定された議決や法律を施行して、全連邦の有機的一体性を擁護するであろう。世界裁判所はこの万国的组织を構成する諸構成員間に起るあらゆる紛争に対して、それを裁判し、その強制的かつ最終的判決を下すであろう。国際的障害や制限から開放された全地球を包含する世界通信機関が案出されて驚異的な速度と完全な規則正しさをもって機能するであろう。世界の中心都市は世界文明の中核として、生命の統合的諸力が集中し又そこから生命の精力的な影響力が発散する焦点として作用するであろう。世界語は考案されるかあるいは言語の中から選ばれ全連邦国の学校で母国語に対する補助語として教えられるであろう。世界文字や世界文献、また画一的世界通貨、度量衡の制度は人類の国家や民族間の交流や理解を簡潔容易にするであろう。かかる世界社会では人類生活の二つの最も有力な力たる科学と宗教は和合し相提携して調和的發展をするであろう。新聞雑誌はかかる制度の下にあって人間の種々の意見や信念の表現に充分つくしても、私的あるいは公的な既成勢力により有害的にあやつられることがなくなりまたまた斗争的な政府や民族の影響から開放されるであろう。世界の経済的諸資源は組織化され、世界の原料資源は開發され充分に利用され、世界の市場は整備され發展し生産物の分配は公正に規整されるであろう。

国家間の競走、憎しみや陰謀はなくなり、人種的敵対や偏見は人種的親善、理解と協調によって代えられ、宗教的争いの原因は永遠に除去され、また経済的障害や制限は完全になくされ、階級間の極端なる差別は廢されるであろう。片方に貧困、他方における所有権の極端な蓄積はなくされるであろう。経済的にもあるいは政治的にも戦争によって浪費された巨大な精力は、人間の發明や技術の發展の範圍を拡げる目的のため、人類の生産力を増大するため、疾病を撲滅するため、科学的探究の伸展

のため、肉体的健康水準の向上のため人間の頭脳の賢明化、向上を計るため、地球上の未使用の想像に及ばぬ諸資源の開発利用のため、人間の生命の延長のため、また全人類の知的、道徳的、精神的生活を刺激向上し得るどのような他の機関の増進のために向け捧げられるであろう。

世界連邦組織——それは全世界を統治し、その想像もできない莫大な資源の上に絶対の権力を行使し、東洋と西洋の双方の理想を融合一体化し、戦争ののろいやその悲劇から解放され、地球の表面のすべての有用なエネルギー源の開発に力を注ぎ、それにおいては力が正義の僕とされ、又その生命は唯一の神の一般による認識と共通する啓示に対する忠誠とによって支えられている組織——かくの如きものこそ人類が生命の統合力によって刺激され進んでいる目標である。……

全人類はもだえている、統合へ導かれるべく昔からの殉教に終止符をうつべく心から願っている。しかし依然として人類は光を抱き、人類をその混惑の中から救出し人類をのまんとして脅かしている痛ましい不幸を避け得る唯一の力の最高の権威を認めることを拒否している。……

全人類の統合は人類社会が現在接近せんとしている段階の極印である。家族、種族、都市国家や国家の統合は継続的に試みられて充分に確立されてきた。世界の統合は苦のうしている人類が努力し向っている目標である。建國は終りを告げた。国家主義に根づいた無秩序は頂点に近づいている。成熟に近づいている世界はこの物神をすてて、人間相互関係の一体性と全体性を認め、世界の生活のこの根本原理を最も良く具現化し得る機構を決定的に樹立しなければならない。』……（一九三六年三月十一日）

## アブドル・バハの「遺言」から拔萃追加

アブドル・バハの遺訓の極めて緊要なこと、その提起する問題の重要性、その諸々の条項に対する智恵の奥深さにかんがみて、今改めてここにその内容の註釈を加えない方がよいと思う。しかし我々は以上述べてきた処のこのバハイ信教の概略の最も適当なむすびとして、アブドル・バハを鼓舞し、指導し、彼の忠実なる信徒等への最大の遺産となった処の精神と主要原理を描写する数項の拔萃を追加する。

『おお汝等、主に愛される者等よ！この神聖なる宗教制においては不和と争いは決して許されない。

あらゆる侵略者は神の恩寵から洩れるものである。全ての人々は友達、他人の差別をつけず、世界中のあらゆる人々に最高の愛、行為の廉潔さ、正直及び心よりの親切を示さなければならぬ。不案内者は友を見出し、敵は真の兄弟を見出し、そしてその間に差異が全く存在しないまでに愛と親切の精神が強くなってはならない。普遍性は神より由来するものであり、全ての制限は地上のものだからである。

それ故に、おお我が愛する友等よ！世界の全存在がバハの恩寵の聖なる歡喜で満され、無知、敵意、憎悪、怨恨が地上より消え去り、国民及び民族間の疎隔の闇が統合の光にその位置を譲るようにならなければならない。もし他の国の人々及び国家が汝等に対して不誠実であつても誠実さを示し、不正であつても正義を示し、冷淡であつても愛嬌良くし、敵意を表しても友情で感え、生命を脅かされても彼等の魂を甘美にし、傷つけられても彼等の痛みを和らげる薬剤とならねばならない。これが誠実者

の特性であり、正直者の属性である。

おお汝等、主に愛される者等よ、汝等はあらゆる正義の君主に従い、あらゆる公正の王に忠誠を示さねばならない。至高の真実さと誠実さをもって世界の主権者等に仕えよ。彼等に従順さと好意を示さねばならない。何故なら正義の君主に不誠実であることは、神そのものに不誠実なることだからである。

これが我が勧告であり神より汝等への指令である。この命に従って行動する者こそ幸せである。

主よ、貴君は我のためにあらゆるものが嘆き悲しみ、我が血縁の者共が我が苦悩を喜んでいるのを見給うた。おお我が神よ、貴君の栄光にかけて誓うが、我が敵の中にもある者は我が災難と苦悩を嘆き、我を妬む者の中にもある者は我が煩勞、流罪、苦難を見て涙を流した。これは、彼等が我が心の中には愛情と配慮しかない事に気付き、また親切と慈悲しかないことを目のあたりに見たからである。我が苦難と逆境の洪水に流され、恰も運命の矢の標的の如くにさらされているのを見て、彼等の心は同情で動かされ、眼には涙が溢れて次のように言明した——「主は我等の証人である。彼には忠実さと寛大さと深い同情心の他は何も見られない。」——しかし乍ら災いの前兆となる聖約破壊者共は憎しみを募らせ、我が極端に残酷な試練の犠牲になったことを喜び、我に反対して起ち上がり、我を取巻く悲痛な出来事を面白がったのである。

おお主よ、我が神よ、我が言葉と全心を尽して貴君に訴える。彼等の残酷さ、非行、狡猾、悪意に報復されないように。彼等は愚かで下劣であり何をしているのか解っていないからです。彼等は善悪の区別をつけることも真実と誤謬、正義と不正を見分けることも出来ないからです。彼等は彼等自身の欲望に従い、彼等のうちでも最も欠陥のある愚かな者の行為を見習っているのです。おお我が主よ、

彼等を憐れみ、この困難な時期にあらゆる苦難より彼等を守り、全ての試練や艱難は暗黒の深淵に落ち込んだこの僕の運命として許し給え。我一人を選び抜き、あらゆる苦悩を与え、貴君の愛する全ての人々の為に我を犠牲となさせ給え。おお主よ、最高者よ、我が魂、我が生命、我が存在、我が精神、我が総てが彼等のために捧げられんことを。おお神よ、我が神よ、地にひれ伏し、敬虔に、最も熱烈に嘆願する。我を傷つけた者を許し、我に對し陰謀を企て罪を犯した者を容赦し、我に不正を働らいた者の悪行を洗い淨め給え。彼等に貴君の恩賜と歡びを与え、悲しみを和らげ、正穩と繁栄を授け、祝福し恩典を与え給え。

貴君は強き者、恩寵深き者、危難の中の救い、御自力にて存在し給う者なり。

キリストの弟子達は自己と世俗の一切を忘れ、煩勞や家財一切を捨て自我と欲望を一掃し、全くの超越をもつて至る所に分散し、世の人々を神の教えに導くために努力し、遂に世界をして別の世界へと換え、地球の表を照らし、最後迄神に愛される人の道に自己を捧げることを証明したのである。遂に彼等は諸国に於て光榮ある殉教に遭遇した。実践の人々をして彼等の足跡を踏ましめよ！

おお神よ、我が神よ、貴君に、貴君の予言者に、貴君の使者に、貴君の聖者に、貴君の聖なる者に嘆願する。貴君の愛される者等が貴君の信教を見守り、貴君の真直な道を守り貴君の輝やかしき律法を保護せんとし、我は彼等に貴君の証拠を決定的に明言し、あらゆることを明確に解明したということを目撃し給え。真に貴君は全知にして全てに賢き御方である。」

バハオラと新時代（終り）

## 結 び

シヨールギ・エフエンデイの靈感に満ちた指導の下で、バハイの大業はその規模と行政秩序の確立において着実な成長を遂げ、一九五一年までには一一の機能的な全国精神行政会が結成された。その時点でバハイの機構を国際的レベルに発展させることに着手された守護者は今日の万国正義院の前身である国際バハイ議會を任命され、その後間もなく、最初の、神の大業の翼成者を任命された。シヨールギ・エフエンデイはそれまでもジョン・E・エッセルモント博士など何人かのすぐれたバハイを、彼らの死後、大業の翼成者の地位におかれたが、一九五一年、彼はこの重要な制度を全面的に開発する時が来たと判断された。そして一九五一年から一九五七年にかけて彼は次々に三二人の大業の翼成者を任命され、彼らの活動範囲を拡大し、各大陸ごとに補佐団を設立された。この補佐団は大業の翼成者によって信者の中から選び任命され、大業の翼成者の代理、助手、助言者となるべきものである。守護者の亡くなられた時には二七人の大業の翼成者が生存中であつた。

世界中のバハイに宛てた手紙、あるいは特定の国のバハイに宛てたものなど一連の手紙の中で守護者は、教えについて彼らの理解を深め、信教の行政機構を確立し、信者達がその機構を正しく、効果的に活用できるように訓練された。そして一九三七年には、バハオラのメッセージ普及のため、アメリカのバハイ共同体に対して聖なる計画の遂行を打ち出された。この聖なる計画は、第一次世界大戦中に書かれた多数の書簡の中でアブドル・バハが啓示されていたもので、信教普及のための憲章を制



定している。

この憲章の枠組にそつたいろいろな布教計画が、先づ始めに西半球、次いでヨーロッパ、アジア、オーストラリア、アフリカにおいて実行され、一九五三年には、残りの独立国と主要な属領すべてにバハイの教えを広めるため守護者は、「一〇年にわたる、世界的規模の精神的聖戦」を呼びかけられた。

この聖戦の中間点真近か、一九五七年、三六年間の休まない労働に疲れ果てられた守護者は、訪問先のロンドンで逝去された。

ショージ・エフェンディには後継者が無かつたため、一九五七年一月以後、信教の活動は二十七人の大業の翼成者によつて統制、指導された。彼らによるそれは、十年聖戦が大勝利をもつて完了され、世界五六ヶ国の全国精神行政会代表が、大業の翼成者達によつてハイファのバハイ世界本部に招集され、始めての万国正義院が選出された一九六三年四月まで続いた。

この歴史的選挙の直後、世界各地のバハイはロンドンで開かれた第一回世界大会に結集し、バハオラの宣言の百年記念を祝うと共に信教の世界的拡大を喜び合った。

今日、バハイ信教の最高機関は万国正義院であり、これはバハオラが最も聖なる書の中で創設されているものである。これは、バハイの聖典に述べられていないすべての事柄について制定する権限を付与されており、その聖典で神の導きを確約されたものである。アブドル・パハはその遺訓に万国正義院の選出方法を述べて、その地位や義務について更に明瞭に定義されると共に、それはバブとバハオラの直接の教導の下にあるもので、すべての者がたよるべき機関であると断言しておられる。

バハイ信教の比類なき、顕著な特色はバハオラの聖約で、その上にバハイ信教がそのすべての構造

を打ち立て、またその発展を支える礎石とするものである。その特異性は、宗教史上はじめて、神の顯示者が明瞭かつ誤解の余地のない言葉で、彼の言葉の權威ある解釈を提供し、信教の源泉から流れ出る神意によって任命された權威者の継続を保証されている点にある。

過去の諸宗教においては、聖書の解釈は常に分裂の最大原因の一つであった。バハオラは聖約の書の中で、彼の長男のアブドル・バハに彼の著述の解釈及び大業の管理に関する全権を与えられた。そしてアブドル・バハはその遺訓の中で、一番年上の孫息子であるシヨギ・エフェンディを信教の守護者でありかつ著述に関する唯一人の解釈者として任命された。バハイ信教には僧職者はなく、いかなる個人も特別な地位や、自分が特別に導かれていると主張するようなことはできない。権限はバハイの聖典中に創設された機構に与えられている。

これらの独特な規定の効力によってバハオラの信教は分裂や正当性のない指導がもたらす破壊から保護され、とりわけ過去において諸宗教の和合を粉碎したところの、人間の造った教義や理論の浸入から保護された。バハオラによって啓示された純粹で神聖なる言葉は、その權威ある解釈をもって、この宗教制を通じてずっと、万人に対する腐敗することなき精神生活の源泉となり続けるのである。一九六八年、万国正義院は、大業の翼成者に与えられていた信教の保護と普及という役目を将来にわたり引き継ぐために、大陸顧問団を設立した。各顧問団は、万国正義院により任命された数名の顧問から成り、大業の翼成者と密接に共同して活動する。現在、顧問補佐の任命と指揮は大陸顧問の義務となっており、現在生存されている一九名の大業の翼成者の活動は国際的なものに拡大されたのである。

守護者は、万国正義院の指導の下に実行されるべき将来の国際的布教計画についてすでに書いてお

られた。この計画の最初のものである九年計画は一九六四年に打ち出された。一九六九年現在、バハイ信教は一三九の独立国に確立され、世界の三三、〇〇〇以上の地域にバハイが居住し、バハイの文献は四二一の言語に翻訳されている。第五番目のバハイ礼拝堂がパナマに建築中（一九七二年完成）であり、更に五〇カ所の礼拝堂用地が確保されている。八三の全国精神行政会と六、八〇〇以上の地方精神行政会がある。

殊に励みとなることは、アフリカ、インド、東南アジア、ラテン、アメリカ等における大衆の反響で、それらの地域では多数の土着の人々が大業に参加しはじめ、世界的規模でのバハイ共同体の行政的、社会的活動の発展に新段階をもたらしつつあることである。

バハオラと新時代

昭和七年十二月五日 初刊  
昭和三十一年十二月十五日 再刊  
昭和五十三年十一月十五日 再刊  
昭和五十九年二月十五日 再刊

翻訳監修 日本バハイ全国精神行政会

発行所 バハイ出版局

東京都新宿区新宿7丁目2-13

東京バハイセンター

印刷所 株式会社

大阪市西淀川区御幣島1の11の18

TEL 〇六一四七一〇四三二

◎この本は日本バハイ全国精神行政会の承認のもとで  
出版されるものです。

BAHA' 'U'LLA' H AND THE NEW ERA

© 1978. バハイ出版局

不許複製

TRANSLATED FROM THE ENGLISH  
BAHA' 'I' PUBLISHING TRUST  
OF JAPAN